岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第497集

舘（たて）Ⅱ遺跡発掘調査報告書

主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

２００６

岩手県二戸地方振興局土木部

（財）岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第４９７集

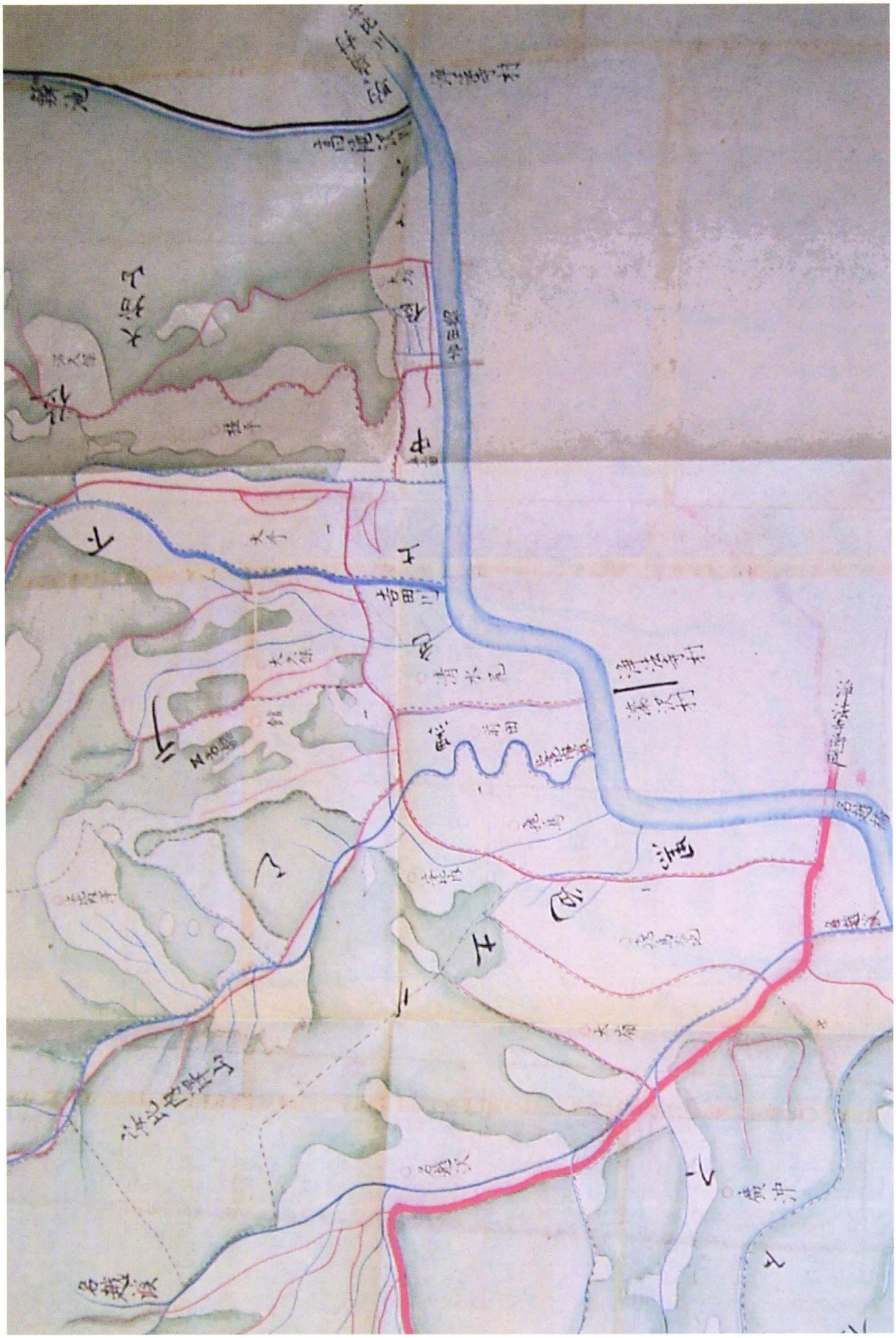
舘Ⅱ遺跡発掘調査報告書

頁	行	誤	正
2	１４	日本測地系	世界測地系
抄録		（北緯・東経は日本測地形による）	（北緯・東経は世界測地系による）

舘Ⅱ遺跡発掘調査報告書

主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

御旧領之内福岡通絵図（部分）元文四年　　（盛岡市中央公民館蔵）



岩手県管轄陸奥国二戸郡御山村（部分）年代不明　　（岩手県立図書館蔵）

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業に関連して平成17年度に発掘調査された二戸市舘Ⅱ遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、中世後期に属すると考えられる館跡に伴う複数の平坦地（曲輪）・堀が検出され、中世の陶磁器破片や茶臼などの遺物が出土しました。浄法寺地区には数多くの中世城館跡が存在していますが、調査が行われているものは少なく、今回の調査成果は中世における当地区の歴史を知るための貴重な資料となると思われます。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました二戸地方振興局土木部、二戸市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、厚く感謝の意を表します。

平成18年11月

財団法人岩手県文化振興事業団
理事長　武田　牧雄

例　言

1．本報告書は岩手県二戸市浄法寺町御山舘1番地に所在する舘Ⅱ遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本発掘調査は、主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

3．岩手県遺跡データベース登録の遺跡コードはＪＥ37-0075、調査時の遺跡略号はＴＴⅡ-05である。

4．調査開始当初の調査対象面積（当初）は3,740㎡、調査実施面積（実績）は4,730㎡である。

5．発掘調査の期間、担当者は次のとおりである。

　野外調査　　平成17年５月19日～平成17年９月８日　丸山直美、千葉正彦

　室内整理　　平成17年11月１日～平成18年３月31日　丸山直美、千葉正彦

6．出土遺物の鑑定、保存処理は次の方々および機関に依頼した。

　石器の石材石質鑑定　　矢内圭三、柳沢忠昭（花崗岩研究会）

　鉄製品の保存処理　　赤沼英男（岩手県立博物館）

7．基準点測量および航空写真撮影は次の機関に委託した。

　基準点測量　　㈲下斗米測量設計

　地形測量・航空写真撮影　　㈱シン技術コンサル

8．野外調査・室内整理・報告書作成にあたり、次の方々ならびに機関から指導・助言・協力をいただいた。（敬称略）

　山口厳・柴田知二（二戸市教育委員会）、室野秀文（盛岡市遺跡の学び館）、似内啓邦（盛岡市中央公民館）、青木宗準（岩手県立大学茶道部指導顧問・裏千家茶道正教授）、大西市造（株式会社丸久小山園）、菅野文夫（岩手大学）、鈴木聡（二戸市役所）、二戸市教育委員会、盛岡市中央公民館、岩手県立図書館

9．本書の執筆・編集・校正は丸山・千葉が行い、文末にそれぞれ名前を記した。

10．本書では国土地理院発行の次の地形図を使用した。

　1/25,000地形図　　浄法寺、陸奥荒屋、駒ケ嶺、稲庭岳

　1/50,000地形図　　浄法寺、荒屋、一戸、葛巻、田子、三戸

11．調査で得られた出土遺物および調査に係る諸記録は岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。

12．調査成果の一部については、現地説明会資料、平成17年度遺跡報告会発表資料および「平成17年度発掘調査報告書」（岩文振調報第490集）等において公表しているが、本書の記載内容と異なる場合は本書の記載内容が優先する。

目　次

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．遺跡の環境 …… 2
1．遺跡の位置と環境 …… 2
2．地形的環境 …… 3
3．地質的環境と基本層序 …… 3
4．周辺の遺跡 …… 5
5．発掘調査以外で得た知見 …… 6
Ⅲ．調査と整理の方法 …… 7
1．野外調査の経過 …… 7
2．野外調査の方法 …… 8
3．室内整理の経過と方法 …… 9
4．掲載の方法 …… 10
Ⅳ．検出遺構と出土遺物 …… 11
1．縄文時代の検出遺構 …… 11
2．古代の検出遺構 …… 43
3．中世の検出遺構 …… 46
4．時期不明の検出遺構 …… 78
Ⅴ．出土遺物 …… 87
1．縄文土器 …… 87
2．土師器・須恵器 …… 87
3．陶磁器 …… 87
4．土製品 …… 87
5．石器・石製品 …… 87
6．鉄製品 …… 88
7．古銭 …… 88
8．自然遺物 …… 88
Ⅵ．まとめと考察 …… 97
1．縄文時代 …… 97
2．中世 …… 103
報告書抄録 …… 161

図版目次

第1図　岩手県全図 …… 1
第2図　地形分類図と地質縦断図 …… 2
第3図　周辺の遺跡分布図（中世） …… 4
第4図　浄法寺町の縄文遺跡 …… 6
第5図　1号炉跡 …… 12
第6図　1～3・5号土坑 …… 13
第7図　6～9号土坑 …… 14
第8図　10・11・22号土坑 …… 16
第9図　12～15号土坑 …… 18
第10図　16～19号土坑 …… 20
第11図　20・21・23・24号土坑 …… 22
第12図　25～28号土坑 …… 24
第13図　29～32号土坑 …… 26
第14図　33～35・39号土坑 …… 28
第15図　40～42号土坑 …… 30
第16図　1～3号陥し穴状遺構 …… 31
第17図　4号土坑・4～6号陥し穴状遺構 …… 32
第18図　7～9号陥し穴状遺構 …… 34
第19図　10・11・13～15号陥し穴状遺構 …… 36
第20図　16～19号陥し穴状遺構 …… 38
第21図　36号土坑・20・21号陥し穴状遺構 …… 40
第22図　37・38号土坑・22・23号陥し穴状遺構 …… 42

第23図　1・2号竪穴住居跡（1）…… 44
第24図　1・2号竪穴住居跡（2）…… 45
第25図　3号竪穴住居跡…… 46
第26図　1号焼土遺構…… 47
第27図　1～3号平坦地・1・2号切岸状遺構… 48
第28図　1・2号平坦地・1号切岸状遺構…… 50
第29図　2・3号平坦地・2号切岸状遺構…… 52
第30図　4号平坦地…… 53
第31図　5・6号平坦地…… 54
第32図　1～3号堀跡・1号大溝跡…… 56
第33図　1・2号堀跡…… 58
第34図　2・3号堀跡・1号土塁…… 60
第35図　1～3号堀跡…… 61
第36図　1号大溝跡…… 62
第37図　2号大溝跡…… 64
第38図　1号門跡？…… 65
第39図　1号掘立柱建物跡…… 66
第40図　1・2号竪穴建物跡…… 68
第41図　3・4号竪穴建物跡…… 69
第42図　5号竪穴建物跡…… 70
第43図　6・7号竪穴建物跡…… 72
第44図　8・9号竪穴建物跡…… 74
第45図　1号竪穴状遺構（1）…… 76
第46図　1号竪穴状遺構（2）・
　　2号竪穴状遺構…… 77
第47図　3・4号竪穴状遺構…… 78
第48図　5・6号竪穴状遺構…… 79
第49図　7号竪穴状遺構…… 80
第50図　1号平坦地柱穴状小ピット…… 80
第51図　2号平坦地柱穴状小ピット（1）…… 81
第52図　2号平坦地柱穴状小ピット（2）・
　　3号平坦地柱穴状小ピット…… 83
第53図　4号平坦地柱穴状小ピット…… 85
第54図　1号墓坑（獣骨出土）…… 86
第55図　茶臼の各計測部位…… 88
第56図　縄文土器・土師器…… 91
第57図　土師器・須恵器・陶磁器・土製品・石器… 92
第58図　石器・石製品…… 93
第59図　鉄製品・古銭…… 94
第60図　岩手県内出土茶臼集成図…… 95
第61図　陥し穴状遺構形態分類図…… 98
第62図　陥し穴状遺構配置図…… 98
第63図　岩手県北部における陥し穴状遺構集成図…101
第64図　浄法寺氏系図……104
第65図　三戸郡・二戸郡における
　　中世城館分布図……109
第66図　周辺の館跡縄張り図……111
第67図　舘Ⅱ遺跡虎口・連絡路想定図……113
第68図　舘Ⅱ遺跡縄張り変遷想定図（中世）……116
第69図　舘Ⅱ遺跡（陣場・中舘）・不動館縄張り図…118

表　目　次

第1表　周辺の遺跡（中世）…… 4
第2表　浄法寺町の縄文遺跡…… 6
第3表　1号平坦地柱穴状小ピット計測表…… 80
第4表　2号平坦地柱穴状小ピット計測表（1）… 82
第5表　3号平坦地柱穴状小ピット計測表…… 83
第6表　2号平坦地柱穴状小ピット計測表（2）… 84
第7表　4号平坦地柱穴状小ピット計測表…… 85
第8表　縄文土器観察表…… 89
第9表　土師器・須恵器観察表…… 89
第10表　陶磁器観察表…… 89
第11表　土製品観察表…… 90
第12表　石器・石製品観察表…… 90
第13表　茶臼観察表…… 90
第14表　鉄製品観察表…… 90
第15表　古銭観察表…… 90
第16表　その他観察表（動物遺存体）…… 90
第17表　土坑計測値一覧……100
第18表　陥し穴状遺構計測値一覧……100
第19表　三戸郡・二戸郡における
　　中世の遺跡・館跡……107

写真図版目次

写真図版1　空中写真……120
写真図版2　1号炉跡・1・2号土坑……121
写真図版3　3・5～8号土坑……122
写真図版4　9～12号土坑……123
写真図版5　13～16号土坑……124
写真図版6　17～20号土坑……125
写真図版7　21～24号土坑……126
写真図版8　25～28号土坑……127
写真図版9　29～32号土坑……128
写真図版10　33～36号土坑……129
写真図版11　37～40・42号土坑……130
写真図版12　41号土坑・1～3号陥し穴状遺構…131
写真図版13　4～7号陥し穴状遺構（4号土坑）…132
写真図版14　8～11号陥し穴状遺構……133
写真図版15　12～15号陥し穴状遺構……134
写真図版16　16～19号陥し穴状遺構……135
写真図版17　20～23号陥し穴状遺構……136
写真図版18　1・2号竪穴住居跡……137
写真図版19　2・3号竪穴住居跡・1号焼土遺構 138
写真図版20　1号平坦地・1号切岸状遺構……139
写真図版21　2・3号平坦地・2号切岸状遺構…140
写真図版22　4～6号平坦地……141
写真図版23　1～3号堀跡・1・2号大溝跡……142
写真図版24　2・3号堀跡・遺物出土状況……143
写真図版25　1号大溝跡……144
写真図版26　2号大溝跡・1号土塁……145
写真図版27　1号掘立柱建物跡……146
写真図版28　1・2号竪穴建物跡……147
写真図版29　3・4号竪穴建物跡……148
写真図版30　5号竪穴建物跡……149
写真図版31　6号竪穴建物跡……150
写真図版32　7号竪穴建物跡……151
写真図版33　8号竪穴建物跡……152
写真図版34　9号竪穴建物跡……153
写真図版35　1～4号竪穴状遺構……154
写真図版36　2～7号竪穴状遺構……155
写真図版37　1号墓坑（獣骨出土）……156
写真図版38　出土遺物1……157
写真図版39　出土遺物2……158
写真図版40　出土遺物3……159
写真図版41　出土遺物4……160

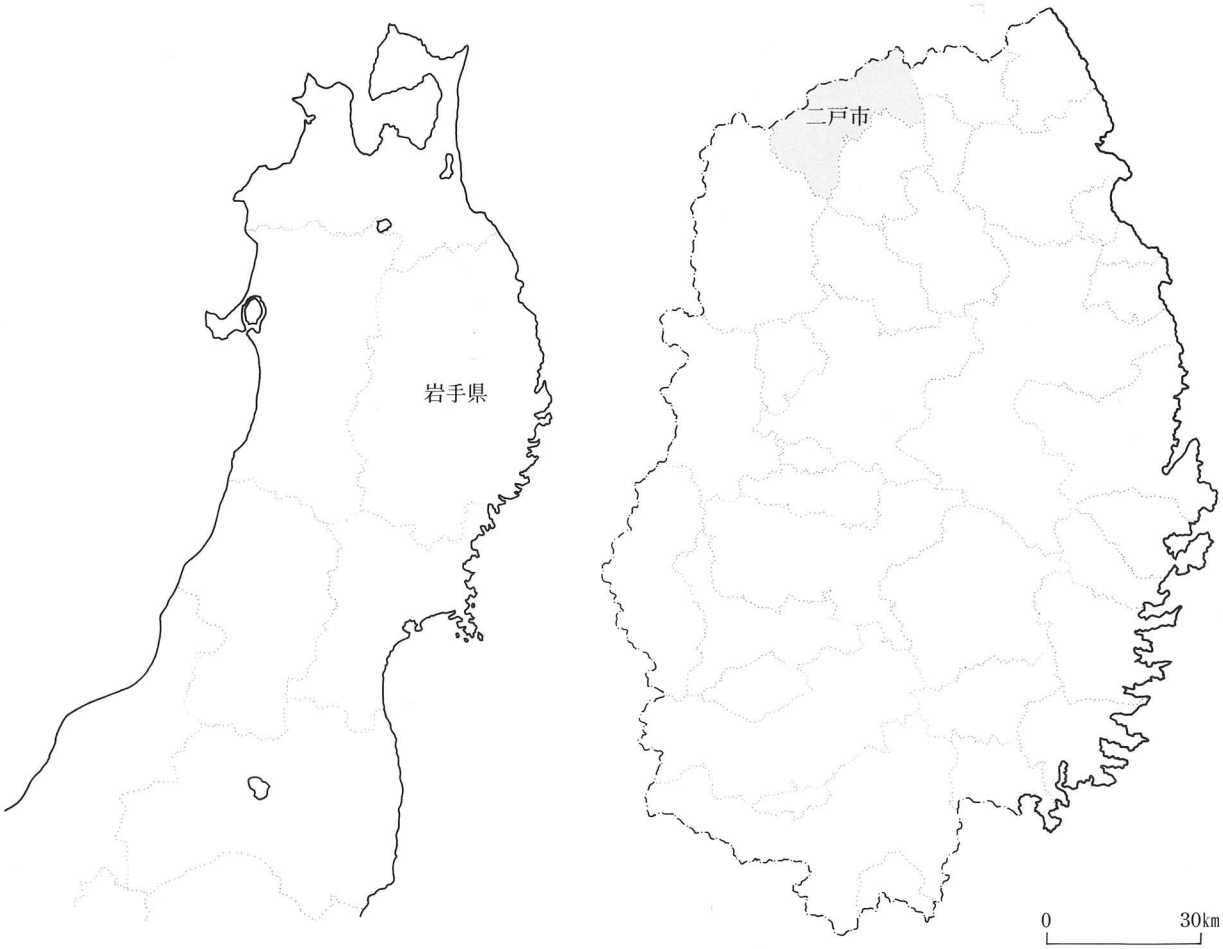
Ⅰ．調査に至る経過

舘Ⅱ遺跡は、「主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業」工事に伴い、事業計画区間内に存することから発掘調査を行うことになったものである。

主要地方道二戸五日市線は二戸市南西部に位置し、二戸市と八幡平市を結ぶ道路であり、その機能は東北縦貫自動車道八戸線の並行路線としての代替可能な幹線道路である。事業対象区域である「浄法寺工区」においては、浄法寺の中心地に位置しており、車道の幅員が狭い上に歩道がなく、さらに見通しの悪いカーブが多いことから、危険な状態となっている。そのような中、安全・安心に暮らせる地域の実現を目指して平成８年に「新交流ネットワーク道路整備事業」により事業着手したものであるが、平成16年度に新たに「緊急地方道路整備事業」の採択となり早期完成を目指すものである。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、二戸地方振興局土木部から平成16年７月21日付け二地土第298号により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。依頼を受けた県教育委員会では、平成16年７月26日と同年８月２日に試掘調査を実施し、工事に着工するには舘Ⅱ遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成16年８月５日付け教生第661号により当土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木部は県教育委員会と協議し、平成17年度に財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結して発掘調査を実施することとなった。　　（二戸地方振興局土木部）



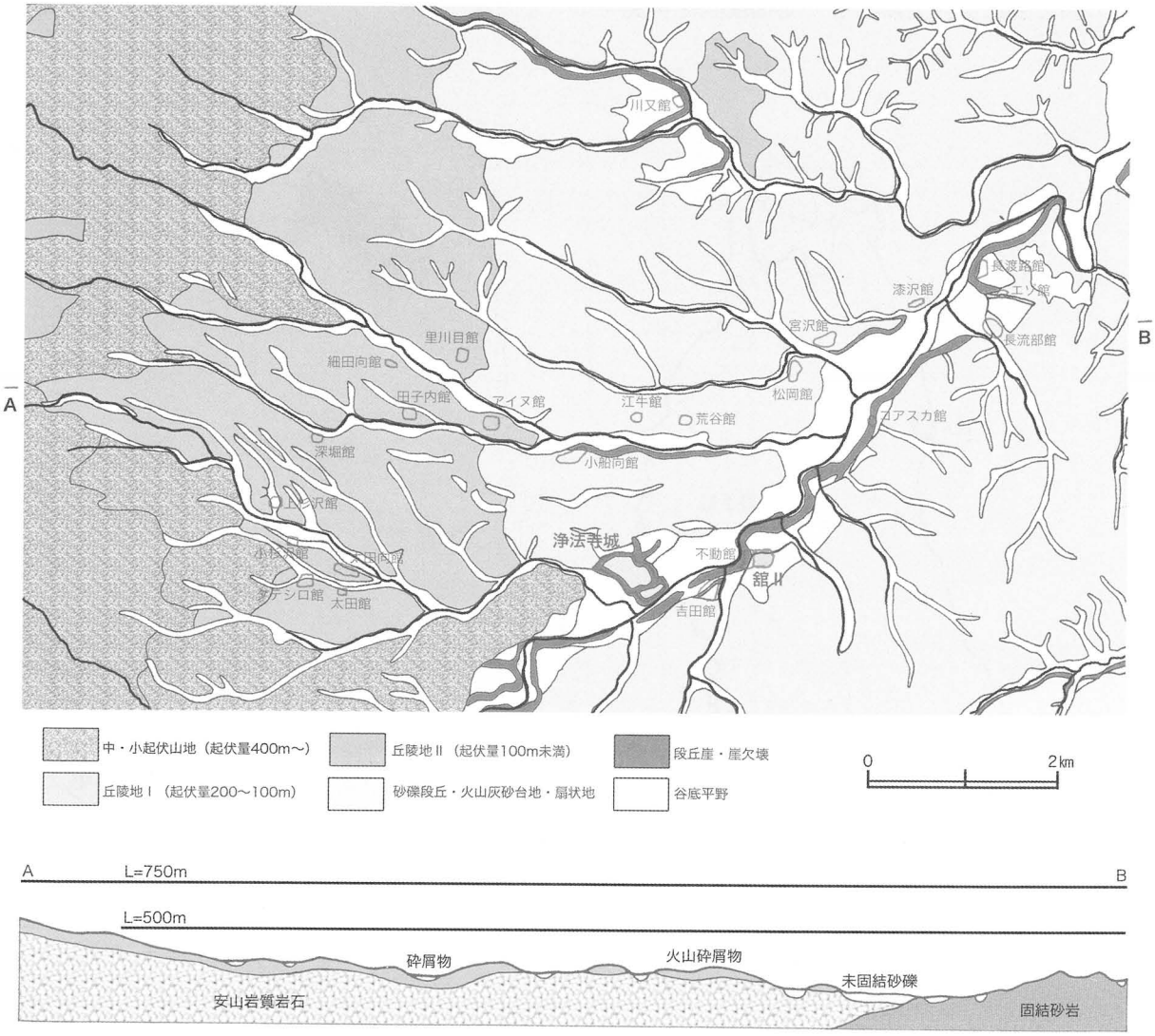
第１図　岩手県全図

Ⅱ．遺跡の環境

1．遺跡の位置と環境

館Ⅱ遺跡は岩手県北部の二戸市浄法寺町御山館（調査時点では二戸郡浄法寺町大字御山字館）地内に所在する。現在の二戸市は、平成18年１月に二戸市と二戸郡浄法寺町が合併する形で成立した。平成17年度の統計によれば、市域の総面積は420.31㎢である。二戸市は岩手県北部に位置し、西の八幡平市、南の一戸町、東の九戸村・軽米町と境を接し、北は県境を挟んで青森県三戸町・田子町・南部町と接する。遺跡の所在する二戸市浄法寺町〔以下、単に「浄法寺町」と略す〕は二戸市の西部、合併前の旧・浄法寺町部分にあたり、人口5,122人、面積179.7㎢を占める。旧・浄法寺町は明治22年に浄法寺、駒ヶ嶺、大清水、漆沢、御山の５村合併の後、昭和15年に町制施行により成立した。これらの旧村名は大字として残っており、二戸市と合併した現在でも一部地名に名残を残している。

館Ⅱ遺跡は、旧浄法寺町役場から東約１㎞、安比川右岸の海抜214～222ｍの丘陵上にある。その位置は国土地理院発行の地形図1/25,000「浄法寺」ＮＫ-54-18-15-2図幅に含まれており、北緯40°11′5″、東経141°9′57″付近〔日本測地系〕である。遺跡は、小河川によって開削された自然



第２図　地形分類図と地質縦断図

地形の谷により東西双方を画された丘陵縁辺部に広がっている。安比川との比高は32～39mである。現況では大部分が山林・原野であり、緩斜面の一部は開墾されて畑地となっている。また、舘Ⅱ遺跡の所在する御山地区には、聖武天皇により陸奥へ遣わされた仏僧行基が神亀５（728）年に仏堂を建てたことが縁起とされる天台宗の古刹・八葉山天台寺がある。

２．地形的環境

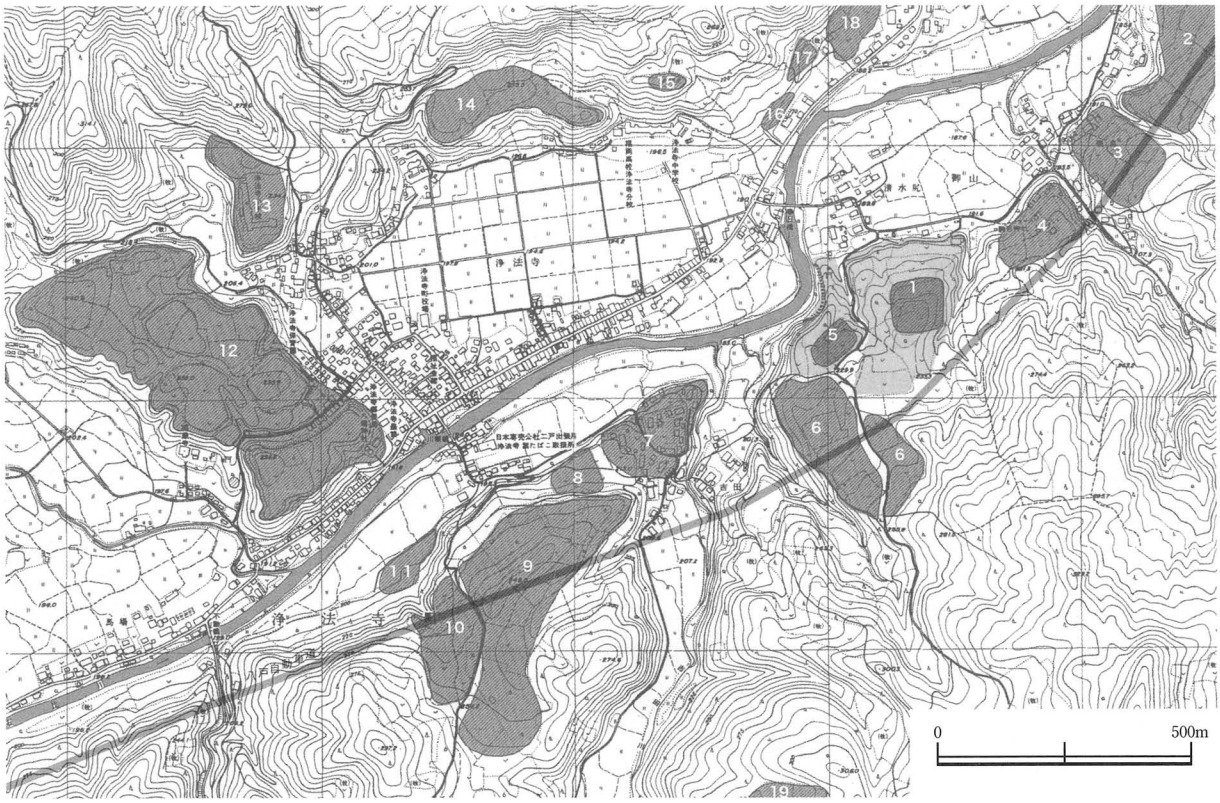
浄法寺町の大部分は山地・丘陵地で占められている（第２図）。安比川より西側は、稲庭岳（1,078 m）を頂点とする中・小起伏山地（起伏量400 m以下）、それに続く丘陵地（起伏量200 m以下）が広く分布しており、東に向かって高度を下げている。稲庭岳は火成岩により構成される火山であるが、風化浸食によりその原型を殆ど残していない。一方、安比川の東・南側も様相は同じであり、西岳（1,018 m）や七時雨山（1,060 m）から続く丘陵地によって占められている。八幡平市に源流を持つ安比川が浄法寺町の中央を蛇行しつつ北東に流れ、東西双方から小河川が山地・丘陵を下刻しつつ安比川へと流れ込んでいる。安比川およびその支流の流域には谷底平野や台地（段丘）が形成されている。高位から砂礫段丘Ⅰ・火山灰砂台地・砂礫段丘Ⅱ・砂礫段丘Ⅲの「台地」各面、扇状地・谷底平野の「低地」が分布しているが、その分布は断続的かつ狭小であり発達は良好ではない（図ではこれらの台地が狭小であるため、台地各面と扇状地を一括して示した）。浄法寺の中心部は、安比川沿いの狭い谷底平野に形成されている。第２図に示したとおり、本遺跡を含めた浄法寺の城館の多くは、平野を一望に見通せる高位の砂礫段丘面に立地する点で共通している（註１）。

舘Ⅱ遺跡の周辺は台地に分類され、安比川の右岸段丘縁辺部の中位段丘面にあたる。遺跡の載る台地は東西両側および中央を自然の谷筋によって画されている。西側は町道に沿って流れる沢により狭い谷地形となっており、東側でもやはり幅50mほどの谷地形が区画となっている。これらの谷はいずれも堀として利用されているものと考えられる。また中央にも沢が入って谷地形が見られるが、後述のとおり、この沢は堀（１号堀）に改変されていた。地元の古老によれば、台地東側を「陣場」、西側を「中舘」と呼び習わしていたという。舘Ⅱ遺跡西隣に接する不動館は「お不動様」と呼ばれており、遺跡台帳上では二つの遺跡に分けられるが、三つの館が並列的に配されている様相が垣間見える。なお現在では、東流する安比川が本遺跡西隣に隣接する不動館の載る段丘に突き当たり、それを侵食しつつ一旦北へと流れを変えている。そのため、不動館は安比川により北～西部分を抉り取られた状態となっており、往時の姿を留めてはいない。

註１）岩手県 1979「土地分類基本調査」による。

３．地質的環境と基本層序

浄法寺の表層地質は第２図の地質縦断図に示すとおりである（註１）。東西の山稜部分は更新世の凝灰岩質岩石や固結砂岩を基底とし、その上位に完新世の火山砕屑物や安山岩質岩石が載っている。安比川およびそれに流れ込む小河川の下刻・堆積作用により細かな谷底地形が形成されて未固結の砂礫や砕屑物が堆積している。舘Ⅱ遺跡の所在する御山地区付近は、更新世の固結砂岩体の分布域にあたり、地質的には比較的古い様相を示している地域である。二戸市・軽米町・九戸村などの県北内陸部では、ローム質火山灰・浮石凝灰岩・スコリア質火山灰などの火山砕屑物が層をなして堆積している。これらの起源は十和田系の火山噴出物であり、一般的には上位から、十和田ａ火山灰、十和田ｂ火山



第３図　周辺の遺跡分布図

第１表　周辺の遺跡　　＊第３図の番号に一致する。

No	遺跡名	時代	種別	遺構・遺物など	備考
1	舘Ⅱ	縄文・古代・中世	城館跡	曲輪、堀、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、陥し穴　他	報告遺跡
2	飛鳥台地Ⅰ	縄文～近世	集落跡	竪穴住居跡、竪穴建物跡、土坑、陥し穴　他	岩手県埋文 120 集
3	安比内Ⅰ	縄文・古代	集落跡	陥し穴、縄文土器	岩手県埋文 106 集
4	舘Ⅰ	縄文	散布地	縄文土器	
5	不動館	縄文・中世	城館跡	曲輪、二重堀、土塁、縄文土器	
6	大久保Ⅰ	縄文・中世	集落跡	陥し穴、縄文土器　他	岩手県埋文 90 集
7	吉田館	古代・中世	城館跡	曲輪、堀、須恵器	岩手埋文調査中
8	桂平Ⅰ	古代	散布地	土師器	
9	桂平Ⅱ	縄文	集落跡	竪穴住居跡、土坑、陥し穴　他	岩手県埋文 110 集
10	沼久保Ⅰ	縄文～近世	集落跡	竪穴住居跡、土坑、陥し穴　他	岩手県埋文 109 集
11	大坊	縄文	散布地	縄文土器	
12	浄法寺城	中世	城館跡	曲輪、堀、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、青磁・白磁　他	浄法寺町教委 1998 など
13	上外野	古代	集落跡	土師器	壊滅
14	小池	古代	集落跡	土師器	旧「小池Ⅱ」
15	小池塚	不明	塚		
16	岩淵Ⅲ	縄文	散布地	縄文土器	
17	岩淵Ⅳ	縄文	散布地	縄文土器	
18	岩淵Ⅴ	縄文・古代	散布地	縄文土器、土師器	
19	大久保Ⅳ	縄文	散布地	縄文土器	
	安比内Ⅱ	縄文	散布地	縄文土器	安比内Ⅰと同一？
	大久保Ⅱ	縄文	散布地	縄文土器	位置不明（台帳記載のみ）
	大久保Ⅲ	縄文	散布地	縄文土器	位置不明（台帳記載のみ）

灰、中掫浮石、南部浮石、二ノ倉火山灰、八戸火山灰、大不動浮石流凝灰岩という層序が確認されている。二ノ倉よりも上位が完新世に堆積した火山灰である。これらのうち、本遺跡で観察されるのは南部浮石と二ノ倉火山灰（推定）、八戸火山灰である（註２）。南部浮石は黄褐色を呈する径５㎜程の浮石粒からなり、県北部では「ゴロタ」と呼ばれる。旧二戸市内では南部浮石が場合によっては１ｍを超えるように厚い層をなしているが、浄法寺町では純粋な南部浮石層は確認できない。本遺跡の場合も、ゴロタは層をなしておらず、Ⅲ層（黒色土）中に疎らに混入する形で存在している。一方、二ノ

倉火山灰は明褐色を呈し、赤褐色パミス粒を含む。本遺跡では明確な層として認識できないが、Ⅲ層とⅣ層の間に見られる橙色パミス粒が、二ノ倉火山灰相当ではないかと思われる。八戸火山灰は更新世のローム質火山灰であり、噴出時期は14Ｃ年代では 10,000 ～ 13,000 年 B.P. と推定されている。本遺跡の場合、八戸火山灰は土質・色調の違いから上下２層に分かれている。上層は黄褐色～褐色を呈しており、その上位は土壌化して黒褐色化している。一方、下層は白色～乳白色を呈するローム層であるが、上層に比して粘性・しまりに欠けており、水分を含むと脆く崩壊しやすい。

調査区域では中世の普請の影響で地点により堆積様相が異なる。調査区西半部（１・２号堀跡以西）においては、普請により大規模な地形改変が行われた結果、Ⅱ・Ⅲ層が失われている。そのため、南東側の平坦地奥側では表土直下でⅣ・Ⅴ層が露出し、平坦面先端（段際）付近では表土直下で普請により盛られたⅤ層が確認できる。一方、１号堀跡以東は現況で段差が確認できたが、普請の影響は思いの外少なかったようで、Ⅱ層以下の土層が良好に残存している。調査区内の模式的な層序は次のとおりである。

Ⅰ層　表土・耕作土。

Ⅱ層　中世館普請に伴う盛り土、整地土層。Ⅲ～Ⅵ層起源の混合土。

Ⅲ層　10YR2/1 黒色～10YR3/2 黒褐色シルト。白色パミス（「南部浮石」To-Nb相当）を１～３％ほど含む。主に調査区東側で残存している。遺構検出面。微妙な差異（色調、混入物の多寡）により上位（Ⅲａ層）・下位（Ⅲｂ層）に細分可能である。下位には 7.5YR7/6 橙色パミス層（「二ノ倉火山灰」To-Nk 相当？）が断続的に存在している。

Ⅳ層　10YR3/3 暗褐色～ 4/4 褐色シルト。漸移層。遺構検出面。

Ⅴ層　10YR7/6 黄褐色ローム。「八戸火山灰」To-H層（上層）。遺構検出面。

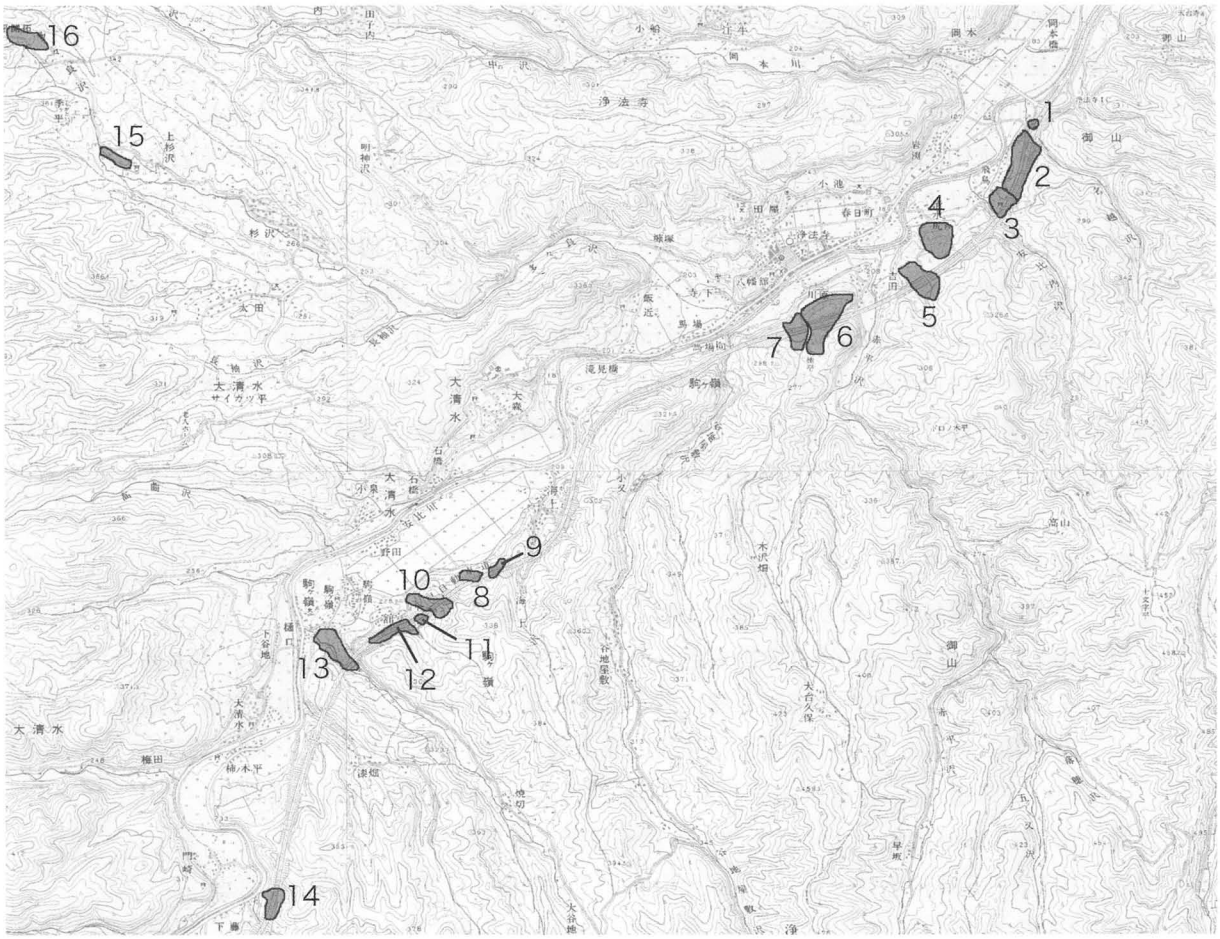
Ⅵ層　2.5Y8/2 灰白色ローム。浮石流凝灰岩。「八戸火山灰」To-H層（下層）。層厚不明。削剥部分においては遺構検出面。

註１）岩手県教委「岩手県遺跡情報検索システム」（平成16年版）のデータによる。また第３図は同システムで検索した画像データをもとに一部改変したものである。

註２）肉眼観察及び二戸市教育委員会山口氏のご教示による。テフラ分析は実施していない。

４．周辺の遺跡

浄法寺町では平成17年時点で、縄文時代から近世までの総数 429 箇所の遺跡が登録されている（註１）。本遺跡の周辺にも複数の遺跡が存在しており（第３図・第65図）、町道を挟んで西隣に隣接して不動館跡、西約 0.5km に吉田館跡、同じく西約 1.2km には浄法寺城跡が存在する。館跡以外でも東北縦貫自動車道八戸線に関連して発掘調査が行われた浄法寺町内の遺跡群で中世の遺構が検出されている。駒ヶ嶺地区の五庵Ⅱ遺跡（第65図 133：以下、図版No.省略）では、西向きの尾根上に立地する、中世～近世の「竪穴住居跡」（＝竪穴建物跡）20棟、住居跡状遺構２棟、掘立柱建物跡１棟が纏まって検出された。遺跡の西側には駒ヶ嶺館跡があり、館に関連する遺跡（館の一部か）と思われる。中世の竪穴建物跡は、駒ヶ嶺地区の五庵Ⅰ遺跡（134）で１棟、本遺跡に近い御山地区の飛鳥台地Ⅰ遺跡（111）で３棟、それぞれ検出されている。中世以外の遺跡については、当遺跡周辺の台地上に縄文時代～古代の遺跡群が存在しており、広沖遺跡、飛鳥台地Ⅰ遺跡、安比内Ⅰ遺跡、大久保Ⅰ遺跡、桂平遺跡、沼久保遺跡などについて東北自動車道八戸線建設に際して当センターが発掘調査を実施している（第４図）。これら縄文・古代の遺跡との関わりについては、後述の第Ⅵ章で考察することとする。



第４図　浄法寺町の縄文遺跡

第２表　浄法寺町の縄文遺跡　　＊調査済の遺跡のみ

No	遺跡名	標高	時期	陥し穴状遺構	他の検出遺構など	
1	広沖	198 ～ 204m	初頭～中葉（大洞Ｂ～Ｃ式）	Ａ・Ｂ	土坑（？）	
2	飛鳥台地Ⅰ	200 ～ 220m	初頭	Ⓐ・Ｂ・Ｃ	竪穴住居跡（Ｂ式期）５、土坑	
3	安比内Ⅰ	215 ～ 219m	中葉（Ｃ１式）	Ⓐ	土器少量	
4	舘Ⅱ	209 ～ 221m	中葉（Ｃ２式）	Ⓐ・Ｃ	土坑（墓坑？）１	
5	大久保Ⅰ	237 ～ 246m	中葉（Ｃ２式）	Ａ	土器少量	
6	桂平（Ⅱ）	238 ～ 245m	晩期なし〔前・後期〕	Ａ・Ｂ・Ⓒ		
7	沼久保（Ⅰ）	230 ～ 245m	初頭～末葉	Ⓐ・Ｃ	土器少量	
8	海上Ⅰ	235 ～ 264m	〔後期末〕	Ⓑ		
9	海上Ⅱ	236 ～ 248m	〔後期末～〕晩期初頭	Ⓑ	土器少量	
10	五庵Ⅱ	245 ～ 257m	晩期末〔～弥生〕	なし	土器少量	安比川左岸
11	五庵Ⅲ	237 ～ 249m	晩期末〔～弥生〕	Ａ	竪穴住居跡（Ａ？式期？）	安比川左岸
12	五庵Ⅰ	240 ～ 251m	中葉（Ｃ１～Ｃ２式）	Ⓐ・Ｂ・Ⓒ	竪穴住居跡（Ｃ２式期）、土坑	
13	田余内Ⅰ	250 ～ 255m	前～中葉	Ⓐ・Ｃ	土器少量	
14	柿ノ木平Ⅲ	263 ～ 282m	中葉（Ｃ２式）	Ⓐ・Ｂ・Ｃ	土器少量	
15	上杉沢	300 ～ 315m	初頭～末葉（Ｂ～Ａ？式）	なし	竪穴住居跡（Ａ式期を除く各期）、土坑、掘立柱建物跡	
16	野黒沢Ⅷ	350 ～ 360m	中葉（Ｃ１式）	なし	竪穴住居跡（Ｃ１式）、土坑、土器少量	

（陥し穴状遺構のアルファベット記号はⅥ.（３）の形態分類と対応）

５．発掘調査以外で得た知見

本遺跡の館跡は、その存在について発掘調査が実施されるまで知られていなかった。舘Ⅱ遺跡は「遺跡登録台帳」（県教育委員会）によると「古代の散布地」となっており、かつその遺跡範囲は丘陵頂部平坦面（「陣場」部分）を括っている。平成16年度、舘Ⅱ遺跡が県道改修事業の路線隣接地となり、試掘調査が行われた際、沢状の落ち込み部分が堀ではないかと判断され、初めて館跡の可能性

が示唆されるに至った。この時点まで、本遺跡が全体として一つの館跡であるとは認識されていなかったのである。本遺跡は文献史料に全く登場していない館跡であり、館主や館の存続時期等、推測する根拠がない。そこで、周辺住民からの聞き取り、現地踏査、絵図・地籍図の判読、背景となる中世北奥の政治状況の把握など、広範な情報を収集して情報の不足を補うことを目指した。

調査区を含めた本遺跡の縄張りを把握すべく、調査序盤に踏査を行った。また、調査終了時に盛岡市教育委員会の室野秀文氏に現地指導を依頼し、不動館を含めた３つの館全体を踏査しつつ、縄張りの具体についてご指導いただいた。

Ⅲ．調査と整理の方法

１．野外調査の経過

平成17年５月19日（木）、調査機材を搬入、現場の設営を行い、調査を開始した。現況で調査区東側付近は沢状の窪地となっており、堀であると認識できた。ただし、自然の沢地形に殆ど手を加えずに堀として代用している場合、確認調査のみで可、との指示を受けており、作業の工程上、取り急ぎ確認が必要であった。そこで窪み部分にトレンチを設定して掘り下げた。法面は上方で傾斜が緩いものの、次第に急傾斜に角度が変わっており、人為的に改変されていることが判明。遺構、堀であることが確認された。この窪み部分は現在でも上方から水が伏流しており、掘削すると湧水してくる。この水を処理しないことには、堀の精査は難しい状態であった。一方、高位の平坦面についてはトレンチを設定して掘り下げたが、表土は意外に浅く、南側（斜面上方寄り）では表土直下でⅤ層（白色ローム）が露出した。表土直下が館の曲輪面・遺構検出面と認識し、人力による表土除去を開始した。24日（火）、降雨による作業中止を利用して、遺跡（城館）全体の踏査、縄張り図の作成を試みた。調査区のある「中舘」から東へ広がる「陣場」一帯を踏査した結果、陣場の丘陵頂部には比較的広い緩斜面が広がっており主郭的な場所と思われること、「主郭」の周囲には帯曲輪・土塁・堀切・犬走？・枡形？と推測される痕跡が見られることなど、舘Ⅱ遺跡が明らかに中世城館であることを再確認した。

６月８日（水）、１号堀の底面までトレンチを入れた。堀は予想よりも深く、人手では危険なため、重機により段階的に掘り下げ、中央付近の埋土様相を確認した。同日、県教育委員会生涯学習文化課（以後、生文課と略記する）・二戸地方振興局土木部の立会の下、現地協議が行われた。当初の調査範囲外にあたる、堀より東側部分が（帯）曲輪である可能性が生じたため、範囲を拡張して調査を行うか否か、について協議するものであった。その結果、当該部分の調査が必要として堀以東の990㎡を調査範囲に繰り入れ、調査面積は4,730㎡となった。22日（水）、１号堀跡の北端にトレンチを入れて、堀の延長方向を確認した。その結果、１号堀跡はやや北西へ屈曲しつつ、段丘崖へ抜けていることが判明した。覆土の断面を見ると、表土直下で八戸火山灰下層の白色土が厚く堆積していた。この覆土様相が自然堆積なのか、人為的な埋め戻し行為の所産であるか、判然としなかった。30日（木）、堀中央部に残していた土層ベルトの断面記録を試み、重機を使用してトレンチ状に埋土を掘削した。しかし、湧水によって水分を含んで軟弱化した土層ベルトは、たちまち崩落し始めた。危険な状況だったため、湧水の様子を窺ってから精査することとした。

しかし、７月に入ると天候不順が続いた。１号堀跡付近は土壌（八戸火山灰下層）の性格上滑りや

すい上、ただでさえ崩れやすい堀埋土がさらに脆弱になってしまったため、１号堀跡の精査はいよいよ難渋した。この時期、やむを得ず１号堀跡の精査を中断し、２号平坦地南西側の柱穴群（のちの１号掘立柱建物跡を構成）、堀以東の表土除去および検出作業を優先して進めた。後者区域では、自然堆積の黒色土（Ⅲ層）が残存しており、この黒色土上面が曲輪としての使用面と判断し、検出を行った。しかし結果的に、柱穴等は検出されなかったが、１号堀跡の東側で堀に平行する溝状のプランを検出した。精査の結果、深さ30～40cmほどと、堀と呼ぶほどには深くなかった（１号大溝跡）。一方、２号平坦地南西側では掘立柱建物跡を構成すると見られる柱穴状小ピットが多数検出された。これら柱穴群の精査は天候不順のためここでも難航し、降雨の度に精査途中および完掘後の柱穴が地山の砂で埋没、その都度再掘削が繰り返された。この一連の作業の中で消失、或は埋没により柱穴の見落としが生じた可能性も否めない。

幾分天候が回復した13日（水）以降、重機による堀埋土掘削を本格的に行った。堀の土層ベルトはメインベルト部分のみ残して、他の部分は重機で掘削した。ベルト崩壊の危険性があったため、掘削直後に土層断面の写真撮影・実測を取り急ぎ行い、ベルトを除去して、難渋した１号堀跡をようやく完掘した。なお、堀完掘後に湧水によって脆弱となった堀法面が崩壊した。

８月20日（土）午前、現地説明会を開催した（参加者44名）。午後、５・６号平坦地部分のⅢ層を除去し、縄文時代土坑の検出を開始した。29日（月）、生文課の立会の下、調査終了確認が行われた。その結果、東側調査区における縄文土坑の精査の進行状況から見て、調査終了を当初予定31日から翌月８日まで延長することとなった。30日（火）、調査区の航空写真を撮影するとともに、調査時点での現況地形測量を行った。

９月１日（木）、他遺跡の調査開始に伴って千葉が離脱し、小山内文化財専門員が調査支援する体制となった。以降、曲輪整地層の断ち割り、縄文土坑の精査を進めた。結果的に東側調査区では土坑・陥し穴状遺構10基が検出された。８日（木）、作業を終了し、機材を搬出して調査終了した。

2．野外調査の方法

＜調査体制＞　調査員２名、作業員16名の体制である。作業員の中には、かつて当センターが実施した調査や地元教育委員会の調査に参加した経験者もいる。

＜グリッドの設定＞　調査区は丘陵縁辺の緩斜面部にあたり、北東方向への向斜を示している。しかし、その傾斜は緩いものであり、傾斜に沿ったグリッド設定までは必要ないと考えて、調査区に日本測地系にもとづく平面直角座標系に即した調査区割り（グリッド）を設定した。調査区内の任意の基点（X=20,216、Y=28,584）を調査座標原点とし、平面直角座標系に載り、この点で直交する東西・南北の軸線をそれぞれ設定した。それぞれの軸線を基点から４m刻みに分割した。各刻みには、南北方向では調査区の傾斜を考慮して斜面上方側である南から算用数字（１～28）を、東西方向へは東から順にアルファベット（A～Y）を付して、調査区を覆うように算用数字とアルファベットの組み合わせにより呼称される４m四方のグリッドを設定した（付図）。

調査時に設定した基準点は次のとおりである。

基点１	X=20,216	Y=28,584	H=222.115m	基点２	X=20,256	Y=28,584	H=215.811m
補点１	X=20,216	Y=28,552	H=214.425m	補点２	X=20,236	Y=28,552	H=214.602m
補点３	X=20,236	Y=28,584	H=218.466m	補点４	X=20,256	Y=28,616	H=215.953m

＜粗掘りと遺構検出＞　調査区は基本的に表土が薄く、特に調査区西半部分は表土直下が遺構検出面

であった。そこで、斜面上方側（１号曲輪～２号曲輪南半部付近）については可能な限り人力で表土を剥ぎ、斜面下方側（２号曲輪北半～３号帯曲輪付近）は重機を用いて粗掘りを行った。遺構検出は表土直下の中世整地面（Ⅱ～Ⅴ層面）で行い、以後、primary な土層が残る部分は掘り下げながら順次検出を行った。遺構は「黄褐色に黒」、「白色にくすんだ灰褐色」などの形で検出され、遺構識別は比較的易しい。ただし、Ⅲ層が残存する東側調査区については、縄文時代の土坑が「黒に黒」状態で検出されるはずであるが難しく、Ⅴ層まで掘り下げた段階でしか検出できなかった。

＜検出遺構名＞　野外調査では、検出した遺構に対してその種別に応じた略号と検出順の数字を組み合わせた遺構名を使用し、例えば「ＳＩ01、ＳＤ04、ＳＫ20、ＳＫＴ05」などと呼称した。その後、整理段階で遺構名を付け直し、それぞれ「１号竪穴住居跡、４号大溝跡、20号土坑、５号陥し穴状遺構」という形に改めている。

＜遺構精査＞　遺構は種別・規模に応じた方法で精査を行った。竪穴住居跡・竪穴建物跡・竪穴状遺構は４分法により、土坑・柱穴は２分法によった。柱穴についてはプラン確認後、全体を５㎝程度掘り下げて柱痕跡を確認した後、半裁した。また、堀・大溝は任意の土層ベルトを適宜残して掘り下げた。１号堀跡については、ベルト部分で埋土断面を確認した後、主に重機を用いて壁際まで掘削した。

＜実測＞　調査区に傾斜面が多かったことから、平面測量には通常の簡易遣り方測量の他に、光波トランシットによる測量を併用した。実測は主に４～６名の作業員が専従し、随時調査員が点検した。

＜記録＞　遺構埋土の記録にあたっては、「標準土色帳」に準じて土色を判別し、粘性・締まりなどの性状、パミス・炭化物などの混入物について、肉眼観察によって記録した。粘性・しまりについては、概ね「強・やや強・中・やや弱・弱・なし」の段階に区分し、混入物は混入の様相や全体に対するおまかな割合等を記録した。

＜写真撮影＞　個々の遺構の写真撮影は調査員が担当し、主に35㎜判カメラ２台（モノクロ、カラーリバーサル）を用い、補助的にデジタルカメラ１台（400万画素）を使用した。また必要に応じて、適宜、中判カメラ１台（モノクロ）を加えて使用した。また調査終盤には、ラジコンヘリを用いて、調査区および遺跡全体の航空写真撮影を地形測量と併せて行った。

＜縄張り図の作成＞　調査開始当初、調査員が調査区および周辺を踏査して概略図を作成した。その後、盛岡市教育委員会・室野秀文氏に現地指導を依頼して、再度の踏査と縄張りの確認を行い、縄張り図の作図を室野氏に依頼した（第69図）。

＜その他＞　調査成果については、調査終盤の８月20日に現地説明会を開催して広く公開した（参加者44名）。また、二戸地方振興局発行の広報に調査状況の情報を提供した。

３．室内整理の経過と方法

図面の点検・合成・遺物の洗浄・写真の整理は原則として野外調査と並行して行った。

①遺物の処理

遺物は水洗後に全出土遺物を点検し、実測や拓本の必要なものを選択した後、遺構内外にわけて登録し、註記、接合、復元の順に進めた。その後、実測・トレース・写真撮影・図版作成と作業を進めた。

②遺構図面

遺構図面は平面図・断面図の照合、土層註記、レベル等の確認後に第二原図を作成し、その後トレース、遺構図版組の順に作業を進めた。

4．掲載の方法

① 遺構図の用例

（ア）遺構実測図は原則として次の縮尺で掲載している。

竪穴住居跡・竪穴建物跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡：平面・断面 1/60

古代竪穴住居跡カマド：断面 1/30　　土坑・陥し穴状遺構：平面・断面 1/40

墓坑・炉跡：平面・断面 1/30　　柱穴状小ピット群：平面 1/150

平坦地（曲輪）：平面 1/300、断面 1/100　　堀・大溝：平面 1/100・1/300・1/60、断面 1/60

＊但し、遺構規模の関係上これに合わない図面もあるため、その都度スケールおよび縮尺を付した。

（イ）推定線は原則として破線で表現した。これに沿わない場合は挿図中に示した。

（ウ）土器の観察にあたっては、農林水産省農林水産技術会議事務所監修「新版標準土色帖」を使用した。

（エ）図面中の土器は「P」、礫は「S」の略号で表記した。

（オ）挿図中で使用したスクリーントーンの用例は下図のとおりである。それ以外のものについてはその都度挿図中に記した。

② 遺物実測図の用例

（ア）鉄製品は 1/2、古銭は原寸、その他の土器・陶磁器類、石器、石製品については 1/3 縮尺で掲載した。なお、同一図版上に異なる縮尺の遺物が混在する場合は、その都度スケールおよび縮尺を付した。

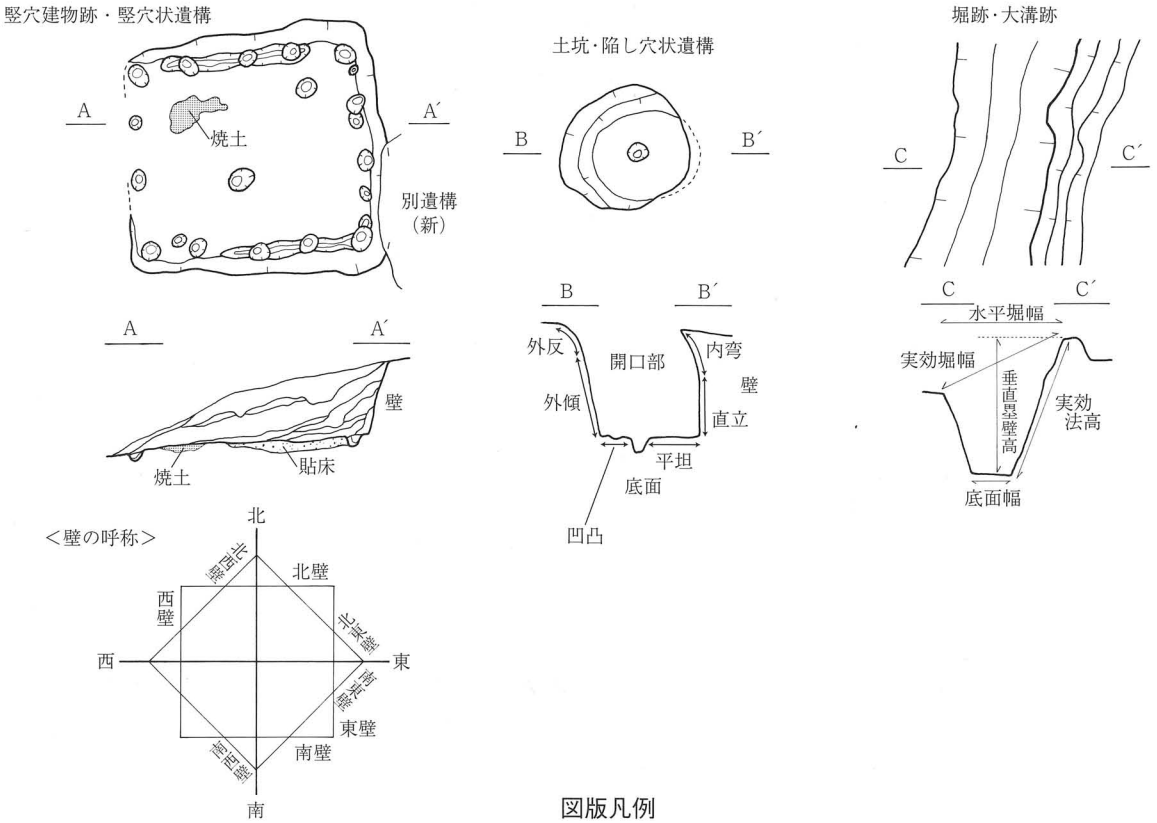
（イ）土器の実測にあたり、口縁部もしくは底部が 1/5 以上残存する場合は努めて図上復元を試みた。

（ウ）本文および遺物観察表の数値に冠した（　）は推定値を、△は残存値を示している。

③ 国土地理院発行の地形図を複製したものは、図中に図幅名と縮尺を記した。

④ 引用・参考文献は各章末に記した。

（千葉正彦）



図版凡例

Ⅳ．検出遺構と出土遺物

発掘調査では縄文時代、古代、中世、時期不明の４時期の遺構・遺物が確認された。この４時期は出土遺物がきわめて少数であったため、所属時期を遺構の形態、および基本層序に認められる数種のテフラ混入物などから判断している。また、単独で検出され、時期が明確でない遺構や、後世の破壊により遺存状況が悪く、特定時期を判断できなかった遺構も存在する。各時期の遺構の種別と数量は以下の通りである。

縄文時代：炉跡１基、土坑42基（内、28基は円筒形陥し穴状遺構の可能性有り）、陥し穴状遺構23基

古　　代：竪穴住居跡３棟、焼土遺構１基

中　　世：《普請》平坦地６箇所（内、帯曲輪１）、切岸状遺構２箇所、空堀跡３条、大溝跡２条、土塁１箇所、門跡？１箇所

《作事》掘立柱建物跡１棟、竪穴建物跡９棟、竪穴状遺構７棟、柱穴状小ピット群595個、時期不明：墓坑（獣骨）１基

以下、時期毎に検出した遺構と遺物について述べる。

１．縄文時代の検出遺構

縄文時代の遺構は、炉跡１基、土坑42基、溝状陥し穴状遺構23基が見つかった。このうち土坑とした42基については平面形が楕円形～円形基調のものが殆どであるが、底面中央部に小穴を持つもの、あるいは配置が一定の間隔を持って連続するものは円筒形の陥し穴状遺構である可能性が想定された。しかしながら平面形、断面形状、堆積物、底面の状況、配置のみを持って判断するには、中間的な様相のものが少なからず存在する事から、便宜上、円筒形の陥し穴状遺構の可能性が高いものであっても土坑に含めて報告することとし、第Ⅵ章（２）、および土坑計測値一覧で個々にその可能性について指摘するに留めた。また、これらの埋土中にはTo-Nk、To-Cuの可能性のある白色・橙色パミスが疎らに混入するものがあるが、テフラ年代からみて二次堆積したものと判断している。炉跡については縄文時代と考えられるものを１基掲載している。

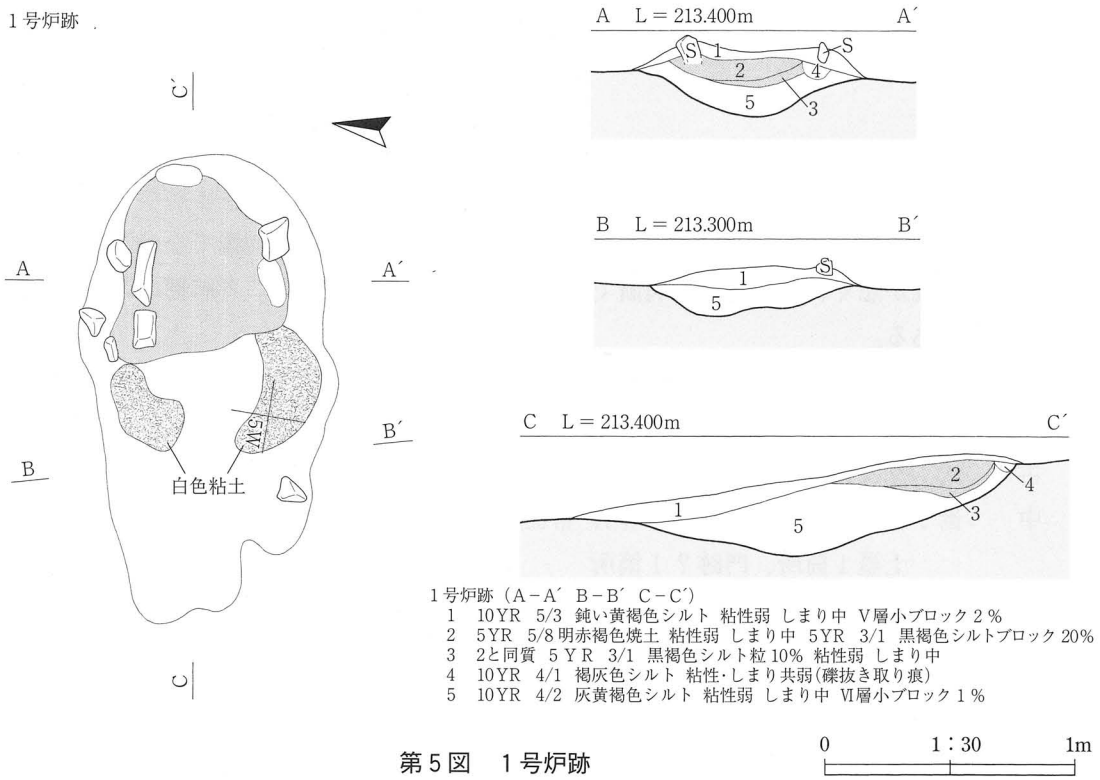
１号炉跡（第５図、写真図版２）

調査区西側下方、５Ｗグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。全体としては97×183㎝の不整楕円形の範囲に焼土細粒を含んだ鈍い黄褐色シルトが広がるものである。東半部において65～70㎝の現地性焼土、周辺に不整な小礫・抜き取り痕が認められる。中央部では48×83㎝の範囲に白色の粘土が確認されている。炉の構造は、平面形から複式炉に類するものとみられるが、明確な掘り込み部などが伴わず詳細は不明である。焼土は最も厚く形成されている部分で8.5㎝を測る。

遺物（第56図、写真図版38）

埋土上位から浅鉢片と深鉢片各１点が出土しており（１・２）、いずれも晩期（大洞ＢＣ式期）に比定される特徴を有する。本遺構の時期は、出土遺物から判断して縄文時代晩期に相当するとみられる。

１号土坑（第６図、写真図版２）



第５図　１号炉跡

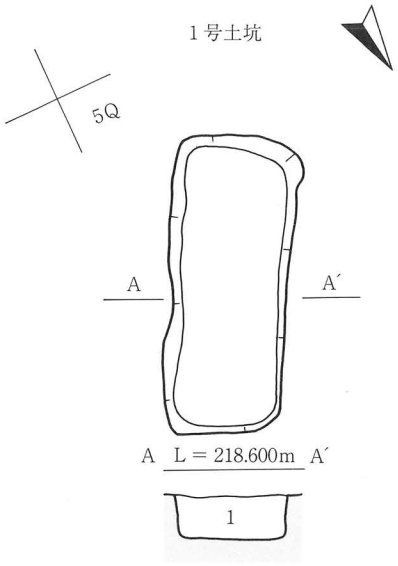
〔位置・検出状況〕調査区南西側、５Ｑグリッドに位置する。検出面はⅥ層である。
〔規模・形状〕開口部径 62 × 158cm、底部径 50 × 144cmの隅丸長方形を呈する。断面形はビーカー状で、壁は底面から直立して立ち上がる。深さは最深部で22cmを測る。
〔埋土〕Ⅴ・Ⅵ層ブロックを含む灰黄褐色砂質シルトの混合土である。粒状～板状の炭化物が全体に10%程度混入する。人為堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

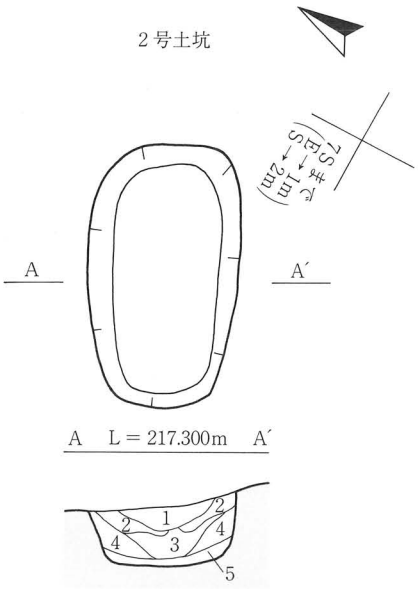
２号土坑（第６図、写真図版２）

〔位置・検出状況〕調査区中央部西寄り、７Ｓグリッドに位置する。検出面はⅤ層下位～Ⅵ層である。
〔規模・形状〕開口部径 80 × 138cm、底部径 56 × 120cm の楕円形を呈する。断面形はＵ字状で、壁は底面からやや外傾しながら直立気味に立ち上がる。深さは最深部で32cmを測る。
〔埋土〕５層からなり、黒色・明黄褐色シルト主体で構成される。第１層に白色パミス、第４層に橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

３号土坑（第６図、写真図版３）

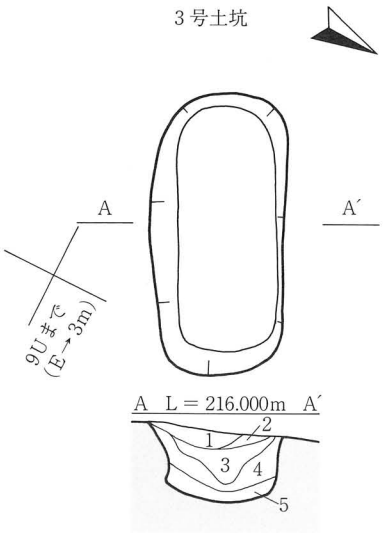
〔位置・検出状況〕調査区中央部西寄り、９Ｔグリッドに位置する。検出面はⅤ層である。
〔規模・形状〕開口部径 70 × 146cm、底部径 49 × 129cm の楕円形を呈する。断面形はＵ字状で、壁は底面から直立気味に立ち上がる。深さは最深部で36cmを測る。
〔埋土〕５層からなり、黒褐色シルト主体で構成される。第１層に白色パミス、第３・４層に橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

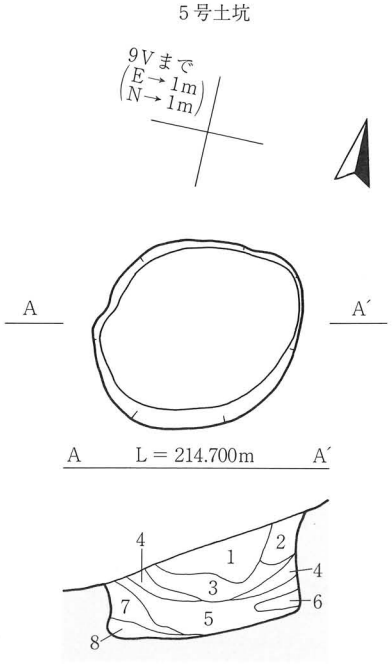




1号土坑（A−A′）
1　10YR 6/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性・しまり共弱
　Ⅴ層、Ⅵ層ブロック混入50：30：10
　炭化物ブロックφ2㎜ほどの粒状と厚さ5㎜程の板状で
　全体に10%程度混入

2号土坑（A−A′）
1　10YR 2/1 黒色シルト　粘性やや弱　しまり中　橙色パミス2％
　白色パミス1％　Ⅴ層ブロック2％
2　10YR 6/8 明黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　1層ブロック3％
3　1層と同質　Ⅴ層ブロック混入率のみ1％
4　10YR 6/8 明黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス1％以下
5　10YR 4/1 褐灰色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅴ・Ⅵ層ブロック各2％





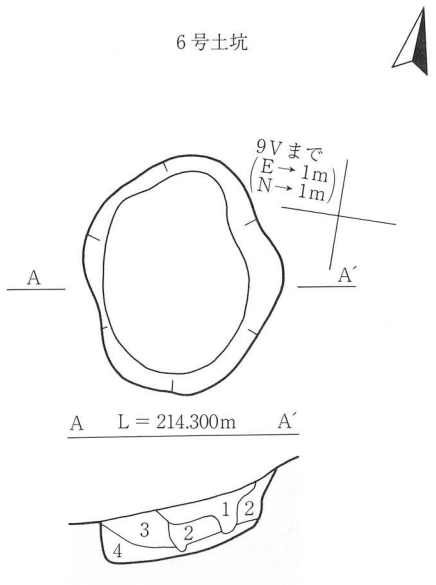
3号土坑（A−A′）
1　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中
　橙・白色パミス1％以下
2　10YR 5/2 灰黄褐色シルト　粘性弱　しまり中
3　1層とⅤ層の混合土　橙色パミス1％
4　10YR 8/8 黄橙色層（汚れⅤ層崩落土）橙色パミス1％以下
5　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中

5号土坑（A−A′）
1　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス2％
2　10YR 5/6 黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅴ層ブロック・橙色パミス1％
3　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス2％
4　10YR 7/8 黄橙色層（汚れⅤ層崩落土）粘性弱　しまり中
5　10YR 4/4 褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス2％　白色パミス1％
6　10YR 8/6 黄橙色層（汚れⅥ層崩落土）粘性弱　しまり中
7　10YR 8/4 浅黄橙色層（汚れⅥ層崩落土）粘性弱　しまりやや弱
8　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅵ層ブロック1％以下

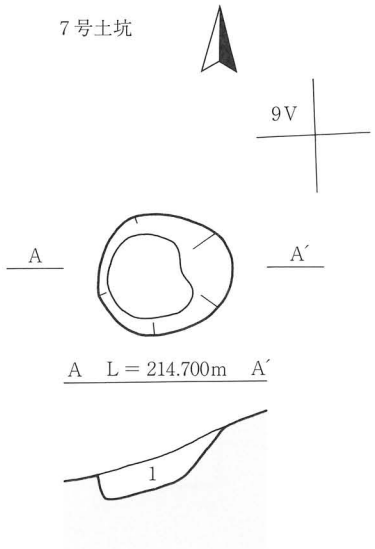
0　1：40　2m

※4号土坑は第17図

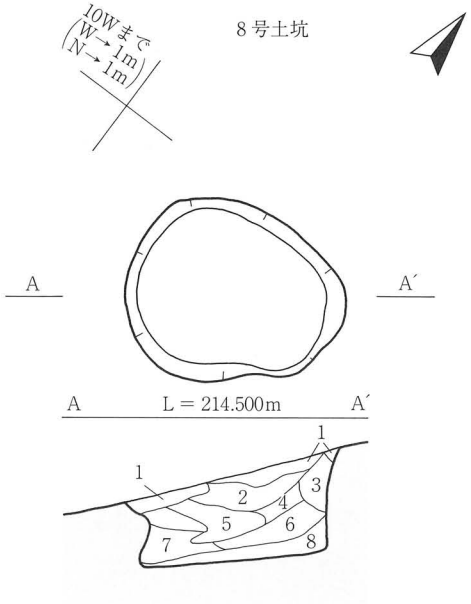
第6図　1～3・5号土坑



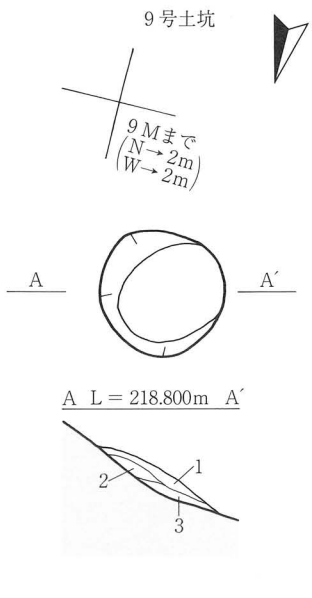
6号土坑（A−A′）
1　10YR　4/2　灰黄褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
2　10YR　3/2　黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
3　10YR　4/3　鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
4　10YR　3/2　黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅵ層ブロック１％以下



7号土坑（A−A′）
1　10YR　6/6　明黄褐色シルト　粘性中　しまり強
　　10YR　2/3　黒褐色シルトブロック５％



8号土坑（A−A′）
1　10YR　4/2　灰黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス１％以下
2　10YR　4/3　鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス２％
3　10YR　4/3　鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス１％以下
4　10YR　6/8　明黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅴ・Ⅵ層１％
　　橙・白色パミス各１％以下
5　10YR　3/3　暗褐色シルト　粘性弱　しまり中
　　Ⅴ層大ブロック　橙色パミス　１％
7　10YR　7/8　黄橙色層（汚れⅥ層崩落土）粘性弱　しまり中
8　10YR　2/2　黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス１％以下



9号土坑（A−A′）
1　10YR　2/2　黒褐色シルト　粘性中　しまり弱　橙色パミス３％
2　10YR　5/6　黄褐色シルトと同2/2黒褐色シルトの混合土７：３
　　粘性中　しまり弱　橙パミス３％
3　２層と同質　混合比３：７　粘性中　しまり弱　橙色パミス３％

0　1：40　2m

第７図　６～９号土坑

４号土坑（第17図、写真図版13）

〔位置・検出状況〕調査区中央部西寄り、９Ｔグリッドに位置する。検出面はＶ層である。５号陥し穴状遺構と重複し、これにより切られる。

〔規模・形状〕開口部径48×86cm、底部径42×79cmの隅丸長方形を呈する。断面形はビーカー状で、残存する壁は底面から直立して立ち上がる。深さは最深部で10cmを測る。

〔埋土〕２層からなり、明褐～黒褐色シルト主体で構成される。上位に橙色パミスが疎らに混入する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

５号土坑（第６図、写真図版３）

〔位置・検出状況〕調査区西側、８Ｖグリッドに位置する。検出面はＶ層である。

〔規模・形状〕開口部径100×118cm、底部径85×107cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は底面から直立気味に立ち上がる。深さは最深部で51cmを測る。

〔埋土〕８層からなり、黒褐～黄褐色シルト主体で構成される。上～中位に白色・橙色パミスを疎らに含む。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

６号土坑（第７図、写真図版３）

〔位置・検出状況〕調査区西側、８Ｖグリッドに位置する。検出面はＶ層である。

〔規模・形状〕開口部径104×126cm、底部径74×105cmの不整楕円形を呈する。断面形は皿状で、壁は底面から直立気味に立ち上がる。深さは最深部で26cmを測る。

〔埋土〕４層からなり、灰黄褐色～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

７号土坑（第７図、写真図版３）

〔位置・検出状況〕調査区西側、８Ｖグリッドに位置する。検出面はＶ層である。

〔規模・形状〕開口部径64×70cm、底部径38×43cmの円形を呈する。断面形は皿状で、壁は底面から外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で16cmを測る。

〔埋土〕黒褐色シルトブロックを少量含む明黄褐色シルトの単層である。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

８号土坑（第７図、写真図版３）

〔位置・検出状況〕調査区西側、９Ｖグリッドに位置する。検出面はＶ層である。

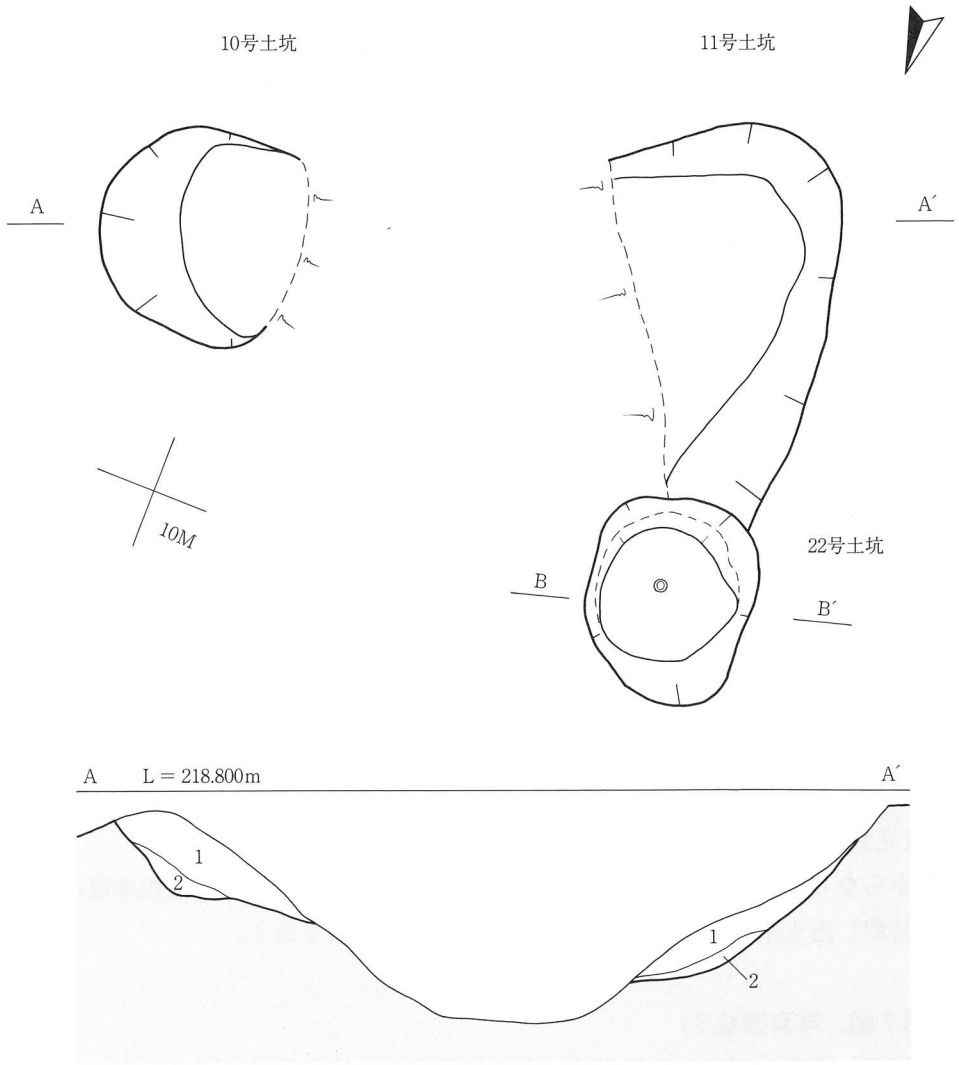
〔規模・形状〕開口部径94×115cm、底部径81×99cmの不整円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は底面から直立気味に立ち上がる。南西側は崩落の為、やや外傾する。深さは最深部で50cmを測る。

〔埋土〕８層からなり、灰黄褐色～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。全体に白色・橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

９号土坑（第７図、写真図版４）

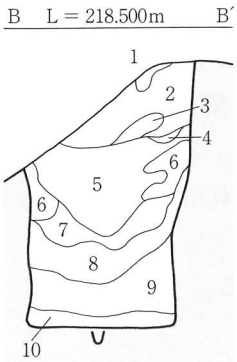
〔位置・検出状況〕調査区中央部南寄り、８Ｌグリッドに位置する。検出面はＶ層である。



10号土坑（A−A′）
1　10YR 6/6 明黄褐色シルト　粘性中　しまり強
　　10YR 2/3 黒褐色シルトブロック５％
2　10YR 5/6 黄褐色シルトと同2/2黒褐色シルトの混合土６：４
　　粘性中　しまり強　橙色パミス３％

11号土坑（A−A′）
1　10YR 5/8 黄褐色シルトと10YR 2/2 黒褐色シルト、
　　10YR 6/8 明黄褐色シルトの混合土
　　６：２：２（後２者はブロックで混入）　粘性･しまり共中
　　橙色パミス５％　白色パミス２％
2　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性･しまり共弱　橙色パミス３％

22号土坑



22号土坑（B−B′）
1　10YR 5/6 黄褐色シルト　粘性・しまり共中　10YR 2/2 黒褐色シルト、
　　同 6/8 明黄褐色シルト、共にブロック状で３％混入
2　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまり中　5YR 6/8 橙色パミス３％
3　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性中　しまりやや強　Ⅴ層３％　橙色パミス１％疎らに混入
4　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性中　しまりやや強　Ⅴ層 10%　橙色パミス５％
5　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや強
6　10YR 3/4 暗褐色粗砂　粘性弱　しまり中　橙色パミスφ１～３㎜、15%
7　10YR 4/4 褐色砂質シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミスφ３㎜、５％
8　10YR 7/8 黄橙色粘質シルト　粘性やや強　しまり中　中央付近に10YR 4/4 褐色土 15%
9　10YR 4/4 褐色砂質シルトとⅤ層の互層　粘性やや強　しまり中
10　10YR 4/3 鈍い黄褐色砂質シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス 30%

0　1：40　2m

第８図　10・11・22号土坑

〔規模・形状〕開口部径66×66cm、底部径48×56cmの円形を呈する。断面形はⅢ状で、壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。深さは最深部で12cmを測る。
〔埋土〕３層からなり、上位は黒褐色シルト、下位は黄褐色･黒褐色シルトの混合土主体で構成される。全体的に橙色パミスを疎らに含む。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

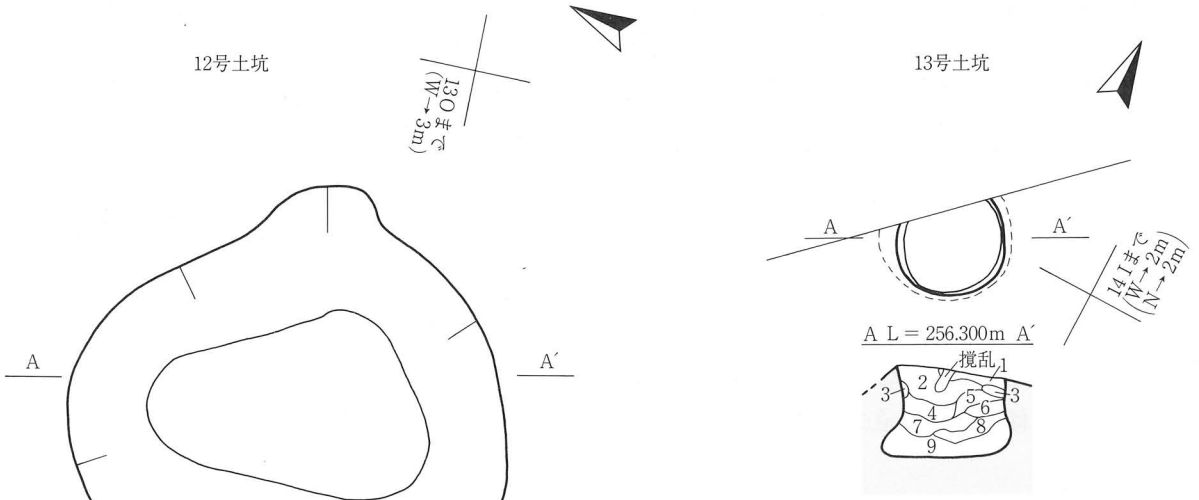
10号土坑（第８図、写真図版４）
〔位置・検出状況〕調査区中央部南寄り、９Ｌグリッドに位置する。検出面はⅢ層下位である。
〔規模･形状〕開口部径10.7×11cm、底部径6.6×9.8cmの円形基調である。断面形はⅢ状で、壁は東側において外傾しながら立ち上がる。西側は３号堀跡に切られ消失している。深さは最深部で42cmを測る。
〔埋土〕２層からなり、黄褐～明黄褐色シルト主体で構成される。人為堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

11号土坑（第８図、写真図版４）
〔位置・検出状況〕調査区中央部南寄り、９Ｍグリッドに位置する。検出面はⅢ層下位である。
〔規模・形状〕開口部径11.6×20.6cm、底部径9.0×14.8cmの楕円形基調を呈する。断面形はⅢ状で、壁は底面から丸みをもって緩やかに立ち上がる。深さは最深部で24cmを測る。
〔埋土〕２層からなり、黄褐色シルトと黒褐色シルト、明黄褐色シルトの混合土主体で構成される。人為堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

12号土坑（第９図、写真図版４）
〔位置・検出状況〕調査区中央部、13Ｎグリッドに位置する。検出面はⅣ層である。
〔規模・形状〕開口部径176×232cm、底部径98×148cmの楕円形を呈する。断面形はⅢ状で、壁は底面から外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で26cmを測る。
〔埋土〕５層からなり、炭化物粒を少量含む黒褐色シルト主体で構成される。第２層に異地性の焼土が堆積する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

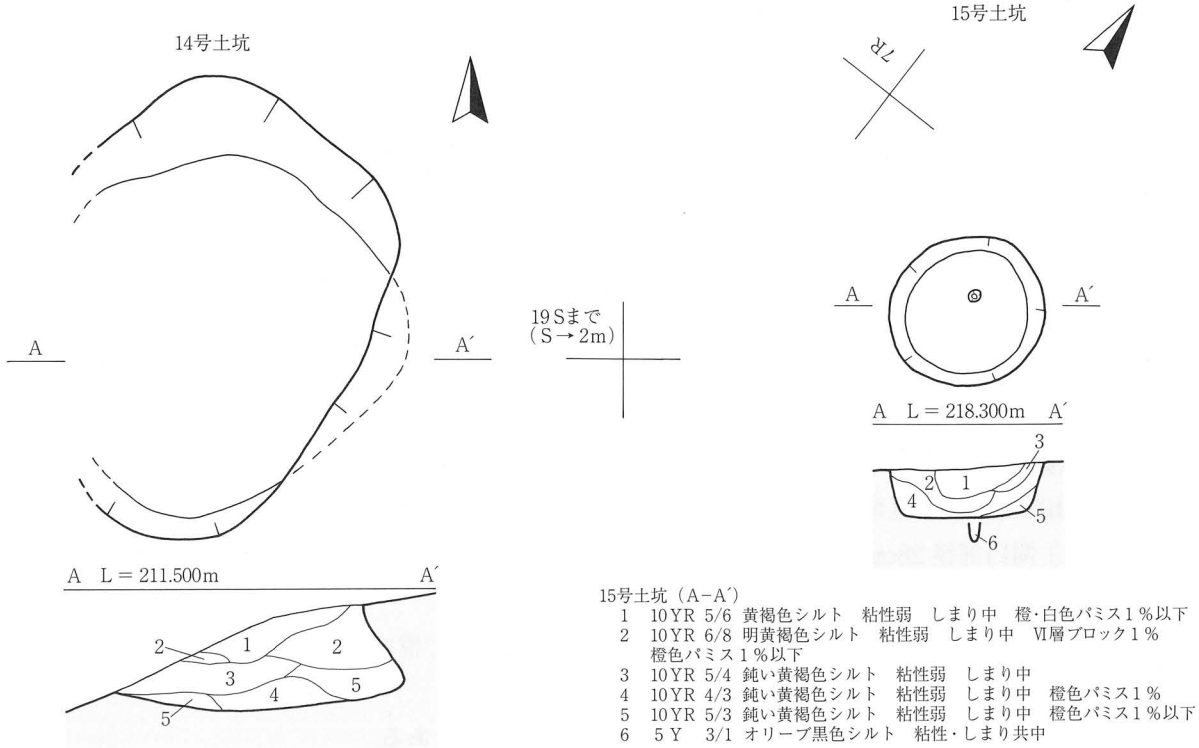
13号土坑（第９図、写真図版５）
〔位置・検出状況〕調査区南東側、13Ｈグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位である。
〔規模･形状〕開口部径28cm、底部径70cmの円形を呈する。断面形はフラスコ状で、壁は底面からオーバーハングしながら立ち上がる。深さは最深部で48cmを測る。
〔埋土〕９層からなり、黒色～黒褐色、鈍い黄褐色シルト主体で構成される。上位に白色パミス、中位に橙色パミスを疎らに含む。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

14号土坑（第９図、写真図版５）
〔位置・検出状況〕調査区中央部北東寄り、19Ｉグリッドに位置する。検出面はⅣ層下～Ⅴ層である。



13号土坑（A−A′）
1　10YR 2/1 黒色粘質シルト　粘性強　しまり中　橙色パミス３％
　白色パミス 15%
2　10YR 5/3 鈍い黄褐色シルト　粘性やや強　しまり中　橙色パミス全体に10%
3　2.5Y 7/6 明黄褐色粘質シルト　粘性強　しまり中（Ⅵ層壁面崩落土？）
4　10YR 4/1 褐灰色シルト　粘性・しまり共やや強　Ⅵ層小ブロック３％
5　10YR 3/1 黒褐色粘質シルト　粘性強　しまり中　橙色パミス５％
6　2.5Y 6/6 明黄褐色粘質シルト　粘性強　しまり中　３に比して汚れている
　橙色パミス１％
7　10YR 3/1 黒褐色粘質シルト　粘性強　しまり中　Ⅵ層ブロック１％
8　10YR 3/1 黒褐色シルトと2.5Y 6/6 明黄褐色シルトの混合土７：３
　粘性やや強　しまり弱
9　10YR 2/1 黒色シルト　粘性強　しまり中　Ⅵ層ブロック10%混入（特に壁際）

12号土坑（A−A′）
1　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性・しまり共弱
2　10YR 7/6 橙色焼土　粘性・しまり共弱
3　10YR 2/1 黒褐色シルト　粘性・しまり共やや弱　炭化物粒５％
4　10YR 2/1 黒色シルト　粘性・しまり共やや弱　炭化物粒１％
5　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性・しまり共やや弱　２層ブロック１％　Ⅴ層ブロック２％



15号土坑（A−A′）
1　10YR 5/6 黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス１％以下
2　10YR 6/8 明黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅵ層ブロック１％
　橙色パミス１％以下
3　10YR 5/4 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中
4　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス１％
5　10YR 5/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス１％以下
6　5Y 3/1 オリーブ黒色シルト　粘性・しまり共中

14号土坑（A−A′）
1　10YR 3/4 暗褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス各１％
2　10YR 5/8 黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス各１％
3　10YR 3/1 黒褐色シルトと10YR 4/2 灰黄褐色シルトの混合土　粘性弱　しまり中
　Ⅵ層ブロック・橙色パミス・白色パミス各１％以下
4　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　10YR 5/2 灰黄褐色シルトブロック２％
5　10YR 5/2 灰黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅵ層ブロック５％

0　1：40　2m

第９図　12〜15号土坑

〔規模・形状〕開口部径168×242cm、底部径176×186cmの円形基調を呈する。断面形はフラスコ～皿状で、東壁のみ底面からオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で50cmを測る。
〔埋土〕５層からなり、暗褐～黒褐色シルト主体で構成される。上～中位に白色・橙色パミスを疎らに含む。人為堆積と考えられる。
遺物（第56図、写真図版38）
　底面から縄文土器の深鉢が入れ子状に潰れた状態で２点出土している（３・４）。時期は土器から判断して晩期（大洞ＢＣ式期）に相当するものと推測される。

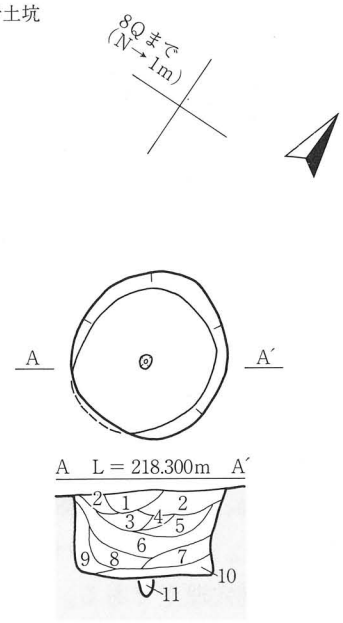
15号土坑（第９図、写真図版５）
〔位置・検出状況〕調査区南西側、６Ｑグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層である。
〔規模・形状〕開口部径78×82cm、底部径64×69cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は直立気味に立ち上がる。深さは最深部で26cmを測る。底面中央に径８cm、深さ12cmの副穴を持つ。
〔埋土〕６層からなり、黄褐～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。上位に白色パミス、中～下位に橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。６層は副穴埋土である。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

16号土坑（第10図、写真図版５）
〔位置・検出状況〕調査区南西側、７Ｐグリッドに位置する。検出面はⅥ層である。
〔規模・形状〕開口部径82×88cm、底部径72×74cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は直立して立ち上がる。深さは最深部で46cmを測る。底面中央に径７cm、深さ10cmの副穴を持つ。
〔埋土〕11層からなり、褐色～明黄褐色シルト主体で構成される。全体に橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。11層は副穴埋土である。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

17号土坑（第10図、写真図版６）
〔位置・検出状況〕調査区南西側、８Ｏグリッドに位置する。検出面はⅤ層下位～Ⅵ層である。
〔規模・形状〕開口部径72×86cm、底部径62×66cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は直立して立ち上がる。深さは最深部で84cmを測る。
〔埋土〕８層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

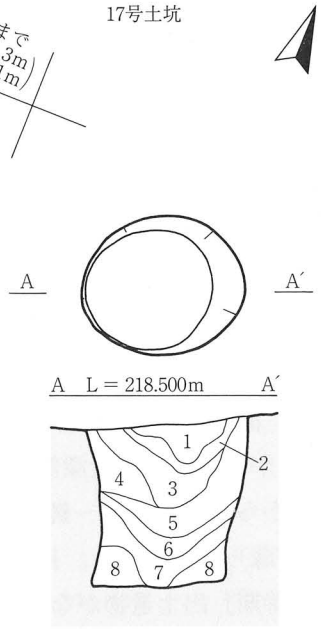
18号土坑（第10図、写真図版６）
〔位置・検出状況〕調査区南西側、８Ｏグリッドに位置する。検出面はⅤ層である。
〔規模・形状〕開口部径126×156cm、底部径80×82cmの楕円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は直立して立ち上がり、上半に至って大きく外傾する。深さは最深部で108cmを測る。底面中央に径12cm、深さ20cmの副穴を持つ。
〔埋土〕７層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。上位～中位に白色・橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。７層は副穴埋土である。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

16号土坑



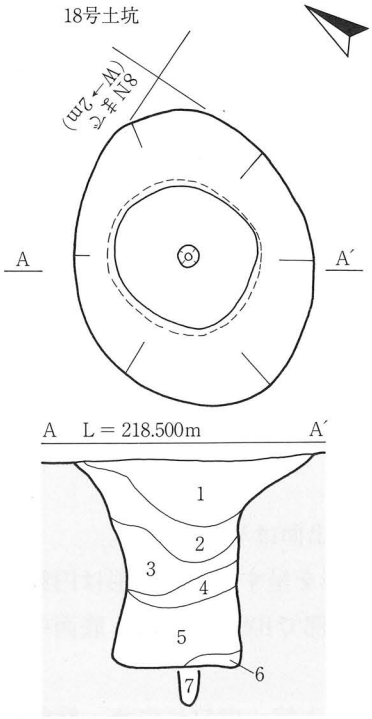
16号土坑（A−A′）
1　10YR 3/2　黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス１％以下
2　10YR 7/8　黄橙色シルト（Ⅴ層主体）１層３％混入　粘性弱　しまりやや弱
3　10YR 4/4　褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅴ層ブロック５％
4　10YR 6/6　明黄褐色シルト　粘性・しまり弱（Ⅴ層主体）
5　10YR 3/1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅴ層大ブロック３％
6　10YR 4/4　褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅴ層ブロック５％
　Ⅵ層ブロック３％
7　10YR 7/6　明黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅵ層ブロック３％（Ⅴ層主体）
8　10YR 4/1　褐灰色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅵ層ブロック５％
9　10YR 7/1　灰白色層（Ⅵ層主体）　Ⅴ層ブロック30％
10　10YR 3/2　黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス１％
11　５Y　3/1　オリーブ黒色シルト　粘性・しまり共中

17号土坑



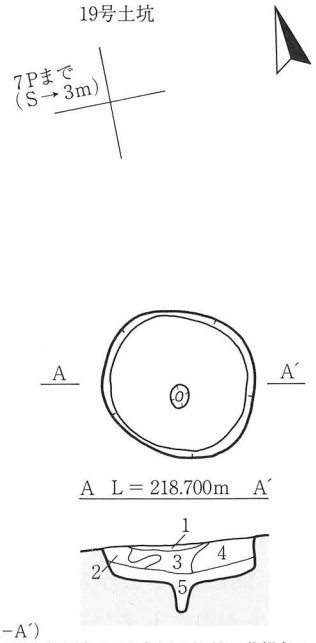
17号土坑（A−A′）
1　10YR 2/1　黒色シルト　粘性中　しまり中　白色パミス１％
　橙色パミス・Ⅴ層ブロック
2　１層と同じだが、Ⅴ層粒状に３％含む　粘性弱　しまり中
3　１層と同じだが、Ⅴ層ブロック状に１％含む　粘性弱　しまり中
4　10YR 3/1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅴ層粒全体に２％
5　４と同じだが、Ⅴ層ブロック10％含む　粘性弱　しまりやや弱
6　10YR 4/1　褐灰色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅴ・Ⅵ層ブロック各２％
7　４と同じだが、Ⅴ層ブロック５％含む　粘性弱　しまり中
8　10YR 5/4　鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共中
　10YR 3/1　黒褐色シルトブロック１％

18号土坑



18号土坑（A−A′）
1　10YR 2/1　黒色シルト　粘性中　しまり中　白色パミス１％　橙色パミス・Ⅴ層ブロック
2　１と同じであるが、Ⅴ層ブロック混合比のみ１％
3　10YR 4/4　褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　２層、Ⅴ層、Ⅵ層の混合土
4　10YR 4/1　褐灰色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅴ・Ⅵ層ブロック各２％
5　10YR 5/4　鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共中　10YR 3/1　黒褐色シルトブロック１％
6　10YR 3/1　黒褐色シルト　粘性中　しまり弱
7　５Y　3/1　オリーブ黒色シルト　粘性・しまり共中

19号土坑



19号土坑（A−A′）
1　10YR 5/1　褐灰色シルトと同5/4鈍い黄褐色シルトの混合土
　粘性・しまり共弱
2　10YR 7/6　明黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　１層30％混入
3　10YR 4/2　灰黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス１％
　白色パミス１％以下
4　10YR 6/6　明黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　３層５％混入
5　10YR 3/1　黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス２％
　白色パミス１％以下

0　1：40　2m

第10図　16〜19号土坑

19号土坑（第10図、写真図版６）

〔位置・検出状況〕調査区南西側、７Ｏグリッドに位置する。検出面はＶ層である。

〔規模・形状〕開口部径76×80cm、底部径68×72cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は直立して立ち上がる。深さは最深部で20cmを測る。底面中央に径10cm、深さ15cmの副穴を持つ。

〔埋土〕５層からなり、明黄褐～灰黄褐色シルト主体で構成される。全体に白色・橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

20号土坑（第11図、写真図版６）

〔位置・検出状況〕調査区中央部南寄り、８Ｎグリッドに位置する。検出面はＶ層である。

〔規模・形状〕開口部径80×94cm、底部径60cmの楕円形を呈する。断面形は円筒状である。壁は直立して立ち上がり、南壁のみ上部で外反する。深さは最深部で106cmを測る。

〔埋土〕６層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

21号土坑（第11図、写真図版７）

〔位置・検出状況〕調査区中央部南寄り、８Ｎグリッドに位置する。検出面はⅢ層下位である。

〔規模・形状〕開口部径120×124cm、底部径64×72cmの円形を呈する。断面形は逆台形状で、壁は外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で112cmを測る。

〔埋土〕４層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。上～中位に白色・橙色パミスを疎らに含む。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

22号土坑（第８図、写真図版７）

〔位置・検出状況〕調査区中央部南寄り、９Ｍグリッドに位置する。検出面はⅢ層下位である。

〔規模・形状〕開口部径88×108cm、底部径75×78cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁はほぼ直立して立ち上がる。深さは最深部で137cmを測る。底面中央に径７cm、深さ８cmの副穴を持つ。

〔埋土〕10層からなり、黒褐～褐色シルト主体で構成される。全体に橙色パミスが混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

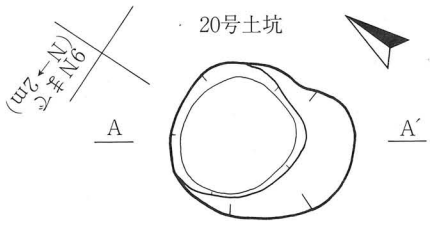
23号土坑（第11図、写真図版７）

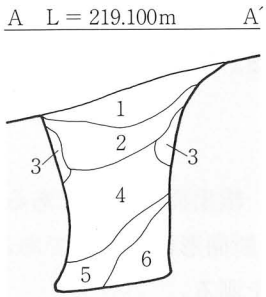
〔位置・検出状況〕調査区中央部南寄り、10Ｎグリッドに位置する。検出面はⅢ層下位である。

〔規模・形状〕開口部径141×200cm、底部径106×114cmの円形を呈する。断面形はフラスコ状で、壁は底面からオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で129cmを測る。底面中央に径10cm、深さ18cmの副穴を持つ。

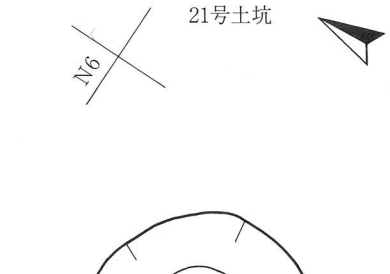
〔埋土〕10層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。上位に白色パミス、中位に橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。10層は副穴埋土である。

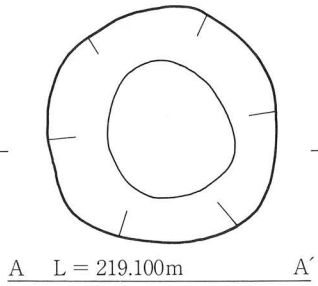
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。



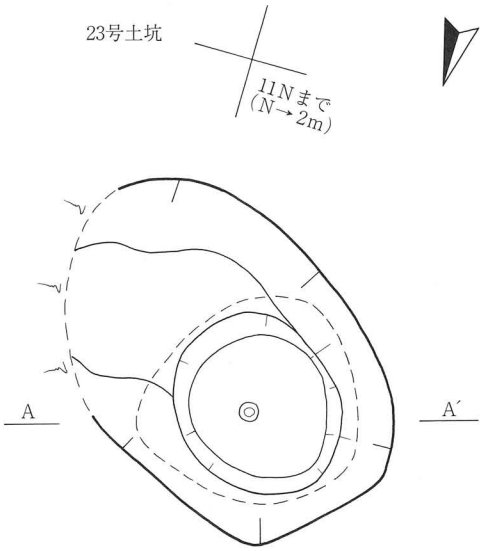


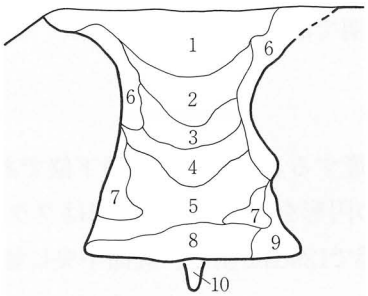
20号土坑（A−A′）
1　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス各１％
2　10YR 2/1 黒色シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス１以下％
3　10YR 5/6 黄褐色シルトと10YR 3/1 黒褐色シルトの混合土　粘性弱　しまり中
4　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス３％
5　４に同じで橙色パミス２％
6　7.5YR 6/8 橙色層（橙色パミス層）粘性・しまり共弱



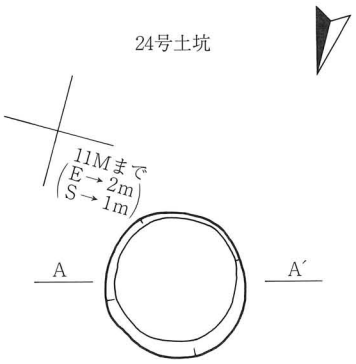


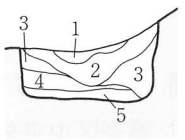
21号土坑（A−A′）
1　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス１％
2　10YR 2/1 黒色シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス１％
3　10YR 3/1 黒褐色シルトとV層との混合土50：50　粘性弱　しまりやや弱
4　10YR 4/1 褐灰色シルト　粘性・しまり共弱



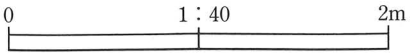


23号土坑（A−A′）
1　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス１％以下
2　10YR 2/1 黒色シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス１％以下
3　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス２％
4　10YR 2/3 黒褐色シルト　粘性・しまり共弱　橙色パミス１％以下
5　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス１％
6　３層とV層の混合土　粘性弱　しまり中
7　５層とV層の混合土　粘性弱　しまり中
8　10YR 2/3 黒褐色シルト　粘性・しまり共中
9　８層とⅥ層の混合土　粘性中　しまりやや弱
10　5Y 3/1 オリーブ黒色シルト　粘性・しまり共中





24号土坑（A−A′）
1　7.5YR 5/6 明褐色粘質シルト　粘性・しまり共中　橙色パミス５％
白色パミス１％
2　10YR 3/1 黒褐色粘質シルト　粘性中　しまり弱
7.5YR 5/6 黄褐色シルトブロック３％　橙色パミス５％
3　10YR 3/1 黒褐色シルトと7.5YR 5/6 明褐色シルトの混合土６：４
橙色パミス５％　白色パミス（φ～５㎜）１％
4　１層と同じ　粘性中　しまり強
5　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性中　しまり強
10YR 7/3 浅黄色テフラブロック１％（V層？）



※22号土坑は第８図

第11図　20・21・23・24号土坑

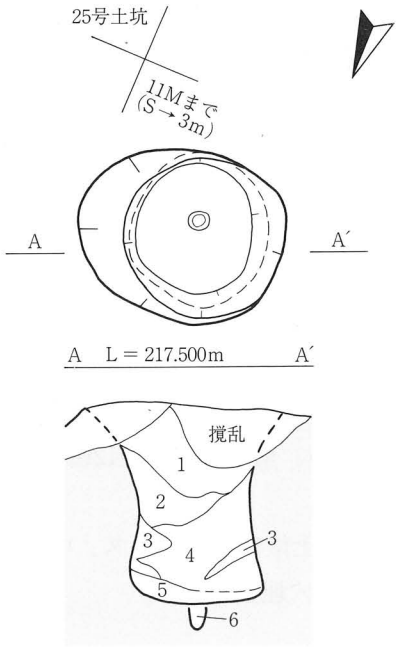
24号土坑（第11図、写真図版７）
〔位置・検出状況〕調査区中央部南寄り、11Ｍグリッドに位置する。検出面はⅢ層下位である。
〔規模・形状〕開口部径73×76cm、底部径64cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は直立して立ち上がる。深さは最深部で33cmを測る。
〔埋土〕５層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。中位～上位に白色・橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

25号土坑（第12図、写真図版８）
〔位置・検出状況〕調査区中央部南寄り、11Ｍグリッドに位置する。検出面はⅥ層である。
〔規模・形状〕開口部径90×109cm、底部径72×81cmの円形を呈する。断面形はフラスコ状で、壁は弱くオーバーハングしながら立ち上がる。深さは最深部で103cmを測る。底面中央に径12cm、深さ14cmの副穴を持つ。
〔埋土〕６層からなり、黒褐～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。上位に白色パミス、中位～下位に橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。６層は副穴埋土である。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

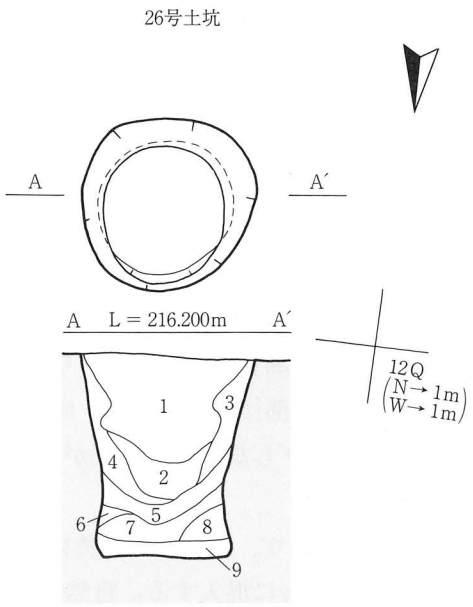
26号土坑（第12図、写真図版８）
〔位置・検出状況〕調査区中央部、11Ｐグリッドに位置する。検出面はⅢ層下位である。
〔規模・形状〕開口部径90×92cm、底部径69×71cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は下半部で一旦弱く内傾したのち、やや外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で107cmを測る。
〔埋土〕９層からなり、黒色～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。上位～中位に白色・橙色パミス、下位に白色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

27号土坑（第12図、写真図版８）
〔位置・検出状況〕調査区中央部、11Ｐグリッドに位置する。検出面はⅣ層である。
〔規模・形状〕開口部径98×106cm、底部径64×69cmの楕円形を呈する。断面形は円筒状で、壁はほぼ直立して立ち上がる。深さは最深部で102cmを測る。
〔埋土〕７層からなり、黒色～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。上位に白色・橙色パミス、中～下位に橙色パミスを疎らに含む。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

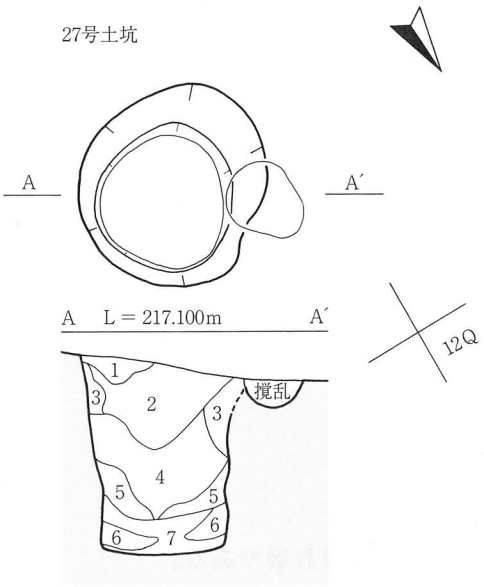
28号土坑（第12図、写真図版８）
〔位置・検出状況〕調査区中央部、13Ｏグリッドに位置する。検出面はⅣ層である。
〔規模・形状〕開口部径97×106cm、底部径79cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は底面からやや丸みを持って立ち上がる。深さは最深部で106cmを測る。
〔埋土〕７層からなり、黒褐～褐灰色シルト主体で構成される。上位に白色・橙色パミスが疎らに混入する。第４層は橙色パミスの純層である。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。



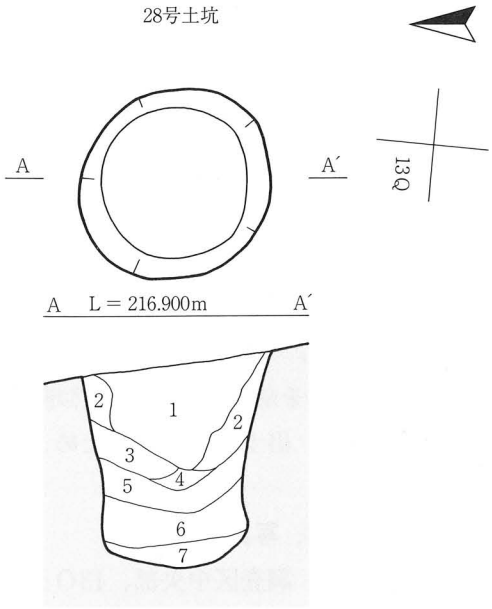
25号土坑（A−A′）
1　10YR 2/2 黒褐色砂質シルト　粘性やや弱　しまり中　橙色パミス1％
　白色パミス7％　2.5Y 8/6 黄色パミス（To-Cu?）3％
2　10YR 5/6 黄褐色シルト　粘性弱　しまり中
　10YR 4/4 褐色粒壁際に4％程度混入
3　10YR 7/6 明黄褐色シルト　粘性やや強　しまり中
4　10YR 5/4 鈍い黄褐色砂質シルト　粘性弱　しまり中
　Ⅴ層ブロック5％　橙色パミス3％
5　10YR 3/2 黒褐色砂質シルト　粘性弱　しまり中
　Ⅴ・Ⅵ層ブロック10％　橙色パミス3％
6　5Y 3/1 オリーブ黒色シルト　粘性・しまり共中



26号土坑（A−A′）
1　10YR 2/1 黒色シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス1％
2　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス1％
3　10YR 4/1 褐灰色シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス各1％以下
4　10YR 5/8 黄褐色と2層の混合土　粘性弱　しまり中
5　10YR 7/6 明黄褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
　10YR 2/1 黒色シルトブロック2％
6　10YR 6/2 灰黄褐色シルト（汚れたⅥ層崩落土）粘性弱　しまりやや弱
7　10YR 4/1 褐灰色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス1％以下
8　10YR 7/4 鈍い黄橙色シルト　粘性弱　しまり中
　10YR 3/3 暗褐色シルトもや状に1％
9　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中



27号土坑（A−A′）
1　10YR 4/1 褐灰色シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス各1％以下
2　10YR 2/1 黒色シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス各1％
3　10YR 5/8 黄褐色シルトとⅣ層の混合土　粘性弱　しまり中
4　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中
　10YR 3/1 黒褐色シルトもや状に5％ 橙色パミス1％
5　10YR 7/6 明黄褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
　10YR 2/1 黒色ブロック2％
6　10YR 7/4 鈍い黄橙色シルト　粘性弱　しまり中　暗褐色シルトもや状に1％
7　10YR 4/1 褐灰色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス1％以下



28号土坑（A−A′）
1　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性・しまり共やや弱　橙・白色パミス各2％
2　10YR 5/8 黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス1％
3　10YR 5/8 黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス1％以下
4　7.5YR 5/8 明褐色層（橙色パミス主体）粘性弱　しまり中
5　10YR 5/8 明褐色と10YR 4/2灰黄褐色の混合土　粘性・しまり共弱
6　10YR 4/1 褐灰色シルト　粘性・しまり共弱　3層を5％含む
7　10YR 5/4 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱

0　1：40　2m

第12図　25〜28号土坑

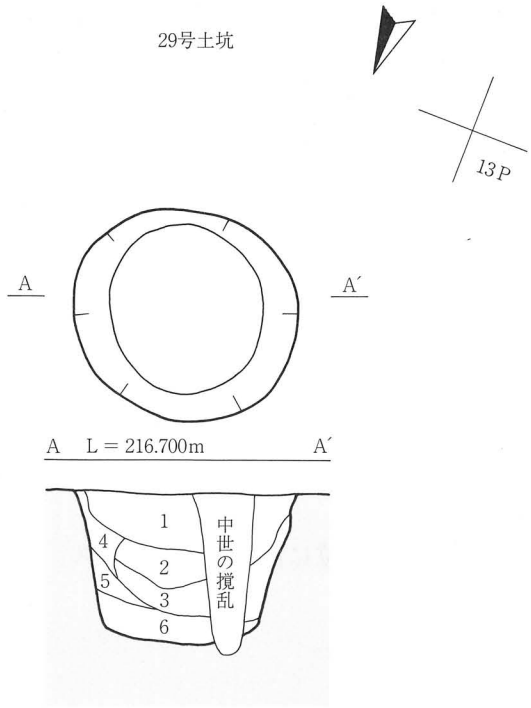
29号土坑（第13図、写真図版９）
〔位置・検出状況〕調査区中央部、13Ｏグリッドに位置する。検出面はⅣ層である。東側で中世の柱穴と重複し、これにより切られる。
〔規模・形状〕開口部径112×117cm、底部径80×88cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁はやや外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で79cmを測る。
〔埋土〕６層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。上～中位に白色・橙色パミス、最下位に橙色パミスが疎らに堆積する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

30号土坑（第13図、写真図版９）
〔位置・検出状況〕調査区中央部、13Ｐグリッドに位置する。検出面はⅣ層である。
〔規模・形状〕開口部径91×93cm、底部径66×67cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は直立しながら立ち上がる。深さは最深部で87cmを測る。
〔埋土〕４層からなり、黒褐～暗褐色シルト主体で構成される。上位に白色・橙色パミス、中～下位に橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

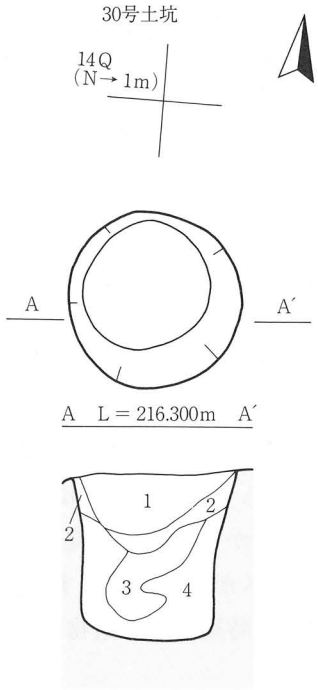
31号土坑（第13図、写真図版９）
〔位置・検出状況〕調査区北西側、13Ｓグリッドに位置する。検出面はⅣ層である。中央部で中世の柱穴と重複し、これにより切られる。
〔規模・形状〕開口部径90×97cm、底部径72×78cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁はほぼ直立して立ち上がる。深さは最深部で78cmを測る。
〔埋土〕６層からなり、黒色～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。上位に白色・橙色パミス、最下位に橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

32号土坑（第13図、写真図版９）
〔位置・検出状況〕調査区南東側、14Ｈ～Ｉグリッドに位置する。検出面はⅣ層である。
〔規模・形状〕開口部径75×78cm、底部径68×72cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は直立しながら立ち上がる。深さは最深部で73cmを測る。
〔埋土〕14層からなり、黒褐～暗褐色シルト主体で構成される。全体に白色・橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

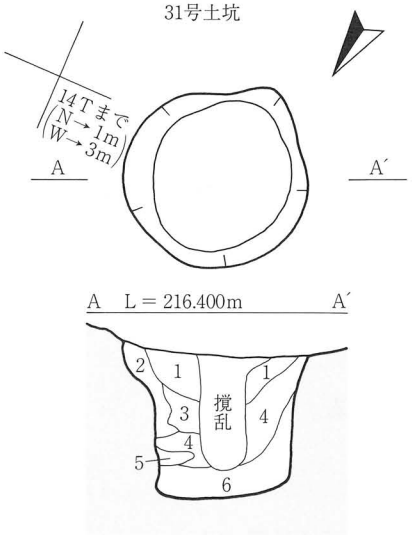
33号土坑（第14図、写真図版10）
〔位置・検出状況〕調査区南東側、15Ｉグリッドに位置する。検出面はⅤ層である。
〔規模・形状〕開口部径116×133cm、底部径114×116cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁はやや外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で88cmを測る。
〔埋土〕11層からなり、黒褐～鈍い黄橙色シルト主体で構成される。上～中位に白色・橙色パミス、最下位に橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。



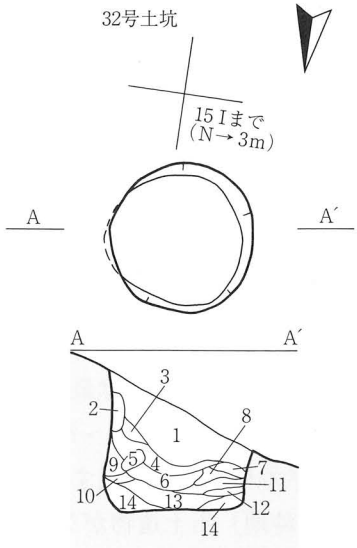
29号土坑（A−A′）
1　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙･白色パミス１％以下
2　10YR 2/1 黒色シルト　粘性弱　しまり中　橙･白色パミス１％以下
3　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス２％
4　３層とⅤ層の混合土　粘性弱　しまり中
5　２層とⅤ層の混合土　粘性弱　しまり中
6　10YR 2/3 黒褐色シルト　粘性･しまり共弱　橙色パミス１％以下



30号土坑（A−A′）
1　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙･白色パミス各１％
2　10YR 4/6 褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　橙色パミス２％
3　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性･しまり共弱　橙色パミス１％
4　２層と３層の混合土　粘性・しまり共弱



31号土坑（A−A′）
1　10YR 2/1 黒色シルト　粘性弱　しまり中
　　橙･白色パミス１％
2　10YR 7/6 明黄褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
　　10YR 2/1 黒色シルトブロック２％
3　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性･しまり共弱
4　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中
　　10YR 3/1 黒褐色シルト　もや状に５％
5　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中
　　Ⅴ層ブロック１％
6　10YR 4/1 褐灰色シルト　粘性弱　しまり中
　　橙色パミス１％以下



32号土坑（A−A′）
1　10YR 2/3 黒褐色砂質シルト　粘性やや弱　しまり弱　白色パミス５％　橙色パミス３％
2　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性・しまり共弱　下位にⅥ層ブロック 20%（木根撹乱）
3　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性やや強　しまり弱　橙色パミス１％
4　10YR 4/1 褐灰色砂質シルト　粘性・しまり共やや弱　橙色パミス３％
5　2.5Y 8/3 淡黄色粘質シルト　粘性やや強　しまりやや弱　（Ⅵ層崩落土？）
6　2.5Y 5/2 暗灰黄色砂質シルト　粘性やや弱　しまり中　白色パミス５％　橙色パミス３％
7　10YR 7/8 黄橙色粘質シルト　粘性強　しまり弱　汚れたⅥ層ブロック10%（地山崩落土）
8　10YR 5/4 鈍い黄褐色シルト　粘性やや強　しまり中　Ⅵ層ブロック５％
9　８と同質　Ⅵ層の混入なし
10　５と同質　Ⅵ層地山崩落土
11　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性・しまり共やや弱　橙色パミス５％
12　８と同質　Ⅵ層ブロック３％
13　10YR 3/3 暗褐色砂質シルト　粘性弱　しまり中　白色パミス３％　橙色パミス１％
14　10YR 5/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性やや弱　しまり中　Ⅵ層ブロック５％（地山崩落土）

0　1：40　2m

第13図　29〜32号土坑

34号土坑（第14図、写真図版10）

〔位置・検出状況〕調査区南東側、16Ｇグリッドに位置する。検出面はⅤ層である。

〔規模・形状〕開口部径 112 × 120cm、底部径 66 × 70cmの円形を呈する。断面形は逆台形状で、壁はやや外傾しながら直線的に立ち上がる。深さは最深部で114cmを測る。底面中央に径８cm、深さ12cmの副穴を持つ。

〔埋土〕９層からなり、黒褐～灰黄褐色シルト主体で構成される。上位に白色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。９層は副穴埋土である。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

35号土坑（第14図、写真図版10）

〔位置・検出状況〕調査区東側、17Ｇグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層である。

〔規模・形状〕開口部径 100 × 107cm、底部径 72 × 73cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁はほぼ直立して立ち上がるが、東壁面に崩落による凹凸が見られる。深さは最深部で118cmを測る。底面中央に径10cm、深さ13cmの副穴を持つ。

〔埋土〕７層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。全体に白色・橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。７層は副穴埋土である。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

36号土坑（第21図、写真図版10）

〔位置・検出状況〕調査区東側、16Ｈグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層である。中央部で21号陥し穴状遺構と重複し、これにより切られる。

〔規模・形状〕開口部径 101 × 123cm、底部径 80 × 81cmの円形基調を呈する。断面形はフラスコ状で、壁は下半部で一旦弱く内傾し、その後外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で100cmを測る。底面中央に径16cm、深さ23cmの副穴を持つ。

〔埋土〕９～16層の８層からなり、黒褐～黄褐色シルト主体で構成される。白色・橙色パミスを全体に疎らに含む。自然堆積の様相を呈する。16層は副穴埋土である。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

37号土坑（第22図、写真図版11）

〔位置・検出状況〕調査区東側、17Ｆ～Ｇグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層である。北側で22号陥し穴状遺構と重複し、これにより切られる。

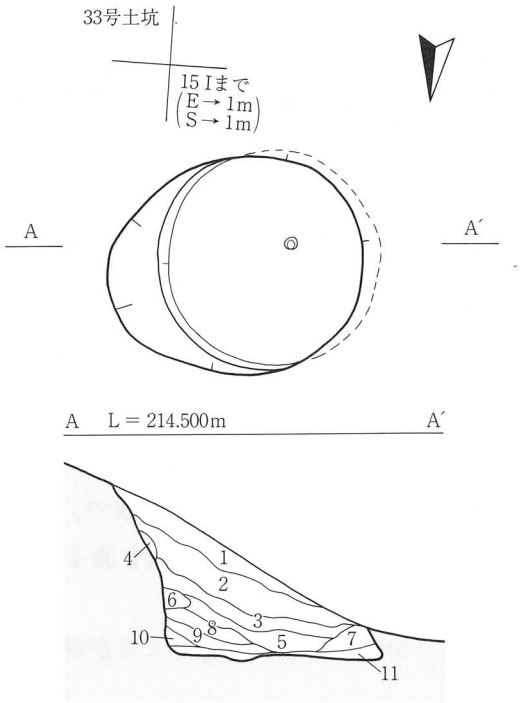
〔規模・形状〕開口部径 114 × 132cm、底部径 78 × 80cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は下半部においてほぼ直立しながら立ち上がり上半部に至って外傾する。深さは最深部で158cmを測る。

〔埋土〕17層からなり、黒褐～暗褐色シルト主体で構成される。全体に白色・橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

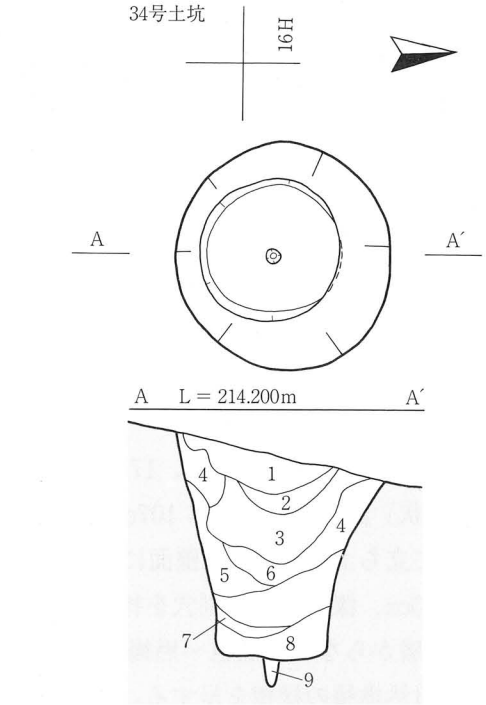
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

38号土坑（第22図、写真図版11）

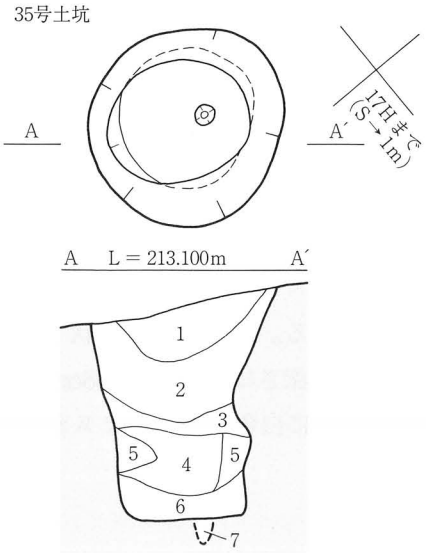
〔位置・検出状況〕調査区東側、18Ｇグリッドに位置する。検出面はⅣ層下～Ⅴ層である。中央部で22号陥し穴状遺構とほぼ外形を同じくして重複し、これにより切られる。この為、埋土断面の記録を



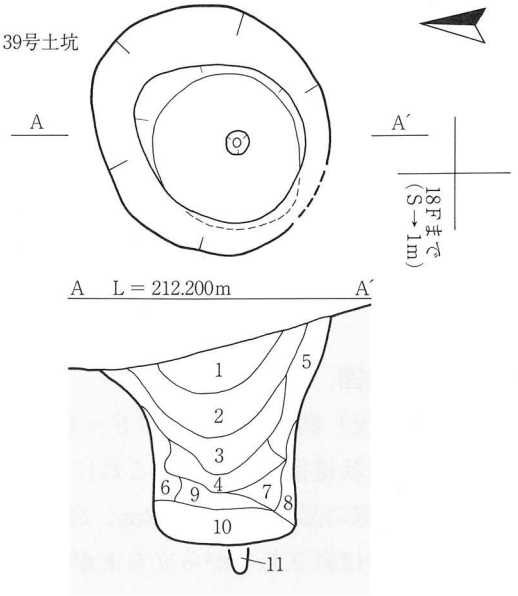
33号土坑（A−A′）
1　10YR 2/3 黒褐色砂質シルト　粘性・しまり共やや弱
　白色パミス7％　橙色パミス2％
2　1と同質　白色パミス15％　橙色パミス5％
3　10YR 4/4 褐色シルト　粘性・しまり共やや強
　白色パミス2％　橙色パミス1％
4　10YR 7/8 黄橙色粘質シルト（V層）　粘性強　しまり弱
5　10YR 4/3 鈍い黄褐色粘質シルト
　10YR 2/3 黒褐色砂質シルトの混合土6：4　粘性やや強　しまり中
6　7.5YR 7/8 黄橙色砂　粘性・しまり共弱（橙色パミスの崩落土？）
7　10YR 7/6 明黄褐色粘質シルト　粘性やや強　しまり中
　橙色パミス20％
8　10YR 7/8 黄橙色粘質シルト（V層）粘性強　しまり中
　10YR 2/3 黒褐色シルト　筋状に下位に30％
9　8と同質　10YR 2/3 黒褐色シルト5％
10　8と同質　10YR 2/3 黒褐色シルト3％
11　10YR 4/2 灰黄褐色粘土　粘性強
　しまり中　橙色パミス3％
＊　4・6・8〜10　V層地山崩落土



34号土坑（A−A′）
1　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性・しまり共中　白色パミス1％
2　10YR 5/6 黄褐色シルト　粘性・しまり共中　1層3％含む
3　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性・しまり共中　白色パミス1％以下
4　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性・しまり共中　10YR 5/6 黄褐色シルトブロック2％
5　10YR 4/4 褐色シルト　粘性・しまり共中　10YR 3/1 黒褐色シルト粒1％
6　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性・しまり共中
7　10YR 6/4 鈍い黄橙色シルト　粘性・しまり共弱
8　10YR 2/3 黒褐色シルト　粘性・しまり共中
9　5Y 3/1 オリーブ黒色シルト　粘性・しまり共中



35号土坑（A−A′）
1　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　白色パミス7％　橙色パミス3％
2　10YR 2/1 黒色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス3％　白色パミス1％
3　7.5YR 2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス3％　白色パミス1％
4　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス各3％
5　10YR 2/2 黒褐色シルトと10YR 3/4 暗褐色シルトの混合土5：5
　粘性・しまり共中　橙・白色パミス各5％
6　5層と同じ　混合比7：3
7　5Y 3/1オリーブ黒色シルト　粘性・しまり共中



39号土坑（A−A′）
1　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性中　しまりやや弱
2　10YR 2/1 黒色シルト　粘性やや弱　しまり中　白色パミス1％以下
3　10YR 3/4 暗褐色シルト　粘性弱　しまり中
4　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性やや弱　しまり中　橙色パミス1％以下
5　10YR 5/8 黄褐色シルト　粘性・しまり共弱（汚れたV層崩落土）黒褐色粒1％
6　10YR 5/8 黄褐色シルト　粘性・しまり共弱（汚れたV層崩落土）
7　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス1％以下
8　10YR 6/2 灰黄褐色シルト（汚れたVI層崩落土）粘性弱　しまりやや弱
9　10YR 4/6 褐色シルト　粘性弱　しまり中　10YR 3/3 暗褐色シルトブロック1％
10　10YR 2/3 黒褐色シルト　粘性・しまり中　橙・白色パミス1％
11　5Y 3/1 オリーブ黒色シルト　粘性・しまり共中

0　1：40　2m

※36〜38号土坑は第21・22図

第14図　33〜35・39号土坑

欠く。
〔規模・形状〕開口部径42cm、底部径54×62cmの円形を呈する。断面形はフラスコ状で、壁はやや内傾しながら立ち上がる。深さは最深部で95cmを測る。底面中央に径7cm、深さ14cmの副穴を持つ。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

39号土坑（第14図、写真図版11）
〔位置・検出状況〕調査区東側、18Eグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層である。
〔規模・形状〕開口部径119×135cm、底部径76×85cmの円形を呈する。断面形はほぼ円筒状で、壁は直立して立ち上がり、上位に至って外傾する。深さは最深部で116cmを測る。底面中央に径12cm、深さ15cmの副穴を持つ。
〔埋土〕11層からなり、黒褐～暗褐色シルト主体で構成される。全体に白色・橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。11層は副穴埋土である。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

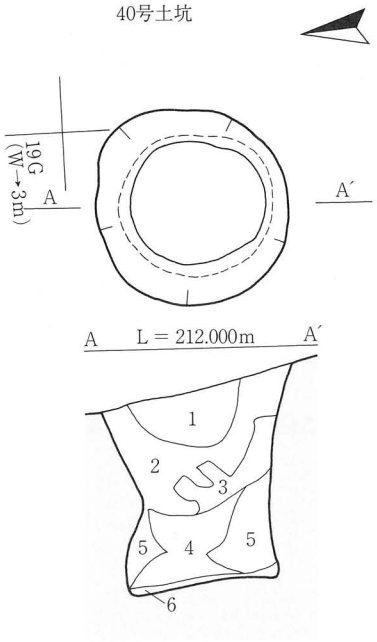
40号土坑（第15図、写真図版11）
〔位置・検出状況〕調査区東側、18Fグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層である。
〔規模・形状〕開口部径100×102cm、底部径74×80cmの円形を呈する。断面形はほぼ円筒状で、壁は下半部で一旦弱く内傾し、その後やや外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で113cmを測る。
〔埋土〕6層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。全体に白色・橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

41号土坑（第15図、写真図版12）
〔位置・検出状況〕調査区東側、18Fグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層である。
〔規模・形状〕開口部径95×99cm、底部径55×57cmの円形を呈する。断面形は逆台形状で、壁はやや外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で105cmを測る。底面中央に径12cm、深さ14cmの副穴を持つ。
〔埋土〕8層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。上位に白色・橙色パミス、中～下位に橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。8層は副穴埋土である。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

42号土坑（第15図、写真図版11）
〔位置・検出状況〕調査区中央部北東寄り、19Jグリッドに位置する。検出面はⅣ下位～Ⅴ層である。
〔規模・形状〕開口部径108×121cm、底部径67×81cmの楕円形を呈する。断面形は円筒状で、壁はほぼ直立して立ち上がる。深さは最深部で116cmを測る。降雨による影響で遺構断面が崩落し、埋土の記録を欠く。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

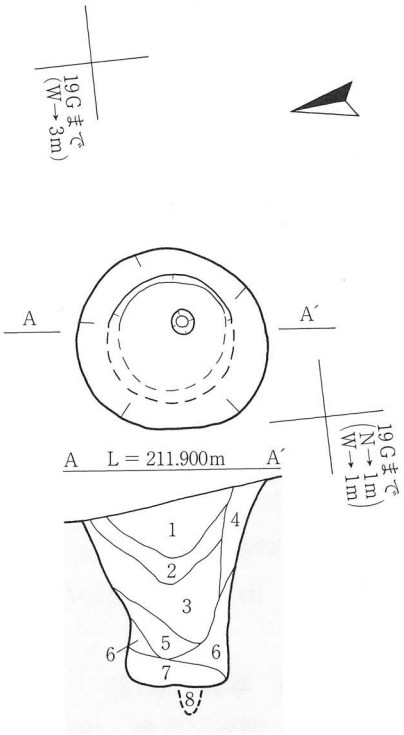
1号陥し穴状遺構（第16図、写真図版12）
〔位置・検出状況〕調査区南側、6～7Oグリッドに位置する。検出面はⅤ層である。
〔規模・形状〕開口部径22×30.5cm、底部径16×28.9cm・深さ10cmを測る。平面形は溝形を呈し、長

40号土坑



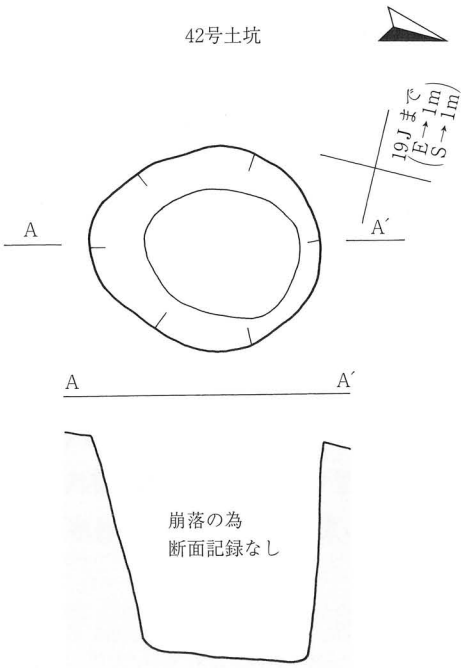
40号土坑（A−A′）
1　10YR 2/1 黒色シルト　粘性・しまり共中　橙・白色パミス１％
2　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性・しまり共中
　10YR 4/6 褐色シルトブロック５％　橙・白色パミス各１％
3　10YR 5/8 黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　汚れたV層　黒褐色粒１％
4　10YR 3/2 黒褐色シルトと同4/6褐色シルトの混合土　粘性・しまり共やや弱
　橙・白色パミス各１％
5　４層と10YR 7/2 鈍い黄橙色シルトの混合土　橙色パミス１％
6　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性・しまり共中　橙色パミス１％

41号土坑



41号土坑（A−A′）
1　10YR 2/1 黒色シルト　粘性やや弱　しまり中　橙・白色パミス１％以下
2　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまり中　橙・白色パミス１％以下
3　10YR 2/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス１％以下
4　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス１％
5　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　橙色パミス１％以下
6　10YR 4/6 褐色シルト　粘性・しまり共弱　橙色パミス主体　５層少量混入
7　10YR 1.7/1 黒色シルト　粘性・しまり共弱　橙色パミス１％
8　５Y 3/1 オリーブ黒色シルト　粘性・しまり共中

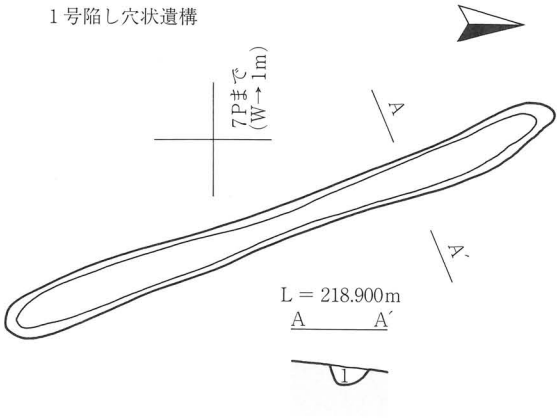
42号土坑



0　1：40　2m

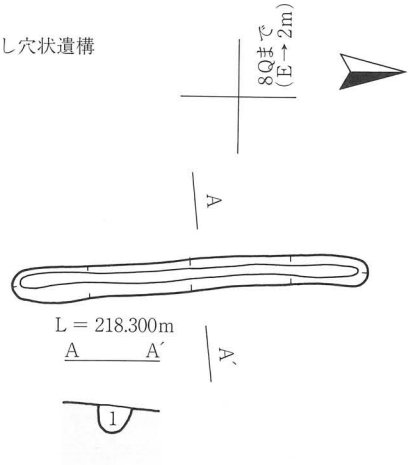
第15図　40〜42号土坑

1号陥し穴状遺構



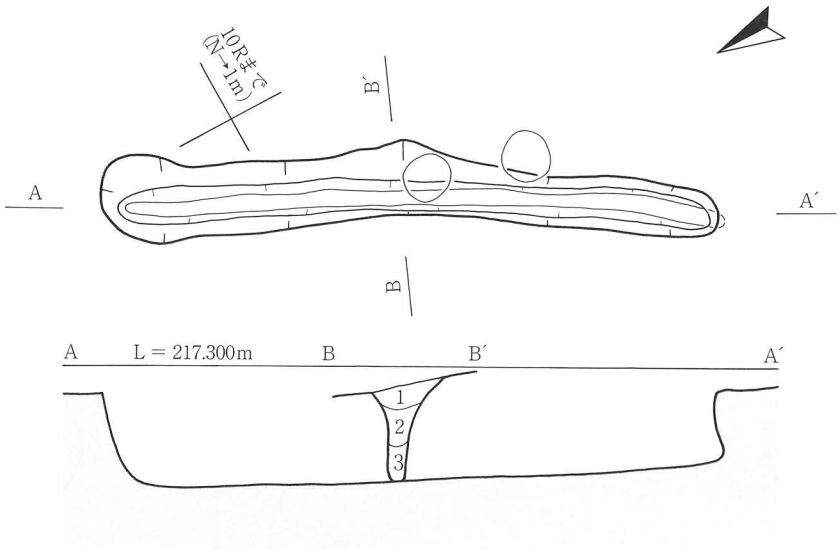
1号陥し穴状遺構（A−A′）
1　10YR 4/4 褐色シルト　粘性･しまり共弱　白色パミス1％以下

2号陥し穴状遺構

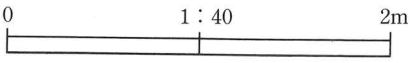


2号陥し穴状遺構（A−A′）
1　10YR 7/4 鈍い黄橙色シルト　粘性･しまり共弱（Ⅵ層主体）

3号陥し穴状遺構

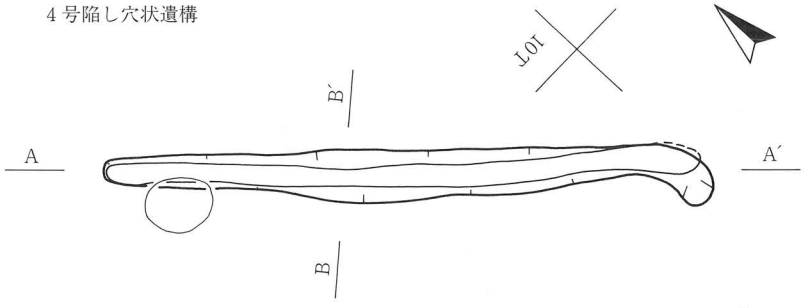


3号陥し穴状遺構（A−A′）
1　10YR 5/4 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　10YR 4/2 灰黄褐色シルトブロック5％
2　10YR 5/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　1層ブロックで30％混入
3　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　2層ブロックで30％混入

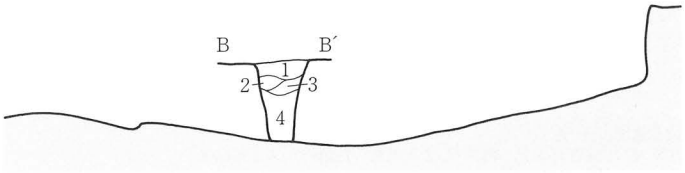


第16図　1～3号陥し穴状遺構

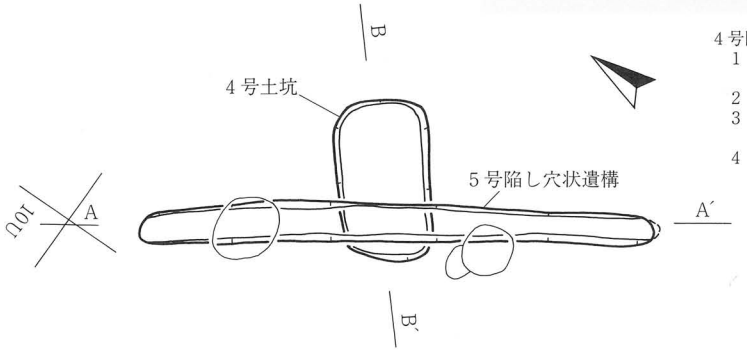
4号陥し穴状遺構



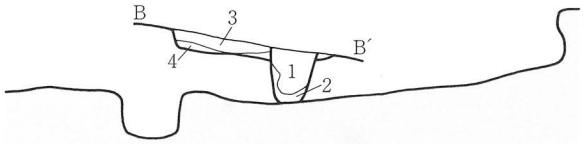
A　L＝216.300m　A′



4号陥し穴状遺構（A−A′）
1　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性弱　しまり中
　Ⅵ層小ブロックもや状に含む２％
2　10YR 5/3 鈍い黄褐色層（Ⅵ層主体）粘性弱　しまりやや弱
3　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中
　Ⅵ層ブロック・橙色パミス共２％
4　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性弱　しまり中

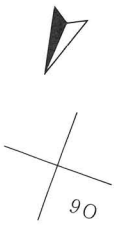


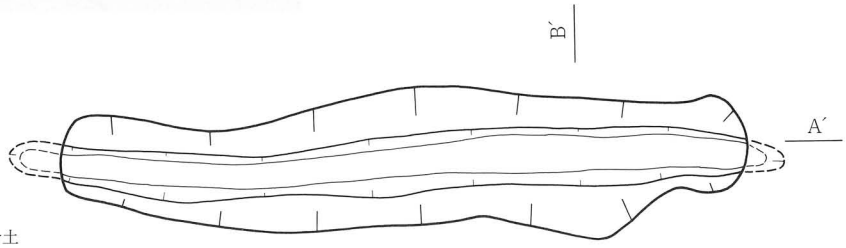
A　L＝215.900m　A′



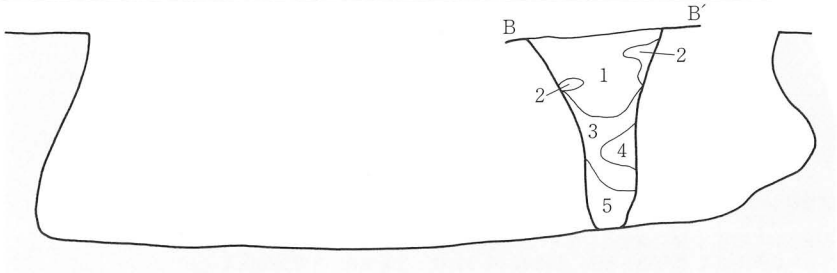
4号土坑・5号陥し穴状遺構（B−B′）
1　10YR 3/1 黒褐色シルト
　粘性・しまり共弱
　橙色パミス１％以下
2　10YR 6/4 鈍い黄橙色
　（汚れⅤ層崩落土）
　粘性・しまり共弱
3　7.5YR 5/8 明褐色シルト
　粘性弱　しまり中
　橙色パミス１％
4　10YR 3/1 黒褐色シルトと３層の混合土
　粘性弱　しまり中

6号陥し穴状遺構





A　L＝218.500m　A′



0　1：40　2m

6号陥し穴状遺構（A−A′）
1　10YR 2/1 黒色シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス１％
2　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅴ層ブロック１％
3　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　10YR 3/1 黒褐色シルト　もや状に５％
4　10YR 6/8 明黄褐色層（Ⅴ層崩落土）粘性・しまり共弱
5　10YR 4/1 褐灰色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス１％以下

第17図　4号土坑・4～6号陥し穴状遺構

軸方向はＮ－22°－Ｗである。削平により殆ど底面の痕跡をとどめる程度で、壁の立ち上がりなど詳細は不明である。
〔埋土〕白色パミスを疎らに含む褐色シルトの単層である。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

２号陥し穴状遺構（第16図、写真図版12）

〔位置・検出状況〕調査区南西側、７～８Ｑグリッドに位置する。検出面はＶ層である。
〔規模・形状〕開口部径16×18.5cm、底部径６×17.5cm・深さ15cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はＮ－２°－Ｗである。削平により殆ど底面の痕跡をとどめる程度で、壁の立ち上がりなど詳細は不明である。
〔埋土〕鈍い黄橙色シルトの単層である。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

３号陥し穴状遺構（第16図、写真図版12）

〔位置・検出状況〕調査区中央部西寄り、９Ｒグリッドに位置する。検出面はＶ層である。
〔規模・形状〕開口部径38×322cm、底部径８×312cm・深さ53cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はＮ－30°－Ｅである。短軸の壁は底面から直立気味に立ち上がり開口部に至って外傾するＵ字状である。長軸の壁は南側が内湾、北側が外傾して立ち上がる。底部は北側に低く傾斜気味であるが、ほぼ平坦である。
〔埋土〕３層からなる。鈍い黄褐～黒褐色シルト主体で構成され、上位に灰黄褐色シルトブロックが少量混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

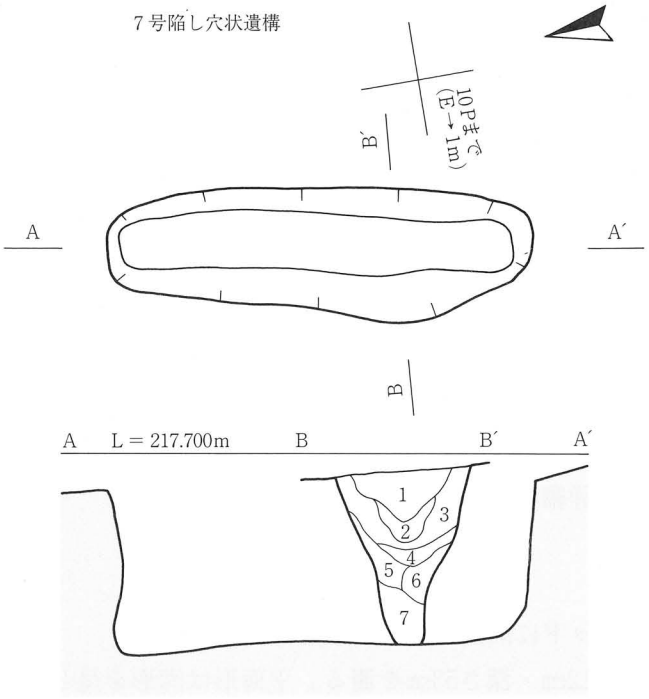
４号陥し穴状遺構（第17図、写真図版13）

〔位置・検出状況〕調査区中央部西寄り、９～10Ｔグリッドに位置する。検出面はＶ層である。
〔規模・形状〕開口部径28×317cm、底部径９×308cm・深さ42cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はＮ－44°－Ｗである。短軸の壁は底面から直立気味に立ち上がるＵ字状である。長軸の壁は北側が削平により殆ど残存しないが、底部中央でやや低く窪んだ後、南側は直立して立ち上がる。
〔埋土〕４層からなる。黒褐～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。３層に橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

５号陥し穴状遺構（第17図、写真図版13）

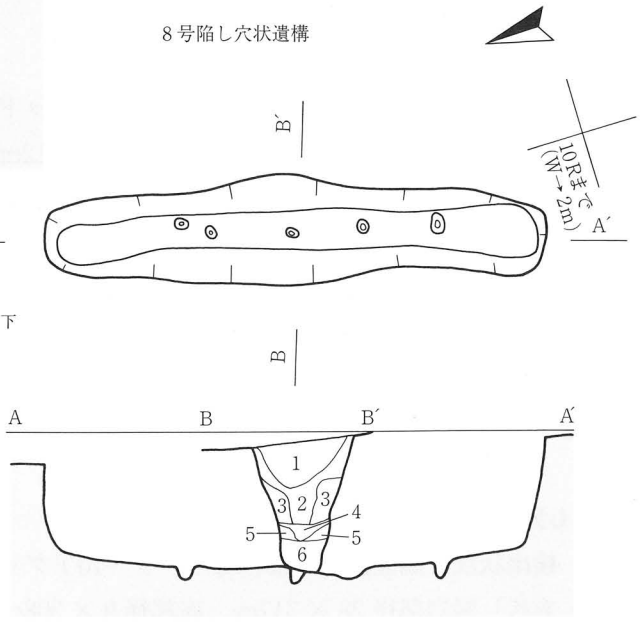
〔位置・検出状況〕調査区北西側、９Ｔグリッドに位置する。検出面はＶ層である。
〔規模・形状〕開口部径22×266cm、底部径13×270cm・深さ28cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はＮ－35°－Ｗである。短軸の壁は底面から直線的に立ち上がるＵ字状である。長軸の壁は北側が削平により殆ど残存しないが、底部中央でやや低く窪んだ後、南側は内湾して立ち上がる。
〔埋土〕２層からなり、黒褐～鈍い黄橙色シルト主体で構成される。橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

7号陥し穴状遺構



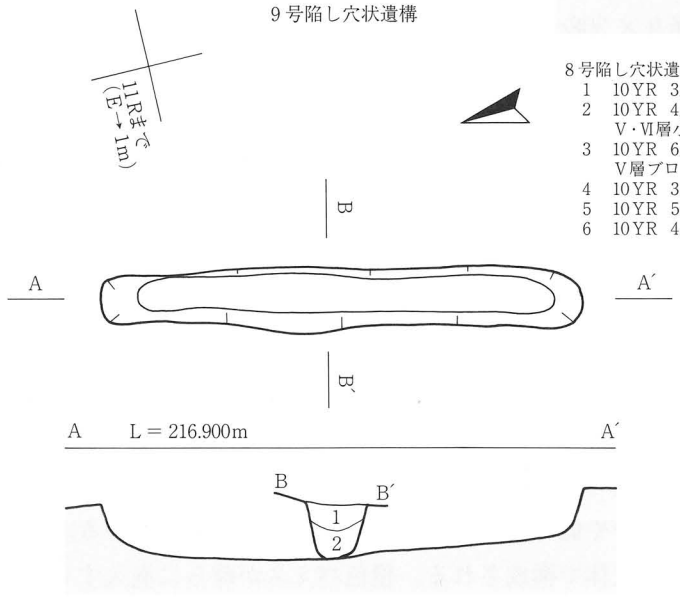
7号陥し穴状遺構（A−A′）
1　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性・しまり共弱　橙色パミス1％以下
2　10YR 5/1 褐灰色シルト　粘性・しまり共弱
3　2層とV層の混合土　粘性・しまり共弱　橙色パミス1％
4　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　橙色パミス1％以下
5　4層とV層の混合土　粘性・しまり共弱
6　10YR 6/4 鈍い黄橙色（汚れV層崩落土）粘性・しまり共弱
7　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性やや弱　しまり弱

8号陥し穴状遺構



8号陥し穴状遺構（A−A′）
1　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅵ層小ブロックもや状に含む2％
2　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中
　V・Ⅵ層小ブロックもや状に各2％
3　10YR 6/2 灰黄褐色シルト（汚れたⅥ層崩落土）粘性弱　しまりやや弱
　V層ブロック30％
4　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
5　10YR 5/3 鈍い黄褐色層（Ⅵ層主体）粘性弱　しまりやや弱
6　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性弱　しまり中

9号陥し穴状遺構



9号陥し穴状遺構（A−A′）
1　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅵ層ブロック・橙色パミス各2％
2　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性弱　しまり中

0　1：40　2m

第18図　7～9号陥し穴状遺構

６号陥し穴状遺構（第17図、写真図版13）

〔位置・検出状況〕調査区中央部南寄り、９Ｎグリッドに位置する。検出面はⅢ層下位～Ⅳ層である。
〔規模・形状〕開口部径73×355cm、底部径18×401cm・深さ102cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はＮ－70°－Ｅである。短軸の壁は底部から外傾しながら立ち上がり開口部に至るＹ字状である。長軸の壁は東西共に内湾するフラスコ形を呈し、底部はほぼ平坦である。
〔埋土〕５層からなる。黒色～鈍い黄褐色シルト主体で構成され、上位に白色パミス、下位に橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

７号陥し穴状遺構（第18図、写真図版13）

〔位置・検出状況〕調査区中央部、９～10Ｐグリッドに位置する。検出面はⅢ層下位～Ⅳ層である。
〔規模・形状〕開口部径70×225cm、底部径29×206cm・深さ91cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はＮ－９°－Ｅである。短軸の壁は底部から外傾しながら立ち上がるＶ字状である。長軸の壁はほぼ直立して立ち上がるもので、底面はほぼ平坦である。
〔埋土〕７層からなる。黒褐～灰黄褐色シルト主体で構成され、上位～中位に橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

８号陥し穴状遺構（第18図、写真図版14）

〔位置・検出状況〕調査区中央部、10Ｑグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ｖ層である。
〔規模・形状〕開口部径58×265cm、底部径20×253cm・深さ69cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はＮ－16°－Ｅである。短軸の壁は底面から外傾して立ち上がり開口部に至るＶ字状である。長軸の壁は南北共に直立して立ち上がるもので、底面はほぼ平坦である。底面から径８cm、深さ８～10cmほどの小穴が５基並列して検出されている。
〔埋土〕６層からなる。暗褐～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

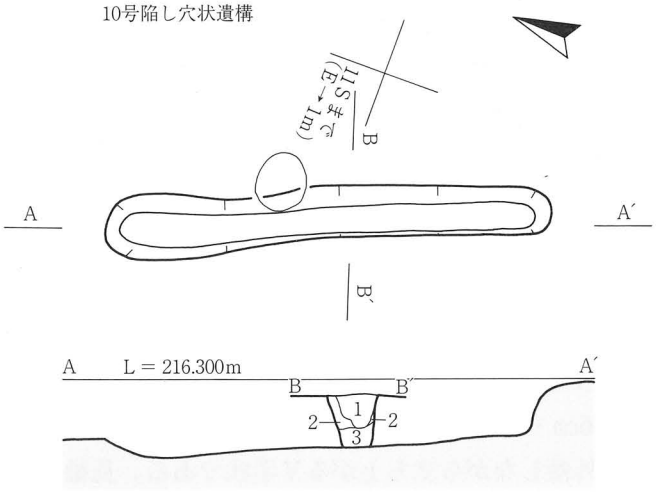
９号陥し穴状遺構（第18図、写真図版14）

〔位置・検出状況〕調査区中央部西寄り、10Ｒグリッドに位置する。検出面はＶ層である。
〔規模・形状〕開口部径35×252cm、底部径19×218cm・深さ27cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はＮ－14°－Ｅである。短軸の断面形は底面から外傾して立ち上がり開口部に至って外傾するＵ字状である。長軸の壁は南北共に外傾して立ち上がるもので、底面はほぼ平坦である。
〔埋土〕２層からなる。鈍い黄褐色～灰黄褐色シルト主体で構成され、上位に橙色パミスを僅かに含む。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

10号陥し穴状遺構（第19図、写真図版14）

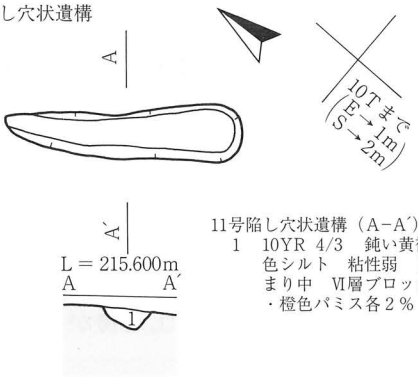
〔位置・検出状況〕調査区中央部西寄り、10～11Ｓグリッドに位置する。検出面はＶ層である。
〔規模・形状〕開口部径27×234cm、底部径13×217cm・深さ27cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はＮ－23°－Ｗである。短軸の壁は底面から直立して立ち上がるＵ字状である。長軸の壁は北

10号陥し穴状遺構



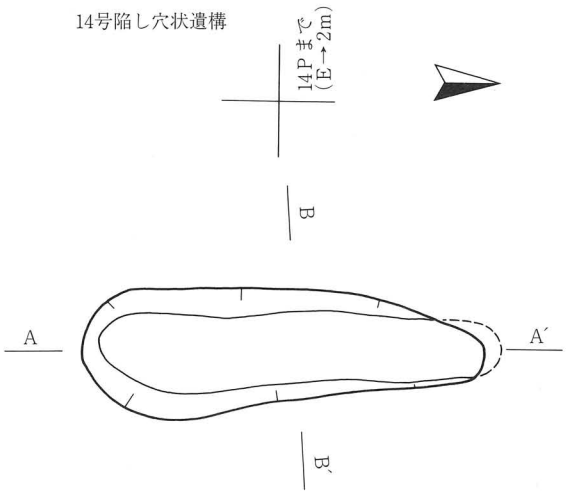
10号陥し穴状遺構（A−A′）
1　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中
　　Ⅵ層ブロック・橙色パミス各２％
2　10YR 5/3 鈍い黄褐色層（Ⅵ層主体）粘性弱　しまりやや弱
3　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性弱　しまり中

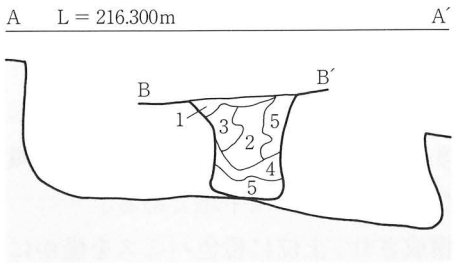
11号陥し穴状遺構



11号陥し穴状遺構（A−A′）
1　10YR 4/3　鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅵ層ブロック・橙色パミス各２％

14号陥し穴状遺構

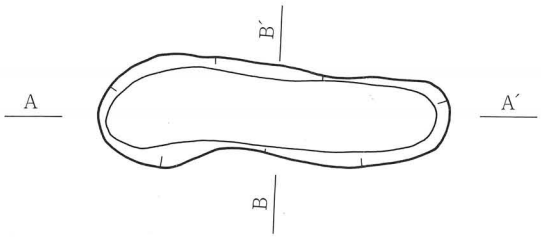


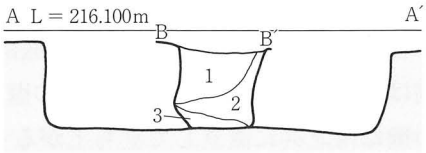


14号陥し穴状遺構（A−A′）
1　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性中　しまりやや強
　　橙・白色パミス各３％
2　10YR 3/2 黒褐色シルトと10YR 2/1 黒色シルトの
　　混合土５：５　粘性・しまり共中
3　10YR 5/8 黄褐色シルト　粘性・しまり共中
　　10YR 3/2 黒褐色シルトブロック５％　橙パミス
4　10YR 5/8 黄褐色シルトと10YR 3/2 黒褐色シルトの
　　混合土５：５
　　粘性中　しまり弱　白色パミス（～５㎜）１％
5　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性中　しまり弱

0　1：40　2m

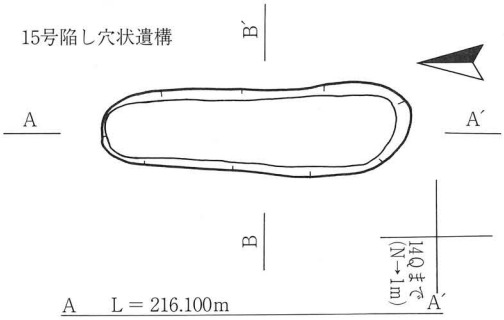
13号陥し穴状遺構

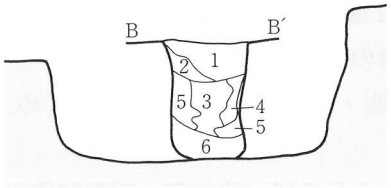




13号陥し穴状遺構（A−A′）
1　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅴ・Ⅵ層の混合土
　　橙・白色パミス１％以
2　10YR 7/8 黄橙色層（Ⅴ層）粘性弱　しまり中　１層２％混入
3　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅴ層ブロック・橙色パミス１％以下

15号陥し穴状遺構





15号陥し穴状遺構（A−A′）
1　5Y 3/2 オリーブ黒色砂質シルトと10YR 2/1 黒色シルトの混合土
　　粘性やや弱　しまり中　橙色パミス５％　白色パミス３％
2　10YR 6/8 明黄褐色砂質シルトと10YR 4/2 灰黄褐色砂質シルトの混合土７：３
　　粘性やや強　しまり強
3　10YR 2/2 黒褐色砂質シルト　粘性弱　しまりやや強　Ⅴ層５％筋状に混入　白色パミス５％
4　Ⅴ層と10YR 2/2 黒褐色シルトの混合土　粘性弱　しまり中
5　10YR 7/8 黄橙色粘質層（汚れⅤ層崩落土）　粘性やや強　しまり中
6　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性やや弱　しまり中

第19図　10・11・13〜15号陥し穴状遺構

側が削平により殆ど残存しないが、南側は直立して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。
〔埋土〕３層からなる。鈍い黄褐～灰黄褐色シルト主体で構成され、上位に橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

11号陥し穴状遺構（第19図、写真図版14）
〔位置・検出状況〕調査区中央部西寄り、10Ｔグリッドに位置する。検出面はⅤ層である。
〔規模・形状〕開口部径23×124cm、底部径14×120cm・深さ10cmを測る。平面形は溝形を呈し長軸方向はＮ－38°－Ｗである。削平により殆ど底面の痕跡をとどめる程度で、壁の立ち上がりなど詳細は不明である。
〔埋土〕橙色パミスを疎らに含む、鈍い黄褐色シルトの単層である。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

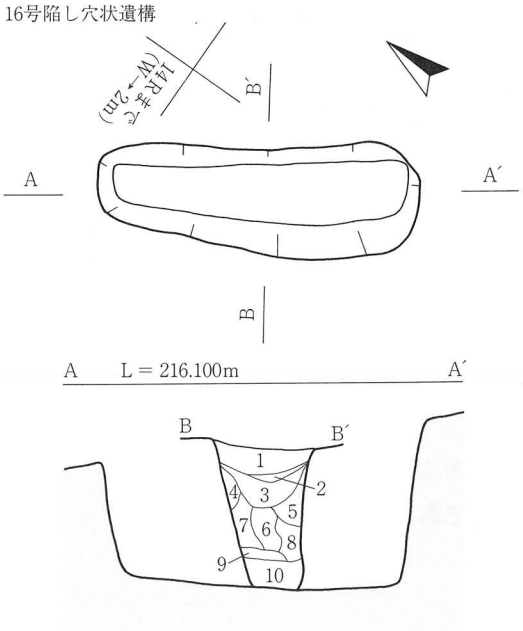
12号陥し穴状遺構（写真図版15）
〔位置・検出状況〕調査区北西側、10Ｕグリッドに位置する。検出面はⅤ層である。
〔規模・形状〕開口部径11×120cm、深さ９cmを測る。平面形は溝形を呈し長軸方向はＮ－23°－Ｗである。削平により殆ど底面の痕跡をとどめる程度で、壁の立ち上がりなど詳細は不明である。
〔埋土〕橙色パミスを疎らに含む、鈍い黄褐色シルトの単層である。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

13号陥し穴状遺構（第19図、写真図版15）
〔位置・検出状況〕調査区中央部、13～14Ｏグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層である。
〔規模・形状〕開口部径47×184cm、底部径35×172cm・深さ41cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はＮ－14°－Ｅである。短軸の壁は底面から直立して立ち上がる開口部に至って外傾するＵ字状である。長軸の壁は南北共にほぼ直立して立ち上がるもので、底部はほぼ平坦である。
〔埋土〕３層からなる。黒褐～黄橙色シルト主体で構成される。上位に白色・橙色パミス、下位に橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

14号陥し穴状遺構（第19図、写真図版15）
〔位置・検出状況〕調査区中央北寄り、13～14Ｐグリッドに位置する。検出面はⅣ層下～Ⅴ層である。
〔規模・形状〕開口部径58×210cm、底部径37×210cm・深さ52cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はＮ－１°－Ｗである。短軸の壁は底面から直立気味に立ち上がり開口部に至って外傾するＹ字状である。長軸の壁は北側が内湾するフラスコ形、南側が直立して立ち上がるもので、底面は北側に向かってやや低く傾斜する。
〔埋土〕５層からなる。黒褐色シルト主体で構成され、上位～中位に白色・橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

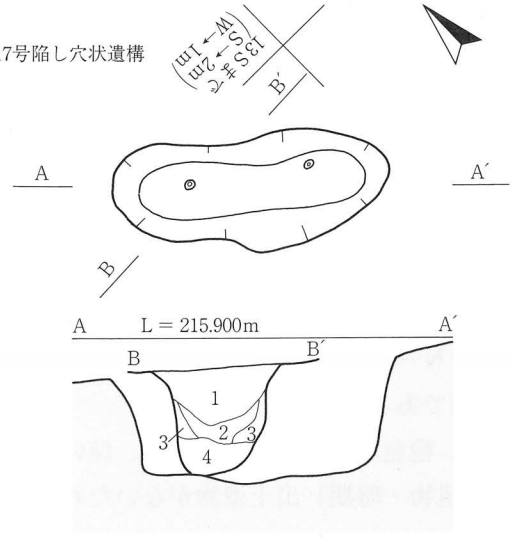
15号陥し穴状遺構（第19図、写真図版15）

16号陥し穴状遺構



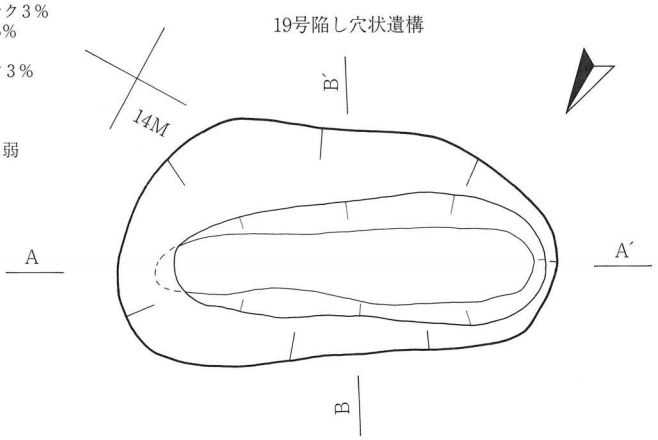
16号陥し穴状遺構（A−A′）
1　10YR 2/3 黒褐色砂質シルト　粘性弱　しまりやや強　橙色パミス1％
　　10YR 7/2 鈍い黄橙色細粒パミス3％
2　5Y 3/2 オリーブ黒色シルト　粘性やや弱　しまり中
3　7.5YR 2/2 黒褐色砂質シルト　粘性弱　しまりやや弱　V層ブロック3％
4　10YR 3/2 黒褐色砂質シルト　粘性弱　しまり中　V層ブロック15％
5　10YR 3/1 黒褐色シルトとV層の混合土　粘性・しまり共やや強
6　10YR 2/1 黒色砂質シルト　粘性・しまり共やや弱　V層ブロック3％
7　2.5Y 4/3 オリーブ褐色砂質シルト　粘性・しまり共やや弱
8　10Y 3/1 オリーブ黒色シルト　粘性・しまり共やや弱
9　10YR 7/6 明黄褐色粘質シルト（V層）と
　　5Y 3/2 オリーブ褐色砂質シルトの混合土　粘性やや弱　しまり弱
10　10YR 3/2 黒褐色砂質シルト　粘性弱　しまり中

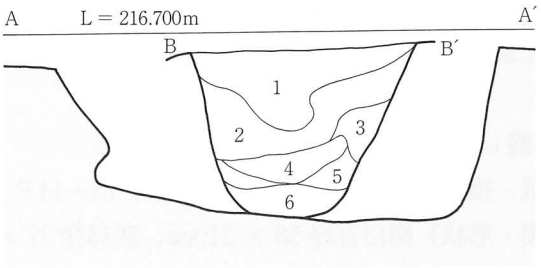
17号陥し穴状遺構



17号陥し穴状遺構（A−A′）
1　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性・しまり共弱
2　1層とV層ブロックの混合土　粘性・しまり共弱
3　10YR 5/8 黄褐色シルト　粘性・しまり共弱（汚れV層崩落土）
4　10YR 2/3 黒褐色シルト　粘性・しまり共弱　V・Ⅵ層ブロック1％

19号陥し穴状遺構



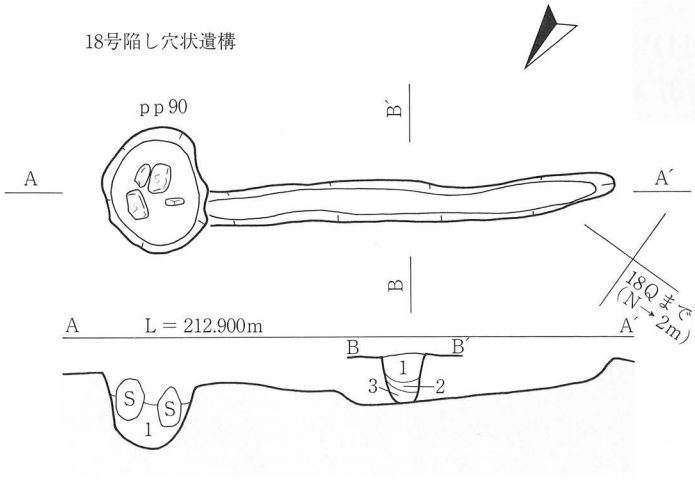


19号陥し穴状遺構（A−A′）
1　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中
　　橙・白色パミス1％以下
2　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中
　　V層ブロック・橙色パミス2％
3　10YR 5/8 黄褐色層（汚れV層崩落土）粘性弱　しまり弱
4　10YR 2/3 黒褐色シルト　粘性・しまり共弱　橙色パミス1％以下
5　10YR 8/8 黄橙色層（汚れV層崩落土）粘性弱　しまり弱
6　4層とV・Ⅵ層の混合土　粘性中　しまりやや弱

pp90
1　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中

18号陥し穴状遺構（A−A′）
1　10YR 5/8 黄褐色シルト　粘性弱　しまり強
　　10YR 5/3 鈍い黄褐色シルトブロックと橙・白色パミス各1％
2　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性弱　しまり強
3　10YR 6/4 鈍い黄橙色シルト　粘性弱　しまりやや強

18号陥し穴状遺構



0　1：40　2m

第20図　16〜19号陥し穴状遺構

〔位置・検出状況〕調査区中央北寄り、13～14Ｐグリッドに位置する。検出面はⅣ層下～Ⅴ層である。
〔規模・形状〕開口部径44×162cm、底部径33×152cm・深さ60cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はＮ－０°－Ｅである。短軸の壁は底面から直立気味に立ち上がるＵ字状である。長軸の断面形は南北両側共に僅かに外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。
〔埋土〕６層からなる。暗褐～黒褐色シルト主体で構成され、上位～中位に白色・橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

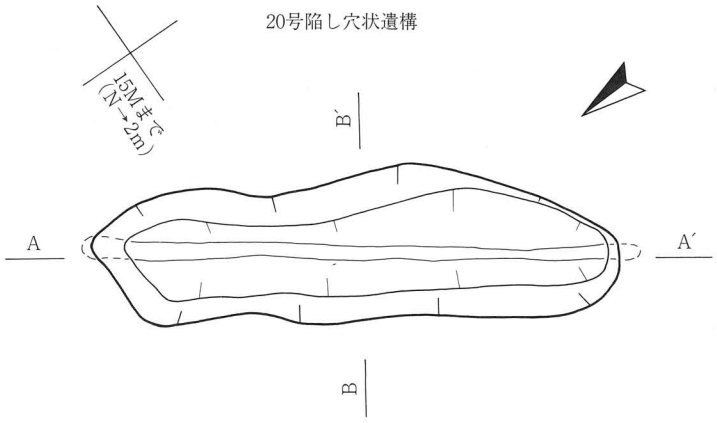
16号陥し穴状遺構（第20図、写真図版16）
〔位置・検出状況〕調査区中央部北寄り、13Ｑグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層である。
〔規模・形状〕開口部径55×169cm、底部径30×155cm・深さ76cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はＮ－32°－Ｗである。短軸の壁は底面から直立気味に立ち上がるＵ字状である。長軸の断面形はほぼ直立して立ち上がるもので、底面はほぼ平坦である。
〔埋土〕10層からなる。黒色～黒褐色シルト主体で構成される。上位に橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

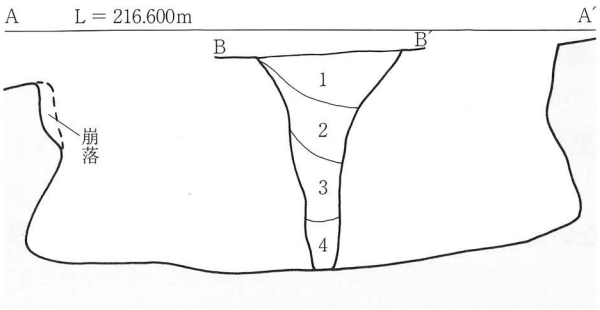
17号陥し穴状遺構（第20図、写真図版16）
〔位置・検出状況〕調査区北西側、13Ｒグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層である。
〔規模・形状〕開口部径58×145cm、底部径25×119cm・深さ58cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はＮ－48°－Ｗである。短軸の断面形は底面から丸みを持って立ち上がるＵ字状である。長軸の断面形は両端部共にやや外傾して立ち上がるもので、底面は僅かに凹凸が認められるがほぼ平坦である。
〔埋土〕４層からなり、黒褐～黄褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

18号陥し穴状遺構（第20図、写真図版16）
〔位置・検出状況〕調査区北側、17Ｐグリッドに位置する。検出面はⅤ層である。
〔規模・形状〕開口部径21×216cm、底部径12×205cm・深さ26cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はＮ－53°－Ｅである。短軸の壁は底部から直立気味に立ち上がるＵ字状である。長軸の壁は削平により不明である。底面は中央部付近でやや深く掘り込まれ、小規模な段状をなす。
〔埋土〕３層からなる。黄褐～灰黄褐色シルト主体で構成され、上位に白色パミスを僅かに含む。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

19号陥し穴状遺構（第20図、写真図版16）
〔位置・検出状況〕調査区中央部、13～14Ｍグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層である。
〔規模・形状〕開口部径119×227cm、底部径35×204cm・深さ87cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はＮ－61°－Ｅである。短軸の壁は底部から外傾しながら立ち上がるＶ字状である。長軸の断面形は東側が底面付近で小さく内湾するフラスコ形、西側が直立して立ち上がるもので、底部は西側

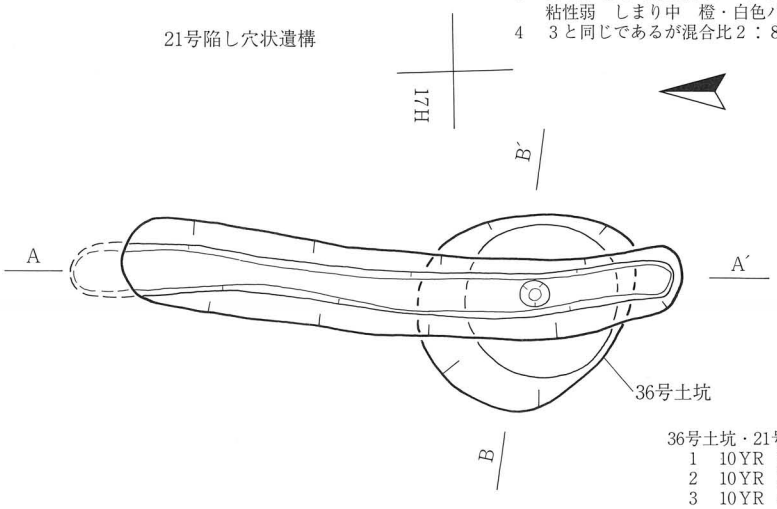
20号陥し穴状遺構

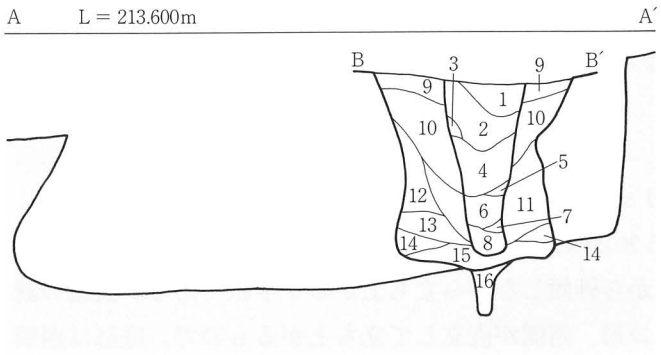




20号陥し穴状遺構（A−A′）
1　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性中　しまりやや強
　10YR 4/4 褐色シルトブロック縁に10%　白色パミス（～5㎜）5％　橙色パミス2％
2　10YR 3/3 暗褐色シルトと10YR 6/8 明黄褐色シルトの混合土6：4
　粘性・しまり共中　白色パミス（～5㎜）3％
3　10YR 6/8 明黄褐色シルトと2.5Y 6/3　鈍い黄色シルトの混合土6：4
　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス各2％
4　3と同じであるが混合比2：8

21号陥し穴状遺構





36号土坑・21号陥し穴状遺構（B−B′）
1　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性中　しまりやや弱
2　10YR 2/1 黒色シルト　粘性やや弱　しまり中　白色パミス1％以下
3　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性やや弱　しまり中　橙色パミス1％以下
4　1層と2層の中間的な様相
5　10YR 5/8 黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　汚れたV層　黒褐色粒1％
6　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス1％以下
7　10YR 5/8 黄褐色シルト　粘性・しまり共弱（V層崩落土）
8　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中
　橙色パミス1％以下
9　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性弱　しまり中
　橙色パミス1％以下
10　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性中　しまりやや弱
11　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性やや弱　しまり中
12　10YR 5/8 黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　白色パミス1％
13　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性・しまり共中　橙・白色パミス各1％
14　10YR 5/8 黄褐色シルト　粘性・しまり共弱（V層崩落土）
15　10YR 3/4 暗褐色シルト　粘性・しまり共中　橙・白色パミス1％
16　10YR 2/3 黒褐色シルト　粘性・しまり共中　橙・白色パミス1％

0　1：40　2m

第21図　36号土坑・20・21号陥し穴状遺構

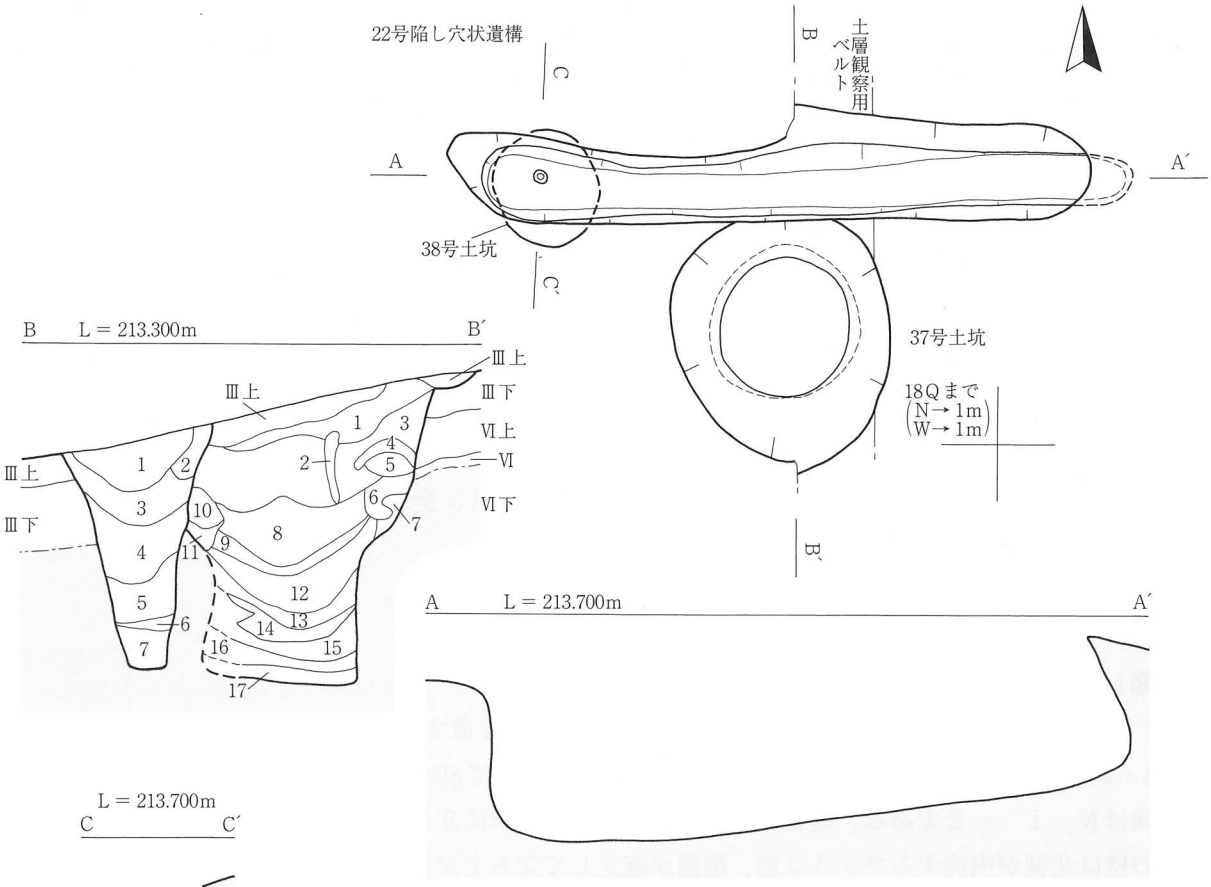
に低く傾斜する。
〔埋土〕６層からなる。暗褐～黒褐色シルト主体で構成される。上位に白色・橙色パミス、中位に橙色パミスを疎らに含む。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

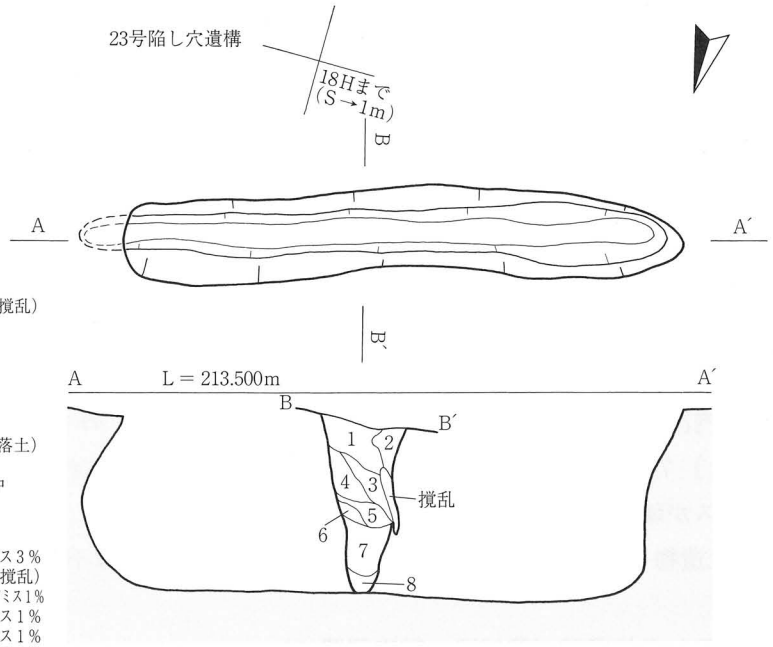
20号陥し穴状遺構（第21図、写真図版17）
〔位置・検出状況〕調査区中央部、14Mグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層である。
〔規模・形状〕開口部径77×274cm、底部径８×290cm・深さ114cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN－36°－Eである。短軸の壁は底面から外傾しながら立ち上がり開口部に至って開くY字状である。長軸の壁は両端共に内湾するフラスコ状を呈するもので、底面は中央部で緩やかに窪むが、ほぼ平坦である。
〔埋土〕４層からなる。黒褐～明黄褐色シルト主体で構成され、全体に白色・橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

21号陥し穴状遺構（第21図、写真図版17）
〔位置・検出状況〕調査区中央東寄り、16～17Hグリッドに位置する。検出面はⅣ層下～Ⅴ層である。
〔規模・形状〕開口部径42×294cm、底部径16×316cm・深さ89cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN－１°－Eである。短軸の壁は底部から直立気味に立ち上がり開口部に至るU字状である。長軸の壁は北側が内湾するフラスコ形、南側が直立して立ち上がるもので、底面は北側にやや低く傾斜する。
〔埋土〕８層からなる。黒色～黒褐色シルト主体で構成され、上位に白色パミス、中位に橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

22号陥し穴状遺構（第22図、写真図版17）
〔位置・検出状況〕調査区東側、18F～Gグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層である。
〔規模・形状〕開口部径62×337cm、底部径18×338cm・深さ141cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN－90°－Wである。短軸の壁は底面から外傾して立ち上がるV字状である。長軸の壁は東側が内湾するフラスコ形、西側が直立して立ち上がるもので、底面は西側に低く傾斜する。
〔埋土〕７層からなる。暗褐～黒褐色シルト主体で構成され、上位に白色・橙色パミス、下位に橙色パミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

23号陥し穴状遺構（第22図、写真図版17）
〔位置・検出状況〕調査区南東側、18G～Hグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層である。
〔規模・形状〕開口部径41×293cm、底部径13×300cm・深さ94cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN－74°－Eである。短軸の断面形は底部から外傾しながら立ち上がるV字状である。長軸の壁は東側が内湾するフラスコ形、西側が外傾して開くもので、底面はほぼ平坦である。
〔埋土〕８層からなる。黒褐～黄褐色シルト主体で構成され、全体に白色・橙色パミスが疎らに混入





22号陥し穴状遺構（B－B′）
1　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中
　白色パミス２％
2　10YR 2/1 黒色シルト　粘性中　しまり弱（木根撹乱）
3　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中
　橙・白色パミス各１％以下
4　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中
　橙・白色パミス各１％以下
5　10YR 2/3 黒褐色シルト　粘性・しまり共中
　橙色パミス２％
6　10YR 4/6 褐色シルト　粘性弱 しまり中（Ⅴ層崩落土）
　橙色パミス１％
7　５層と６層の混合土５：５　粘性やや弱　しまり中

37号土坑（B－B′）
1　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　白色パミス３％
2　10YR 2/1 黒色シルト　粘性・しまり共弱（木根撹乱）
3　10YR 2/3 黒褐色シルト 粘性弱 しまり中 白色パミス10% 橙色パミス1％
4　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　白色パミス１％
5　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　白色パミス１％
6　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス１％
7　10YR 4/4 褐色シルトと同2/2黒褐色シルトの混合土4：6　粘性・しまり共中
8　10YR 2/3 黒褐色シルトと同2/1黒色シルトの混合土6：4　粘性・しまり共中
　白色パミス３％　橙色パミス２％
9　10YR 2/3 黒褐色シルト 粘性弱 しまり中 橙色パミス2％ 白色パミス1％
10　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　白色パミス１％
11　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス１％
12　10YR 2/1.5 黒~黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス各2％
13　10YR 2/2 黒褐色シルトと同4/4褐色シルトの混合土6：4　粘性・しまり共中
14　12層と同質
15　10YR 2/2 黒褐色シルトと同2/3黒褐色シルトの混合土7：3　粘性弱　しまり中
16　10YR 4/4 褐色シルトと同2/1黒色シルトの混合土7：3　粘性・しまり共中　橙色パミス３％
17　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性・しまり共中　白色パミス１％

23号陥し穴状遺構（A－A′）
1　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　橙色パミス２％　白色パミス１％
2　10YR 3/2 黒褐色シルトと同5/6黄褐色シルトの混合土5：5　粘性・しまり共中　白色パミス1％
3　２層と同じ　混合比６：４
4　２層と同じ　混合比３：７
5　３層と同じ　粘性・しまり共やや弱
6　10YR 5/6 黄褐色シルト　粘性弱　しまり中
7　10YR 3/1 黒褐色シルトと10YR 5/6 黄褐色シルトの混合土７：３　橙・白色パミス各3％
8　10YR 6/1 褐灰色シルト　粘性やや弱　しまり中　10YR 3/1 黒褐色ブロック10％

0　1：40　2m

第22図　37・38号土坑・22・23号陥し穴状遺構

する。自然堆積の様相を呈する。
〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

2．古代の検出遺構

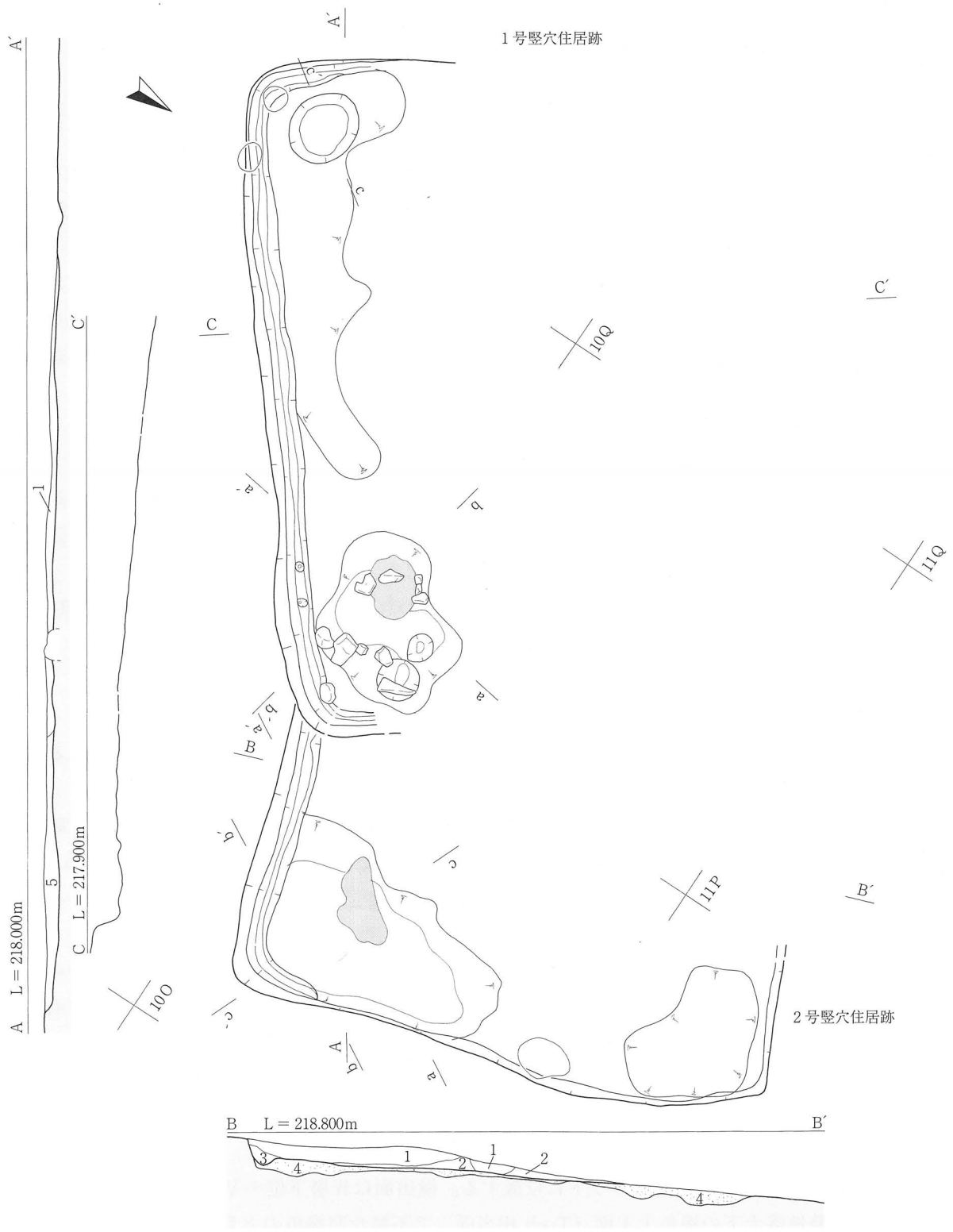
古代の遺構としては、調査区中央部２～３号平坦地を中心に３棟の竪穴住居跡と焼土跡１基を検出した。遺物が殆ど出土せず、残存状態も悪い事から時期の特定が困難であったが、１号竪穴住居跡のカマド相当部から床面にかけて土師器の坏片、甕片が出土していること、および南東隅にカマドを持つことなどから、これらをもって古代の遺構と判断した。焼土遺構については竪穴住居跡と占地を同じくし近接すること、中世の建物跡に炉や焼土の痕跡が全くみられないこと、周囲の削平状況などから判断して竪穴住居跡のカマド残存部である可能性が最も高いと判断し、古代の遺構に含めて報告するものである。

１号竪穴住居跡（第23・24図、写真図版18）

〔位置・重複関係〕９～10 O～Qグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層で、中世の普請である２号平坦地整地盛土下の褐色土上面（To-h 相当面）で不整な暗褐色の方形プランとして確認したものである。東半部で２号竪穴住居跡と重複し、これを切る。
〔規模・平面形〕削平により、斜面上方の南東辺以外は失われている。残存する南東辺は推定値で670㎝を測る。平面形は貼床の範囲から推定して隅丸方形を呈するものと思われる。
〔埋土〕３層に細分され、黒褐色シルトを主体として構成される。
〔壁〕残存する南東壁部分で８㎝を測る。
〔床面〕床面はほぼ平坦でしまる。黒褐色シルトとⅤ層ブロックの混合土によって貼床が施される。また、南東辺に沿って幅20㎝前後、深さ10㎝前後の壁溝が認められる。
〔カマド〕東隅に構築されている。カマド本体は削平により失われており、84×103㎝の範囲で暗赤褐色の楕円形プランと、48×64㎝・厚さ４㎝の不整な暗褐色の焼土範囲が確認されるのみである。
〔柱穴・ピット〕南隅に開口部径64×75㎝・深さ37㎝の円形を呈する土坑が１基検出されている。
遺物（第56図、写真図版38）
カマド相当部から土師器坏片１点、カマド掘り方～貼床相当部から土師器甕片１点、埋土から土師器甕片が２点出土している。器種は坏、甕で構成される。16の坏の製作に際してはロクロが使用され、底部切り離し技法は静止糸切りによる。17～19は甕で、体部はナデもしくはケズリ調整される。出土遺物から本遺構は平安時代に属するものと推察される。

２号竪穴住居跡（第23・24図、写真図版18・19）

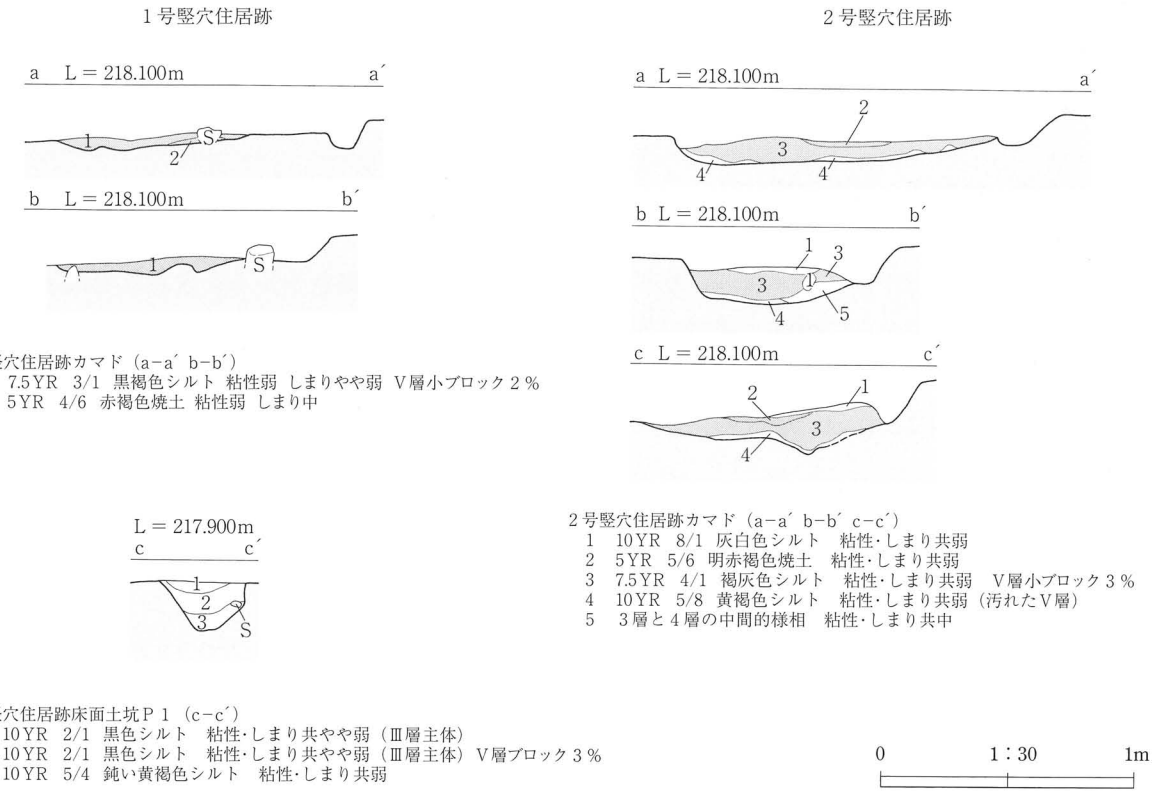
〔位置・重複関係〕９～11 O～Qグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層で中世の普請である２号平坦地の整地盛土下の褐色土上面（To-h 相当面）で不整な暗褐色の方形プランとして確認したものである。西半部で１号竪穴住居跡と重複し、これにより切られる。
〔規模・平面形〕削平により、斜面上方の南辺以外は殆ど失われている。残存する東辺は544㎝、南辺は残存値で256㎝を測る。平面形は貼床の範囲から推定して隅丸方形を呈するものと思われる。
〔埋土〕３層に細分され、黒褐色シルトを主体として構成される。
〔壁〕最も残存する南壁部分で13㎝を測る。



1・2号竪穴住居跡（A－A′ B－B′）
1　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性・しまり共中
2　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性・しまり共中
3　10YR 2/3 黒褐色シルト　粘性・しまり共中　V層小ブロック2％
4　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性・しまり共中　V層小ブロック5％（貼床）
5　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性・しまり共中

0　1：60　2m

第23図　1・2号竪穴住居跡（1）



第24図　1・2号竪穴住居跡（2）

〔床面〕床面は北西側にやや低く傾斜するが、全体としてはほぼ平坦である。黒褐色シルトとⅤ層ブロックの混合土によって貼床が施される。

〔カマド〕南東隅に構築されている。カマド本体は削平により失われており、94 × 124cm の不整な暗褐色の楕円形プランと、40 × 87cm・14cm の不整な暗赤褐色焼土の範囲が確認されたのみである。

遺物

出土遺物はなく詳細は不明であるが、１号竪穴住居跡との重複関係・平面形状等から判断して本遺構は平安時代に属するものと推察される。

３号竪穴住居跡（第25図、写真図版19）

〔位置・重複関係〕13～14 O～Qグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層で中世の普請である２号平坦地の整地盛土下の褐色土上面（To-h 相当面）で不整な暗褐色の方形プランとして確認したものである。床面中央部で15・16号陥し穴状遺構と重複し、これらを切る。

〔規模・平面形〕削平によって斜面上方の南辺以外は失われている。残存する南辺は356cmを測る。平面形は貼床の範囲から推定して隅丸方形を呈するものと思われる。

〔埋土・貼床〕埋土は削平により殆ど残存せず、僅かに貼床痕跡を留めるのみである。貼床埋土はⅤ層ブロックを少量含む、鈍い黄褐色シルトの単層で構成される。

〔壁〕残存する南壁部分で８cm を測る。

〔カマド〕南東隅に構築されている。カマド本体は削平により失われており、49 × 110cmの範囲で不整な暗褐色シルトと、20 × 34cm・７cmの不整な暗赤褐色焼土の範囲が確認されたのみである。

遺物

出土遺物はなく詳細は不明であるが、平面形状・カマドの存在等から判断して本遺構は平安時代に属するものと推察される。

1号焼土遺構（第26図、写真図版19）

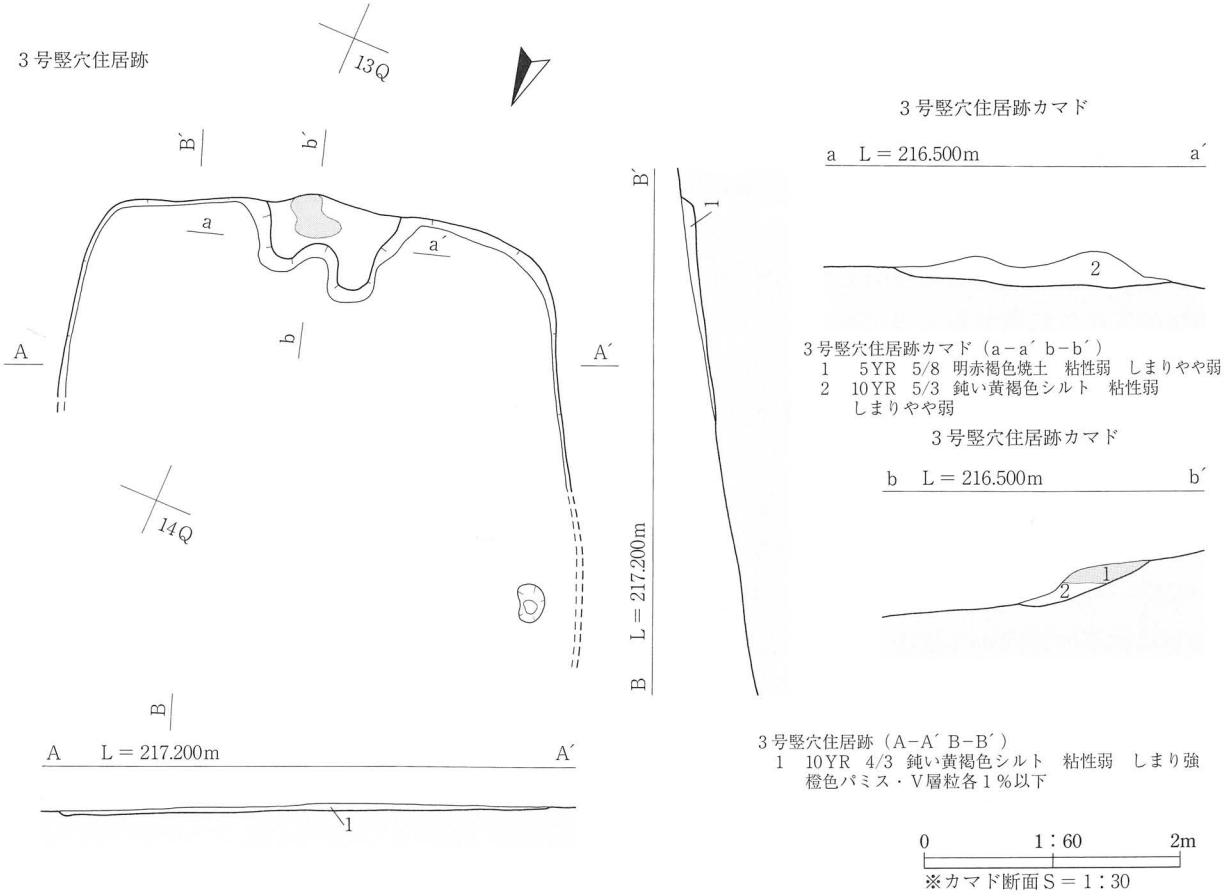
調査区北西側、13Rグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層である。72×89cm・11cmの現地性焼土、それを囲むように216×350cmの不整楕円形の範囲に灰黄褐色シルトを含んだ黒褐色土が広がるものである。周囲から住居跡と認定できるような柱穴プラン、および硬化面等は確認していないが、他の竪穴住居跡と占地を同じくする点や、焼土が形成される点、明確な掘り方を持つことなどから、上部を削平された古代の住居跡のカマドの残存部である可能性が高い。出土遺物等はなく、詳細は不明である

3．中世の検出遺構

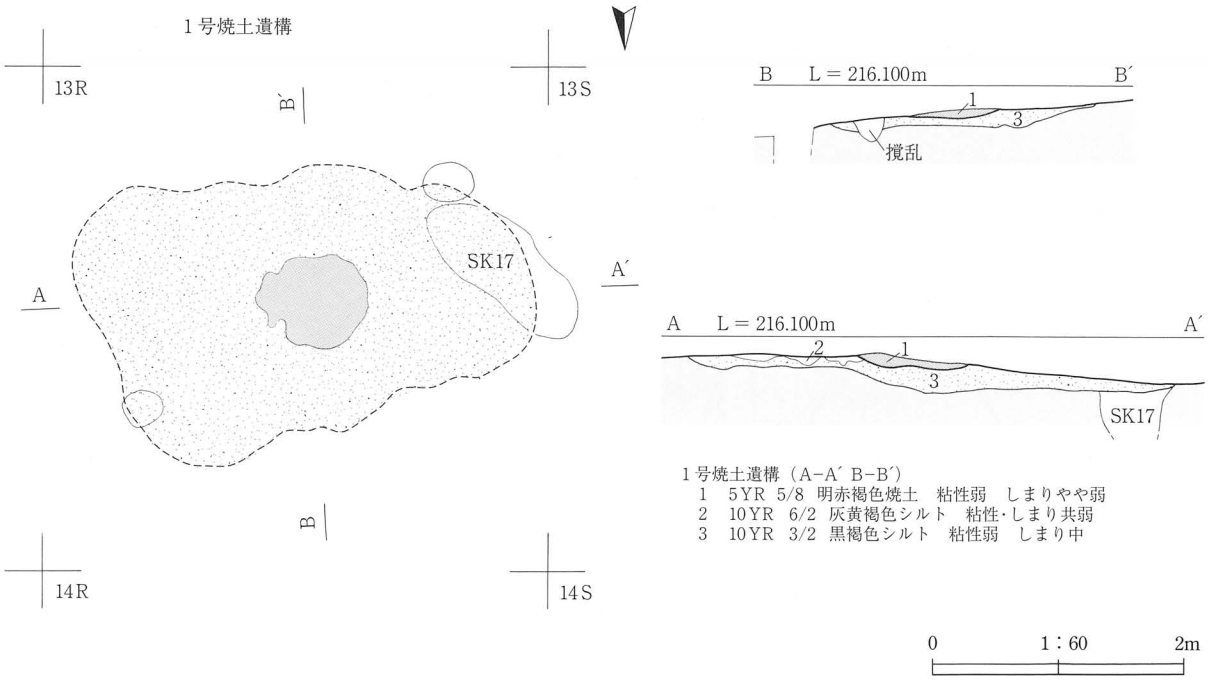
中世における舘Ⅱ遺跡の概要

縄張り（第69図）

舘Ⅱ遺跡は、蛇行しながら北東流する安比川右岸の沖積地に対して張り出す北向きの丘陵上に立地し、標高は214～222mを測る。館跡は、丘陵尾根の先端部を利用してつくられた山城で、東西両側は谷地形を利用し、南端は尾根を横断する堀で区画防御する構えとなっており、全体の規模は東西約



第25図　3号竪穴住居跡



第26図　1号焼土遺構

250m、南北約300mの範囲に及ぶ。曲輪と堀を含めた面積は約75,000㎡である。縄張りは東西2つの曲輪で構成され、今回の調査区は東側曲輪の北西隅？西側曲輪の北半部緩斜面上にかかる。本遺跡と谷を隔てた西側には同じく中世山城「不動館」があり、西側を安比川の断崖と接し、東～南側を二重の堀で区切った内部に狭い平坦地と腰曲輪を持つ。地元では、これを含めて東側から「陣場」、「中舘」、「御不動様」と呼び習わされている（写真図版1）。

註）堀、土塁に囲まれた城域内には、北から南方向に緩く傾斜する尾根の自然地形を利用して人工的に造られた平坦地が数段確認でき、断面からは普請（切り盛り）の痕跡を認める事ができる。本報告書では便宜上、このように堀・土塁によって防御された平坦地のことを「郭・曲輪」、曲輪内部の斜面上に形成された階段状の平場を「平坦地」と呼称して両者を区別した。

検出された遺構について

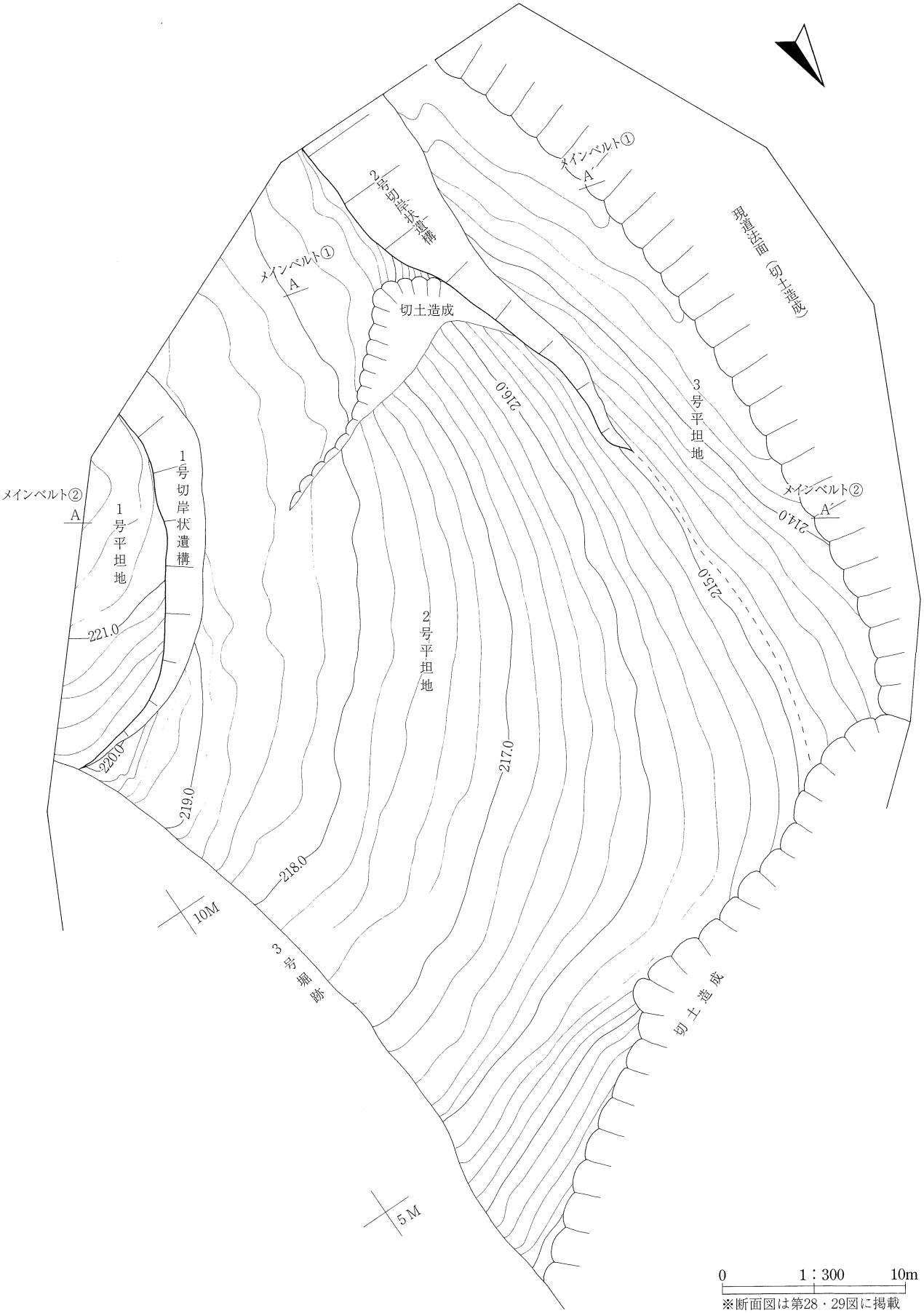
今回検出された遺構は、普請の跡として平坦地6箇所（内、帯曲輪1）、切岸状遺構2箇所、堀跡3条、大溝跡2条、土塁1箇所、門跡？1箇所があり、作事の跡として掘立柱建物跡1棟、竪穴建物跡9棟、竪穴状遺構7棟、柱穴状土坑574個、獣骨の出土した墓坑1基がある。このうち獣骨が出土した墓坑については近現代の可能性があるが、まとめて本節で扱うこととする。

1号平坦地（第27・28図、写真図版20）

〔位置・検出状況〕調査区南側、4O～P、5N～O、6M～O、7M～Nグリッド、北向きの緩斜面に位置する。南西側は調査区域外にかかる腰曲輪、北東側は3号堀跡で限られ、南東側は上位の平坦地によって画されている。現況は原野で、標高220.2～221.6mである。

〔規模・形態・機能〕南東－北西4.0m、北東－南西19.8m、面積約61.8㎡で、北西方向に張り出す狭い半円形状である。館跡の縄張りから、高位面から2番目の平坦地と判断される。

〔普請・作事〕尾根斜面を切土して、平坦地を造っている。平坦面における作事の痕跡としては柱穴



第27図　1～3号平坦地・1・2号切岸状遺構

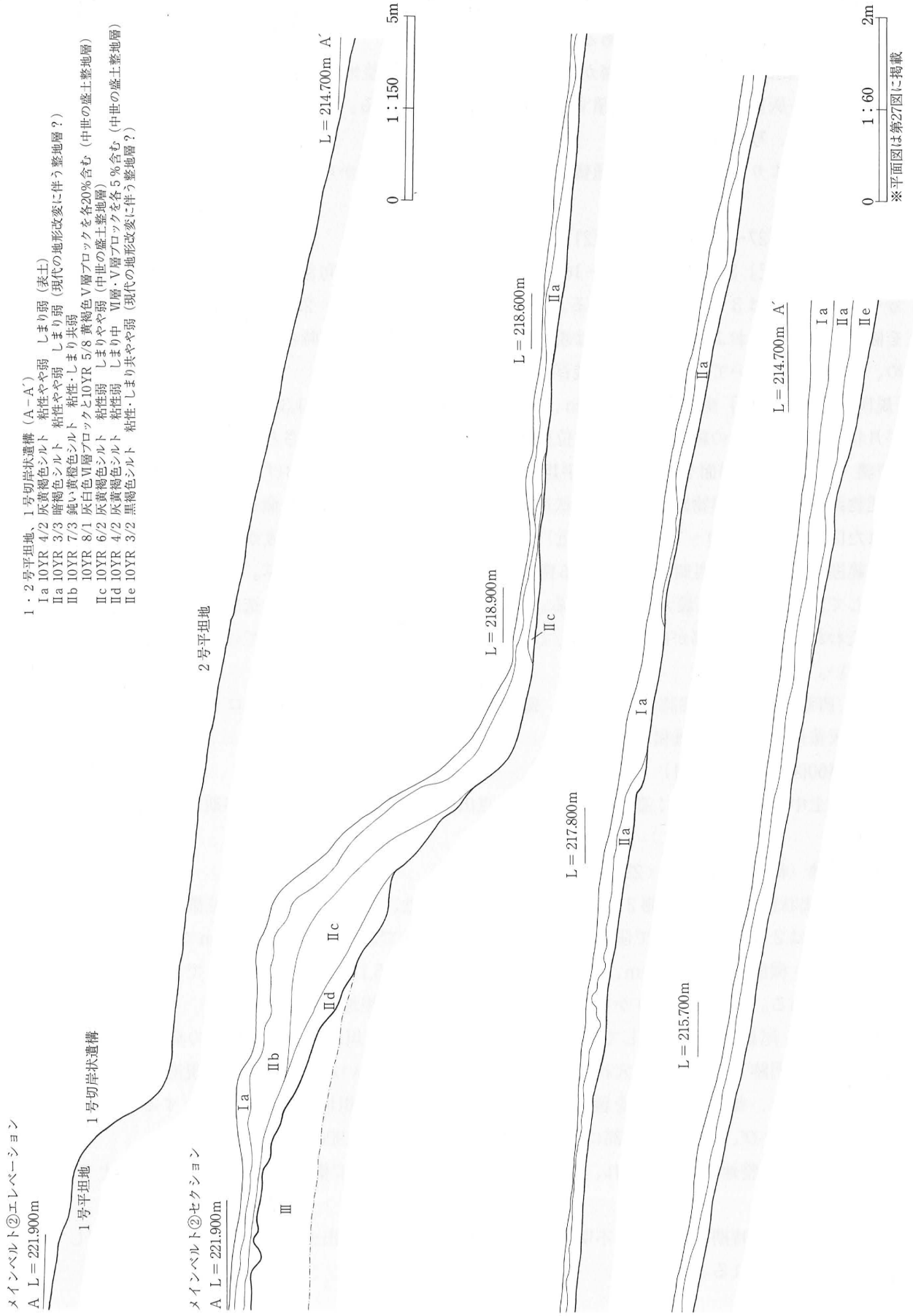
状小土坑が３個確認されている。整地層は、平坦地の調査範囲ほぼ全面におよび、端部に厚く施されている。厚さは最大107cmほどである。
〔埋土〕調査範囲ほぼ全域で整地層が確認されており、盛土整地層としてⅤ・Ⅵ層地山ブロックを含む鈍い黄橙～灰黄褐色シルトが堆積する。Ⅲ層は旧表土である。
遺物（第60図、写真図版41）
Ⅱ層盛土中より古銭（52：嘉祐通寶）が１点出土している事から、普請の時期は中世と考えられる。

２号平坦地（第27～29図、写真図版21）

〔位置・検出状況〕調査区中央部２～16 M～Uグリッド付近、北向きの緩斜面に位置する。西側は３号平坦地、東側は３号堀跡で限られる。現況は畑地で、標高215～220mである。本平坦地の南西側を除いて北西側、および北側縁辺部は現代の切土造成により、普請時の現況が失われている。このため、当該区域においては作事痕跡の残存状況も不良である。
〔規模・形態・機能〕南東－北西22.0m、北東－南西36.0m、面積約1,301.2㎡で、南西側に張り出す半月状である。館跡の縄張りから、高位面から３番目の平坦地と判断された。
〔普請・作事〕尾根斜面を切土して、平坦面を造っている。平坦地における作事の痕跡としては掘立柱建物跡１棟、竪穴建物跡５棟、竪穴状遺構２棟、柱穴状小ピット469個が確認されたが、切土造成された区域（６～８ Q～Tグリッド付近）では、周囲と比較して遺構密度が疎である。整地層は残存する範囲で、平坦地の西側を中心とする南北約146m、東西約6.8mに及ぶ。盛土平坦地の縁辺部を主体として施され、厚さは最大104cmを測る。本平坦地の北側縁辺部は、切土造成時に広範囲に普請時現況が失われ、遺構の一部が破壊・消失している。このため当該区域においては盛土整地層も確認できていない。
〔埋土〕西側で整地層が確認されており、盛土整地層としてⅤ・Ⅵ層地山ブロックを多量に含む鈍い黄橙～灰黄褐色シルトが堆積する。
遺物（第60図、写真図版41）
Ⅱ層盛土中より古銭（53：嘉定通寶？）が１点出土したことから、普請の時期は中世と考えられる。

３号平坦地（帯曲輪）（第27・29図、写真図版21）

〔位置・検出状況〕調査区西側２～13 U～Wグリッド付近、北向きの緩斜面に位置する。西側は自然の沢、東側は２号切岸状遺構で限られている。現況は畑地で、標高213.2～215mである。
〔規模・形態・機能〕東－西6.0m、南－北23.5m、面積約145.1㎡（範囲不明瞭）で、西側に狭く張り出す帯状である。館跡の縄張りから、高位面から４番目の平坦地と判断された。
〔普請・作事〕尾根斜面を切土して、平坦面を造っている。平坦地における作事の痕跡としては竪穴状遺構４棟、門跡？１箇所、柱穴状小ピット５個が確認されている。西側端部は現道を通す際に切土造成されており、普請時の現況を留めていない。整地層は、平坦地の西側を中心とする南北104m、東西7.2mにおよび、平坦地の端部に施されている。厚さは最大90cmほどである。
〔埋土〕平坦地で整地層が確認され、暗褐～灰黄褐色シルト主体で構成される。Ⅲ層は旧表土である。
遺物
出土遺物がなく時期など詳細は不明であるが、他の平坦地から出土した遺物の時期から推測して中世の遺構と考えられる。



第28図　1・2号平坦地・1号切岸状遺構

４号平坦地（第30図、写真図版22）

〔位置・検出状況〕調査区北側 14～19 Ｎ～Ｕグリッド付近、北向きの緩斜面に位置する。西側は３号堀跡、東側は自然の谷で限られ、南側は東西方向に尾根を寸断する堀によって画されている。現況は畑地で、標高 212.4 ～ 213.8mである。

〔規模・形態・機能〕南東－北西 11.5m、北東－南西 32.5m、面積約 217.8㎡で、北側に張り出す半円状を呈するものと推測される。館跡の縄張りから、高位面から５番目の平坦地と判断された。

〔普請・作事〕尾根の先端を切土して、平坦面を造っている。平坦地における作事の痕跡としては、竪穴建物跡４棟、竪穴状遺構１棟、柱穴状小ピット89個が確認されている。本平坦地の縁辺部は調査区域外へかかっており、調査範囲内で盛土整地の痕跡は認められていない。

遺物

出土遺物がなく時期など詳細は不明であるが、他の平坦地から出土した遺物の時期から推測して中世の遺構と考えられる。

５号平坦地（第31図、写真図版22）

〔位置・検出状況〕調査区南東側、14～16 Ｆ～Ｈグリッド付近、北向きの緩斜面に位置する。西側は１号大溝跡、東側は自然の谷で限られ、南側は上位の平坦地（調査区域外）によって画されている。現況は原野で、標高 210.4 ～ 213mである。

〔規模・形態・機能〕東西 10.3m、南北 13.0m、面積約 56.5㎡で、北側に狭く張り出し、その後東方へ帯状に巡る。館跡の縄張りから、高位面から４番目の平坦地と判断された。

〔普請・作事〕尾根斜面を切土して、平坦面を造っている。盛土整地の痕跡は認められなかった。

遺物（第60図、写真図版41）

Ⅱ層盛土中より古銭（54：寛永通寶）が１点出土している事から、普請の時期は中世と考えられる。

６号平坦地（第31図、写真図版22）

〔位置・検出状況〕調査区東側 17～20 Ｅ～Ｈグリッド付近、北向きの緩斜面に位置する。西側は１号大溝跡、東側は自然の谷で限られ、南側は５号平坦地によって画されている。現況は原野で、標高 214.4 ～ 215.8mである。

〔規模・形態・機能〕東西 15.5m、南北 10.2m、面積約 106.8㎡で、北側に狭く張り出し、その後東方へ帯状に巡る。館跡の縄張りから、高位面から５番目の平坦地と判断された。

〔普請・作事〕尾根斜面を切土して、平坦面を造っている。盛土整地の痕跡は認められなかった。

遺物

出土遺物がなく時期など詳細は不明であるが、他の平坦地から出土した遺物の時期から推測して中世の遺構と考えられる。

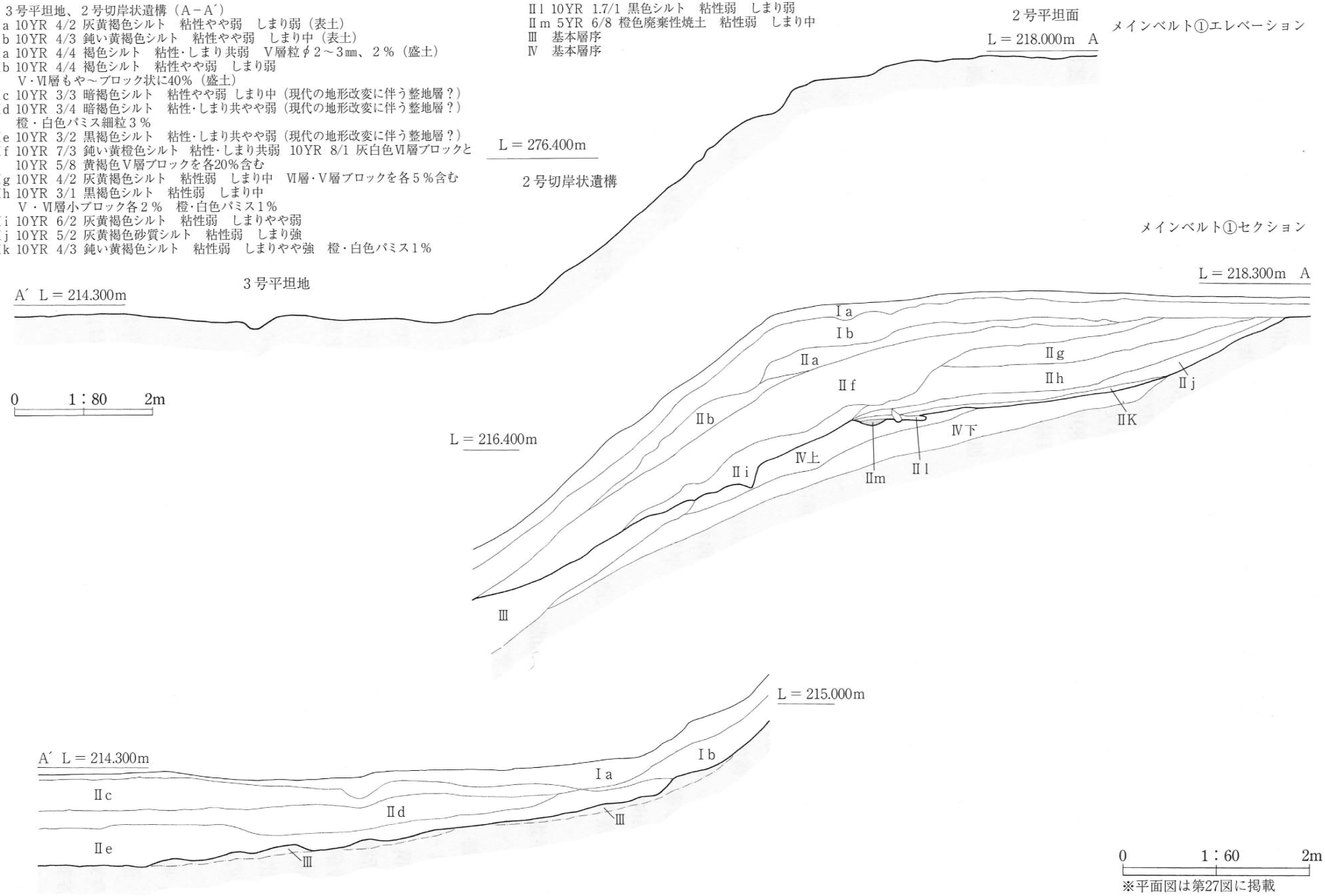
１号切岸状遺構（第27・28図、写真図版20）

調査区南西側４～７Ｍ～Ｐグリッド付近、１号平坦地と２号平坦地の間の斜面である。調査地内での実効法高はおよそ 3.8m、垂直塁壁高は約 3.2mを測る。普請は山側上位が１号平坦地の整地盛土、谷側下位は掘削して傾斜をとり、法面の角度は現状の上位で38°、下位で35°前後である。

遺物（第58・59図、写真図版39・40）

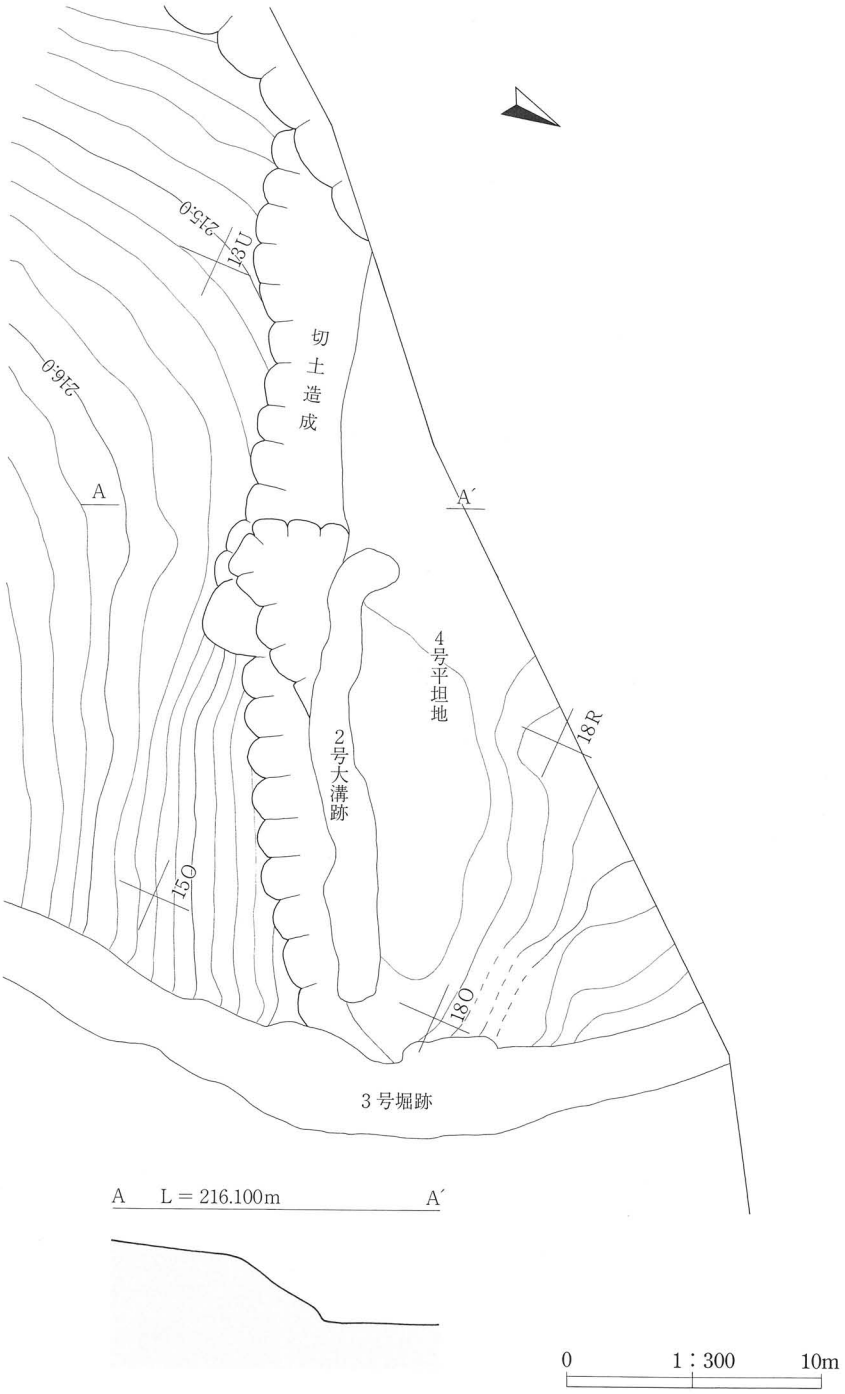
Ⅰ層表土中から石鉢片２点、敲磨器１点、茶臼（上臼、下臼各１点）が出土している。本遺構の時

2・3号平坦地、2号切岸状遺構（A－A′）
Ⅰa 10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性やや弱　しまり弱（表土）
Ⅰb 10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性やや弱　しまり中（表土）
Ⅱa 10YR 4/4 褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅴ層粒φ2～3㎜、2％（盛土）
Ⅱb 10YR 4/4 褐色シルト　粘性やや弱　しまり弱
　Ⅴ・Ⅵ層もや～ブロック状に40％（盛土）
Ⅱc 10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性やや弱 しまり中（現代の地形改変に伴う整地層？）
Ⅱd 10YR 3/4 暗褐色シルト　粘性・しまり共やや弱（現代の地形改変に伴う整地層？）
　橙・白色パミス細粒3％
Ⅱe 10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性・しまり共やや弱（現代の地形改変に伴う整地層？）
Ⅱf 10YR 7/3 鈍い黄橙色シルト　粘性・しまり共弱　10YR 8/1 灰白色Ⅵ層ブロックと
　10YR 5/8 黄褐色Ⅴ層ブロックを各20％含む
Ⅱg 10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅵ層・Ⅴ層ブロックを各5％含む
Ⅱh 10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中
　Ⅴ・Ⅵ層小ブロック各2％　橙・白色パミス1％
Ⅱi 10YR 6/2 灰黄褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
Ⅱj 10YR 5/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性弱　しまり強
Ⅱk 10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまりやや強　橙・白色パミス1％
Ⅱl 10YR 1.7/1 黒色シルト　粘性弱　しまり弱
Ⅱm 5YR 6/8 橙色廃棄性焼土　粘性弱　しまり中
Ⅲ　基本層序
Ⅳ　基本層序

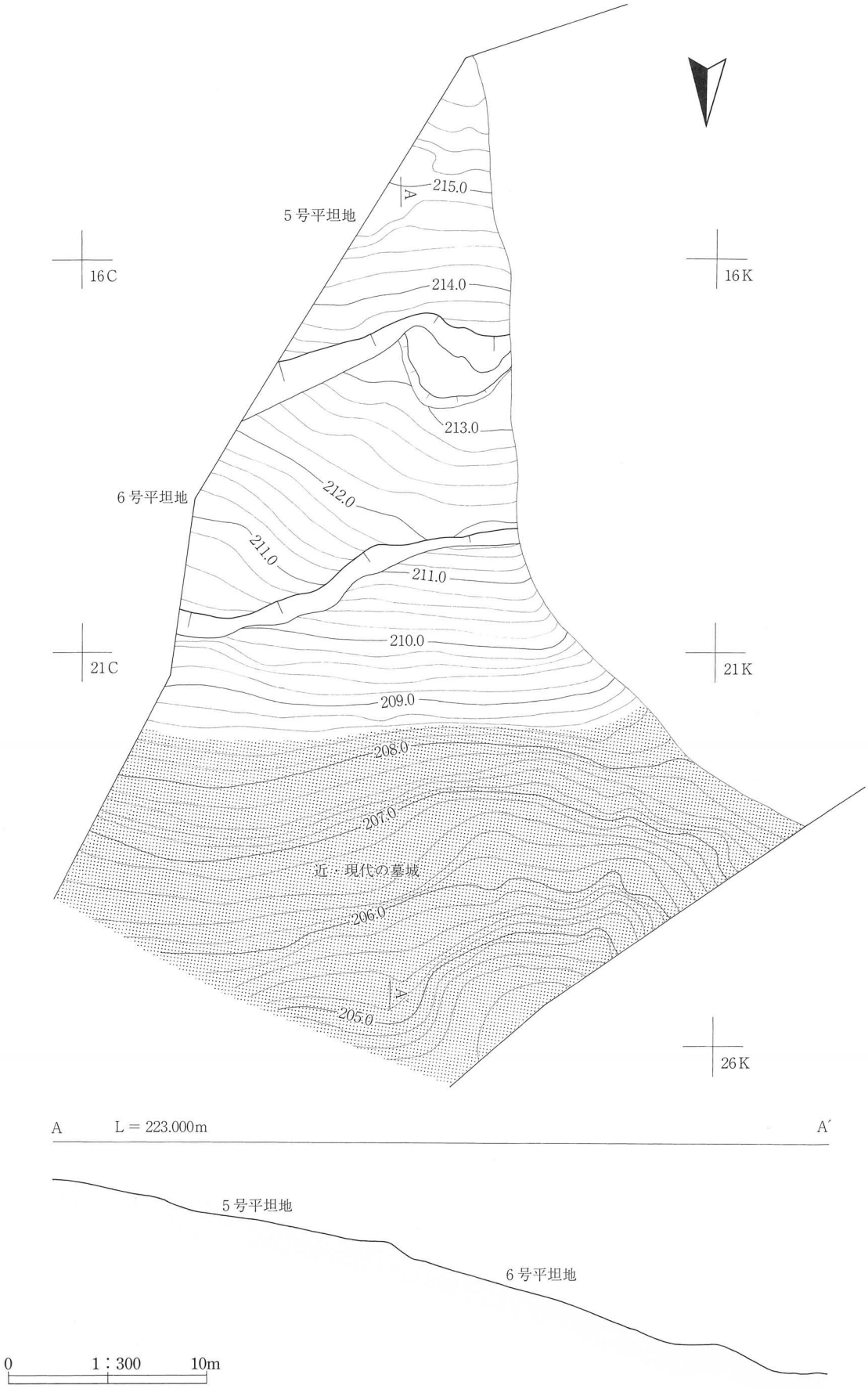


※平面図は第27図に掲載

第29図　2・3号平坦地・2号切岸状遺構


215.0
13U
216.0
切土造成
A
A′
4号平坦地
2号大溝跡
18R
15O
18O
3号堀跡
A　L＝216.100m　A′
0　1：300　10m

第30図　4号平坦地


5号平坦地
6号平坦地
16C
16K
21C
21K
26K
215.0
214.0
213.0
212.0
211.0
211.0
210.0
209.0
208.0
207.0
206.0
205.0
A
A
近・現代の墓城
A
L＝223.000m
A′
5号平坦地
6号平坦地
0
1：300
10m

第31図　5・6号平坦地

期はこれらの出土遺物から推定して中世と考えられる。

２号切岸状遺構（第27・29図、写真図版21）

調査区南西側２～７ Ｔ・Ｕグリッド付近、２号平坦地と３号平坦地の間の斜面である。調査地内での実効法高はおよそ5.9m、垂直塁壁高は約3.45mを測る。普請は山側上位が２号平坦地の整地盛土、谷側下位は削平して傾斜をとり、法面の角度は現状の上位で53°、下位で49°前後である。

（丸山直美）

１号堀跡（第32・33・35図、写真図版23）

〔位置・検出状況〕調査区中央部の12H～22Mグリッドに位置する。２・４号平坦地の東側にあり、同平坦地と５・６号平坦地とを区画する。当堀跡付近は現況でも埋没しきらず、緩く窪んだ状態であり、堀跡として認識できた。中央付近の19Ｊ～19Ｋ付近は西側の畑へ登る小路となっており、当該部分は人為的に削平されている。また南半部の西寄り部分は平坦に整地されて、通路状となっていた。窪みの底では斜面上方から少量ながら常に湧水しており、ごく小規模な沢となっていた。

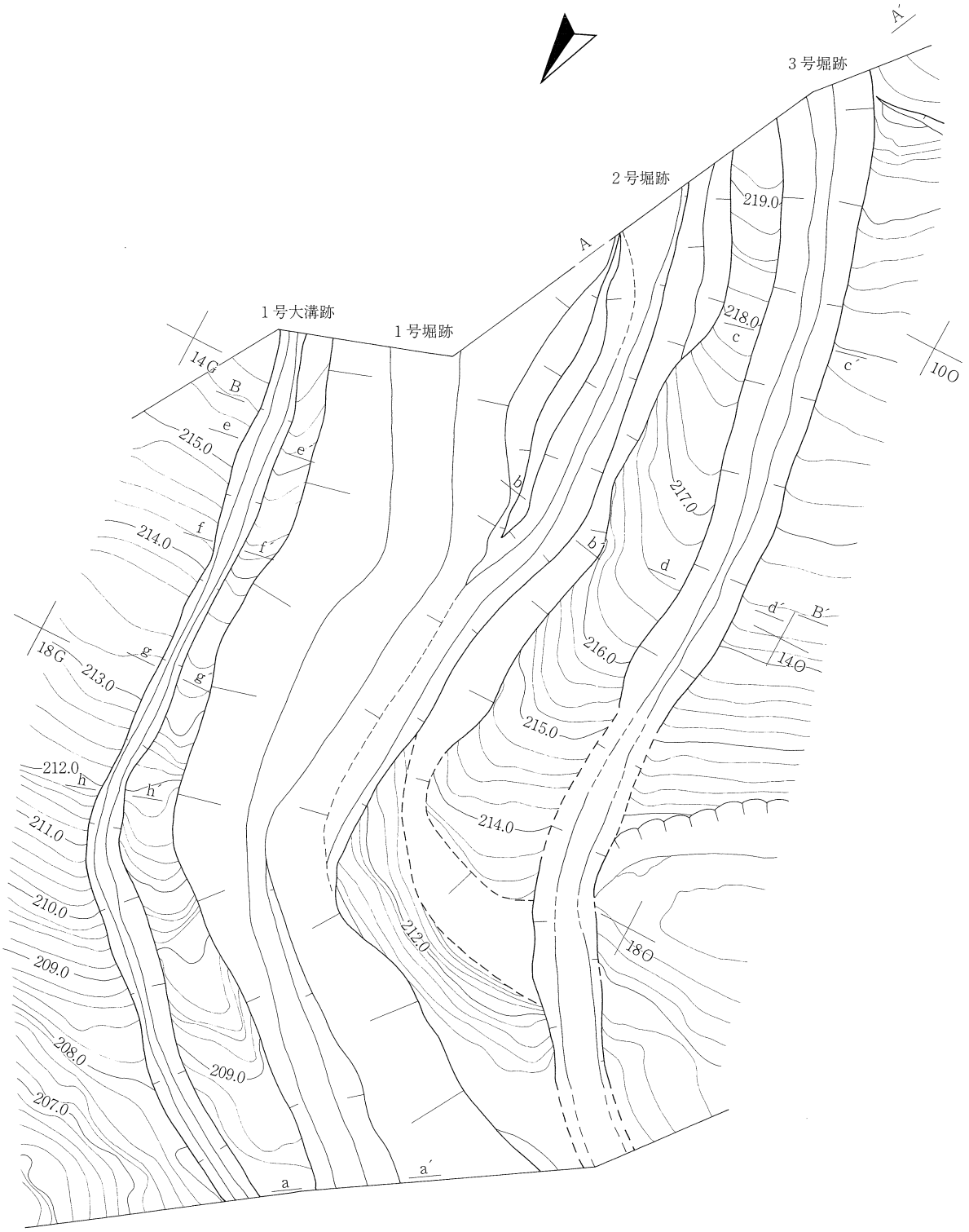
〔重複関係〕２号堀跡と重複しているが、平面で新旧関係を把握できなかった。また、埋土断面でも直接的に截り合い関係は示されていない。位置関係から見て２号堀跡と同時期存在する可能性は低く、他の堀との配置、縄張りの検討から、間接的ではあるが当堀跡がより古い可能性が高いと推測される。

〔規模・形態・方向〕調査区内で「く」字形に屈曲している。２号平坦部と５・６号平坦地を区切る南半部分ではほぼ南－北に走るが、19Ｉ～18Ｊグリッド付近で方向を変えて、４号平坦地を区切る北半部分は北東－南西方向へ延びている。当堀跡の南北両端ともに調査区外へと続いており、調査区外でも現況で当堀跡の延長部分が確認できる。南側（斜面上方）ではさらに上段の曲輪とおもわれる平坦面を区画して、現況で確認できる枡形様の屈曲部へと続いている。北側については、丘陵先端部へと向かっているが、崖面へと突き抜けているのか、現況では確認できなかった。検出部分の規模は、長さ43.5m、実効堀幅10.4m（最大）、実効法高4.6m（最大）である。法面は、屈曲部以南では上位がⅤ層、中～下位がⅥ層、屈曲部以北では最上位がⅤ層、上～中位がⅥ層、下位はⅦ層（砂礫層）、に相当している。実測図に即せば、断面形状はやや漏斗状に上方が開いたもので、一般的な堀の形態分類に即せば、「箱堀」に相当するものと判断される。但し、精査過程において湧水により底面を明確に把握できなかった嫌いがあり、屈曲部以北がやや底面幅が狭く薬研堀に近い形態となっている。また法面に相当するⅥ層土が脆く崩れやすい性状を踏まえると、はじめ薬研堀だったものが崩落・補修を繰り返して箱堀状となった可能性もある。

〔普請〕当堀跡部分はもともと沢筋だったと思われ、その地形を生かして堀を構築している。すなわち、縁辺部～法面中位までは傾斜が比較的緩やかで、自然地形の窪みを生かして大幅な普請は行っていないものと思われる。しかし、法面下位については、傾斜角が変わり、著しく急角度となる。普請により八戸火山灰層（Ⅴ～Ⅶ層）を掘削した所産と思われる。

〔付属施設〕土橋部分や橋脚と思われるピットは検出されていない。

〔埋土〕上位にはⅠ層（現表土・盛り土・旧表土層）およびⅢ層系黒褐色土が堆積している。前者は人為堆積層で、当堀跡が埋没しきらない深い窪みだったものを、ある程度まで整地したものである（それでも現状で窪みを認識できる程度までしか埋まっていない）。中～下位の埋土は、Ⅵ層起源の白色ロームが多量に混入する黒褐色土である。断面Ａ－Ａ′で見ると、特に西寄り部分に白色土が纏まって堆積している。また、北端部の断面ａ－ａ′では、表土直下まで白色土が堆積している。これらの白色土



0　1：300　10m

※断面図は第33～36図に掲載

第32図　1～3号堀跡・1号大溝跡

自体はⅥ層の崩落によるものであろうが、特にＡ－Ａ′断面の堆積様相はやや特殊であり、斜面上方については人為的な埋め戻しが行われている可能性を否定しきれない。なお、新期と思われる２号堀跡が機能していた時期には、当堀跡は６～８層付近まで埋没し窪み状となっており、２号堀跡廃絶後に５層以上が堆積したと思われる。
〔時期〕出土遺物を欠いており、直截的に時期決定する根拠が薄い。但し当堀跡が中世城館に付随する施設であることは確実であることから、他の遺構の年代観から見て中世後期16世紀代と思われる。

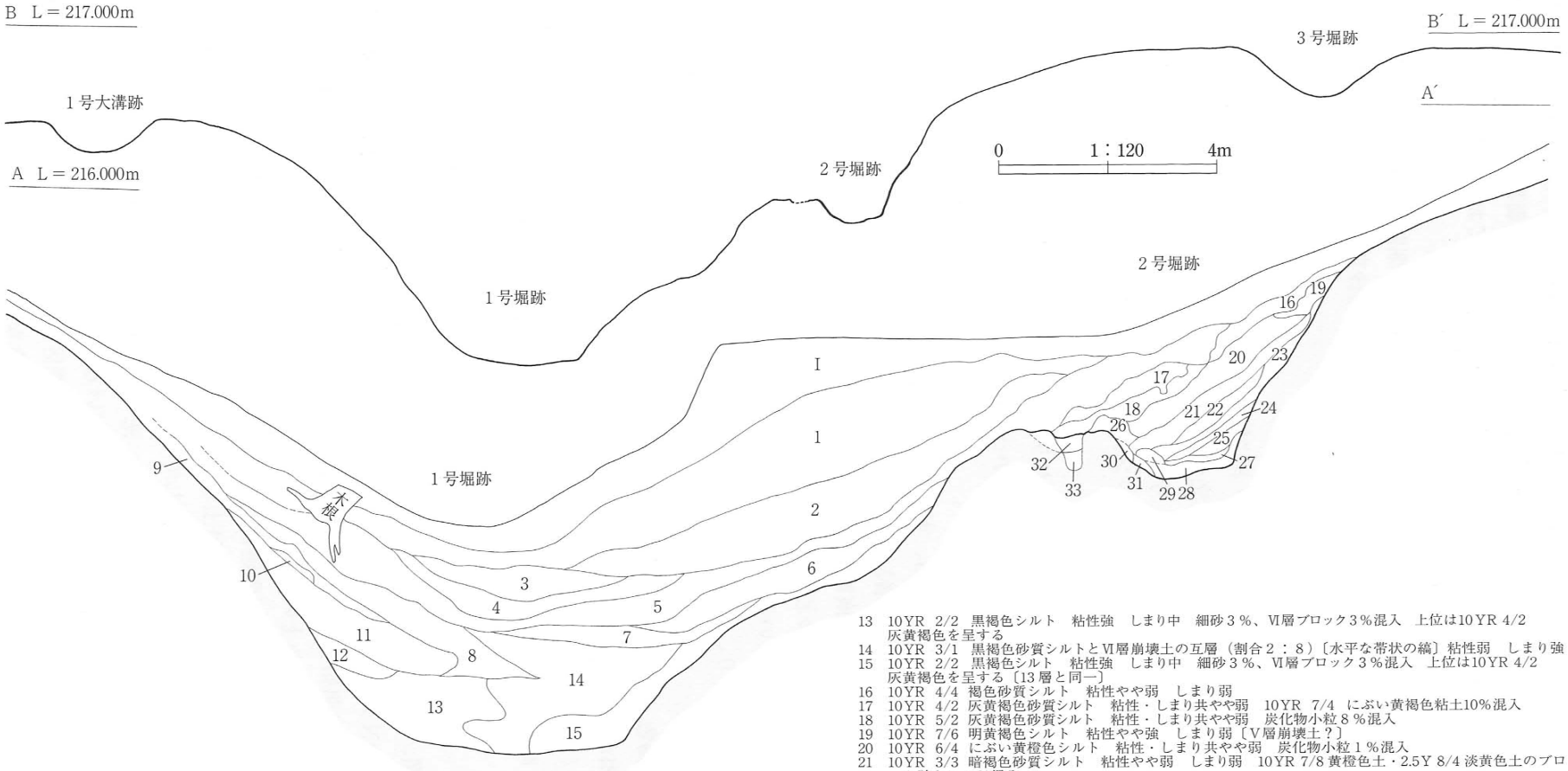
２号堀跡（第32～35図、写真図版23・24）

〔位置・検出状況〕調査区中央部の10Ｋ～18Ｋグリッドに位置し、ほぼ２号平坦地の東側を画する。屈曲部以南の１号堀跡に並行しているが、現状では完全に埋没しており、かつ通路状に整地されていたため、当堀跡の存在を全く認識できなかった。１号堀跡の検出作業中に、Ⅵ層白色土の筋に区切られたくすんだ褐色土の帯状プランとして検出し、トレンチを入れた結果、白色土の筋は塁壁の先端部分で、当該プランが堀であることが判明した。
〔重複関係〕16Ｋグリッド以北で１号堀跡と重複しており、19Ｋグリッド以北では延長部分の有無を確認できなかった。新旧関係を直截的には把握できなかったが、１号堀跡で述べたように、おそらく当堀跡はより新しいものと推測される。
〔規模・形態・方向〕検出部分では、長さ37m、実効堀幅3.6m、実効法高2.2mである（断面Ａ－Ａ′を参照）。１号堀跡との間には、地山（Ⅵ層）をそのまま掘り残した塁壁状の高まりがある。断面形は逆台形の箱堀状を呈している。当堀跡南端はさらに調査区外へ延びており、現況でははっきりしないが堀痕跡を辿ることができる。上述のとおり、１号堀跡との間に塁壁が認められるが、15Ｋグリッド以北では崩落によるものか消失している。
〔普請〕Ⅵ層を箱堀状に掘削しており、法面・底面ともにⅥ層相当である。
〔付属施設〕検出されていない。
〔埋土〕くすんだ色調の、褐色・灰黄褐色・黒褐色土が細かな層をなして堆積、下位では地山系の土が互層している。堆積様相から見ると、16～17層以下については地山崩落による自然堆積と思われる。当堀跡廃絶後、２つの堀（１号堀跡はこの時点である程度まで埋没）は同時に埋没したと思われる。
〔時期〕出土遺物がなく、時期判断の根拠を欠いているが、１号堀跡同様に中世後期16世紀代と思われる。

３号堀跡（第32・34・35図、写真図版23・24）

〔位置・検出状況〕８Ｌ～19Ｎグリッドに位置する。２号・４号平坦地の東側を緩く蛇行しながら南北に走り、区画している。調査開始当初の試掘トレンチで一部を検出しており、表土除去後、Ⅴ層面で調査区を縦断する帯状に延びる黒色土のプランとして把握した。
〔重複関係〕北半部では３・４・５・６号竪穴建物跡と重複して、法面および埋土を截られている。また南半部では９・10・11・22・23・24（・25）号土坑と重複してこれらを截っている。なお、直截の截り合い関係ではないが、当堀跡の東側縁辺に隣接して１号土塁が構築されていたと推測される。
〔規模・形態・方向〕２号平坦面の東側縁辺部に沿って、逆「Ｓ」字にごく緩く曲がりながら南－北へ延びている。南半部では１号堀跡とほぼ同じ軸線をとっているが、はっきりした屈曲部分はなく、北半部では緩くカーブするものの１号堀跡と接近している。調査区内で完結せず、南北両側は調査区外へ続いている。調査区外では、当堀跡の痕跡を明確には把握できない。なお、当堀跡と１号堀跡と

中央部堀跡群横断エレベーション



第33図　1・2号堀跡

1号堀跡・2号堀跡（A－A′）

1　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性・しまり共やや弱　炭化物小粒ごく微量混入〔旧表土？〕
2　10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルト　粘性・しまり共弱　細砂ごく僅かに含む
3　10YR 6/2 灰黄褐色砂　粘性・しまり共弱
4　10YR 4/1 褐灰色粗砂　粘性・しまり共弱　酸化鉄ブロック状に1％混入
5　10YR 3/1 黒褐色砂質シルト　粘性・しまり共やや弱　酸化鉄ブロック状に3％、下位に木質遺存体（小枝、草根など）混入
6　10YR 6/1 褐灰色シルト　粘性やや強　しまり弱　酸化鉄ブロック5％、Ⅵ層ブロック5％混入
7　10YR 2/2 黒褐色砂質シルト　粘性やや強　しまりやや弱　最下位に木質を含む10YR 1.7/1黒色土が疎らに混入
8　5YR 3/1 黒褐色砂質シルト　粘性やや強　しまりやや弱　5YR 3/6 暗赤褐色酸化鉄を全体に15%含むⅥ層ブロック3％混入
9　7.5YR 3/1 黒褐色シルト　粘性強　しまり中　酸化鉄粒5％混入
10　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性やや弱　しまり強（脆い）
11　10YR 3/1 黒褐色砂質シルトと2.5Y 8/4 淡黄色粘質シルト（Ⅵ層崩壊土）の互層〔斜位帯状の縞〕粘性やや強　しまり強（堅い）全体が斑に酸化〔湧水による〕
12　2.5YR 8/3 淡黄色粘質シルト　粘性強　しまりやや弱
13　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性強　しまり中　細砂3％、Ⅵ層ブロック3％混入　上位は10YR 4/2灰黄褐色を呈する
14　10YR 3/1 黒褐色砂質シルトとⅥ層崩壊土の互層（割合2：8）〔水平な帯状の縞〕粘性弱　しまり強
15　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性強　しまり中　細砂3％、Ⅵ層ブロック3％混入　上位は10YR 4/2灰黄褐色を呈する〔13層と同一〕
16　10YR 4/4 褐色砂質シルト　粘性やや弱　しまり弱
17　10YR 4/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性・しまり共やや弱　10YR 7/4 にぶい黄褐色粘土10%混入
18　10YR 5/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性・しまり共やや弱　炭化物小粒8％混入
19　10YR 7/6 明黄褐色シルト　粘性やや強　しまり弱〔Ⅴ層崩壊土？〕
20　10YR 6/4 にぶい黄橙色シルト　粘性・しまり共やや弱　炭化物小粒1％混入
21　10YR 3/3 暗褐色砂質シルト　粘性やや弱　しまり弱　10YR 7/8 黄橙色土・2.5Y 8/4 淡黄色土のブロック疎らに5％混入
22　10YR 3/3 暗褐色砂質シルト　粘性やや弱　しまり弱　下位を中心に10YR 7/8 黄橙色土・2.5Y 8/4 淡黄色土のブロック40%混入
23　2.5Y 7/4 浅黄色粘質シルト　粘性・しまり共やや弱　Ⅵ層崩壊土10%混入し全体に汚れている
24　2.5Y 8/2 灰白色粘質シルト　粘性・しまり共やや弱〔Ⅵ層崩壊土〕
25　2.5Y 7/4 浅黄色粘質シルト　粘性・しまり共やや弱　Ⅵ層崩壊土25%混入
26　10YR 6/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性弱　しまりやや弱　2.5Y 8/4 淡黄色ブロック5％混入
27　2.5Y 7/4 浅黄色粘質シルト　粘性・しまり共やや弱　Ⅵ層崩壊土30%混入
28　2.5Y 8/2 灰白色砂質シルト　粘性・しまり共弱〔Ⅵ層崩壊土〕
29　2.5Y 8/2 灰白色粘質シルト　粘性・しまり共やや弱〔Ⅵ層崩壊土；28層と同一？土塁盛り土の可能性もある〕
30　10YR 6/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性弱　しまりやや弱　2.5Y 8/4 淡黄色ブロック5％混入〔26と同一？〕
31　2.5Y 8/2 灰白色砂質シルト　粘性弱　しまり強〔Ⅵ層崩壊土；土塁盛り土の可能性もある〕
32　10YR 4/2 灰黄褐色砂　粘性・しまり共弱　粗砂1％混入〔土塁の風化・崩壊土か〕
33　10YR 5/2 灰黄褐色砂　粘性・しまり共弱　粗砂1％混入〔土塁の風化・崩壊土か〕

0　1：60　2m

※平面図は第32図に掲載

の間に２～５ｍほどの間隔があるが、当該部分には柱穴が全くない。この部分に土塁が堀に沿った形で築かれていたようであるが、南端付近を除いてその痕跡は捉えられなかった。土層断面Ａ－Ａ′で見ると、断面形は逆台形の箱堀状である。検出部分では、長さ52m、堀幅5.9m、法高3.2mであり、土塁先端を基点とした場合は実効堀幅7.6m、実効法高4.2mを測る。

〔普請〕土層断面で確認できるところでは、Ⅲ層面から掘り込んでおり、法面はⅢ～Ⅵ層土、底面はⅤ～Ⅵ層土に相当している。

〔付属施設〕検出されていない。

〔埋土〕断面を参照すると、下位の堆積土と上～中位のそれとでは様相が異なる。下位は東西両側（１号土塁、２号平坦地）から流れ込んでいる自然堆積の崩落土である。一方、上～中位の堆積土は東側からのみ流入しており、かつ黒褐色・暗褐色・にぶい黄褐色土が厚みある層ごとに流入し、グラデーションをなしている(断面Ａ－Ａ′の４～８層)。これら上～中位の堆積土は、人為的埋め戻しによるものと考えられる。

〔時期〕出土遺物を欠くが、館全体の年代観から、中世後期16世紀に属するものと思われる。

１号大溝跡（第32・36図、写真図版23・25）

〔位置・検出状況〕13Ｈ～22Ｋグリッドに位置し、５・６号平坦地の西側縁辺を区切る。

〔重複関係〕13・36号土坑、23号陥し穴状遺構と僅かに重複して、これらを截る。

〔規模・形態・方向〕ほぼ１号堀跡に沿っている。「く」字状に屈曲しつつ、調査区を南北縦断している。検出部分は長さ45m、実効堀幅1.7m、実効法高1.0mである。断面形は地点によって異なり、南側ではややⅢ状、屈曲部付近は逆三角形、北側では逆台形ぎみ、をそれぞれ呈している。底面は傾斜に沿っているわけではなく、やや平坦ぎみな面が階段状に連続した形である。１号堀跡との間には、1.5～３ｍほどの間隔がある。２号堀跡と３号堀跡との間と同様、当該部分に土塁が存在した可能性も考えたが、痕跡を確認できなかった。なお、南端付近で、法面傾斜に対して直交ぎみの、長さ10cmほどのごく浅い溝状窪みが複数検出された。当大溝跡掘削の際の工具痕でと思われる。

〔普請〕Ⅲ層面から掘り込んでおり、法面はⅢ～Ⅴ層、底面はほぼⅤ層に相当する。

〔付属施設〕検出されていない。

〔埋土〕橙色パミス（To-Nk）を含む黒色～黒褐色が主体で、概ね自然堆積の様相を示している。

〔時期〕出土遺物を欠くが、館全体の年代観から、中世後期16世紀に属するものと思われる。

２号大溝跡（第37図、写真図版23・26）

〔位置・検出状況〕調査区北側の15Ｎ～17Ｒグリッド、２・４号平坦地を区画している。当大溝跡周辺は現況では４号平坦地縁辺部にあたるが、２号平坦地縁辺部が後世の撹乱により削剥されていることから、本来は２号平坦地の北側にあった可能性がある。当堀跡自体も削剥により底面付近しか残っていない。４号平坦地の表土を除去した際に、Ⅴ層面で黒褐色の帯状プランとして検出した。

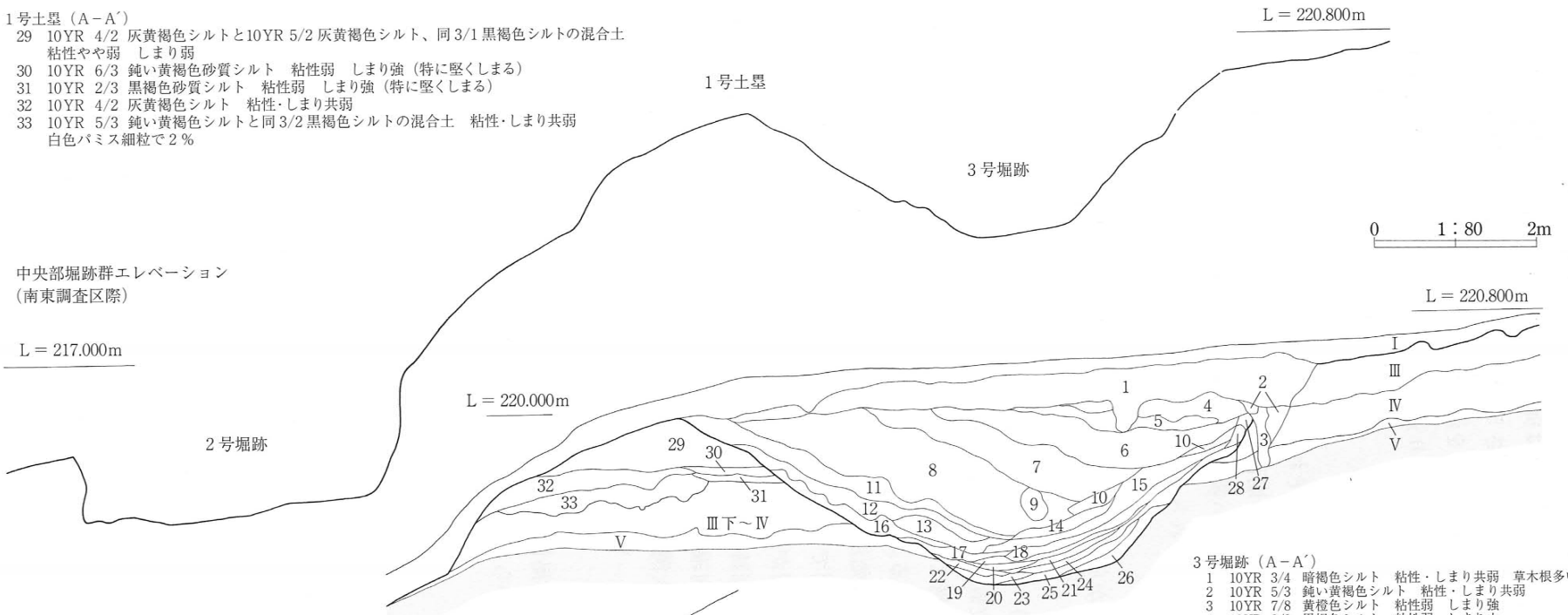
〔重複関係〕東側の17Ｏ～16Ｐグリッド付近では柱穴群によって截られている。

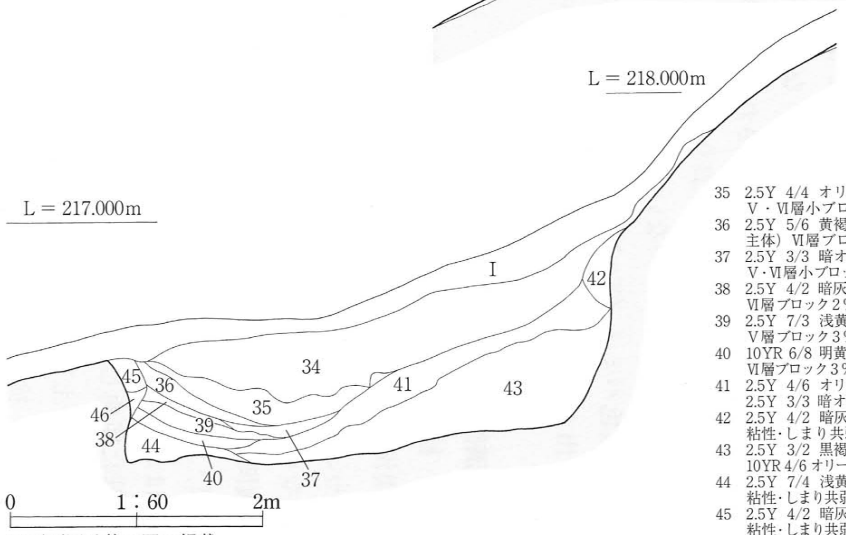
〔規模・形態・方向〕長さ18m、実効堀幅1.7mだが、上述のとおり底面付近しかなく、残存する深さ20cmほどである。本来の形状は不明であるが、残存部はやや蛇行しつつ北東－南西に延び、西端部では鉤状に屈曲している。

〔普請〕Ⅴ層土を掘り込んでいる。掘り込み面は不明である。

〔付属施設〕検出されていない。

1号土塁（A－A′）
29　10YR 4/2 灰黄褐色シルトと10YR 5/2 灰黄褐色シルト、同3/1 黒褐色シルトの混合土
　　粘性やや弱　しまり弱
30　10YR 6/3 鈍い黄褐色砂質シルト　粘性弱　しまり強（特に堅くしまる）
31　10YR 2/3 黒褐色砂質シルト　粘性弱　しまり強（特に堅くしまる）
32　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性・しまり共弱
33　10YR 5/3 鈍い黄褐色シルトと同3/2 黒褐色シルトの混合土　粘性・しまり共弱
　　白色パミス細粒で２％





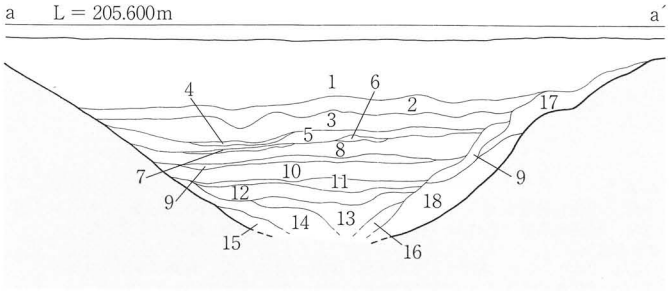
※平面図は第32図に掲載

2号堀跡（A－A′）
34　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱
　　しまりやや弱　10YR 5/3 鈍い黄褐色シルトブロックもや状に３％
35　2.5Y 4/4 オリーブ褐色砂質シルト　粘性・しまり共弱
　　Ⅴ・Ⅵ層小ブロック各１％　橙・白色パミス各１％以下
36　2.5Y 5/6 黄褐色砂質シルト　粘性弱　しまりやや弱（Ⅴ層主体）Ⅵ層ブロック２％　橙・白色パミス各１％以下
37　2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色シルト　粘性・しまり共弱
　　Ⅴ・Ⅵ層小ブロック各１％
38　2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト　粘性・しまり共弱（Ⅴ層主体）
　　Ⅵ層ブロック２％　橙・白色パミス各１％以下
39　2.5Y 7/3 浅黄色シルト　粘性・しまり共やや弱（Ⅵ層主体）
　　Ⅴ層ブロック３％
40　10YR 6/8 明黄褐色シルト　粘性やや弱　しまり弱（Ⅴ層主体）
　　Ⅵ層ブロック３％
41　2.5Y 4/6 オリーブ褐色シルトと
　　2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色シルトの混合土　粘性・しまり共弱
42　2.5Y 4/2 暗灰黄色シルトと同7/2 灰黄色シルトの混合土
　　粘性・しまり共弱
43　2.5Y 3/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
　　10YR 4/6 オリーブ褐色シルトブロック
44　2.5Y 7/4 浅黄色シルトと10YR 5/6 黄褐色シルトの混合土
　　粘性・しまり共弱　橙・白色パミス各１％以下
45　2.5Y 4/2 暗灰黄色シルトと同7/4 浅黄色シルトの混合土
　　粘性・しまり共弱
46　2.5Y 7/2 灰黄色シルト　粘性弱　しまり中（Ⅵ層崩落土）

3号堀跡（A－A′）
1　10YR 3/4 暗褐色シルト　粘性・しまり共弱　草木根多い
2　10YR 5/3 鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共弱
3　10YR 7/8 黄橙色シルト　粘性弱　しまり強
4　10YR 2/3 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中
　　10YR 3/3 暗褐色シルト・Ⅴ層小ブロック各２％
5　10YR 2/3 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
　　10YR 3/3 暗褐色シルト・Ⅴ層ブロック各２％
6　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
　　10YR 4/6 褐色シルトブロック１％　橙・白色パミス各１％以下
7　10YR 3/4 暗褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
　　10YR 4/6 褐色シルト小ブロック30％　橙・白色パミス細粒で１％以下
8　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
　　10YR 4/6 褐色シルト粒もや状に５％　橙・白色パミス細粒で１％以下
9　10YR 5/3 鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　橙・白色パミス細粒で１％以下
10　10YR 2/1 黒色シルト　粘性弱　しまりやや弱
　　10YR 4/6 褐色シルト大ブロック30％　橙・白色パミス細粒で１％以下
11　10YR 5/8 黄褐色シルトと10YR 3/4 暗褐色シルトの混合土50：50 粘性弱
　　しまり中　橙・白色パミス細粒で１％以下
12　10YR 6/6 明黄褐色シルトと10YR 3/4 暗褐色シルトの混合土　粘性弱　しまり中
13　10YR 4/6 褐色シルト　粘性弱　しまり中　10YR 2/2 黒褐色シルト30％
　　橙・白色パミス細粒で１％以下
14　10YR 3/4 暗褐色シルト　粘性弱　しまり弱　Ⅵ層ブロック１％
　　橙・白色パミス各１％以下
15　10YR 5/4 鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共弱
　　10YR 3/3 暗褐色シルトブロック全体に２％
16　10YR 5/6 黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　10YR 3/2 黒褐色シルト全体に２％
17　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性・しまり共弱
　　10YR 7/3 鈍い黄橙色テフラ（？）ブロック２％
18　10YR 3/3～3/4 暗褐色シルト　粘性・しまり共弱
19　10YR 5/3 鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　10YR 7/3 鈍い黄橙色テフラ？砂？30％
　　局所的にラミナが認められる（水成堆積）
　　以後、26層まで18層と19層の互層状を呈する　粘性弱　しまりやや強（水成堆積）
27　2.5Y 6/8 明黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　10YR 4/2 灰黄褐色砂５％
28　2.5Y 6/8 明黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　10YR 4/2 灰黄褐色砂２％
　　＊１～８層まで人為堆積の様相を呈する

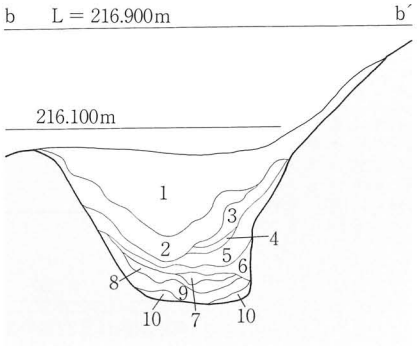
第34図　2・3号堀跡・1号土塁

1号堀跡



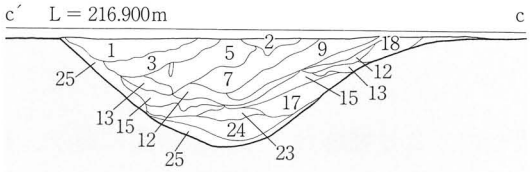
1号堀跡（a－a′）
1　10YR 3/4 暗褐色シルト　粘性･しまり共弱　草木根多い
2　10YR 7/4 鈍い黄橙色（Ⅴ層）粘性弱　しまり中　1層ブロック10％含む（水成堆積）
3～16　10YR 8/1 灰白色（Ⅵ層）粘性弱　しまり中　局所的に褐灰色のラミナ層を介する（水成堆積）　以後、16層まで2層と3層の互層状を呈する　粘性弱　しまりやや強（水成堆積）
17　10YR 4/1 褐灰色シルト　粘性・しまり共弱
18　10YR 6/2 灰黄褐色シルト　粘性・しまり共弱

2号堀跡

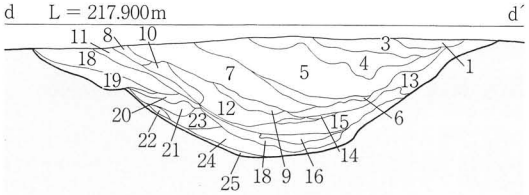


2号堀跡（b－b′）
1　10YR 2/3 黒褐色砂質シルト　粘性やや弱　しまり弱　Ⅵ層筋状に3％炭化物粒･橙色　パミス1％
（上位は表土 10YR 3/2 黒褐色シルトと混ざっている）
2　10YR 4/6 褐色砂質シルト　粘性･しまり共弱　Ⅵ層ブロック5％混入　橙色パミス1％
3　10YR 7/6 明黄褐色砂質シルト　粘性･しまり共弱　Ⅵ層崩落土10％
4　2層と同質　Ⅵ層筋状に20％
5　10YR 7/3 鈍い黄橙色砂質シルト（Ⅵ層起源？）粘性弱　しまり中　10YR 8/6 黄橙色砂質シルトと混合
6　2層と同質　Ⅵ層筋状に5％
7　10YR 7/3 鈍い黄橙色シルト、10YR 8/6 黄橙色シルトの混合土　粘性やや強　しまり弱　マトリクスは10YR 2/3
8　2層と同質　Ⅵ層筋状に10％
9　7と同質　10YR 2/3 少ない
10　10YR 8/4 浅黄橙色層（汚れⅥ層崩落土）粘性弱　しまりやや弱

3号堀跡



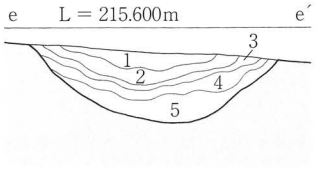
3号堀跡



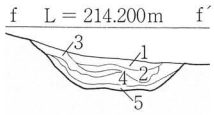
3号堀跡（c′－c　d－d′）
1　10YR 5/4 鈍い黄褐色砂質シルト　粘性弱　しまりやや強　Ⅴ･Ⅵ層ブロック25％（φ2～3㎝）橙色パミス2％
2　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性やや弱　しまり中　橙色パミス1％以下
3　10YR 7/4 鈍い黄褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや強（Ⅴ･Ⅵ層ブロック主体）1層大ブロック20％　橙色パミス1％以下
4　7.5YR 5/8 明褐色砂質シルト　粘性弱　しまり中　Ⅴ層ブロック20％　橙色パミス3％
5　10YR 2/1 黒色シルト　粘性やや弱　しまり中（Ⅲ層主体）Ⅴ層小ブロック2％　橙色パミス･白色パミス（φ3～5㎜）各1％
6　10YR 2/1 黒色シルト　粘性やや弱　しまり中（Ⅲ層主体）Ⅴ層大ブロック25％　橙色パミス･白色パミス（φ3～5㎜）各1％
7　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや強　Ⅴ層粒（φ3～5㎜）20％　橙色パミス･白色パミス（φ3～5㎜）各1％以下
8　10YR 3/4 暗褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや強　混入物7層と同様
9　10YR 3/4 鈍い黄褐色砂質シルト　粘性弱　しまりやや弱（Ⅴ層とⅢ層の均質な混合土）　粒度細かい　橙・白色パミス共1％以下
10　9と同質　Ⅴ層ブロック5％含む　粘性弱　しまりやや弱
11　10YR 3/4 黒色シルト　粘性やや弱　しまり中（Ⅲ層主体）Ⅵ層ブロック2％
12　10YR 2/1 黒色シルト　粘性弱　しまり中（Ⅲ層主体）Ⅴ層大ブロック30％　橙パミス1％以下
13　10YR 5/4 鈍い黄褐色砂質シルト　粘性弱　しまり弱
14　13と同質　Ⅴ層粒1％程度含む　粘性弱　しまり弱
15　10YR 4/3 鈍い黄褐色砂質シルト　粘性･しまり共弱　Ⅵ層ブロック、橙･白色パミス各1％
16　10YR 8/2 灰白色砂質層（Ⅵ層主体）粘性・しまり共弱
17　10YR 6/4 鈍い黄橙色砂質シルト　粘性･しまり共弱　Ⅴ層ブロック5％
18　10YR 4/3 鈍い黄褐色砂質シルト　粘性弱　しまり中（6層と類似）
19　18と同質　Ⅴ層大ブロック5％程度含む
20　10YR 5/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性･しまり共弱　局所的にⅥ層ラミナが認められる
21　10YR 4/3 鈍い黄褐色砂質シルト　粘性･しまり共弱
22　10YR 6/8 明黄褐色砂質シルト　粘性･しまり共弱（汚れたⅤ層主体）
23　10YR 4/3 鈍い黄褐色砂質シルト　粘性・しまり共弱　橙・白色パミス各2％（15層と類似）
24　10YR 5/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性･しまり共弱　Ⅴ･Ⅵ層ブロック15％　橙・白色パミス1％以下
25　10YR 7/4 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中（Ⅴ･Ⅵ層ブロック主体）白色パミス1％

0　1：60　2m

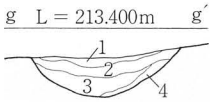
第35図　1～3号堀跡



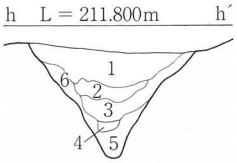
1号大溝跡（e−e′）
1　10YR　3/2　黒褐色砂質シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス各１％
2　10YR　3/1　黒褐色細砂　粘性弱　しまり中　白色パミス10%　橙色パミス５％
Ⅵ層ブロック３％
3　10YR　1.7/1　黒色シルト　粘性・しまり弱　橙色パミス１％　Ⅵ層ブロック３％
4　10YR　3/3　暗褐色砂質シルト　粘性やや弱　しまり弱　Ⅵ層ブロック７％
5　10YR　2/1　黒色シルト　粘性やや強　しまり中　Ⅴ・Ⅵ層ブロック４％



1号大溝跡（f−f′）
1　10YR　3/2　黒褐色砂質シルト　粘性弱　しまり中　橙・白色パミス各１％
2　10YR　3/1　黒褐色細砂　粘性弱　しまり中　白色パミス10%　橙色パミス５％
Ⅵ層ブロック３％
3　10YR　1.7/1　黒色シルト　粘性・しまり共弱　橙色パミス１％　Ⅵ層ブロック３％
4　10YR　3/3　暗褐色砂質シルト　粘性やや弱　しまり弱　Ⅵ層ブロック７％
5　10YR　2/1　黒色シルト　粘性やや強　しまり中　Ⅴ・Ⅵ層ブロック４％



1号大溝跡（g−g′）
1　10YR　2/1　黒色砂質シルト　粘性弱　しまり中
2　10YR　3/1　黒褐色シルト　粘性・しまり共強　白色パミス３％　橙色パミス１％
3　10YR　1.7/1　黒色砂質シルト　粘性やや弱　しまり中
2.5Y　7/6　明黄褐色粘質シルトブロック３％　同7/6黄橙色粘質シルトブロック５％
白色パミス１％
4　10YR　2/1　黒色シルト　粘性やや強　しまり中　Ⅴ・Ⅵ層ブロック４％



1号大溝跡（h−h′）
1　10YR　2/1　黒色シルト　粘性・しまり共やや弱　白色パミスφ３～５㎜、３％
2　2.5Y　4/3　オリーブ褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅴ層ブロック筋状に15%
3　２と同質　Ⅴ層ブロック20%　粘性・しまり共弱
4　２と同質　Ⅴ層ブロック５％　粘性・しまり共弱
5　２と同質　Ⅳ層（10YR 8/1灰白）15%　粘性・しまり共弱
6　２と同質　Ⅳ層15%　Ⅴ層10%　粘性・しまり共弱

0　1：60　2m
※平面図は第32図に掲載

第36図　１号大溝跡

〔埋土〕確認できた埋土は、地山（Ⅴ層）ブロックを含む黒褐色土である。
〔時期〕出土遺物を欠くが、館全体の年代観から、中世後期16世紀に属するものと思われる。

１号土塁（第34図、写真図版26）

〔位置・検出状況〕９Ｌグリッドでごく一部分を検出した。２号堀跡と３号堀跡の間にあり、表土直下で黒色土の高まりとして確認された。
〔重複関係〕確認できた部分では、他の遺構とは重複していない。
〔規模・形態・方向〕平面として検出できた残存部分は、９Ｌグリッド付近のみである。表土除去の際、当該部分で黒色土の高まりを確認し、断面で土塁痕跡と認定した。断面で確認できる先端部分から堀底までの深さ（垂直塁壁高）は約2.0m、土塁積み土の底面幅3.8mである。
〔普請〕当土塁はⅢ層下位面に構築されており、にぶい黄褐色土・灰黄褐色土・黒褐色土が版築様となっている。黒褐色土は堅く締まっているが、その他は全般的にしまり弱く、突き固めた様子がない。これら構築土はⅢ～Ⅴ層起源であり、東に隣接する３号堀跡の掘り上げ土である可能性が高い。
〔付属施設〕検出されていない。
〔埋土〕埋土は薄く、現表土層に被覆されるのみである。
〔時期〕３号堀跡と同時期に存在したものと捉えられ、中世後期16世紀に属すると思われる。

（千葉正彦）

１号門跡？（第38図）

〔位置・検出状況〕調査区西側、３Ｕ・Ｖグリッドに位置する。現況で３号平坦地の南西側で確認され、奥の山林につづく下り緩斜面に位置している。

〔重複関係〕１号竪穴状遺構と重複し、これを切る。

〔規模〕径61×80cm・深さ67.2cm（ｐｐ４）、径57×76cm・深さ79.5cm（ｐｐ５）の柱穴が計２個確認されたもので、後に門跡の可能性を想定したものである。２個の柱穴はほぼ東西方向に位置しており、柱穴間の距離は130cmほどを測る。

〔性格〕広範囲な調査を行っていないため、詳細は不明であるが、本遺構の位置する３号平坦地（帯曲輪）はほどなく南側の調査区外に至って一旦緩やかに下り、その後再び緩やかな上り勾配となり奥の平坦地へつづく。この付近は西側の虎口であったと推定できる地点からやや北側に登った地点にあたり、冠木門などの門柱が建っていた可能性が考えられる。

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡が１棟検出されている。２号平坦地の南西縁辺部に位置するもので、館跡に伴うと考えられるものである。平面図に付してある１尺の寸法は30.3cmとして計算した。また、個別の柱穴規模は表に記載した。柱穴の深さは斜面下位に位置する浅いもので10cmに満たないものがあり、柱穴配列も不足するものが多いことから削平により消失したものが少なからず存在すると考えられ、本来は下屋などの付属施設を伴う可能性がある。

１号掘立柱建物跡（第39図、写真図版27）

〔位置・検出状況〕調査区南西側、２号平坦地の３～７ ｐ～ｓグリッドにかけて位置する。検出面はⅤ～Ⅵ層で、暗褐色～黒褐色の円形プランとして検出した。

〔平面形式〕梁間４間、桁行７間の長方形プランを呈すると考えられる。梁行6.8m（22.44尺）、桁行14.0ｍ（46.2尺）で、面積は952m²（約288.5坪）である。使用した柱穴は29個である。

〔建物方位〕桁行の方向はＮ～31°～Ｅである。

〔柱間寸法〕梁桁の柱間は170cm（5.61尺）である。桁桁の柱間は200cm（6.6尺）、220cm（7.26尺）を多用する。

〔付属施設〕なし

遺物（写真図版41）

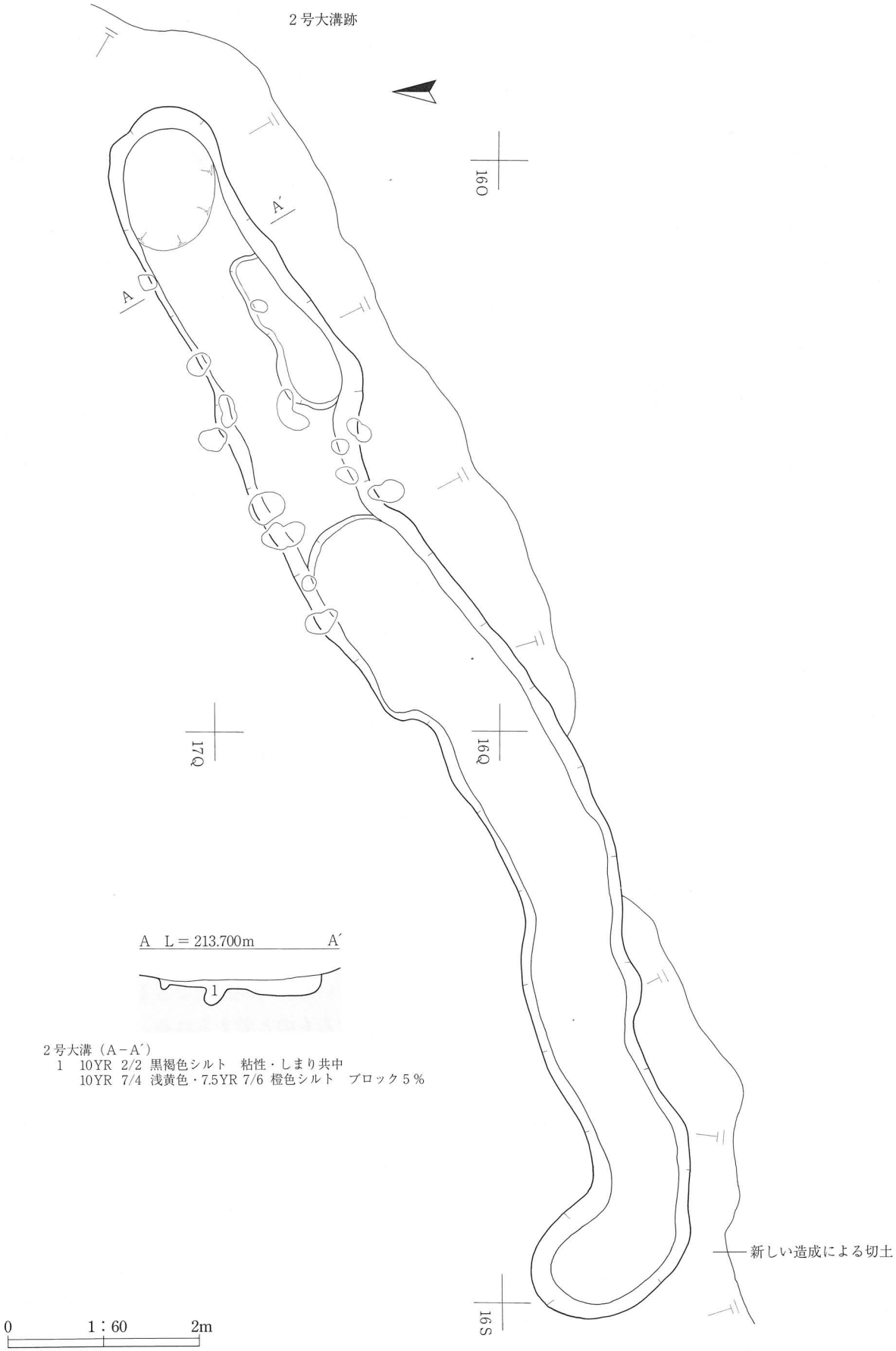
自然遺物としてｐｐ433から、動物遺存体（貝殻）が出土している。時期決定できるような遺物は出土していないが、埋土の状況などから判断して中世後期に属するものと考えられる。

竪穴建物跡

竪穴建物跡としたものは地面を方形に掘り窪めて床とした建物跡のうち、床面に規則的な柱配置を持つものを扱った。ただし、２号・６号・８号は柱穴をもつもののやや不規則であり、竪穴状遺構に分類されるべきものとも考えられるが、便宜上こちらに含めて報告する。

竪穴建物跡は２・４号平坦地縁辺部を中心として９棟が検出されている。うち４棟は３号堀跡の埋め立て跡地に造られており、縄張り変更後に構築されたものである事が判明した。

１号竪穴建物跡（第40図、写真図版28）

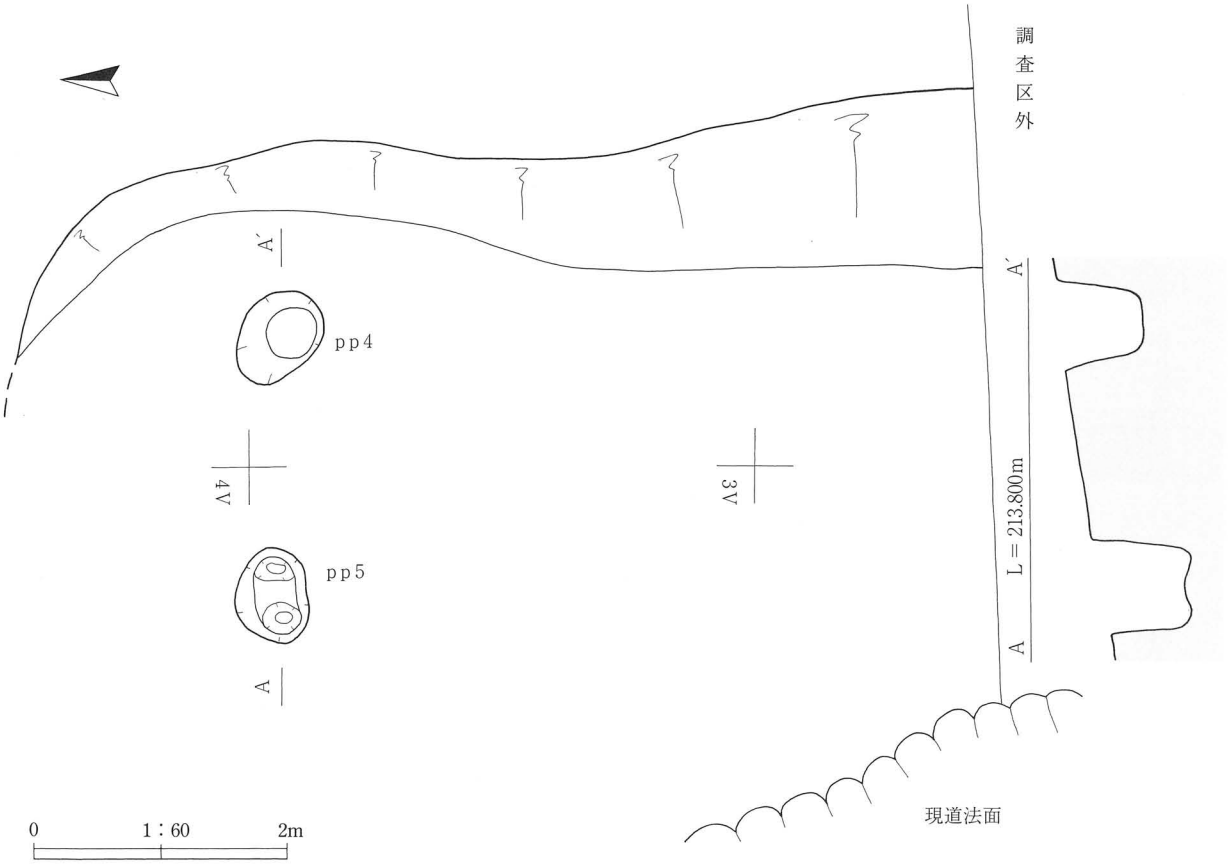

2号大溝跡
16O
A
A´
17Q
16Q
16S
A L＝213.700m A´
1
2号大溝（A－A´）
1 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共中
10YR 7/4 浅黄色・7.5YR 7/6 橙色シルト ブロック5％
新しい造成による切土
0 1：60 2m

第37図 2号大溝跡

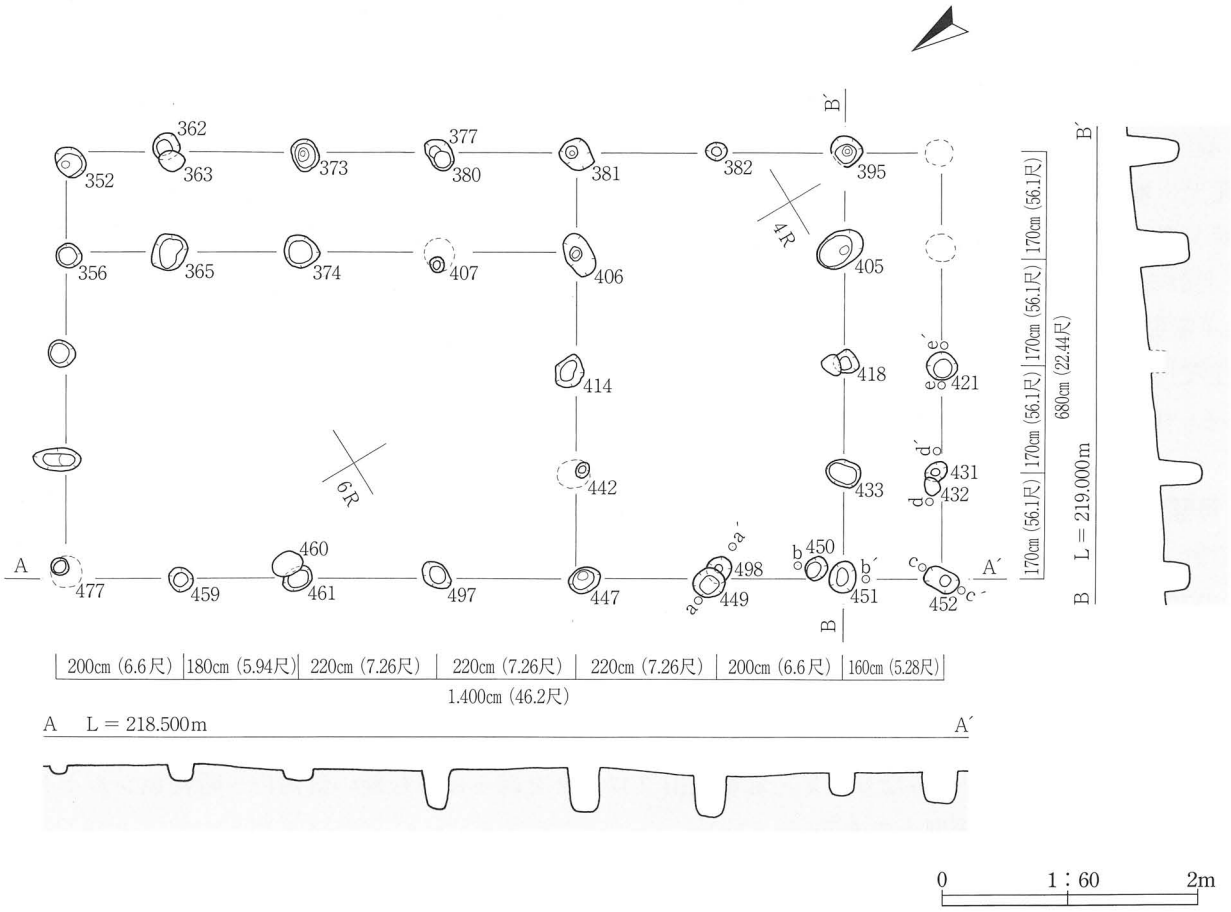
〔位置・検出状況〕調査区北西側、12～13Ｓグリッドに位置する。Ｖ層下～Ⅵ層上面で黒褐色のプランとして検出した。２号平坦地の北側縁辺部に位置する。北側は削平を受け、残存状況は不良である。
〔重複関係〕北側隅において31号土坑と重複し、これを切る。
〔規模・平面形〕南東辺3.2m、南西辺2.8m、北東辺3.1mの方形を呈する。南西・北東辺は残存値である。斜面下位にあたる北西側では壁・床を確認できていない。
〔埋土・堆積状況〕７層からなり、Ｖ層地山ブロックを疎らに含む黒～暗褐シルト主体で構成される。
〔壁・床面〕Ｖ～Ⅵ層を掘り込み壁・床としている。残存する壁高は南東側で36cmあり、外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦で、しまりは特にない。また、中央部を主体として黒褐色～暗褐色シルトによる貼床が施されるが、硬化面は特に認められない。
〔柱穴〕壁際を巡るようにｐｐ１～ｐｐ12の12個を検出した。削平により、北西辺の柱穴のみ未検出である。規模は径13.5～(38)cm、深さ23.3～78.6cmを測る。

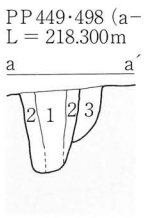
２号竪穴建物跡（第40図、写真図版28）

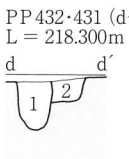
〔位置・検出状況〕調査区北西側、13Ｔグリッドに位置する。Ｖ層下位～Ⅵ層上面で鈍い黄褐～暗褐色のプランとして検出した。２号平坦地の北側縁辺部に位置する。南側を除く殆どは現代の地形改変時の掘削により失われ、残存状況は不良である。
〔規模・平面形〕南辺は残存値で4.15mを測る。平面形は残存部から推定して方形基調を呈すると思われる。
〔埋土・堆積状況〕３層からなり、Ｖ・Ⅵ層地山ブロックを疎らに含む鈍い黄褐色～暗褐色シルトを主体とする。３層は貼床埋土である。
〔壁・床面〕Ｖ・Ⅵ層を掘り込み壁・床としている。残存する壁高は南側で22cmあり、ほぼ直立して

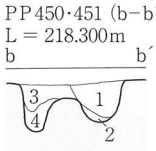


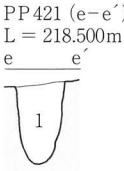
第38図　１号門跡？

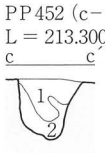












1号掘立柱建物跡

PP449・498（a−a′）
1　10YR 4/1 褐灰色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅵ層ブロック2％
　　炭化物ブロック3％
2　10YR 5/2 灰黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅴ層小ブロック1％
　　Ⅵ層小ブロック5％
3　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅵ層大ブロック5％

PP450・451（b−b′）
1　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共やや弱　Ⅵ層小ブロック2％
2　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅵ層ブロック3％
3　10YR 5/2 灰黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅴ層小ブロック1％
　　Ⅵ層小ブロック5％
4　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅵ層ブロック2％

PP452（c−c′）
1　10YR 5/2 灰黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅴ層小ブロック1％
　　Ⅵ層小ブロック5％
2　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅵ層ブロック3％

PP432・431（d−d′）
1　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共中　Ⅴ層小ブロック3％
　　Ⅵ層小ブロック2％
2　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅵ層ブロック3％

PP421（e−e′）
1　10YR 5/3 鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共中　Ⅵ層ブロック20％
　　炭化物ブロック2％

0　1：60　2m

第39図　1号掘立柱建物跡

立ち上がる。床面は検出した範囲でほぼ平坦で全体的に貼床が施されるが、特にしまりはない。
〔柱穴〕壁際に沿ってｐｐ１～ｐｐ４の４個を検出した。柱穴の規模は径13～34㎝、深さ15.2～81㎝を測る。

３号竪穴建物跡（第41図、写真図版29）

〔位置・検出状況〕調査区中央部北寄り、15～16 Ｍ～Ｎグリッドに位置する。３号堀跡精査中に、堀幅をやや上回る鈍い黄橙色シルトのプランとして検出した。２号平坦地の北側縁辺部に位置する。
〔重複関係〕３号堀跡を人為的に埋戻した跡地に造られている。３号堀跡と南北辺の長さをほぼ同じくして重複し、これを切る。また南半部で４号竪穴建物跡と重複し、これを切る。
〔規模・平面形〕東辺2.0ｍ、西辺1.98ｍ、南辺2.26ｍ、北辺2.6ｍの方形を呈する。
〔埋土・堆積状況〕13層からなり、Ⅴ・Ⅵ層地山ブロックを疎らに含む鈍い黄橙～暗褐色シルト主体で構成される。自然堆積と思われる。
〔壁・床面〕上位は３号堀跡埋戻し土、下位はⅤ・Ⅵ層を掘り込みそれぞれ壁・床としている。残存する壁高は東側で48㎝、西側で30㎝、南側（西寄り）41.8㎝、北側で3.4㎝あり、それぞれ外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦で中央部に３号堀跡埋戻しの際の貼床が施されるが、特に締まりは認められない。
〔柱穴〕ｐｐ１～ｐｐ７の７個を検出した。柱穴の規模は径13.5～42㎝、深さ9.5～58.6㎝を測る。

４号竪穴建物跡（第41図、写真図版29）

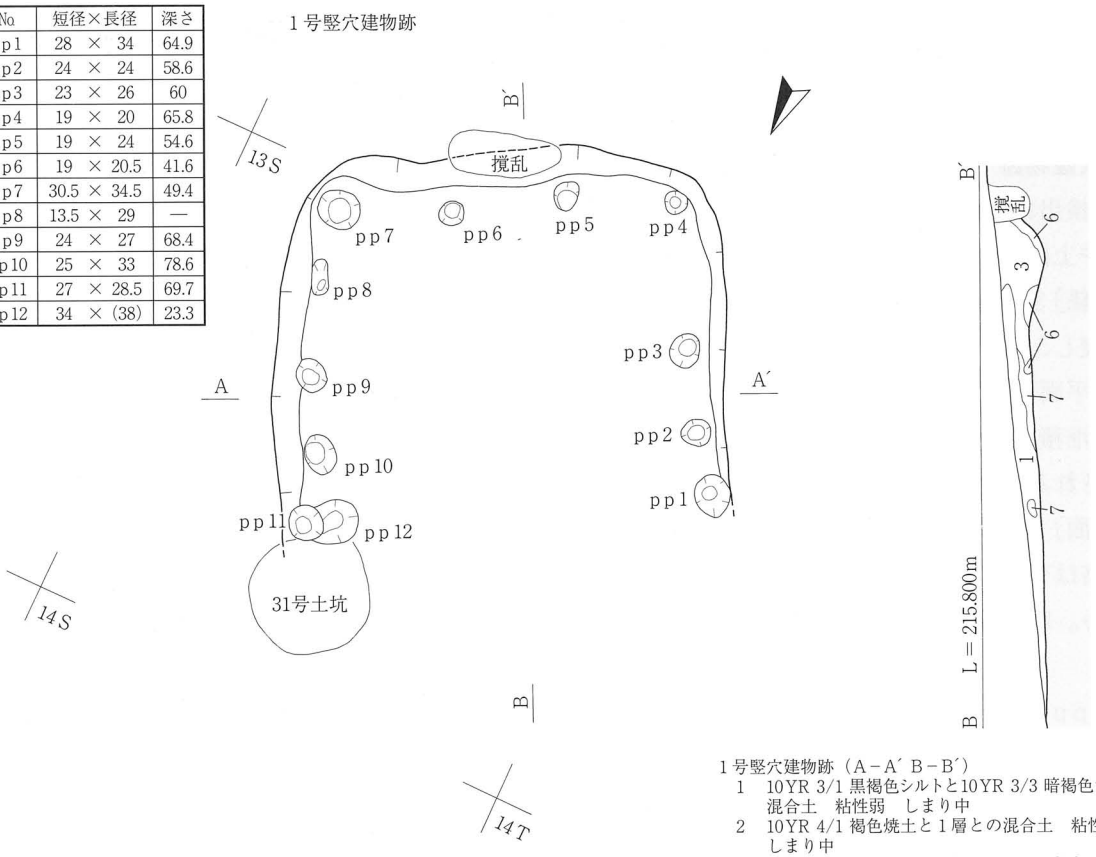
〔位置・検出状況〕調査区中央部北寄り、15～16 Ｍ～Ｎグリッドに位置する。３号堀跡精査中に、堀幅をやや上回る鈍い黄橙色シルトのプランとして検出した。２号平坦地の北側縁辺部に位置する。
〔重複関係〕３号堀跡を人為的に埋戻した跡地に造られている。３号堀跡と南北辺をほぼ同じくして重複し、これを切る。また北半部において３号竪穴建物跡と重複し、これにより切られる。
〔規模・平面形〕規模が判明するのは南辺のみで、2.53ｍを測る。全体の形状としては方形基調を呈する。東辺、西辺は３号竪穴建物跡とほぼプランを同じくして重複しているため不明である。斜面下位にあたる北辺は３号竪穴建物跡に切られ、失われている。
〔埋土・堆積状況〕埋土については断面の記録を欠き、詳細は不明である。当遺構が３号堀跡埋戻し後に掘削されていることから、大きくは３号堀跡埋土と同様、Ⅴ・Ⅵ層地山ブロックを疎らに含む鈍い黄褐～灰黄褐色系の堆積土であったと推測される。
〔壁・床面〕上位は３号堀跡埋戻し土、下位はⅤ・Ⅵ層を掘り込みそれぞれ壁・床としている。残存する壁高は東側で70.4㎝、西側で31.4㎝、南側で87.8㎝あり、それぞれ外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦で、中央部に３号堀跡埋戻しの際の貼床が施される。締まりは特に認められない。
〔柱穴〕ｐｐ８～ｐｐ９の２個を検出した。柱穴の規模は径25～37.5㎝、深さ29～35㎝を測る。

５号竪穴建物跡（第42図、写真図版30）

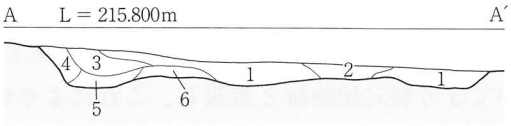
〔位置・検出状況〕調査区中央部北寄り、16～17 Ｍ～Ｎグリッドに位置する。３号堀跡精査中に、堀プランを切る黒褐色シルトの円形プランとして検出した。２号平坦地の北側縁辺部に位置する。
〔重複関係〕３号堀跡を人為的に埋戻した跡地に造られている。また、新規の造成により（新規の普請の際か、現代の切土造成によるものか不明）遺構の北西側が切られ、失われている。
〔規模・平面形〕東辺4.95ｍ、西辺4.0ｍ、南辺3.73ｍ、北辺2.18ｍの方形を呈する。北辺と西辺の値

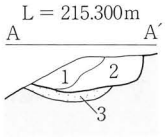
1号竪穴建物跡 (cm)

No	短径×長径	深さ
pp1	28 × 34	64.9
pp2	24 × 24	58.6
pp3	23 × 26	60
pp4	19 × 20	65.8
pp5	19 × 24	54.6
pp6	19 × 20.5	41.6
pp7	30.5 × 34.5	49.4
pp8	13.5 × 29	—
pp9	24 × 27	68.4
pp10	25 × 33	78.6
pp11	27 × 28.5	69.7
pp12	34 × (38)	23.3



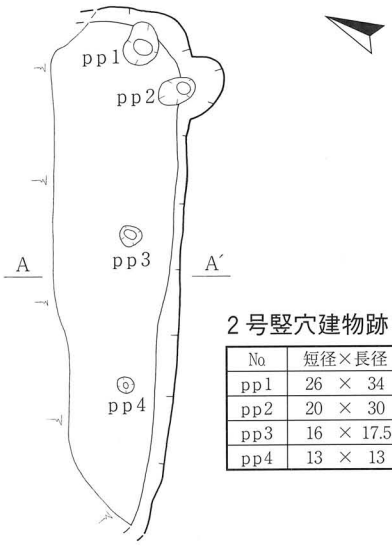
1号竪穴建物跡（A－A′ B－B′）
1　10YR 3/1 黒褐色シルトと10YR 3/3 暗褐色シルトの混合土　粘性弱　しまり中
2　10YR 4/1 褐色焼土と1層との混合土　粘性弱　しまり中
3　10YR 3/1 暗褐色シルトと10YR 4/4 褐色シルトの混合土　粘性弱　しまり中　橙色パミス1％以下
4　3層とV層の混合土　粘性弱　しまり中
5　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性・しまり共弱　V層ブロック2％
6　10YR 3/1 黒褐色シルトとV層ブロックの混合土　粘性弱　しまりやや弱
7　10YR 2/1 黒色シルト　粘性中　しまりやや弱





2号竪穴建物跡（A－A′）
1　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共弱
2　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性・しまり共弱　V層ブロック1％　橙・白色パミス1％以下
3　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　VI層ブロック2％

2号竪穴建物跡



2号竪穴建物跡 (cm)

No	短径×長径	深さ
pp1	26 × 34	81
pp2	20 × 30	15.2
pp3	16 × 17.5	51.6
pp4	13 × 13	45.8

0　1：60　2m

第40図　1・2号竪穴建物跡

は残存値である。

〔埋土・堆積状況〕23層からなり、Ⅴ・Ⅵ層地山ブロックを含む黒褐～灰黄褐色シルト主体で構成される。17層までは自然堆積と思われる。18～23層は本遺構の貼床埋土にあたり、３号堀跡の人為埋戻し層である。

〔壁・床面〕上位は３号堀跡埋戻し土、下位はⅤ・Ⅵ層を掘り込みそれぞれ壁・床としている。残存する壁高は東側で100cm、西側で42cm、南側で71cm、北側で26cm あり、外傾する。床面はほぼ平坦で、締まりは特に認められない。また、ｐｐ11～12間に幅５～11cm、深さ１～８cmの壁溝が短く巡る。

〔柱穴〕壁際に沿ってｐｐ１～ｐｐ14の14個を検出した。柱穴の規模は径19～36cm、深さ25～65cm 前後を示す。

６号竪穴建物跡（第43図、写真図版31）

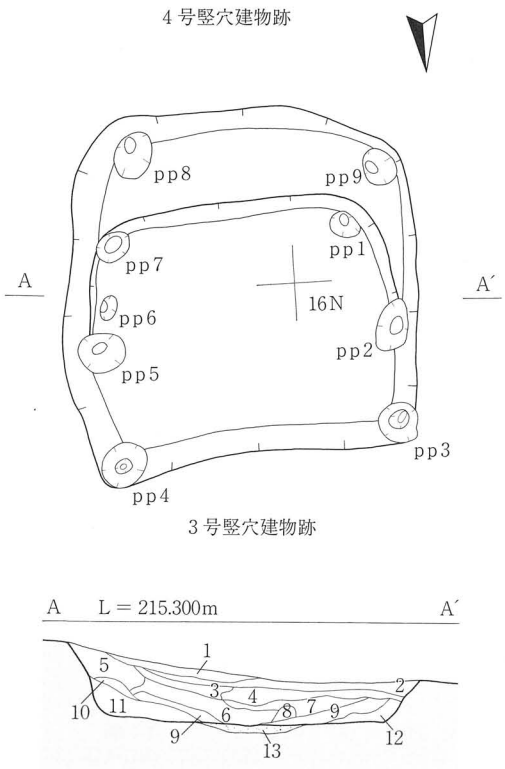
〔位置・検出状況〕調査区北側、17～18Ｎグリッドに位置する。３号堀跡壁面精査時に、竪穴建物跡の西側壁面および壁溝を確認、遺構と認定したものである。４号平坦地の南東隅に位置する。

〔重複関係〕東半部で３号堀跡と重複、これを切る。３号堀跡を人為的に埋戻した跡地に造られる。

〔規模・平面形〕南辺2.82m、西辺3.4mの方形を呈する。西辺の値は残存値である。斜面下位にあたる北辺・および東辺は、遺構と認定する判断が遅れたために失ってしまった。

〔埋土・堆積状況〕10層からなり、Ⅴ・Ⅵ層地山ブロックを含む暗～黒褐色シルト主体で構成される。自然堆積と思われる。10層は遺構の貼床埋土にあたり、３号堀跡の人為埋戻し層である。

〔壁・床面〕上位は３号堀跡埋戻し土、下位はⅤ・Ⅵ層を掘り込み壁面を構築している。残存する壁高は東側で100cm、西側で36cmあり、外傾して立ち上がる。南・西側床面の壁際には幅８～21cm、深さ1.8～８cm の壁溝が廻る。



３・４号竪穴建物跡（cm）

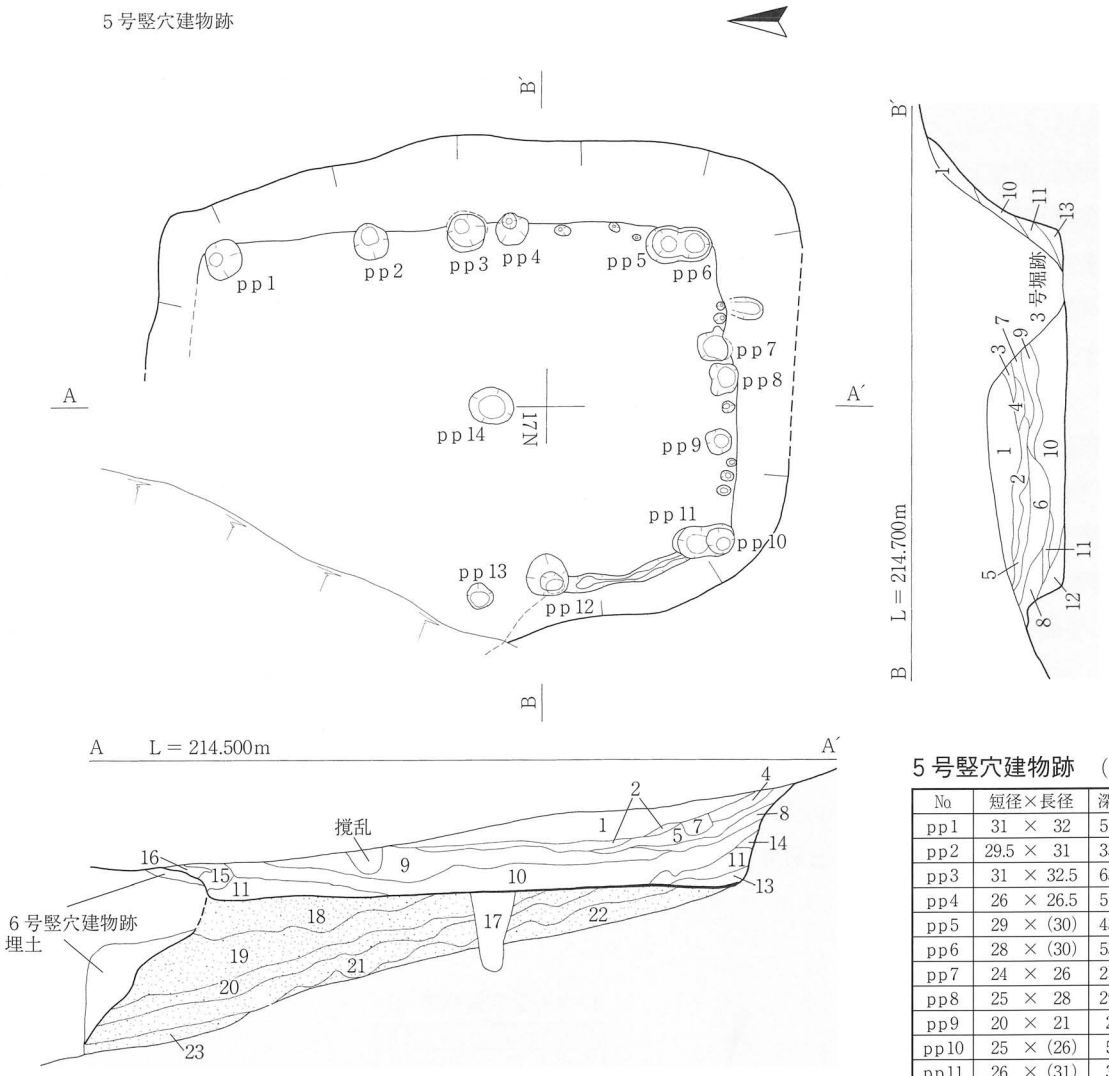
No	短径×長径	深さ
pp1	19 × 25	26
pp2	27 × 42	25.4
pp3	31 × 34	20.9
pp4	32.5 × 41	36.7
pp5	31 × 37.5	21
pp6	13.5 × 19	9.5
pp7	22 × 28	58.6
pp8	28.5 × 37.5	35
pp9	25 × 32	29.1

３・４号竪穴建物跡（Ａ－Ａ′）
1　10YR 6/3 鈍い黄橙色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅵ層ブロック３％
2　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅵ層ブロック・橙色パミス各２％
3　10YR 6/8 明黄褐色（Ⅴ層主体）砂質シルト　粘性弱　しまり中
4　10YR 6/4 鈍い黄橙色砂質シルト　粘性弱　しまり中　Ⅵ層ブロック２％
5　４層と３層の混合土　粘性弱　しまり中
6　10YR 5/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性弱　しまり中　Ⅴ層ブロック１％
7　10YR 7/2 鈍い黄橙色（Ⅵ層主体）粘性弱　しまり中
8　６層と７層の混合土　粘性弱　しまりやや弱
9　10YR 5/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中
10　10YR 5/3 鈍い黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅴ層ブロック１％
11　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅴ層ブロック１％以下
12　10YR 4/3 暗褐色シルト　粘性弱　しまり中　Ⅴ層ブロック１％
13　10YR 5/2 灰黄褐色砂質シルト　粘性弱　しまり中　Ⅴ層ブロック３％

0　1：60　2m

第41図　３・４号竪穴建物跡

5号竪穴建物跡



5号竪穴建物跡 (cm)

No	短径×長径	深さ
pp1	31 × 32	51.9
pp2	29.5 × 31	33.3
pp3	31 × 32.5	63.3
pp4	26 × 26.5	51.2
pp5	29 × (30)	43.7
pp6	28 × (30)	53.3
pp7	24 × 26	25.8
pp8	25 × 28	29.8
pp9	20 × 21	25
pp10	25 × (26)	59
pp11	26 × (31)	38
pp12	32.5 × 33.5	43.8
pp13	19 × 21.5	27.1
pp14	29 × 36	65

5号竪穴建物跡（A－A′ B－B′）
1　10YR 3/2　黒褐色シルト　粘性弱　しまり中　V・Ⅵ層ブロック、橙・白色パミス各1％
2　10YR 2/1　黒色シルト　粘性中　しまりやや弱　V・Ⅵ層ブロック、橙色パミス1％以下
3　10YR 8/1　灰白色地山（Ⅵ層：人為堆積）粘性・しまり共弱
4　10YR 4/2　灰黄褐色シルト　粘性・しまり共弱
5　10YR 4/3　鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共やや弱　橙・白色パミス共1％以下
6　10YR 4/2　灰黄褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　橙・白色パミス・炭化物粒各1％以下
7　10YR 5/3　鈍い黄褐色シルトと10YR 5/8 黄褐色シルトの混合土 粘性・しまり共中
8　10YR 6/8　明黄褐色地山（V層）と同8/1 灰白地山（Ⅵ層）の混合土　粘性・しまり共弱
9　8に10YR 5/2 灰黄褐色シルトブロック30%　粘性・しまり共弱
10　10YR 5/2　灰黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　V・Ⅵ層小ブロック30%　橙色パミス1％以下
11　10YR 6/2　灰黄褐色シルトと同6/6 明黄褐色シルトの混合土　粘性・しまり共弱　Ⅵ層粒1％
12　10YR 6/6　明黄褐色地山（V層）主体　黒褐色シルト壁際に薄く堆積→壁面崩落三角堆積
13　10YR 4/3　鈍い黄褐色シルトと同3/3 暗褐色シルトの混合土　粘性・しまり共弱
14　10YR 6/6　灰黄褐色地山（V層崩落土）粘性・しまり共弱
15　10と同じだが、混入物の粒径更に細かい
16　5YR 6/6　橙色焼土と17層との混合土　粘性・しまり共弱
17　10YR 5/2　灰黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅵ層小ブロック2％
18　10YR 5/2　灰黄褐色シルト　粘性弱　しまり中　黒褐色ブロック・V・Ⅵ層小ブロック2％
19　10YR 6/4　鈍い黄橙色シルト　粘性弱　しまり中　V・Ⅵ層大ブロック5％
20　10YR 2/3　黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　V・Ⅵ層ブロック、炭化物粒各1％以下
21　10YR 3/4　暗褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　Ⅵ層小ブロック1％
22　10YR 8/1　灰白色地山（汚れたⅥ層）粘性・しまり共弱　V層ブロック1％
23　10YR 5/3　鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅵ層ブロック2％　橙・白色パミス1％以下

0　1：60　2m

第42図　5号竪穴建物跡

〔柱穴〕南・東側の床面壁際に相当する箇所を中心としてｐｐ１～ｐｐ５の５個を検出した。柱穴の規模は径６～15㎝、深さ3.2～20㎝を測る。壁溝中に設けられた小穴の可能性がある。

７号竪穴建物跡（第43図、写真図版32）

〔位置・検出状況〕調査区北側、18Ｏグリッドに位置する。Ⅳ層下位～Ｖ層上面で暗褐色土の広がりとして検出した。４号平坦地の北側縁辺部付近に位置する。

〔規模・平面形〕東辺2.65ｍ、西辺2.17ｍ、南辺2.76ｍの方形を呈する。東・西辺は残存値である。斜面下位にあたる北側は、壁を確認できていない。

〔埋土・堆積状況〕８層からなり、上位と下位で様相が異なる。上位はⅥ層地山ブロックを40～50％程度含む黄褐色シルトがレンズ状に堆積するもので、下位は明黄褐色シルトブロックを疎らに含む黒色土がフラットに堆積する。上位は自然堆積、下位は人為堆積の可能性があり、本来は上下別個の建物跡である可能性もある。

〔壁・床面〕Ｖ・Ⅵ層を掘り込み壁・床としている。残存する壁高は南側で65㎝、東側で54㎝、西側で39.6㎝あり、やや外傾して直線的に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、堅く締まる。斜面上位にあたる南側には幅９～20㎝、深さ1.8～3.3㎝の壁溝が廻る。北側では確認できなかった。

〔柱穴〕壁際に沿ってｐｐ１～ｐｐ10の10個を検出した。柱穴の規模は径９～27.5㎝、深さ4.2～33.6㎝を測る。

８号竪穴建物跡（第44図、写真図版33）

〔位置・検出状況〕調査区北側、17Ｑグリッドに位置する。Ⅳ層下位で暗褐色土の広がりとして検出した。４号平坦地の北側縁辺部に位置し、北西側は調査区域外にかかる。

〔重複関係〕北側において現代の切土造成が行われ、これにより切られる。

〔規模・平面形〕確認できた範囲で南東辺2.05ｍ、南西辺1.02ｍを測る。ともに残存値である。平面形は検出範囲から方形基調を呈すると推測される。

〔埋土・堆積状況〕４層からなり、Ｖ・Ⅵ層地山土を少量含む暗～黒褐色シルトを主体とする。自然堆積と思われる。１・６層は表土・撹乱土である。

〔壁・床面〕Ｖ層を掘り込み壁・床としている。残存する壁高は南側で40㎝、西側で13.5㎝、東側で７㎝あり、やや外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦で、堅く締まる。

〔柱穴〕ｐｐ１～ｐｐ５の５個を検出した。柱穴の規模は径24～60㎝、深さ22.9～71㎝を測る。

９号竪穴建物跡（第44図、写真図版34）

〔位置・検出状況〕調査区北側、17Ｒグリッドに位置する。Ⅳ層下位で暗褐色土の広がりとして検出した。４号平坦地の北側縁辺部に位置し、北西側は調査区域外にかかる。

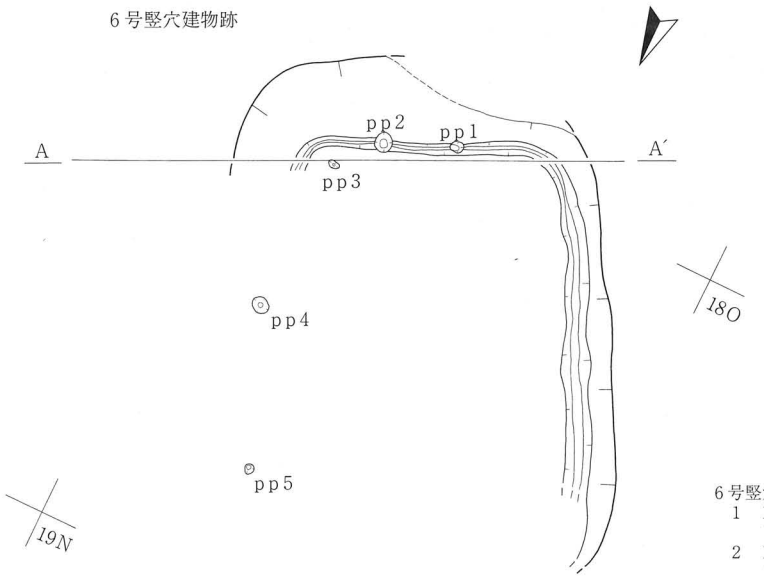
〔規模・平面形〕東辺1.25ｍ、西辺0.4ｍ、南辺2.2ｍを測る。東・西辺は残存値である。平面形は検出範囲において方形を基調とする。

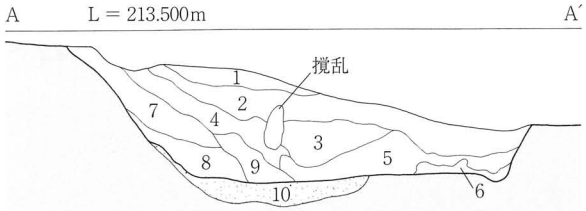
〔埋土・堆積状況〕４層からなり、地山ブロックを疎らに含む暗～黒褐色シルト主体で構成される。１層は表土・撹乱土である。

〔壁・床面〕Ｖ層を掘り込み壁・床としている。残存する壁高は南側で52㎝、東側で27㎝、西側で42㎝あり、直線的に外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦で、堅く締まる。

〔柱穴〕壁際に沿ってｐｐ１～ｐｐ４の４個を検出した。柱穴の規模は径14～19㎝、深さ12.5～23.5㎝を測る。

6号竪穴建物跡



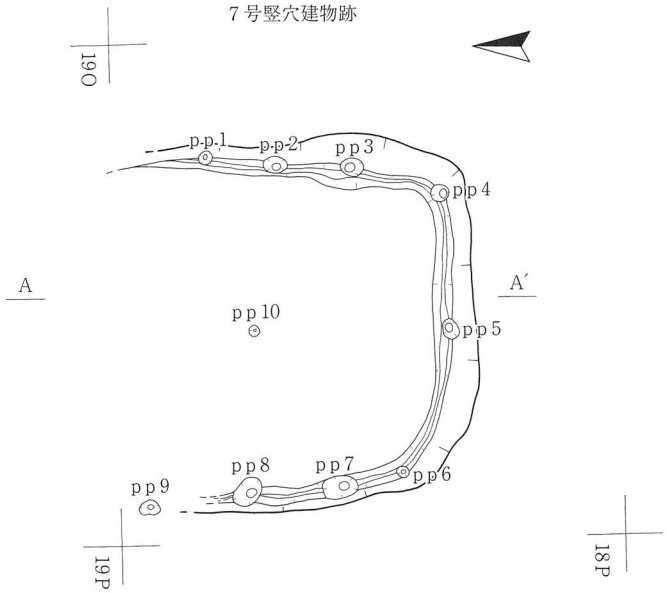


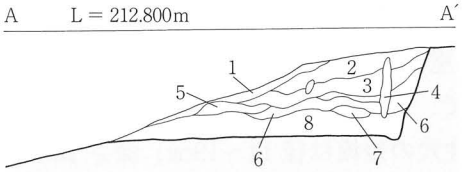
6号竪穴建物跡　(cm)

No	短径×長径	深さ
pp1	9.5 × 11	11
pp2	13.5 × 15	3.2
pp3	6 × 9	13.6
pp4	12.5 × 15	20
pp5	8 × 8.5	14.9

6号竪穴建物跡（A－A′）
1　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性弱　しまりやや強
　V・Ⅵ層小ブロック2％　橙色・白色パミス各1％
2　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中
　V・Ⅵ層中ブロック3％　白色パミス1％以下
3　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共弱
　V・Ⅵ層小～拳大ブロック5％
4　10YR 5/3 鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共弱
　V・Ⅵ層小ブロック5％
5　10YR 2/3 黒褐色シルト　粘性・しまり共やや弱
　V・Ⅵ層小ブロック3％
6　10YR 5/4 鈍い黄褐色砂　粘性・しまり共極弱
7　10YR 6/8 明黄褐色（V層主体）粘性弱　しまり中
　Ⅵ層ブロック3％
8　10YR 5/2 灰黄褐色砂　粘性・しまり共極弱
　V層ブロック1％
9　10YR 5/3 鈍い黄褐色シルトとⅥ層ブロックの混合土
　粘性やや強　しまり強
10　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性・しまり共弱
　(貼床：3号堀跡埋め戻し土)

7号竪穴建物跡





7号竪穴建物跡　(cm)

No	短径×長径	深さ
pp1	10.5 × 12	4.2
pp2	14 × 20	33.6
pp3	15.5 × 19	15.6
pp4	14 × 15	9.2
pp5	13 × 16.5	14.2
pp6	9 × 9	10.8
pp7	18.5 × 27.5	26.2
pp8	18 × 26.5	11.2
pp9	12 × 17	21.7
pp10	9 × 9	19

7号竪穴建物跡（A－A′）
1　7.5YR 3/3 暗褐色砂質シルト　粘性やや弱　しまり中
2　2.5Y 5/4 黄褐色シルト主体（60%）混入物として
　10YR 3/1 黒褐色、4/3 鈍い黄褐色
　5YR 6/8 橙色パミス　2.5Y 8/4 淡黄色(Ⅵ層)を40%程度含む
3　2と同質で、混入物比50%　10YR 7/8 黄橙色砂質シルト
　下位に帯状に入る
4　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性やや強　しまり弱
5　10YR 2/1 黒色シルト　粘性やや強　しまり中
6　10YR 2/1 黒色シルト主体（60%）混入物として10YR 4/3
　鈍い黄褐色、7/6　明黄褐色　シルトブロック40%程度含む
　＊2～6は人為堆積層
7　10YR 6/6 明黄褐色～10YR 8/4 浅黄橙色シルト
　粘性・しまり共やや強
8　10YR 2/1 黒色シルト　粘性・しまり共強
　7層ブロック状に3％

0　1：60　2m

第43図　6・7号竪穴建物跡

竪穴状遺構

切岸状遺構の裾部を中心として７棟が検出されている。内、２・３号平坦地に造られた竪穴状遺構はその後、縄張りの変更によって掘立柱建物跡や門跡？が造られており、これらより遡る時期の建物と考えられる。竪穴状遺構としたものは地面を方形に掘りくぼめて床とした建物跡のうち、便宜上、床面に規則的な柱配置を持たないものを扱っている。

１号竪穴状遺構（第45・46図、写真図版35）

〔位置・検出状況〕調査区南西側、３～６ Ｕ～Ｖグリッドに位置する。Ⅴ層下位～Ⅵ層上面で暗褐色土の広がりとして検出した。３号平坦地南側、２号切岸状遺構の裾部に接するように位置する。西半部は縄張りが変更された際に切土され、残存しない。

〔重複関係〕南辺を２号竪穴状遺構と接するが、両者の新旧関係は不明である。また、西辺南側において１号門跡？掘削時の切土整地と見られる掘り込みによって切られる。

〔規模・平面形〕東辺 12.55m、南辺 1.97m、北辺 3.32mを測る。南・北辺は残存値である。平面形は検出した範囲で長方形を呈する。

〔埋土・堆積状況〕５層からなり、Ⅴ・Ⅵ層地山ブロックを疎らに含む暗褐色シルトを主体とする。１層は盛土整地層である。

〔壁・床面〕Ⅴ層を掘り込み壁・床としている。残存する壁高は東側で 74cm あり、緩く外傾する。床面はほぼ平坦で、特に締まりは認められない。斜面上位にあたる南側には幅 21～30cm、深さ 14cm前後の壁溝が廻る。

〔柱穴・ピット〕ｐｐ１～ｐｐ14の柱穴14個と、Ｐ１のピット１基を検出した。柱穴の規模は径 17.5～100cm、深さ 22～64.6cm、ピットの規模は径 68×71cm、深さ 25.7cmを測る。

２号竪穴状遺構（第46図、写真図版35・36）

〔位置・検出状況〕調査区南西側、２～３ Ｔ～Ｕグリッドに位置する。１号竪穴状遺構の床面精査時に、南方へ連続する一連の平坦面として検出した。３号平坦地南側、２号切岸状遺構の裾部に接するように位置する。西半部は縄張りが変更された際に切土され、残存しない。

〔重複関係〕北辺を１号竪穴状遺構と接するが、両者の新旧関係は不明である。西辺南側において１号門跡？掘削時の切土整地と見られる掘り込みによって切られる。

〔規模・平面形〕東辺 2.92m、南辺 1.44m、北辺 1.69mを測る。すべて残存値である。平面形は検出範囲で隅丸の長方形基調と推測される。

〔埋土・堆積状況〕５層からなり、Ⅴ・Ⅵ層地山ブロックを含む暗褐色シルトを主体とする。１層は盛土整地層である。

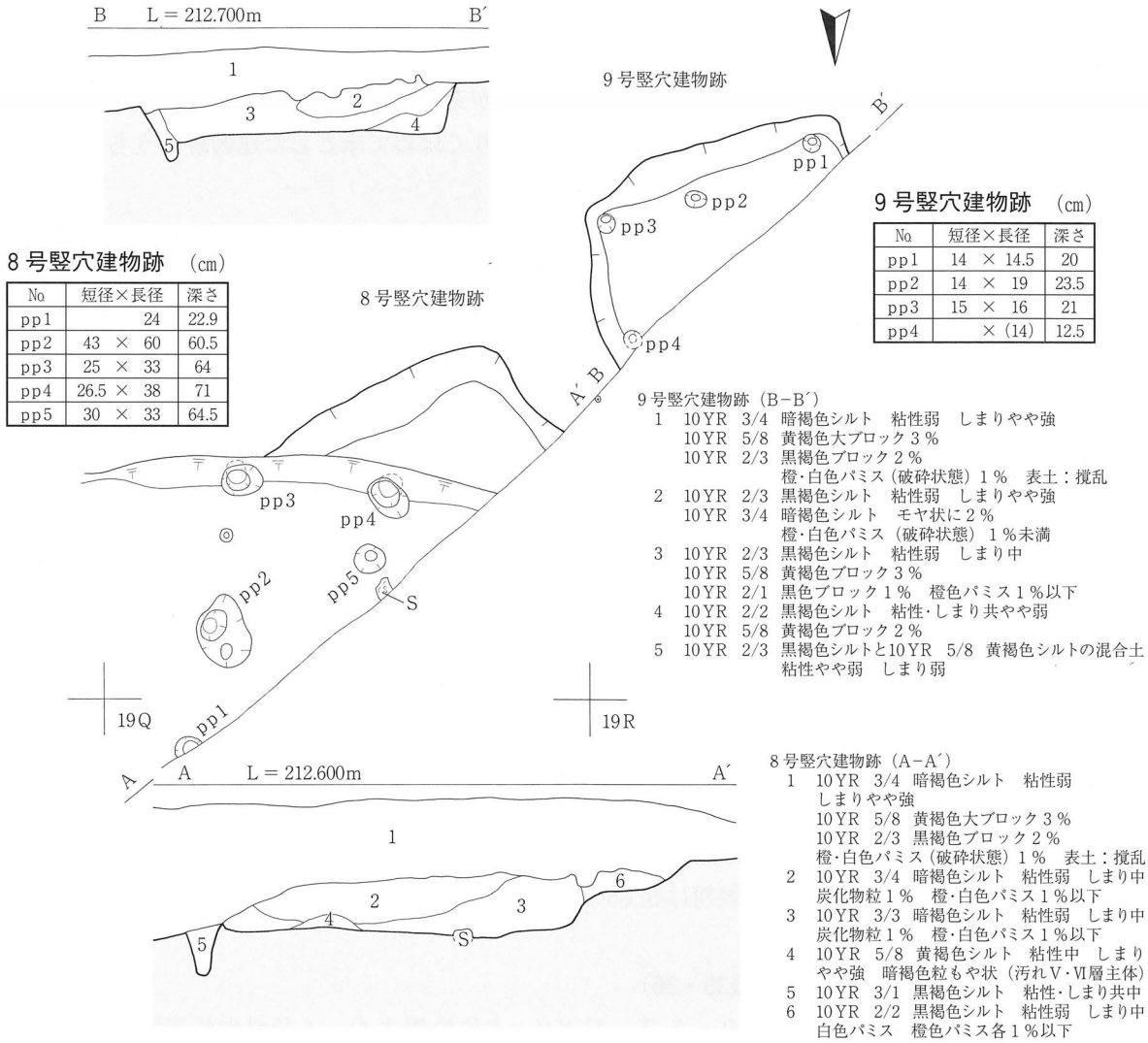
〔壁・床面〕Ⅲ層以下を掘り込み壁・床としている。残存する壁高は南側で 76cm あり、緩やかに外傾する。床面はほぼ平坦で、特に締まりは認められない。

〔柱穴〕ｐｐ１～ｐｐ６の６個を検出した。柱穴の規模は径 18～37cm、深さ 12～46.6cmを測る。

３号竪穴状遺構（第47図、写真図版35・36）

〔位置・検出状況〕調査区西側、５～７Ｖグリッドに位置する。Ⅵ層上面で暗褐色土の溝状プランとして検出した。３号平坦地のほぼ中央に位置する。

〔重複関係〕東辺南側において１号竪穴状遺構と重複し、これを切る。



8号竪穴建物跡　(cm)

No	短径×長径	深さ
pp1	24	22.9
pp2	43 × 60	60.5
pp3	25 × 33	64
pp4	26.5 × 38	71
pp5	30 × 33	64.5

9号竪穴建物跡　(cm)

No	短径×長径	深さ
pp1	14 × 14.5	20
pp2	14 × 19	23.5
pp3	15 × 16	21
pp4	× (14)	12.5

9号竪穴建物跡（B−B′）
1　10YR 3/4 暗褐色シルト　粘性弱　しまりやや強
　　10YR 5/8 黄褐色大ブロック３％
　　10YR 2/3 黒褐色ブロック２％
　　橙･白色パミス（破砕状態）１％　表土：撹乱
2　10YR 2/3 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや強
　　10YR 3/4 暗褐色シルト　モヤ状に２％
　　橙･白色パミス（破砕状態）１％未満
3　10YR 2/3 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中
　　10YR 5/8 黄褐色ブロック３％
　　10YR 2/1 黒色ブロック１％　橙色パミス１％以下
4　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性･しまり共やや弱
　　10YR 5/8 黄褐色ブロック２％
5　10YR 2/3 黒褐色シルトと10YR 5/8 黄褐色シルトの混合土
　　粘性やや弱　しまり弱

8号竪穴建物跡（A−A′）
1　10YR 3/4 暗褐色シルト　粘性弱
　　しまりやや強
　　10YR 5/8 黄褐色大ブロック３％
　　10YR 2/3 黒褐色ブロック２％
　　橙･白色パミス（破砕状態）１％　表土：撹乱
2　10YR 3/4 暗褐色シルト　粘性弱　しまり中
　　炭化物粒１％　橙･白色パミス１％以下
3　10YR 3/3 暗褐色シルト　粘性弱　しまり中
　　炭化物粒１％　橙･白色パミス１％以下
4　10YR 5/8 黄褐色シルト　粘性中　しまり
　　やや強　暗褐色粒もや状（汚れⅤ･Ⅵ層主体）
5　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性･しまり共中
6　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまり中
　　白色パミス　橙色パミス各１％以下

第44図　8・9号竪穴建物跡　0　1：60　2m

〔規模･平面形〕検出した壁溝の範囲は残存値で7.27mである。検出した時点で壁溝しか残存せず、建物自体の規模・平面形は不明である。

〔埋土・堆積状況〕暗褐色シルトを主体とするものである。

〔壁･床面〕Ⅴ層を掘り込んでいる。床面は新規の普請（縄張り変更）の際に削平された可能性があり、殆ど残存しない。検出状況では東側に向かい微かな下り勾配となっている。斜面上位にあたる東側には幅18～37cm、深さ５～17cmの壁溝が廻る。

〔柱穴〕ｐｐ18～ｐｐ20の３個を検出した。柱穴の規模は径19.5～69cm、深さ3.6～43.1cmを測る。

４号竪穴状遺構（第47図、写真図版35・36）

〔位置・検出状況〕調査区西側、５～７Ｖグリッドに位置する。Ⅵ層上面で暗褐色の溝状プランとして検出した。３号平坦地ほぼ中央に位置する。

〔重複関係〕東辺南側において１号竪穴状遺構と重複し、これを切る。

〔規模･平面形〕検出した壁溝の範囲は残存値で7.22mである。検出した時点で壁溝しか残存せず、建物自体の規模・平面形は不明である。
〔埋土・堆積状況〕暗褐色シルトを主体とする。
〔壁･床面〕Ⅴ層を掘り込んでいる。床面は新規の普請（縄張り変更）の際に削平された可能性があり、殆ど残存しない。検出状況では東側に向かい微かな下り勾配となっている。斜面上位にあたる東側には幅10～26cm、深さ３～11cmの壁溝が廻る。
〔柱穴〕床面プランに相当する範囲において、本遺構に伴う可能性のあるｐｐ１～ｐｐ17の17個を検出した。柱穴の規模は径15～51cm、深さ4.1～56.2cmを測る。

５号竪穴状遺構（第48図、写真図版36）

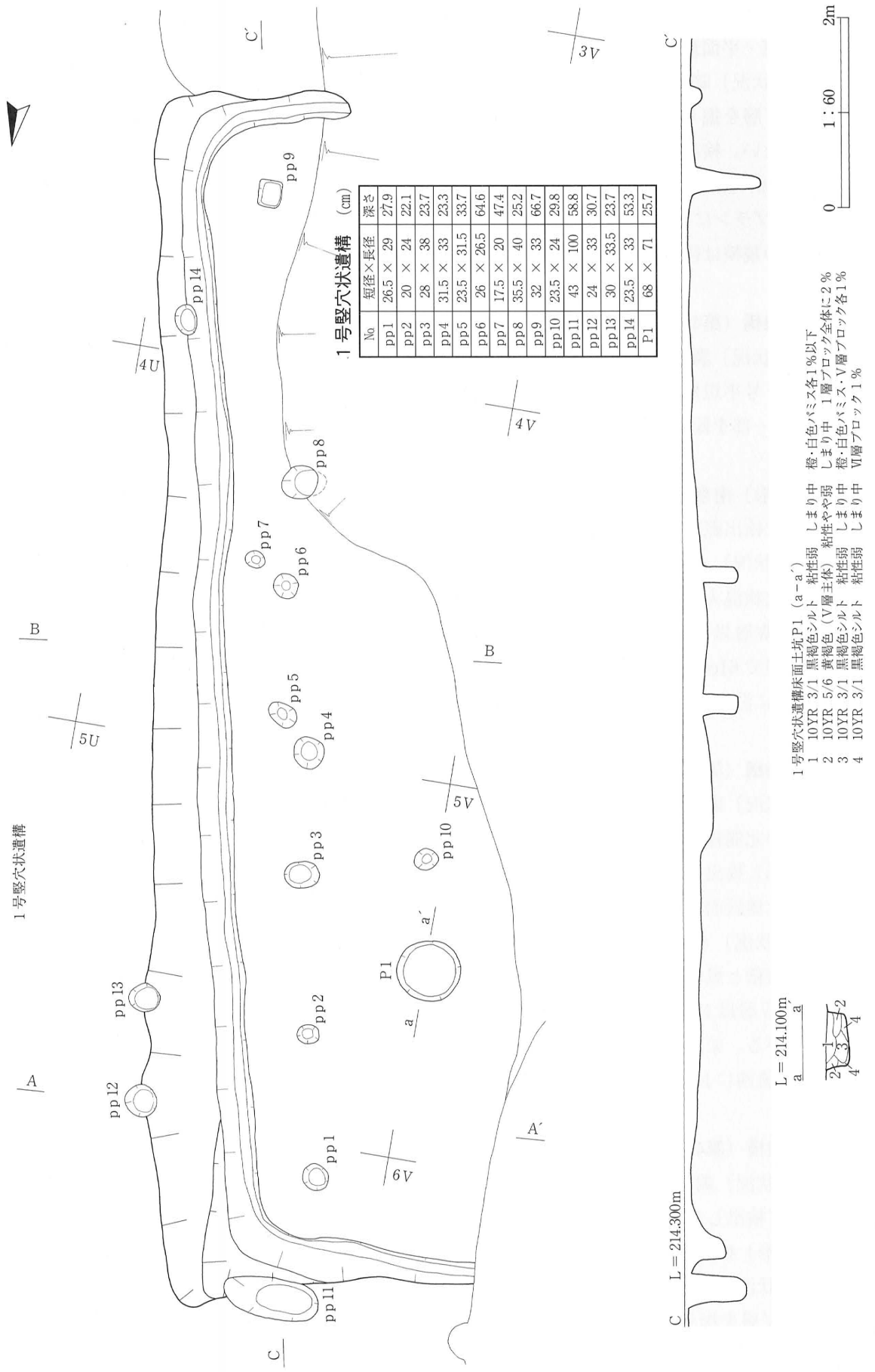
〔位置・検出状況〕調査区南側、５Ｐグリッドに位置する。１号切岸状遺構の盛土層掘削時に存在を確認した。２号平坦地南側、１号切岸状遺構の裾部に接するように位置する。
〔重複関係〕一部を除き、遺構の殆どが１号切岸状遺構の普請（縄張り変更）の際に切土され、失われている。
〔規模・平面形〕南東隅のみを検出したもので、東辺2.5m、南辺1.25mを測る。いずれも残存値である。平面形は検出範囲で方形基調を呈する。
〔埋土・堆積状況〕４層からなり、Ⅴ・Ⅵ層地山ブロックを含む黒～灰黄褐色シルト主体で構成される１層に炭化状混入物を１％含む。
〔壁・床面〕Ⅳ層以下を掘り込み壁・床としている。床面検出した範囲でほぼ平坦である。残存する壁高は南東側で61cmあり、直立気味に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、やや締まる。
〔柱穴〕壁際に沿ってｐｐ１の１個を検出した。柱穴の規模は径43×46cm、深さ54cmを測る。

６号竪穴状遺構（第48図、写真図版36）

〔位置･検出状況〕調査区北側、14Ｑグリッドに位置する。Ⅵ層上面で暗褐色のプランとして検出した。２号平坦地の北側縁辺部に位置する。
〔規模･平面形〕検出した範囲で東辺2.83m、南辺2.97mを測る。平面形は隅丸方形基調を呈すると推測される。北側斜面下位は現代の切土造成が加えられ、遺構の西～北側は失われている。
〔埋土・堆積状況〕６層からなり、Ⅴ・Ⅵ層地山ブロックを含む黒褐～鈍い明黄褐色シルトを主体とする。自然堆積と思われる。
〔壁・床面〕Ⅳ層以下を掘り込み壁・床としている。残存する壁高は南側で130cmあり、やや外傾しながら立ち上がる。床面はほぼ平坦で、やや締まる。
〔柱穴〕調査範囲においては未検出である。

７号竪穴状遺構（第49図、写真図版36）

〔位置・検出状況〕調査区北側、16～17 Ｒ・Ｓグリッドに位置する。Ⅴ層下位～Ⅵ層上面で暗褐色のプランとして検出した。４号平坦地の北側縁辺部に位置し、北西側は調査区域外にかかる。
〔規模・平面形〕検出した範囲で東辺1.89m、南辺2.56mを測る。平面形は方形基調と推測される。
〔埋土・堆積状況〕２層からなり、黒褐色シルトを主体とする。１層は表土および撹乱土である。
〔壁・床面〕Ⅴ層を掘り込み壁・床としている。壁は表土・撹乱土を除去した時点で既に失われており、辛うじて調査区際の断面で残存部が認められた。これによると南側で15cmあり、外傾して立ち上がる。

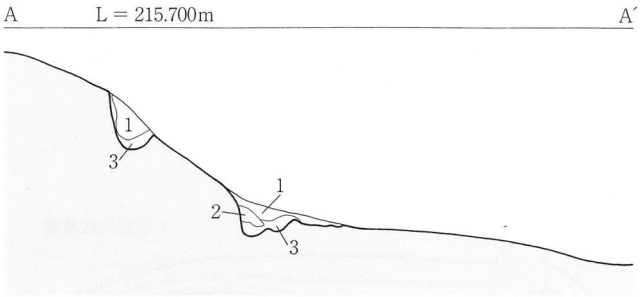


1号竪穴状遺構（cm）

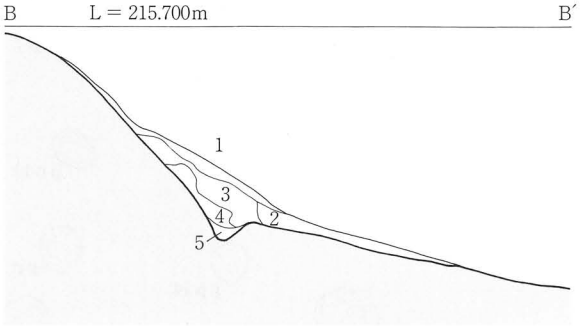
No.	短径×長径	深さ
pp1	26.5 × 29	27.9
pp2	20 × 24	22.1
pp3	28 × 38	23.7
pp4	31.5 × 33	23.3
pp5	23.5 × 31.5	33.7
pp6	26 × 26.5	64.6
pp7	17.5 × 20	47.4
pp8	35.5 × 40	25.2
pp9	32 × 33	66.7
pp10	23.5 × 24	29.8
pp11	43 × 100	58.8
pp12	24 × 33	30.7
pp13	30 × 33.5	23.7
pp14	23.5 × 33	53.3
P1	68 × 71	25.7

第45図　1号竪穴状遺構(1)

1号竪穴状遺構

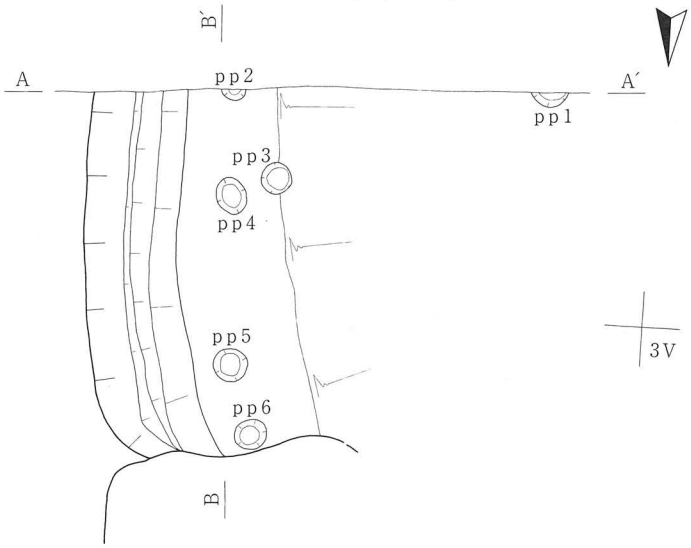


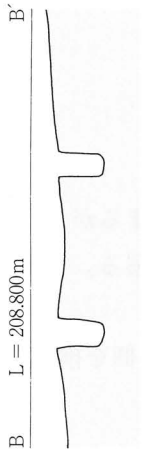
1号竪穴状遺構（A－A′）
1　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱
　Ⅵ層ブロック2％
2　10YR 8/1 灰白色（Ⅵ層主体）粘性弱　しまり中
3　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘・しまり共やや弱

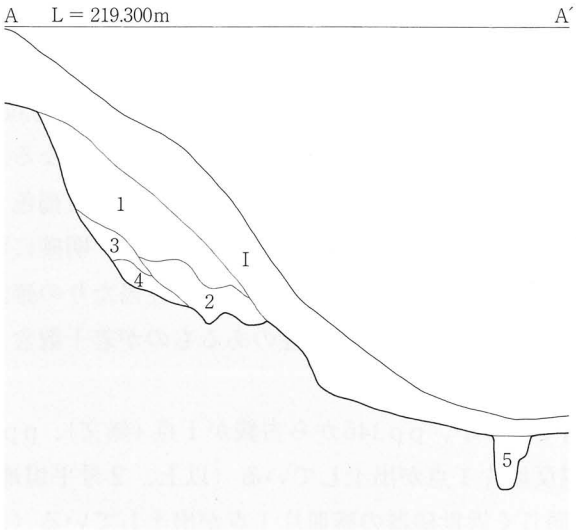


1号竪穴状遺構（B－B′）
1　10YR 5/1 褐灰色シルト　粘性・しまり共弱
　Ⅵ層大ブロック 10%　（盛土整地層）
2　10YR 4/1 褐灰色シルト　粘性弱　しまりやや弱
　Ⅴ層粒全体に2％
3　10YR 4/1 褐灰色シルト　粘性・しまり共弱
4　10YR 3/1 黒褐色シルト　粘性・しまり共弱
　白色パミス1％以下
5　10YR 4/1 褐灰色シルト　粘性・しまり共弱
　Ⅳ層小ブロック1％

2号竪穴状遺構







2号竪穴状遺構　(cm)

No	短径×長径	深さ
pp1	(29)	46.6
pp2	(18)	12
pp3	24 × 25	—
pp4	24.5 × 30	—
pp5	37 × 41	32.8
pp6	24 × 26	26.5

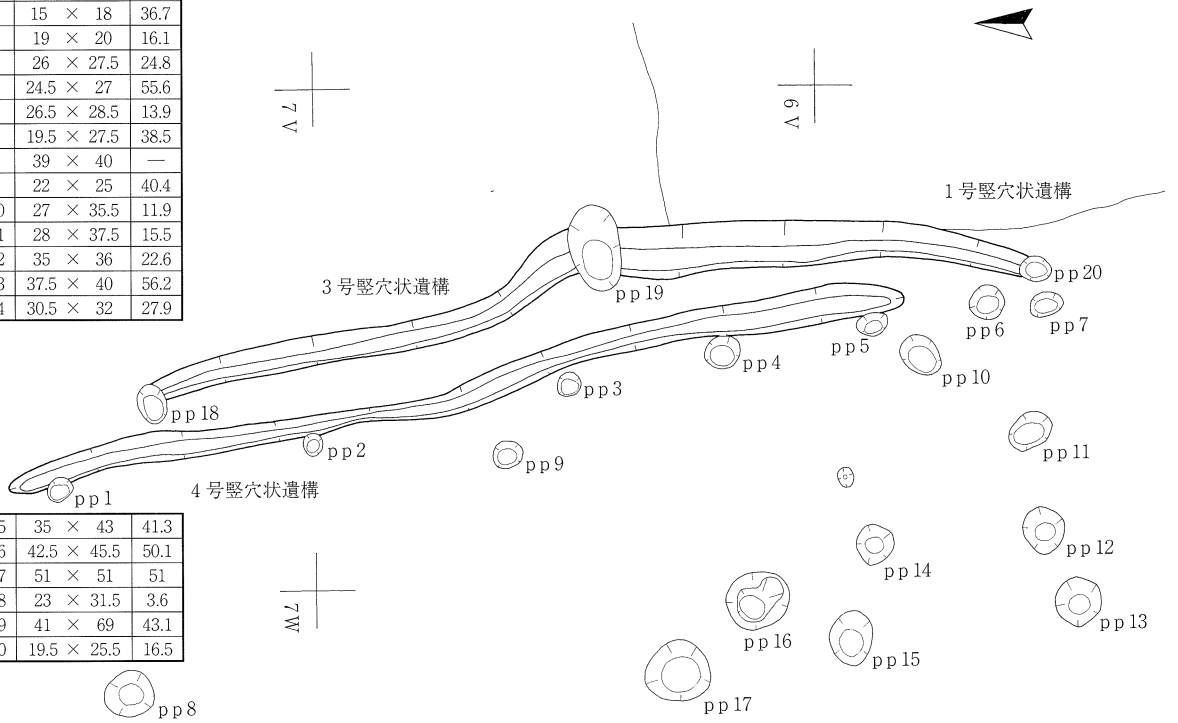
2号竪穴状遺構（A－A′）
1　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅵ層大ブロック 15%
　（盛土整地層）
2　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　Ⅴ層粒全体に5％
3　3層と同質　Ⅴ層ブロック5％　粘性・しまり共弱
4　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　白色パミス1％
5　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅵ層小ブロック1％以下
　（P1埋土）

0　1：60　2m

第46図　1号竪穴状遺構(2)・2号竪穴状遺構

3・4号竪穴状遺構（cm）

No	短径×長径	深さ
pp1	18 × 21	4.1
pp2	15 × 18	36.7
pp3	19 × 20	16.1
pp4	26 × 27.5	24.8
pp5	24.5 × 27	55.6
pp6	26.5 × 28.5	13.9
pp7	19.5 × 27.5	38.5
pp8	39 × 40	—
pp9	22 × 25	40.4
pp10	27 × 35.5	11.9
pp11	28 × 37.5	15.5
pp12	35 × 36	22.6
pp13	37.5 × 40	56.2
pp14	30.5 × 32	27.9
pp15	35 × 43	41.3
pp16	42.5 × 45.5	50.1
pp17	51 × 51	51
pp18	23 × 31.5	3.6
pp19	41 × 69	43.1
pp20	19.5 × 25.5	16.5



第47図　3・4号竪穴状遺構

0　1：60　2m

床面はほぼ平坦でやや締まるが、貼床は認められない。斜面上位にあたる南側には幅10～24cm、深さ3～13cmの壁溝が2重に廻る。このことから、プランをほぼ同じくする別個の竪穴状遺構が重複している可能性もある。

〔柱穴〕pp1～pp3の3個を検出した。柱穴の規模は径22.5～45cm、深さ14～28.5cmを測る。

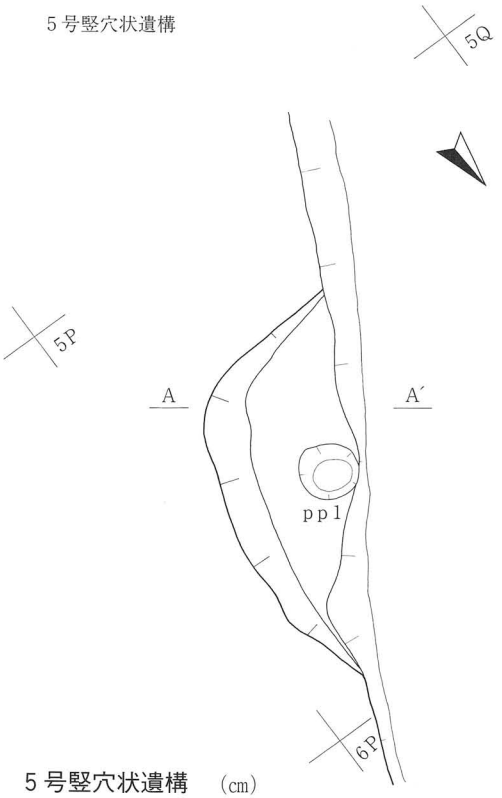
4．時期不明の検出遺構

柱穴状小ピット群（第50～53図）

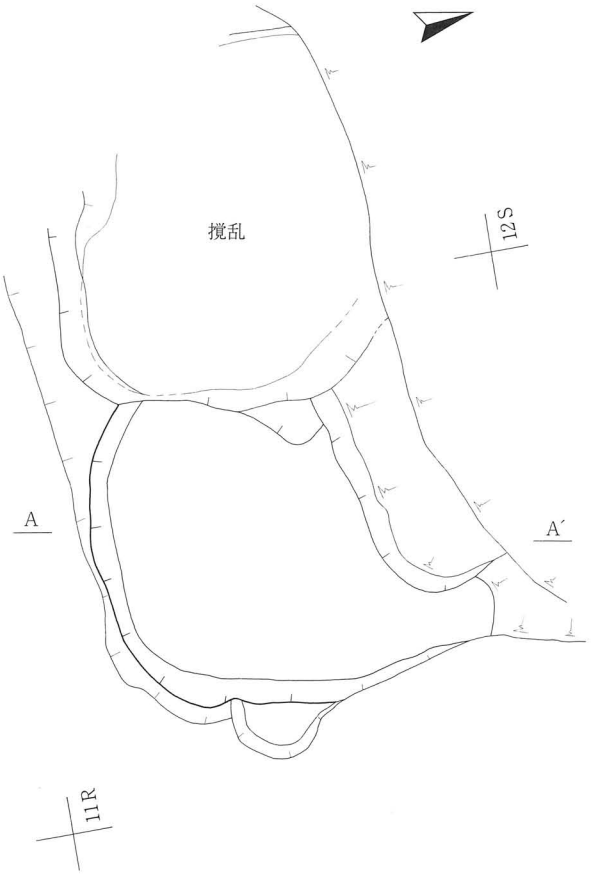
柱穴状ピット群は1～4号平坦地から合計595個が検出されている。個々のピットの計測値については、第3～7表を参照されたい。平面形は円形を基調とし、規模は径13～85cm、深さ4～113.6cmの幅におさまる。柱穴規模は立地条件による数値のばらつきが大きく、斜面下位のものが浅くなるが、同じ等高線付近の柱穴底面のレベルはほぼ近似する範囲に収まるようである。埋土は鈍い黄褐色～灰黄褐色、褐灰色シルト主体で構成され、層中にⅤ・Ⅵ層ブロックが混入するものが多い。明確に建物跡を構成するような配置が確認できなかったため柱穴状ピット群に含めているが、柱当たりの確認できる柱穴も一部存在することから、本来は掘立柱建物跡を構成する可能性のあるものが若干数含まれると見られる。

〔出土遺物〕個々の柱穴の帰属時期など詳細は不明であるが、pp146から古銭が1点（無文）、pp197から砥石が1点、pp205埋土から16世紀代の白磁反皿片1点が出土している（以上、2号平坦地）。また、pp65から近世磁器碗片1点、pp78から同じく近世磁器の碗皿片1点が出土している（以上、

5号竪穴状遺構

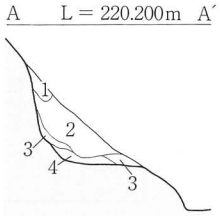


6号竪穴状遺構

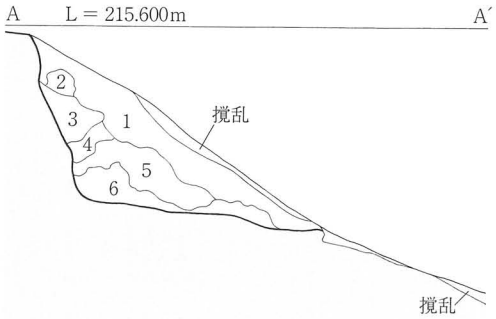


5号竪穴状遺構 (cm)

No	短径×長径	深さ
pp1	43 × 46	54



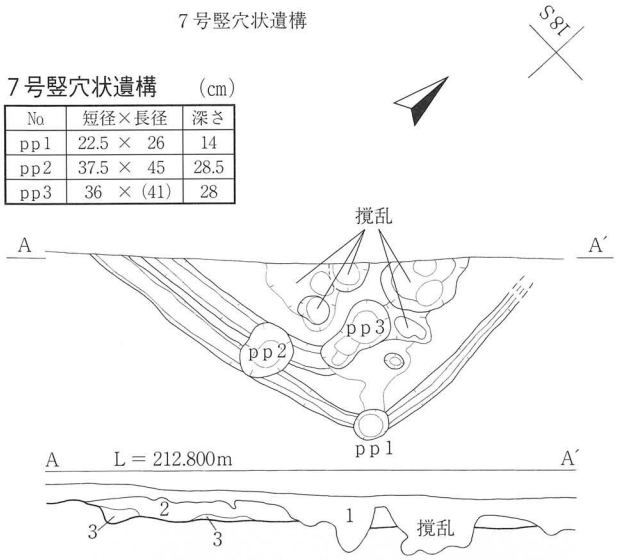
5号竪穴状遺構（A－A′）
1　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅴ・Ⅵ層ブロック各2％
　　炭化状ブロック1％
2　10YR 2/2 黒褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅴ・Ⅵ層ブロック各1％
3　10YR 4/2 灰黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅵ層ブロック1％
4　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅴ層ブロック3％
　　Ⅵ層ブロック5％



6号竪穴状遺構（A－A′）
1　10YR 3/2 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや弱　Ⅴ層ブロック・炭化物粒1％
2　10YR 6/4 鈍い黄橙色（汚れⅤ層崩落土）　粘性・しまり共弱
3　10YR 6/6 明黄褐色（汚れⅤ層崩落土）粘性・しまり共弱
4　1層と3層の混合土　粘性・しまり共弱
5　10YR 6/8 明黄褐色（汚れⅤ層崩落土）粘性・しまり共弱
6　10YR 7/4 鈍い黄橙色（汚れⅤ層崩落土）粘性弱　しまり中

0　1：60　2m

第48図　5・6号竪穴状遺構



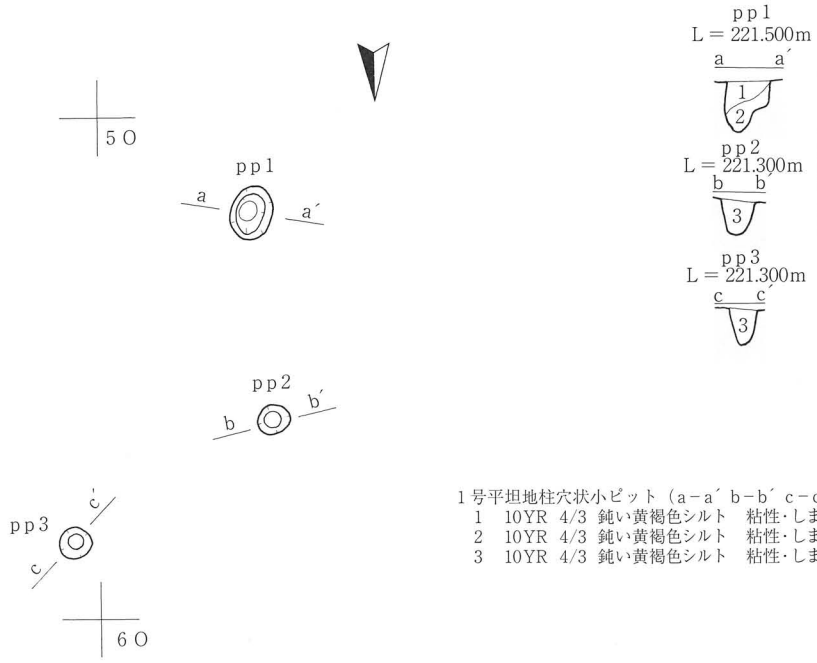
7号竪穴状遺構　(cm)

No	短径×長径	深さ
pp1	22.5 × 26	14
pp2	37.5 × 45	28.5
pp3	36 × (41)	28

7号竪穴状遺構（A－A´）
1　10YR 3/4 暗褐色シルト　粘性弱　しまりやや強
　　10YR 5/8 黄褐色大ブロック3％
　　10YR 2/3 黒褐色ブロック2％　橙・白色パミス（破砕状態）1％
　　表土：撹乱
2　10YR 2/3 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや強
　　10YR 3/4 暗褐色シルト　モヤ状に2％
　　橙・白色パミス（破砕状態）1％未満
3　10YR 2/3 黒褐色シルト　粘性弱　しまりやや強
　　10YR 3/4 暗褐色シルト　モヤ状に2％
　　V層ブロック3％

0　1：60　2m

第49図　7号竪穴状遺構



第3表
1号平坦地柱穴小ピット計測表

No	短径×長径 (cm)	深さ(cm)	底面の標高(m)
pp1	33 × 43	40	220.980
pp2	24 × 26	28	220.960
pp3	24 × 25	24	220.960

1号平坦地柱穴状小ピット（a－a´ b－b´ c－c´）
1　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共弱　Ⅵ層小ブロック2％未満
2　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共やや弱　Ⅵ層小ブロック1％未満
3　10YR 4/3 鈍い黄褐色シルト　粘性・しまり共やや弱　Ⅴ・Ⅵ層小ブロック各1％未満

0　1：60　2m

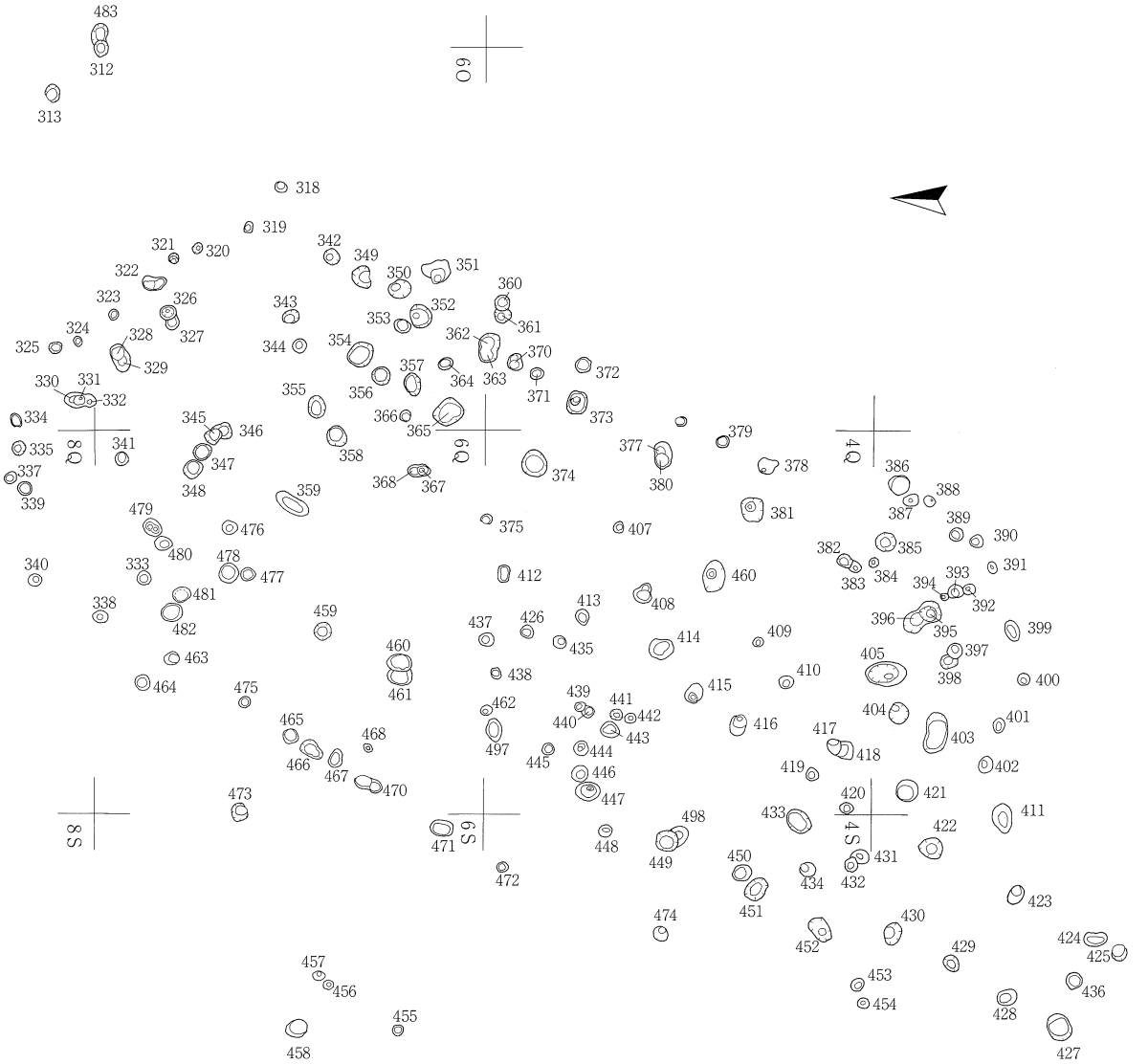
第50図　1号平坦地柱穴状小ピット

第51図　２号平坦地柱穴状小ピット(1)

第4表　2号平坦地柱穴状小ピット計測表(1)

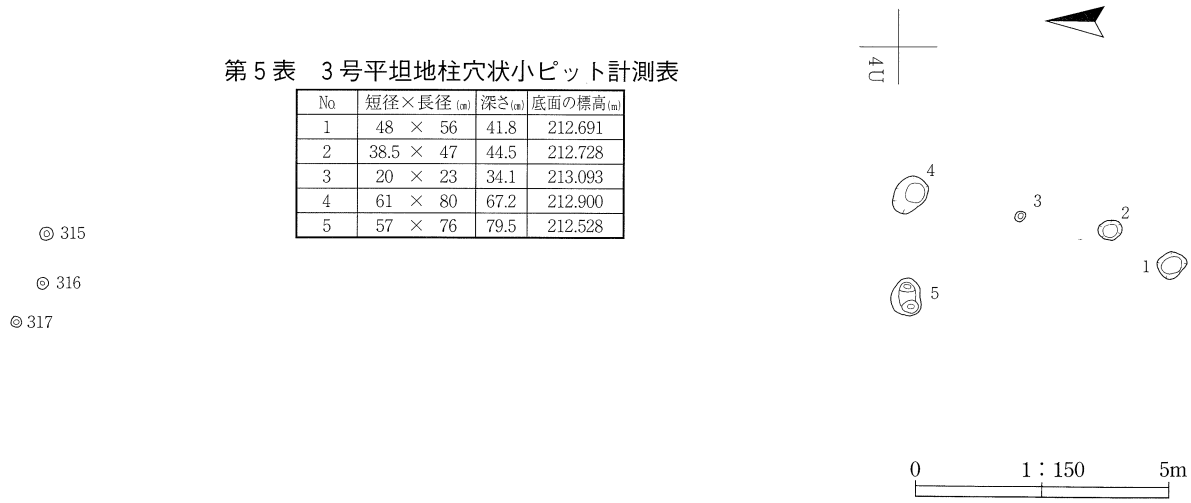
No	短径×長径(cm)	深さ(cm)	底面の標高(m)
1	14 × 29	38.1	218.070
2	25 × 30	−	−
3	21 × 24	29.7	218.075
4	25 × 27	17.8	218.167
5	21 × 26	12.2	218.206
6	30 × 35	9.2	218.214
7	25 × 30	34.8	217.930
8	17 × 19	10.6	218.170
9	19 × 23	10.3	218.185
10	16 × 35	−	−
11	22 × 24	−	−
12	31 × 35	9.1	218.200
13	27 × 35	18.4	218.090
14	28 × 29	−	−
15	26 × 38	12.0	218.038
16	23 × 24	13.8	217.962
17	19 × 21	28.0	217.790
18	27 × 31	17.9	217.956
19	34 × 38	17.6	217.952
20	28 × 28	26.4	217.981
21	40 × 47	52.2	217.666
22	33 × 47	8.6	218.012
23	35 × 39	26.2	217.836
24	31 × 35	18.4	217.896
25	23 × 27	23.7	217.758
26	25 × 26	14.2	217.874
27	23 × 26	16.2	217.798
28	27 × 30	9.0	217.824
29	34 × 43	22.8	217.678
30	25 × 30	42.0	217.654
31	29 × 31	17.0	217.808
32	33 × 38	13.3	217.801
33	20 × 22	13.2	217.752
34	22 × 25	8.4	217.785
35	31 × 31	26.4	217.620
36	21 × 30	23.4	217.840
37	24 × 25	23.4	217.790
38	23 × 33	22.0	217.804
39	20 × 20	23.0	217.746
40	24 × 26	29.8	217.650
41	25 × 31	21.6	217.624
42	25 × 26	16.6	217.578
43	31 × 39	36.5	217.425
44	22 × 40	15.9	217.606
45	25 × 27	29.7	217.278
46	29 × 31	87.3	216.852
47	30 × 32	35.1	217.155
48	28 × 36	43.4	217.014
49	25 × 26	40.7	217.012
50	28 × 32	59.6	216.818
51	32 × 37	30.7	217.082
52	26 × 28	25.0	217.094
53	31 × 32	47.4	216.901
54	29 × 31	55.0	217.044
55	24 × 35	12.8	217.354
56	23 × 25	30.6	217.342
57	26 × 30	63.4	216.974
58	22 × 25	18.6	217.356
59	40 × 45	−	−
60	23 × 34	47.8	217.497
61	45 × 60	46.6	217.132
62	22 × 25	33.5	217.054
63	51 × 55	47.4	216.868
64	41 × 46	112.0	216.616
65	32 × 33	67.1	216.935
66	43 × 57	70.3	216.842
67	32 × 35	69.6	216.768
68	22 × 38	57.1	217.165
69	33 × 33	80.4	216.872
70	28 × 31	55.5	217.065
71	30 × 31	45.1	217.205
72	22 × 28	36.3	217.235
73	32 × 33	−	−
74	30 × 40	78.2	216.852
75	32 × 35	31.7	217.318
76	34 × 37	44.7	217.165
77	32 × 33	17.8	217.418
78	30 × 33	42.5	217.169
79	26 × 31	15.4	217.434
80	28 × 30	44.1	217.109
81	40 × 57	72.9	216.806
82	15 × 17	9.0	217.396
83	31 × 41	33.0	217.142
84	17 × 24	8.4	217.342
85	26 × 30	34.1	216.910
86	32 × 33	69.5	216.814
87	22 × 27	22.3	217.232
88	35 × 37	56.7	216.889
89	30 × 35	16.3	217.238
90	21 × (30)	−	−
91	23 × 27	63.4	216.834
92	30 × 30	31.8	217.280
93	31 × 31	21.5	217.360
94	30 × 34	45.5	217.065
95	21 × 30	19.6	217.284
96	36 × 36	49.8	216.944
97	21 × 22	23.2	217.216
98	25 × 31	12.7	217.282
99	13 × 39	13.4	217.242
100	25 × 29	15.3	217.225
101	21 × 24	21.6	217.272
102	37 × 41	48.1	217.034
103	31 × 42	18.4	217.360
104	38 × 40	75.7	216.775
105	25 × 43	13.2	217.352
106	19 × 23	19.1	217.236
107	18 × 20	16.4	217.250
108	31 × 32	26.2	217.090
109	17 × 21	11.6	217.218
110	24 × 27	57.2	216.714
111	20 × 21	16.3	217.062
112	32 × 41	20.5	216.963
113	27 × 31	20.7	216.943
114	31 × 33	38.3	216.735
115	17 × 19	20.5	216.716
116	27 × 28	44.7	216.652
117	28 × 34	−	−
118	30 × 35	−	−
119	21 × 27	−	−
120	20 × 22	15.4	217.038
121	25 × 25	24.0	216.885
122	45 × 49	33.4	216.852
123	36 × 46	24.6	216.846
124	34 × 39	16.7	216.854
125	17 × 21	15.9	216.765
126	27 × 28	22.1	216.673
127	23 × 26	23.7	216.764
128	25 × 30	28.6	216.570
129	17 × 20	38.3	216.595
130	18 × 20	11.1	216.759
131	29 × 29	52.6	216.310
132	22 × 25	30.9	216.662
133	38 × 45	15.5	216.694
134	24 × 24	26.6	216.508
135	26 × 34	18.1	216.756
136	28 × 40	44.6	216.426
137	25 × 32	21.2	216.648
138	25 × 26	35.8	216.420
139	20 × 23	28.0	216.335
140	24 × (26)	13.1	216.484
141	13 × 15	10.3	216.413
142	35 × 40	69.9	217.262
143	22 × 26	36.7	217.182
144	42 × 48	35.8	216.867
145	36 × 36	69.6	217.078
146	38 × 43	65.8	217.221
147	48 × 56	113.6	216.636
148	25 × 26	45.7	217.421
149	34 × 43	77.0	217.162
150	34 × 36	91.2	216.836
151	30 × 32	75.2	217.174
152	36 × 42	39.0	217.495
153	65 × 75	106.4	216.745
154	31 × 34	74.5	215.885
155	28 × 30	102.9	215.505
156	32 × 32	79.0	215.715
157	26 × 35	50.6	215.990
158	37 × 40	57.1	215.821
159	51 × 70	83.6	215.374
160	25 × 27	29.0	216.250
161	17 × 30	69.0	215.748
162	31 × 36	72.5	215.760
163	21 × 22	43.9	216.039
164	24 × 24	69.4	215.765
165	33 × 35	70.9	215.753
166	21 × 25	30.8	216.147
167	25 × 25	48.6	215.948
168	23 × 23	35.3	215.991
169	24 × 30	44.3	215.896
170	23 × 23	79.4	215.681
171	25 × 26	87.6	215.599
172	28 × 37	42.4	216.007
173	25 × 26	69.7	215.693
174	33 × 41	70.1	215.678
175	40 × 54	110.0	215.229
176	22 × 24	27.6	215.976
177	25 × 28	33.0	216.103
178	31 × 36	60.0	215.756
179	25 × 40	46.7	215.858
180	18 × 20	21.6	216.085
181	27 × 32	36.9	215.877
182	29 × 40	105.4	215.155
183	25 × 32	41.2	215.722
184	22 × 30	19.5	216.972
185	23 × 31	−	−
186	30 × (35)	−	−
187	31 × 35	−	−
188	28 × 35	44.0	215.132
189	31 × 38	36.5	215.365
190	18 × 20	17.5	215.602
191	30 × 31	32.9	215.556
192	16 × 18	19.7	216.157
193	24 × 29	60.4	215.687
194	44 × 44	87.7	215.350
195	19 × 21	35.0	215.926
196	22 × 24	28.1	215.833
197	33 × 41	55.1	215.497
198	20 × 23	17.4	215.654
199	30 × 32	35.1	215.641
200	34 × 36	53.9	215.349
201	29 × 39	35.1	215.578
202	31 × 42	41.0	215.451
203	18 × (24)	12.8	215.606
204	19 × 22	16.4	215.546
205	32 × 35	75.3	214.948
206	27 × 30	27.3	215.355
207	37 × 46	29.2	215.330
208	20 × 22	13.7	215.395
209	24 × 27	15.2	215.516
210	16 × 19	31.4	215.347
211	18 × 20	57.4	215.058
212	25 × 27	43.0	215.122
213	26 × 31	21.0	215.318
214	17 × 20	10.2	215.380
215	53 × 69	63.2	215.910
216	25 × 27	19.6	216.528
217	44 × 47	16.1	216.004
218	27 × 32	77.7	216.108
219	29 × 48	29.8	216.494
220	24 × 25	598.0	216.059
221	27 × 28	63.4	215.947
222	56 × 58	68.1	216.201
223	26 × 28	51.3	216.038
224	22 × 23	10.9	216.296
225	33 × 43	50.2	215.699
226	26 × 26	29.9	215.685
227	20 × 23	58.3	215.258
228	25 × 26	41.5	215.170
229	24 × 24	39.0	215.090
230	26 × 26	24.0	215.040
231	29 × 30	24.0	214.935
232	34 × 35	45.0	214.840
233	21 × 25	9.0	215.110
234	35 × 36	43.0	215.105
235	31 × 36	34.0	215.240
236	27 × 31	44.5	215.170
237	18 × 19	11.5	215.425
238	19 × 20	11.5	215.285
239	23 × 24	11.0	215.110
240	36 × (38)	34.2	215.369
241	26 × (26)	42.8	215.265
242	27 × 34	47.6	215.236
243	32 × 32	65.7	215.118
244	21 × 29	78.2	215.150
245	23 × 25	36.8	215.580
246	18 × 24	44.1	215.545
247	26 × 35	59.0	215.360
248	46 × 65	22.2	216.215
249	24 × 28	19.3	216.172

＊表中の（　）は推定値を表す



第５表　３号平坦地柱穴状小ピット計測表

No.	短径×長径(cm)	深さ(cm)	底面の標高(m)
1	48 × 56	41.8	212.691
2	38.5 × 47	44.5	212.728
3	20 × 23	34.1	213.093
4	61 × 80	67.2	212.900
5	57 × 76	79.5	212.528

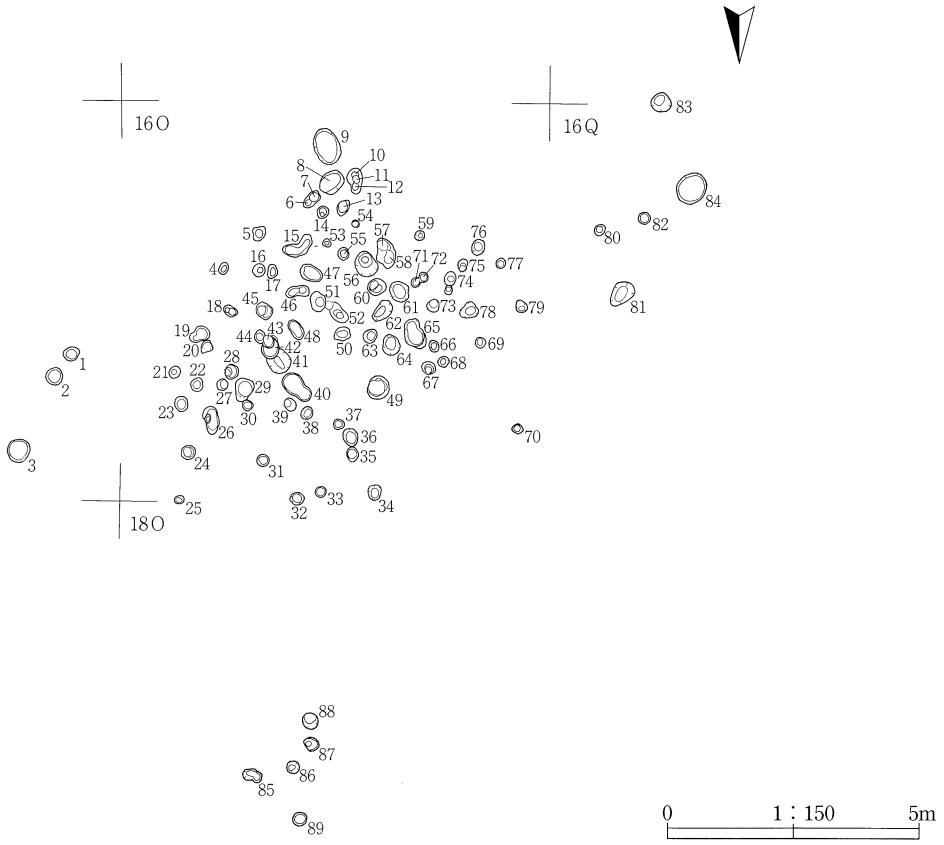


第52図　２号平坦地柱穴状小ピット(2)・３号平坦地柱穴状小ピット

第6表　2号平坦地柱穴状小ピット計測表(2)

No	短径×長径(cm)	深さ(cm)	底面の標高(m)
250	23 × 33	33.0	215.938
251	36 × 40	45.8	215.786
252	34 ×(38)	32.4	215.829
253	26 × 28	49.8	215.629
254	(33)× 42	28.3	215.761
255	(25)× 26	28.0	215.890
256	21 × 23	−	−
257	20 × 23	34.7	215.978
258	23 × 27	57.5	215.655
259	33 × 40	70.2	215.434
260	51 × 55	22.8	215.790
261	61 × 67	20.1	215.902
262	19 × 23	19.8	215.798
263	26 × 27	41.5	215.505
264	30 ×(35)	64.2	215.330
265	24 ×(28)	46.7	215.468
266	25 × 33	23.5	215.700
267	24 × 25	47.5	215.555
268	20 × 24	48.7	215.508
269	23 × 23	35.1	215.626
270	22 × 23	27.7	215.643
271	28 × 31	31.0	215.515
272	19 × 23	15.5	215.695
273	25 × 27	27.2	215.488
274	18 × 23	44.3	215.362
275	20 × 24	25.5	215.490
276	30 × 35	32.0	215.558
277	28 × 30	4.4	215.716
278	15 × 16	34.0	215.400
279	31 × 32	54.0	215.162
280	24 × 25	40.0	215.240
281	28 × 37	26.7	215.366
282	20 × 24	36.5	215.165
283	18 × 20	13.1	215.265
284	28 × 29	22.0	215.284
285	38 × 43	41.0	214.974
286	37 × 39	38.8	214.886
287	27 × 29	19.3	214.965
288	20 × 21	10.0	215.010
289	26 × 28	46.8	215.010
290	18 × 19	15.9	215.348
291	21 × 21	10.0	215.289
292	26 × 27	45.9	214.827
293	18 × 18	7.1	214.904
294	23 × 27	24.4	214.967
295	23 × 24	20.3	214.857
296	21 × 23	29.4	214.820
297	32 × 32	24.5	214.940
298	14 × 17	11.2	214.706
299	25 × 26	21.6	214.604
300	21 × 28	27.8	214.427
301	25 × 25	33.7	214.548
302	17 × 19	18.2	214.835
303	22 × 23	11.3	214.787
304	23 × 24	18.0	214.970
305	20 × 23	2.4	215.644
306	21 × 23	44.2	215.148
307	35 × 38	43.6	215.229
308	20 × 22	24.8	215.322
309	40 × 55	33.7	215.195
310	17 × 25	45.0	214.780
311	40 × 46	20.0	215.000
312	19 × 36	50.1	218.165
313	29 × 37	−	−
314	32 × 33	23.0	215.170
315	27 × 28	18.5	214.425
316	23 × 23	18.0	214.175
317	21 × 22	31.0	213.780
318	22 × 26	−	−
319	18 × 22	11.0	218.360
320	20 × 24	17.6	218.244
321	22 × 25	24.0	218.160
322	32 × 50	−	−
323	19 × 22	14.6	218.170
324	19 × 22	21.9	218.035
325	25 × 28	30.0	217.930
326	30 × 34	37.4	217.950
327	28 ×(32)	16.6	218.158
328	33 ×(35)	79.0	217.480
329	34 ×(43)	39.5	217.835
330	27 ×(35)	−	−
331	23 × 25	54.9	217.561
332	29 ×(29)	49.2	217.668
333	27 × 29	19.5	217.700
334	21 × 27	5.4	217.996
335	29 × 31	25.0	217.716
336	18 × 20	9.4	217.800
337	23 × 28	15.4	217.786
338	27 × 32	45.8	217.336
339	28 × 30	30.4	217.646
340	25 × 26	52.2	217.228
341	28 × 29	53.5	217.580
342	31 × 35	61.4	217.886
343	30 × 35	50.1	217.895
344	27 × 28	36.2	218.010
345	31 × 35	51.4	217.600
346	34 × 35	30.1	217.860
347	36 × 45	27.6	217.838
348	36 × 41	56.5	217.525
349	36 × 49	27.3	218.185
350	39 × 46	51.4	217.935
351	26 × 30	48.3	217.987
352	44 × 50	50.6	217.944
353	29 × 34	30.3	218.118
354	47 × 53	67.9	217.719
355	36 × 46	43.1	217.866
356	38 × 39	43.1	217.948
357	33 × 50	44.2	217.968
358	42 × 43	28.8	218.012
359	34 × 78	35.6	217.796
360	32 × 32	29.1	218.245
361	(34)× 35	46.4	218.030
362	(41)× 42	47.2	218.006
363	(36)× 39	47.4	218.006
364	23 × 32	26.5	218.170
365	50 × 60	52.5	217.880
366	23 × 26	15.1	218.234
367	20 × 22	61.1	217.748
368	26 ×(30)	23.8	218.072
369	(20)× 25	29.0	218.202
370	(27)× 30	32.3	218.165
371	22 × 27	40.3	218.077
372	32 × 36	30.8	218.236
373	40 × 48	72.9	217.746
374	50 × 55	50.3	217.932
375	23 × 24	27.7	218.085
376	22 × 26	25.6	218.265
377	24 × 28	10.3	218.412
378	32 × 34	32.1	218.275
379	36 ×(37)	−	−
380	35 ×(37)	49.2	217.982
381	45 × 52	51.4	217.968
382	28 × 34	52.7	217.935
383	24 ×(31)	62.6	217.836
384	20 × 20	12.8	218.346
385	40 × 48	42.6	218.104
386	40 × 43	54.7	218.018
387	25 × 34	45.6	218.128
388	22 × 29	21.5	218.397
389	28 × 28	34.6	218.276
390	26 × 28	55.0	218.078
391	19 × 24	29.1	218.324
392	22 × 26	32.4	218.222
393	29 × 31	51.7	217.989
394	17 × 18	46.0	218.018
395	43 × 49	75.2	217.740
396	42 ×(57)	40.4	218.004
397	32 × 39	46.9	217.956
398	31 × 36	22.7	218.177
399	28 × 45	59.8	217.902
400	27 × 28	45.1	217.898
401	27 × 31	42.8	217.858
402	31 × 37	52.4	217.684
403	44 × 85	44.6	217.844
404	41 × 47	98.7	217.327
405	53 × 81	75.2	217.604
406	44 × 69	62.5	217.815
407	22 × 24	18.0	218.276
408	(30)× 41	12.6	218.245
409	23 × 24	17.5	218.175
410	28 × 30	56.4	217.768
411	39 × 63	48.0	217.646
412	24 × 36	21.0	218.165
413	30 × 33	26.1	218.117
414	46 × 51	31.4	218.015
415	32 × 43	31.8	217.964
416	34 × 44	93.7	217.292
417	29 × 33	−	−
418	38 × 45	−	−
419	26 × 30	44.4	217.662
420	24 × 26	33.6	217.740
421	46 × 46	67.7	217.482
422	44 × 53	77.9	217.252
423	29 × 45	64.2	217.268
424	29 × 48	62.8	217.260
425	31 × 37	68.1	217.165
426	34 × 36	54.6	217.276
427	50 × 60	48.5	217.207
428	33 × 43	61.0	217.116
429	30 × 35	80.0	217.016
430	35 × 49	60.4	217.314
431	28 × 39	24.5	217.774
432	26 × 32	43.7	217.528
433	41 × 57	64.2	217.396
434	29 × 33	58.0	217.400
435	25 × 30	25.3	218.029
436	26 × 28	30.0	217.982
437	30 × 31	35.0	217.858
438	21 × 25	20.5	217.947
439	20 × 23	1.2	218.044
440	25 × 27	20.4	217.981
441	23 × 25	48.8	217.730
442	23 × 26	63.3	217.592
443	35 × 38	22.9	217.908
444	30 × 32	40.6	217.701
445	24 × 25	20.4	217.868
446	37 × 38	65.6	217.414
447	39 × 52	70.4	217.284
448	25 × 28	47.9	217.356
449	48 × 48	63.5	217.225
450	41 × 46	−	−
451	28 × 50	36.6	217.566
452	35 × 55	50.5	217.429
453	25 × 30	70.6	217.090
454	22 × 26	75.7	216.958
455	21 × 23	16.7	217.615
456	21 × 23	65.6	217.096
457	22 × 28	66.0	217.115
458	38 × 45	42.7	216.945
459	36 × 38	24.4	217.772
460	38 × 52	33.3	217.682
461	(34)× 51	17.0	217.764
462	25 × 27	37.5	217.567
463	29 × 33	46.8	217.298
464	30 × 32	28.1	217.414
465	31 × 32	16.0	217.556
466	25 × 52	22.9	217.434
467	25 × 39	18.1	217.511
468	16 × 18	7.8	217.668
469	28 ×(42)	25.1	217.374
470	27 ×(30)	18.5	217.437
471	34 × 44	20.9	217.331
472	20 × 20	19.0	217.214
473	33 × 39	39.7	217.070
474	31 × 34	83.3	216.499
475	24 × 24	13.9	217.519
476	29 × 30	30.5	217.791
477	29 × 29	14.0	217.896
478	40 × 42	63.5	217.380
479	32 × 41	28.0	217.730
480	27 × 36	25.9	217.697
481	32 × 33	39.3	217.535
482	38 × 42	17.1	217.704
483	36 ×(50)	58.3	218.285
484	28 × 34	19.1	217.309
485	26 × 28	34.2	216.927
486	23 × 27	31.3	216.935
487	34 × 38	61.0	216.626
488	28 × 31	34.1	215.718
489	23 × 23	24.2	215.027
490	17 × 21	10.6	214.450
491	16 × 16	11.2	214.413
492	31 × 39	72.6	214.536
493	20 × 25	25.0	216.906
494	22 × 23	22.8	216.830
495	41 × 56	66.9	216.846
496	50 × 60	20.3	217.392
497	37 × 51	61.0	217.332
498	37 ×(41)	46.0	217.400

＊表中の（　）は推定値を表す



第53図　４号平坦地柱穴状小ピット

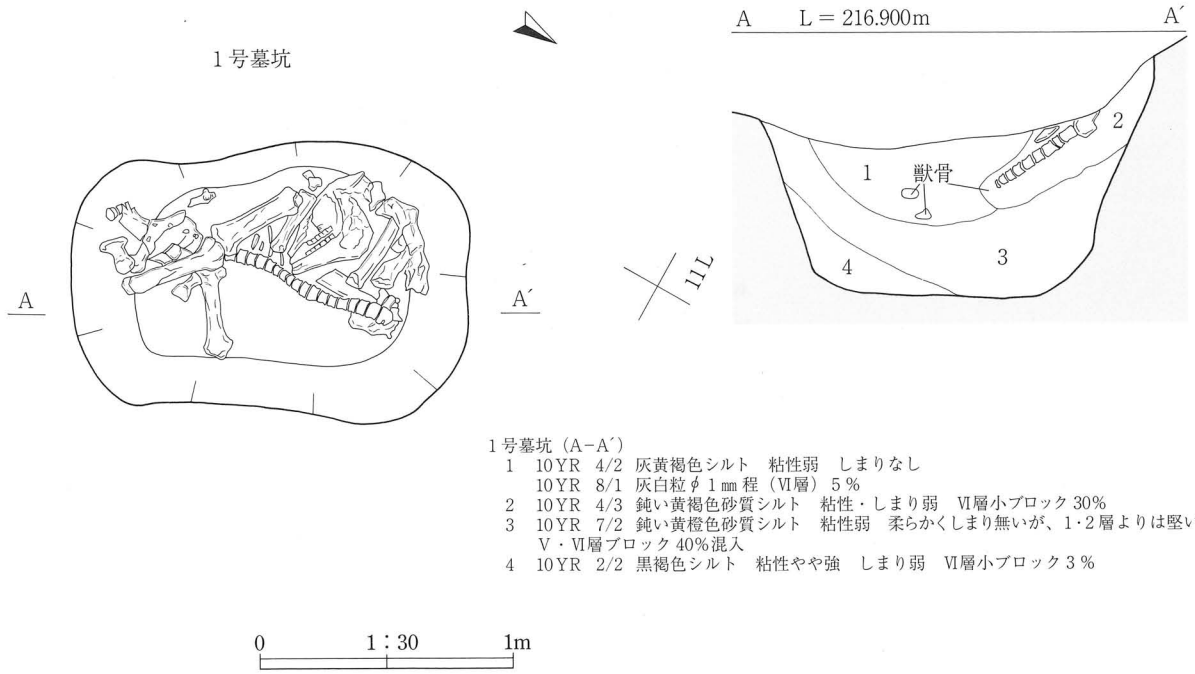
第７表　４号平坦地柱穴状小ピット計測表

No	短径×長径(cm)	深さ(cm)	底面の標高(m)
1	25 × 31	11.0	212.700
2	34 × 35	10.5	212.630
3	44 × 45	17.0	212.625
4	16 × 23	12.0	212.530
5	24 × 28	15.0	212.430
6	18 ×(26)	17.5	212.720
7	22 ×(25)	20.5	212.690
8	40 × 50	18.5	212.685
9	51 × 73	23.0	212.850
10	33 ×(34)	18.5	212.755
11	33 ×(40)	27.0	212.670
12	20 ×(30)	23.0	212.710
13	23 × 34	20.0	212.495
14	22 × 25	9.0	212.590
15	24 × 53	15.0	212.510
16	25 × 25	14.0	212.540
17	19 × 28	17.0	212.510
18	19 × 30	25.5	212.380
19	32 × 37	30.0	212.215
20	22 × 23	47.0	212.335
21	23 × 24	31.0	212.490
22	23 × 26	25.5	212.540
23	25 × 33	7.5	212.720
24	29 × 29	39.5	212.400
25	18 × 19	4.0	212.685
26	28 × 56	35.5	212.480
27	23 × 23	43.0	212.400
28	29 × 29	48.0	212.320
29	36 × 46	40.0	212.430
30	21 × 21	3.0	212.800

No	短径×長径(cm)	深さ(cm)	底面の標高(m)
31	24 × 25	11.0	212.700
32	25 × 28	24.5	212.470
33	19 × 21	6.0	212.650
34	26 × 30	24.0	212.500
35	23 × 29	11.5	212.635
36	29 × 35	23.0	212.570
37	20 × 21	4.0	212.810
38	23 × 25	14.0	212.745
39	22 × 28	44.0	212.395
40	40 × 65	12.5	212.760
41	43 ×(55)	19.5	212.605
42	35 × 45	19.0	212.610
43	(22) × 26	30.0	212.500
44	22 × 26	12.5	212.675
45	26 × 35	32.5	212.350
46	22 ×(30)	21.0	212.510
47	21 ×(26)	27.0	212.450
48	21 × 42	27.5	212.590
49	46 × 46	49.5	212.370
50	25 × 30	39.5	212.470
51	32 × 40	40.0	212.500
52	26 × 40	35.0	212.550
53	14 × 17	8.0	212.580
54	15 × 16	12.5	212.570
55	23 × 23	17.0	212.495
56	41 × 52	32.5	212.340
57	30 ×(40)	17.0	212.390
58	(38) × 40	45.5	212.435
59	19 × 21	7.0	212.500
69	34 × 38	45.0	212.460

No	短径×長径(cm)	深さ(cm)	底面の標高(m)
61	38 × 42	17.0	212.730
62	18 × 46	20.0	212.690
63	26 × 27	36.5	212.500
64	35 × 39	33.5	212.530
65	38 × 65	44.5	212.420
66	20 × 25	20.5	212.660
67	26 × 28	24.0	212.625
68	21 × 22	26.0	212.605
69	20 × 22	48.5	212.350
70	19 × 21	18.5	212.590
71	17 × 19	30.5	212.585
72	17 × 20	24.5	212.645
73	26 × 27	29.5	212.605
74	25 × 30	34.5	212.545
75	20 × 24	36.0	212.530
76	26 × 31	39.0	212.485
77	20 × 21	49.5	212.385
78	28 × 36	44.0	212.440
79	22 × 26	48.5	212.405
80	21 × 23	8.0	212.785
81	40 × 54	13.0	212.735
82	24 × 24	23.0	212.670
83	37 × 41	7.0	212.780
84	57 × 63	8.0	212.800
85	24 × 39	50.0	211.180
86	25 × 27	59.0	210.860
87	26 × 33	33.5	211.165
88	31 × 33	33.0	211.170
89	27 × 28	27.0	211.000

＊表中の（　）は推定値を表す



第54図　1号墓坑（獣骨出土）

4号平坦地）。このことから一部は中世後期に属する可能性があるものの、近世以降のものまで混在する状況を示す。

1号墓坑（第54図、写真図版37）

獣骨が出土した墓坑は、調査区中央部の2号堀跡西側斜面から1基検出された。

〔位置・重複関係〕調査区中央部、10Kグリッドに位置する。検出面はⅥ層でⅤ・Ⅵ層地山ブロックを多量に含む暗褐色土の隅丸方形プランとして確認した。

〔規模・形状〕開口部径110×157㎝、底部径73×98の隅丸方形基調を呈する。断面形は逆台形状で、底面から外傾して立ち上がる。深さは最深部で93㎝を測る。

〔埋土〕4層に大別される。暗褐色土主体で構成されるが、埋土全体にⅤ・Ⅵ層の地山ブロックを多量に含んでいる。全体的に撹乱土で、人為堆積である。

〔遺物・時期〕埋土中位から下位にかけて頭部を北側、背を西側に向け、脚部を東側に折り畳んだ状態の獣骨が1体分出土した。歯の形状から馬であると推測される。このほか供伴遺物は出土しておらず時期など詳細は不明であるが、獣骨の残存状態がきわめて良好であることから、館の造営時期よりは新しいものであると推測される。

（丸山直美）

Ⅴ．出　土　遺　物

今回の調査による出土遺物には、縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器・土製品・石器・鉄製品・銭貨・動物遺存体がある。いずれも量は少なく、総量は大コンテナ（40×30×30cm）でおよそ３箱分である。以下、種類ごとに概観する。

１．縄　文　土　器（第56図、写真図版38：１～15）

縄文土器は大コンテナ１箱分の量が出土しており15点を掲載した。いずれも細片で、図示できたのは内９点である。ほとんどは遺構外からの出土で、２号平坦地盛土中、１号切岸状遺構、１号土塁構築土中からの出土のほか、主に調査区南西側にまとまりがみられる。器種は浅鉢、台付鉢、鉢、深鉢、ミニチュア形？土器で、器形が判明するものは無い。１～２は１号炉跡埋土上位から出土した。１は鉢形土器とみられる体部破片、２は深鉢の体部片で、共にＬＲ縄文が施文される。14号土坑からは２点が出土した。３は台付鉢で、口縁部に平行沈線を持ち、沈線間に短沈線による刻目を持つ。４は深鉢で口縁部文様体に二重連弧文が巡る。頸部に７本の平行沈線＋沈線間の刻目を持つ。５は浅鉢の口縁部片で、体部文様帯に雲形文状の曲線的な磨消縄文が施される。口唇部には平行沈線と半裁竹管状工具による刺突列が巡る。６は鉢形土器の口縁部片で、口縁部に２条の平行沈線を持つ。体部にはＬＲ単節斜縄文が横位施文され、作りは丁寧である。７は台付鉢の脚部片である。８は鉢の体部片である。これらは文様の特徴などから概ね晩期（大洞ＢＣ式期）に相当するものと思われる。９～14は小片であるため、時期の特定が困難であるが、これらの土器に伴う粗製土器と考えられる。

２．土師器・須恵器（第56・57図、写真図版38・39：16～26）

調査区全域から小コンテナ（40×30×10cm）およそ0.5箱分の量が出土しており、11点を掲載した。16は１号竪穴住居跡のカマド相当部から出土した土師器坏である。製作に際してはロクロが使用されており、内面はミガキ＋黒色処理される。底部切り離し技法は静止糸切りによる。17～19は土師器長胴甕の体部片である。外面調整はナデ～ケズリ、内面はナデ調整される。19は底部に木葉痕を持つ。20は小形壺である。外面調整はケズリ後一部ミガキ、内面はミガキ＋黒色処理される。21～23は土師器の長胴甕、体部外面調整はナデ（一部ケズリ）、内面調整はナデ調整される。24～26は須恵器の大甕である。

３．陶　磁　器（第57図、写真図版39：27～33）

調査区の西側を中心に小コンテナ（40×30×10cm）およそ0.5箱分の量が出土しており、７点を掲載した。27は２号平坦地のｐｐ205から出土した中国産の白磁反皿である。28は４号平坦地のｐｐ65から出土した染め付け碗である。体部には二重編み目文が施される。30～31は灰釉皿で、30は大窯Ⅰ期（16世紀前半代）に比定される特徴を持つ。32は18世紀代の肥前産の鉢、33は19世紀以降の東北産の擂鉢である。

４．土　製　品（第57図、写真図版39：34～35）

土製品は２点が出土し、全て掲載した。34は調査区中央部から出土した羽口の小片である。35は調査区東側から出土した陶質の碁石状土製品である。

５．石器・石製品（第58図、写真図版39・40：36～43）

石器・石製品は８点出土し、全て掲載した。36～41は館の時期に伴うものと考えられる。42は２号堀跡埋土下位から出土した硯未成品？である。43は調査区中央部西寄り、Ⅲ層から出土したスクレイパーである。39・40は調査区中央部～南西側の１号切岸状遺構Ⅰ層中より出土した、茶臼（上・下臼）

片である。

〔茶臼について〕

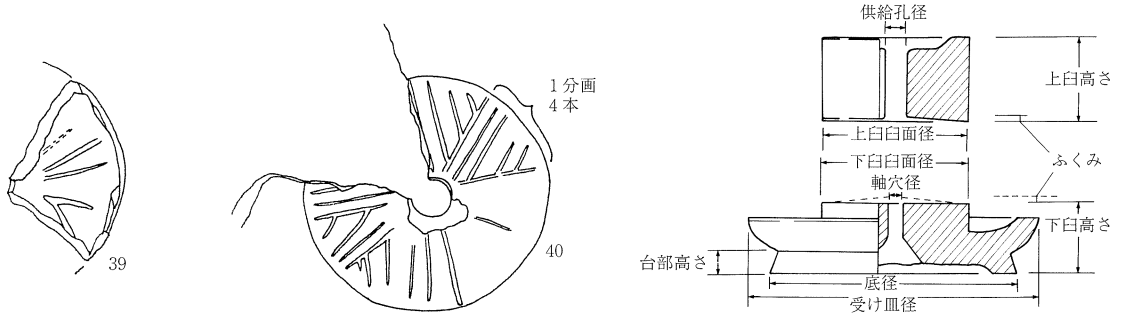
調査区中央部～南西側の１号切岸状遺構Ⅰ層中より、茶臼（上・下臼）片が各１点出土している(39・40)。残存部は上臼で１/４程度、下臼で５/６程度で全体の形状は不明であるが、残存部位の形態から茶臼と判断できるものである。本遺跡出土資料の特徴を以下にまとめる。

上臼（№39）：①中心が供給口となっており、孔が下方まで貫通する。②引き孔痕跡が認められる。

下臼（№40）：①臼面の主溝が８分画となる。②主溝・副溝共に外縁のエッヂまで到達せず、外周平滑面を持つ。③受け皿を持つ。

〔石質〕奥羽山系の安山岩を素材とする　〔主溝を除く副溝の数〕４本で構成される

当資料の臼面は上下共に摩滅しており実用品と見られるが、器面が粗く、副溝の本数・ピッチの間隔が疎である。主溝を除いた副溝の本数については、明確に確認できるところで４本あるものの、分画毎のピッチにばらつきが認められる。



茶臼の各計測部位（桐山秀穂 日本における茶臼の研究より抜粋）

第55図　茶臼の各計測部位

６．鉄　製　品（第59図、写真図版40・41：44～49）

鉄製品は６点出土し、全て掲載した。44～46は１号竪穴状遺構から出土した。44は刀子である。45は形態不明の鉄製品である。46は鉄滓である。47～48は２号切岸状遺構裾部付近から出土した。47は棒状鉄製品で、両端を欠損する。49は２号平坦地ｐｐ495から出土した形態不明の鉄製品である。

７．古　　銭（第59図、写真図版41：50～55）

５種６点が出土しており、全て掲載した。全体的に平坦地の盛土整地層から出土したものが多い。50は１号竪穴状遺構から出土した天聖元寶、52は１号平坦地盛土整地層から出土した嘉祐通寶、53は２号平坦地盛土整地層から出土した嘉定通寶、54・55はそれぞれ５号平坦地Ⅳ層、18ＦⅠ層から出土した寛永通寶である。51は２号平坦地ｐｐ146埋土中から出土した無文銭である。前３者は中国からの舶来銭で、天聖元寶（1023年鋳造）・嘉祐通寶（1056～1063年鋳造）は北宋、嘉定通寶（1208～1224年鋳造）は南宋時代に鋳造されたものである。岩手県北部の事例では一戸町姉帯城跡の土坑から天聖元寶２点が出土しているが、嘉祐通寶・嘉定通寶の出土例は未だ知られていない。54はいわゆる“新寛永”で、銅貨寛永通寶２期、背面上部に「文」字をもつ“文銭”である。文銭は寛文８（1668）～天和３（1683）年に亀戸鋳銭所で鋳造されたものである。55は不明瞭ながら「寛永通寶」の銭名が判読でき、鉄一文銭と思われる。

８．自　然　遺　物（写真図版41：56）

２個体の動物遺存体が出土している。56は２号平坦地ｐｐ433の埋土中から出土した貝殻片である。このほか１号墓坑から獣骨（馬？）が一体分出土した（写真図版37）。

（丸山直美）

第８表　縄文土器観察表

No	出土地点	器種	胎土	文様特徴	原体	内面調整	時期	備考
1	１号炉跡	鉢	やや粗	地文のみ	ＬＲ	ナデ	晩期	精製
2	１号炉跡	深鉢	やや粗	地文のみ	ＬＲ	ミガキに近いナデ	晩期	粗製
3	14号土坑　埋土	深鉢	やや粗	口唇：刻目＋小突起　口縁：平行沈線＋短沈線による刻目　頸部：平行沈線 台部：羊歯状？モチーフ	ＬＲ	ミガキ	晩期（Ｃ２？）	粗製　体部内外面上半に炭化状付着物
4	14号土坑　埋土	深鉢	やや粗	口唇：刻目　口縁：二重連弧文　頸部：平行沈線	ＬＲ	ナデ～ミガキ	晩期	粗製
5	３～４Ｓ（２号平坦地盛土中）	鉢		口唇：小突起　口縁：半裁竹管状工具による刺突列　体部：雲形文＋磨消縄文	ＬＲ	ミガキ	晩期（Ｃ２）	精製
6	３～４Ｓ（２号平坦地盛土中）	鉢		口縁：二重平行沈線　体部：地文	ＬＲ	丁寧なミガキ	晩期	精製
7	９Ｒ～８Ｓ　Ⅲ層	台付鉢？		無文	－	ミガキ	晩期	精製
8	13Ｎ　Ⅰ層	鉢	やや粗	地文のみ	ＬＲ	ナデ	晩期	精製
9	３～４Ｓ（２号平坦地盛土中）	鉢		器形：口唇部平坦　体部：地文のみ	ＬＲ	ナデ～ミガキ	晩期	粗製
10	８Ｍ　Ⅰ層	深鉢	やや粗	地文のみ	ＲＬ	ナデ～ミガキ	晩期	粗製
11	８Ｌ（１号土墓構築土中）	深鉢	やや粗	地文のみ	ＲＬ	ナデ	晩期	粗製
12	４Ｐ（１号切岸状遺構Ⅰ層）	深鉢		地文のみ	ＬＲ	ミガキに近いナデ	晩期	粗製
13	13Ｐ　Ⅰ層	深鉢	やや粗	地文のみ	(r)撚糸	ナデ	晩期	粗製
14	13Ｐ　Ⅰ層	深鉢	やや粗	地文のみ	ＲＬ	ナデ	晩期	粗製
15	13Ｈ　Ⅰ層	ミニチュア形？	やや粗	無文	－	ナデ	晩期？	

第９表　土師器・須恵器観察表

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
16	１号竪穴住居跡　カマド	土師器	坏	10％以下	10YR 7/4	〔体〕ケズリ	〔体〕ミガキ	静止イトキリ	－	(5.8)	△1.6	内面黒色処理
17	１号竪穴住居跡　カマド掘り方（貼り床）	土師器	長胴甕	10％以下	10YR 5/4	〔体〕ナデ	〔体〕ナデ	－	－	－	－	
18	１号竪穴住居跡　埋土	土師器	長胴甕	10％以下	7.5YR 6/6	〔体〕ナデ	〔体〕ロクロナデ	－	－	－	－	
19	１号竪穴住居跡　埋土	土師器	長胴甕	10％以下	7.5YR 5/4	〔体〕ナデ	〔体〕ナデ	木葉痕	－	(11.0)	△3.0	
20	13Ｎ（SK12 埋土）	土師器	小形壺	10％以下	Ｎ 2/0	〔口～体〕ケズリ→ミガキ	〔口～体〕ミガキ	－	－	－	－	内外面黒色処理
21	14Ｋ　Ⅲ層直上	土師器	長胴甕	10％以下	10YR 6/3	〔体〕ナデ	〔体〕ナデ	－	－	－	－	
22	15Ｇ　Ⅱ～Ⅲ層	土師器	長胴甕	10％以下	7.5YR 3/4	〔体〕ナデ→ケズリ	〔体〕ナデ	－	－	－	－	
23	15Ｇ　Ⅱ～Ⅲ層	土師器	長胴甕	10％以下	7.5YR 5/6	〔体〕ナデ（一部ケズリ）	〔体〕ナデ	－	－	－	－	
24	11Ｍ（SD03 埋土下位）	須恵器	大甕	10％以下	2.5YR 3/1	〔体〕平行タタキ	〔体〕格子目タタキ	－	－	－	－	
25	15Ｇ　Ⅲ層直上	須恵器	大甕	10％以下	5YR 1.7/1	〔体〕平行タタキ	〔体〕格子目タタキ	－	－	－	－	
26	25Ｇ　Ⅰ層	須恵器	大甕	10％以下	10GY 4/1	〔体〕平行タタキ（一部ナデ）	〔体〕平行アテグ	－	－	－	－	

（　）は推定値、△は残存値を表す

第10表　陶磁器観察表

No	出土地点	器種	胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
27	２号平坦地　PP205 埋土	白磁／反皿	灰白色	透明釉	中国産	１６世紀前半	
28	４号平坦地　PP65 埋土	磁器／碗	灰白色	染付	肥前産	１８後～１９前	二重網目文
29	４号平坦地　PP78 埋土	磁器／碗皿類	灰白色	灰釉	肥前産？	近世	
30	４Ｕ～５Ｕ　Ⅱ層	陶器／灰釉皿	鈍い黄橙色	灰釉	瀬戸産	１６世紀前半	大窯Ⅰ期
31	13Ｒ　Ⅱ層	陶器／灰釉皿	灰白色	灰釉	瀬戸産	１６世紀代	大窯期
32	６Ｖ　Ⅲ層上位	磁器／鉢	褐灰色	灰釉	肥前産？	１８世紀代	
33	14Ｑ　Ⅰ層（撹乱）	陶器／擂鉢	明赤褐色	鉄釉	東北産	１９世紀代	

第11表　土製品観察表

No	出土地点	種類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
34	11M　Ⅰ～Ⅳ層	羽口	△2.75	△1.8	△1.2	3.1	
35	18F　Ⅰ層	碁石状土製品	1.9	1.81	0.8	2.1	

△は残存値を表す

第12表　石器・石製品観察表

No	出土地点	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	産地	備考
36	2号平坦地　PP197埋土	砥石	△9.45	5.85	2.35	165.4	凝灰岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	
37	3～4P　（1号切岸状遺構Ⅰ層）	石鉢	△13.2	△10.5	5.4	671.5	安山岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	
38	3～4P　（1号切岸状遺構Ⅰ層）	石鉢	△16.0	△10.5	5.8	700.6	安山岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	
41	3～4P　（1号切岸状遺構Ⅰ層）	敲磨器	△14.05	9.65	5.70	1022.6	安山岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	
42	13K　（SD02堀跡埋下）	硯未成品？	12.5	9.7	1.3	212.1	粘板岩	北上山地　古生代（盛岡以南）？	
43	9R～8S　Ⅲ層	スクレイパー	9.05	4.6	1.55	41.5	頁岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	

△は残存値を表す

第13表　茶臼観察表

No	出土地点	種類	規格（mm）		重量（g）	石材	産地	備考
39	3～4P　（1号切岸状遺構Ⅰ層）	茶臼（上臼）	上臼臼面径（170） 上臼高さ 109	供給口径（20）	△1340（残存部のみ）	安山岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	39と同一個体？
40	3～4P　（1号切岸状遺構Ⅰ層）	茶臼（下臼）	下臼臼面径 178 下臼高さ 49 底径 257	軸穴径（28） 台部高さ 25 受け皿径 295	△3000（残存部のみ）	安山岩	奥羽山脈　新生代新第三紀	39と同一個体？

（　）は推定値、△は残存値を表す

第14表　鉄製品観察表

No	出土地点	種類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
44	1号竪穴状遺構　埋下	刀子	20.8	1.8	0.4	33.97	
45	1号竪穴状遺構　埋下	形態不明	△17.9	1.2	1.5	97.81	
46	1号竪穴状遺構　埋下	鉄滓	7.1	5.3	3.7	162.2	
47	4T　層位不明	棒状鉄製品	10.8	0.85	0.6	12.86	
48	4T　層位不明	形態不明	3.9	2.8	0.65	14.1	
49	2号平坦地　PP495埋土	形態不明	4.35	2.05	0.75	19.9	

△は残存値を表す

第15表　古銭観察表

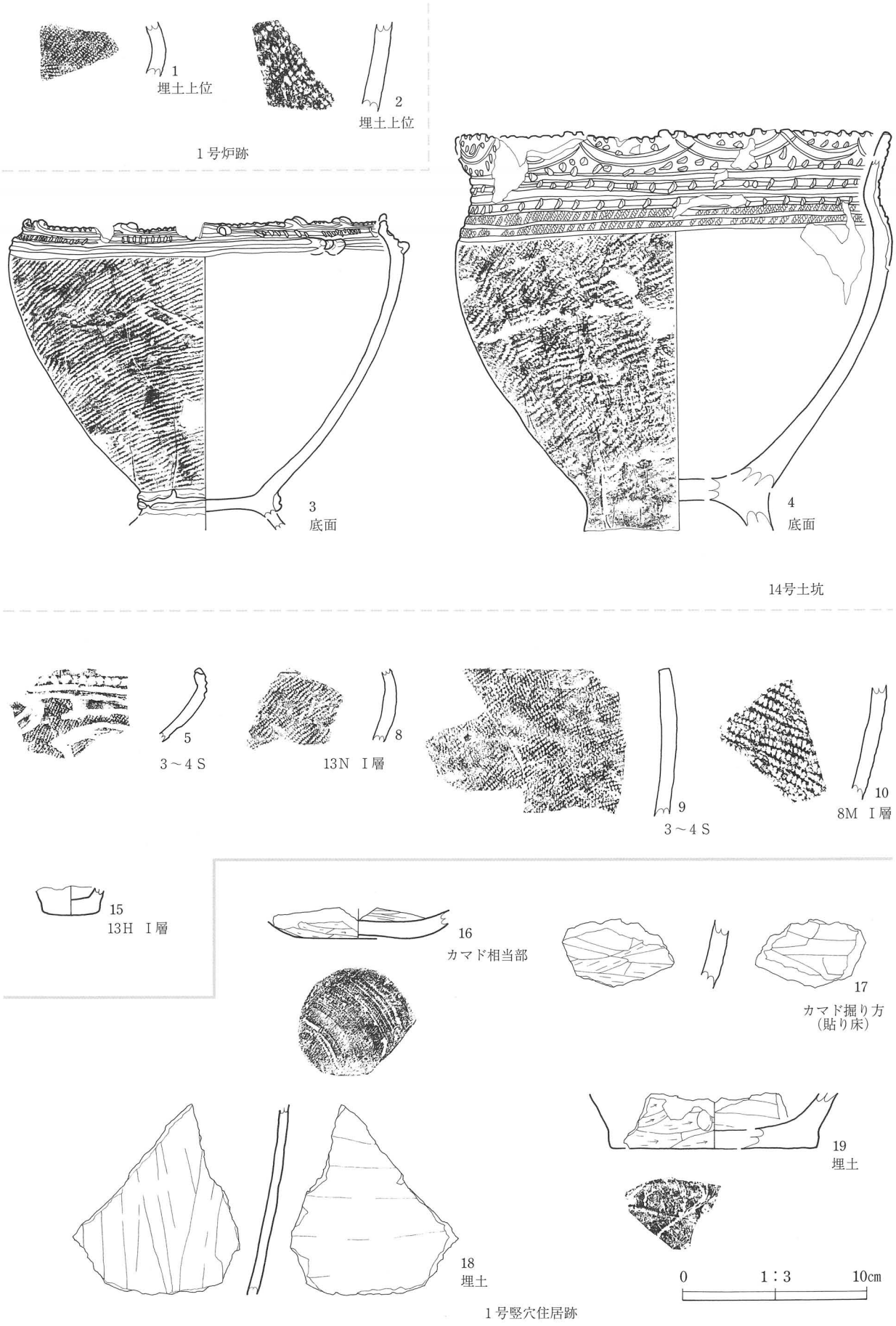
No	出土地点	計測値（cm）				重量（g）	銭名	初鋳年	表	裏	備考
		長さ	幅	厚さ	穿径						
50	1号竪穴状遺構　埋下	2.55	2.55	0.18	6.05×7.05	2.9	銅銭／天聖元寶	1023	◎	○	北宋
51	2号平坦地　PP146埋中	2.15	2.15	0.15	7.0×7.0	2.2	銅銭／無文	－	×	×	
52	1号平坦地　Ⅱ層	2.51	2.51	0.16	7.0×7.0	3.2	銅銭／嘉祐通寶	1056	◎	◎	北宋
53	2号平坦地　Ⅱ層	△2.0	2.25	0.15	6.05×7.05	1.9	銅銭／嘉定通寶？	1208	◎	○	南宋　裏文字あり「十三」
54	5号平坦地　Ⅳ層	2.51	2.51	0.15	6.05×6.05	3.4	銅銭／寛永通寶（文銭）	1668	◎	○	裏文字あり「文」　亀戸鋳銭所
55	18F　Ⅰ層	2.3	2.35	0.18	6.05×7.05	2.0	銅銭／寛永通寶（模鋳銭？）	－	○	△	裏面外縁の段差確認できず。鉄一文銭。

△は残存値を表す　　表・裏面の外縁・内郭の段差：◎明瞭　○やや不明瞭　△不明瞭　×なし

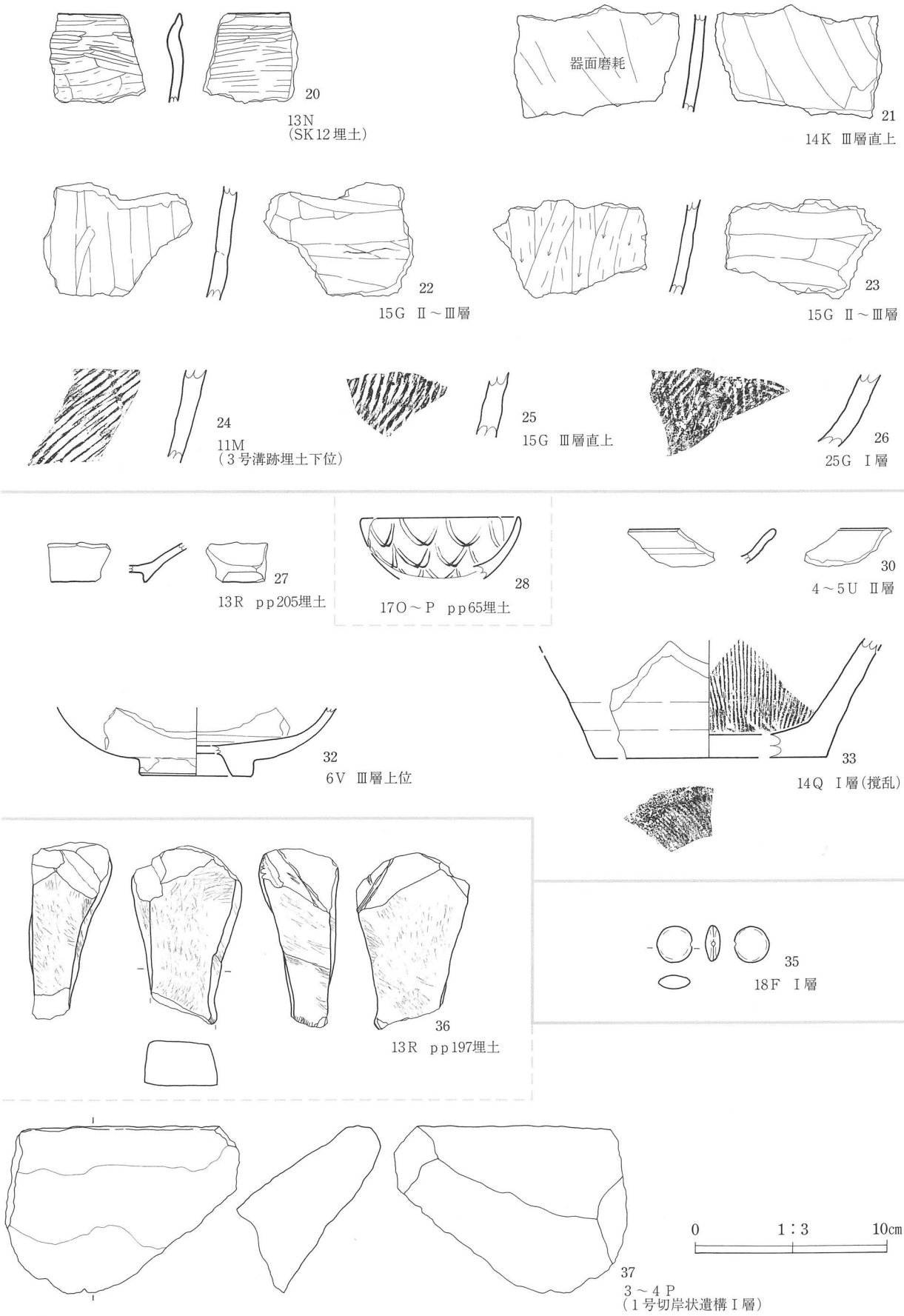
第16表　その他観察表（動物遺存体）

No	出土地点	種類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
56	2号平坦地　PP433埋土	貝殻	△4.0	△1.2	△0.4	1.3	

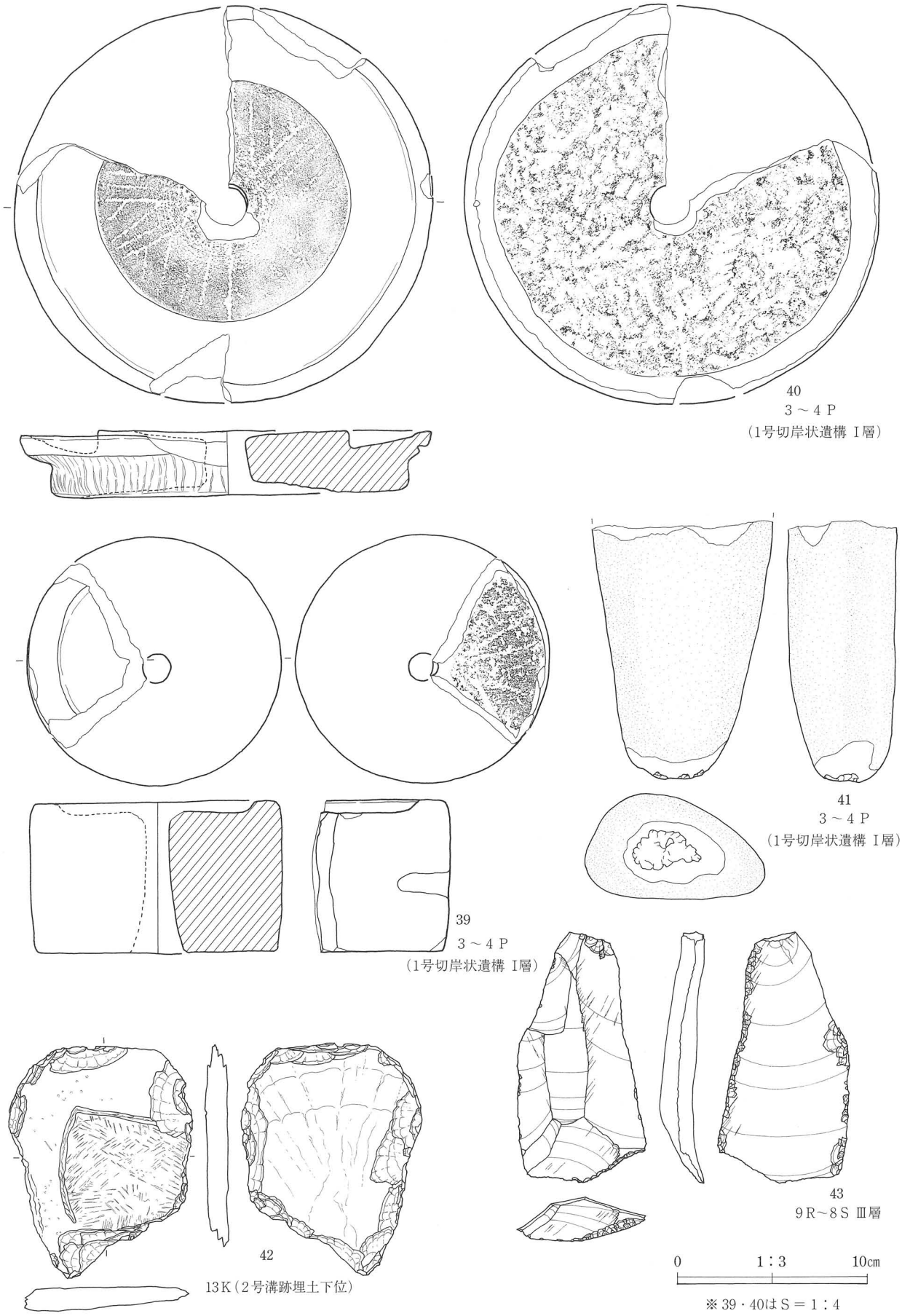
△は残存値を表す



第56図　縄文土器・土師器

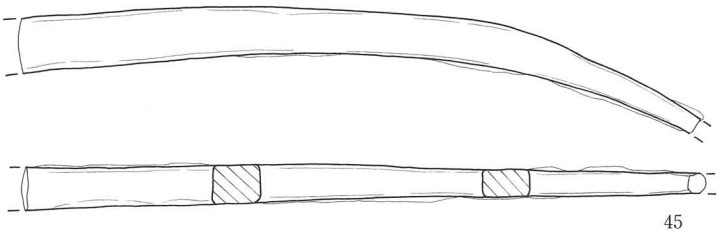


第57図　土師器・須恵器・陶磁器・土製品・石器


40
3～4P
(1号切岸状遺構 I層)
41
3～4P
(1号切岸状遺構 I層)
39
3～4P
(1号切岸状遺構 I層)
42
13K(2号溝跡埋土下位)
43
9R～8S Ⅲ層
0
1:3
10cm
※39・40はS＝1:4

第58図　石器・石製品

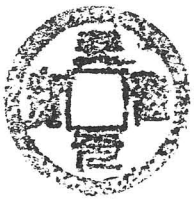
44
1号竪穴状遺構埋下

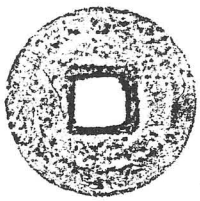


45
1号竪穴状遺構埋下

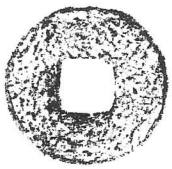
47
1号竪穴状遺構
埋下

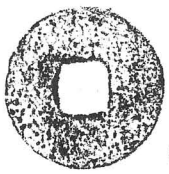
0　1：2　10m



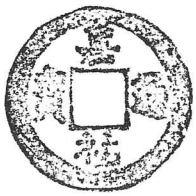


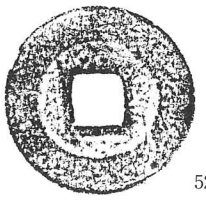
50
1号竪穴状遺構埋下



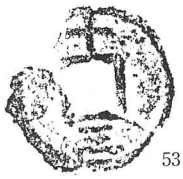


51
13 O pp146埋土

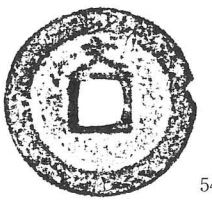




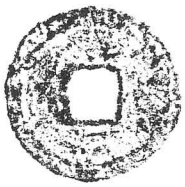
52
1号平坦地(曲輪) Ⅱ層

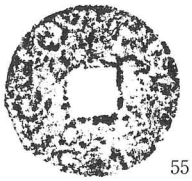


53
2号平坦地(曲輪) Ⅱ層



54
5号平坦地(曲輪) Ⅰ層





55
18F Ⅰ層

0　1：1　5cm

第59図　鉄製品・古銭

九戸城跡（二戸市）

2点出土

（下臼）

※臼上・下の別不明（茶臼でない可能性有）

一戸城跡（一戸町）　2点（4点？）出土

（下臼）

（下臼）

姉帯城跡（一戸町）

31点出土

（下臼）　（下臼）

（下臼）

（下臼）

（下臼）

（下臼）

（下臼）

松本館跡（大林城）（金ヶ崎町）

5点出土

（上臼）

館山遺跡（大林城）（金ヶ崎町）

1点出土

茶臼カーＥＩｄ井戸跡出土　（下臼）

（下臼）

笹間館跡（花巻市）　9点出土

（上臼）

（下臼）

ＣⅢｄ７土坑　埋土

大瀬川Ｃ遺跡（花巻市・旧石鳥谷町）

（下臼）

3点出土

ＤⅦ区　南東部整地層下部

（上臼）

（上臼）

（上臼）

（上臼）

0　10cm

S＝1/6

※他に山口遺跡（宮古市）で1点出土している。

第60図　岩手県内出土茶臼集成図

Ⅵ．まとめと考察

以下では縄文時代の土坑・陥し穴状遺構と中世の縄張り、普請・作事についての簡単なまとめを行う。なお、出土遺物については僅少であるため本章では扱わない。

1．縄　文　時　代

該期の遺構としては、炉跡１基、土坑42基、陥し穴状遺構23基が検出された。

（1）炉跡

３号平坦地西側で検出された。竪穴住居の炉だった可能性もあるが、当該部分は中世の普請によって削剥著しいため、詳細は不明である。

（2）土坑

土坑は42基検出されている。このうち、円形基調の平面形を呈し、底面の中央付近に小径の杭穴を伴うものが14基ある。11・15・16・18・19・23・25・33・24・35・36・38・39・41号の各土坑である。これらは単なる土坑というよりも、次に触れる陥し穴状遺構Ｃ型の可能性が高い。これらの14基については次項で一括して触れることとする。

土坑の形態分類　　土坑 ＝「坑」と略す。＊は不確実なもの。

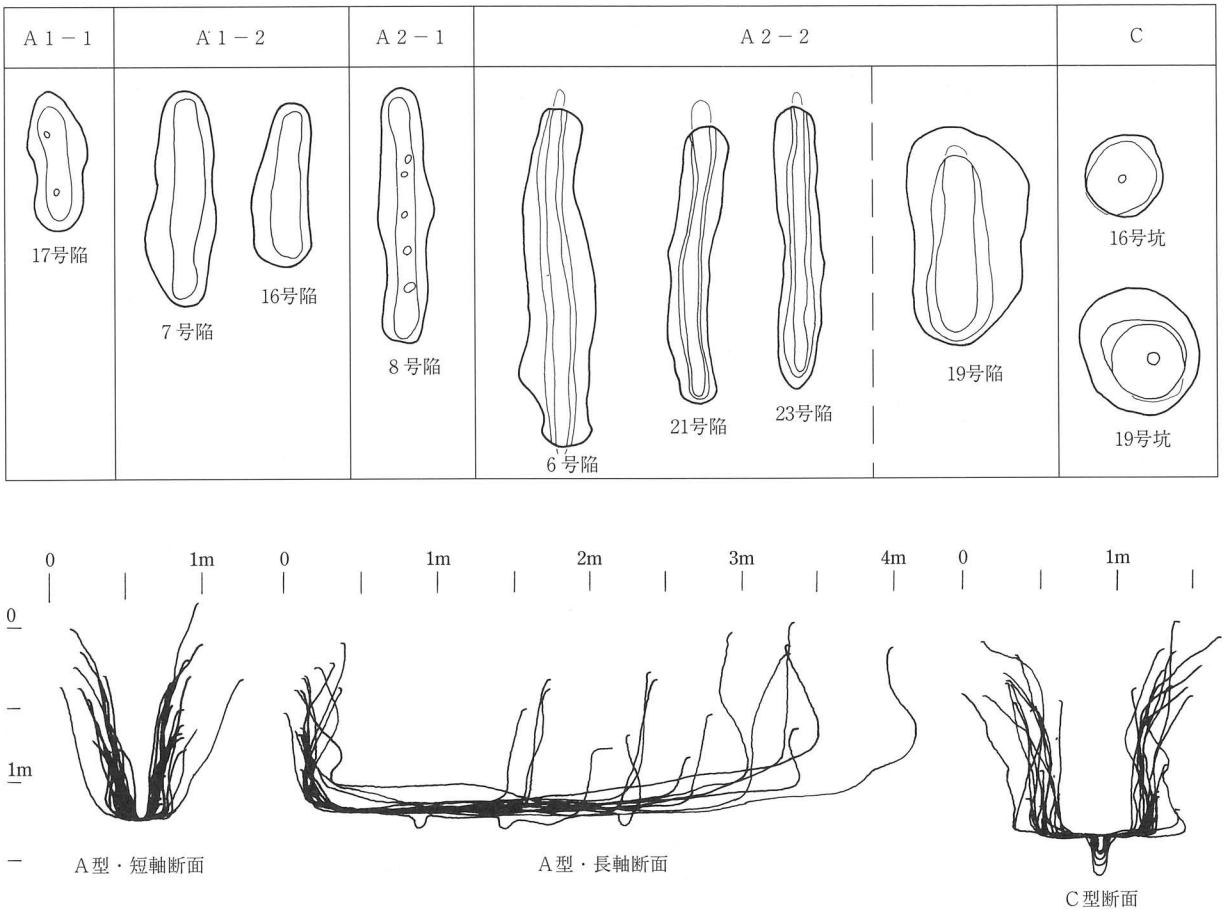
		断面形				
		方形	逆台形	袋	漏斗	不明
平面形	円　形（略円形）	17坑、＊20坑、24坑	７坑、21坑、26坑、28坑、29坑、30坑、31坑、32坑、	13坑	40坑	９坑、＊10坑
	楕円形	５坑	２坑、３坑、６坑、12坑、27坑、42坑	＊８坑、14坑、37坑		＊11坑
	隅丸方形	１坑	＊４坑			

検出された土坑の平面形には不整なものも含めて円形・楕円形・隅丸方形があり、開口部径62～242cm、底径38～148cmとかなりバラつきがある。断面形は方形状、逆台形状、袋状を呈しており、深さ10～129cmを測る。埋土は自然堆積の様相を示すものが多い。遺物は14号土坑を除いて出土しなかった。かかる様相から、これらの土坑にはその機能・用途に差異があると考えられる。いずれの土坑、特にも調査区西半部の土坑は中世の普請により少なからず削剥されており不明確ではあるが、断面形が袋状の13・14・37号土坑などは貯蔵穴の可能性が想定され、円筒形土坑の17・20・24号土坑や漏斗形の40号土坑は、底面の小穴を欠くものの陥し穴状遺構Ｃ型の可能性を考慮する余地がある。

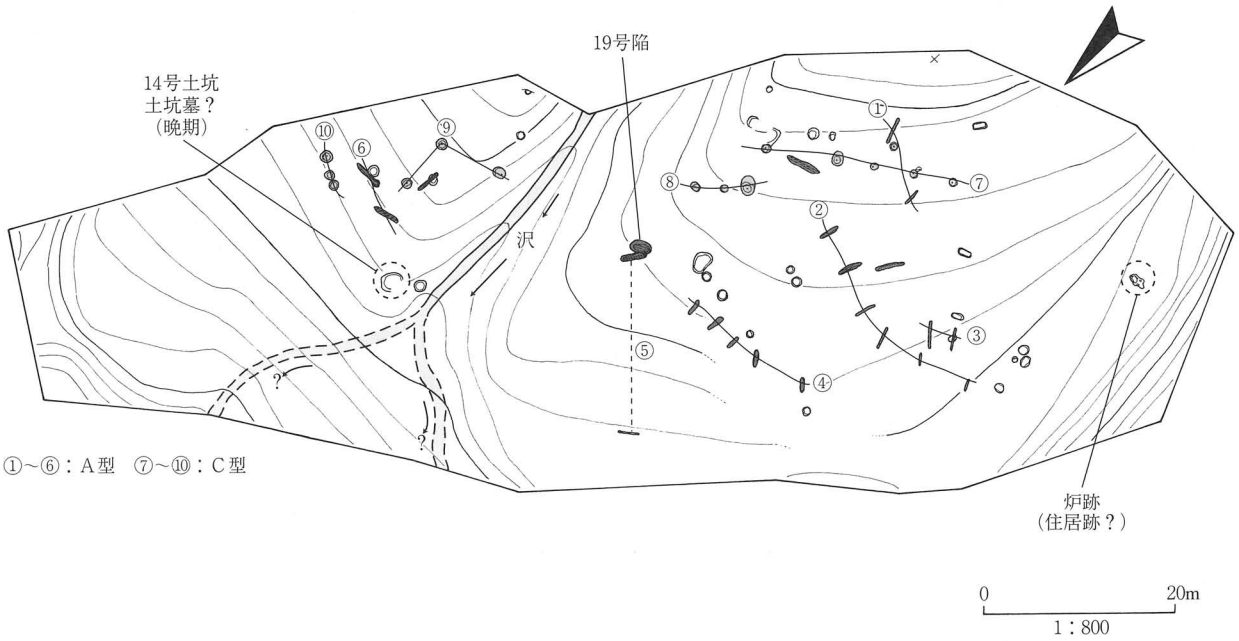
土坑の所属時期は、14号土坑を除いた29基については明らかではない。検出層位から縄文時代に位置づけているが、具体の時期は不明である。一方、袋状を呈する14号土坑では、底面付近で入れ子状に深鉢２個体が潰れた状態で出土した。出土した土器は台付の深鉢形土器で、口縁部文様の様相から大洞ＢＣ式新相ないしは大洞Ｃ１式に位置づけられることから、当土坑の時期は晩期中葉頃と思われる。また、当土坑の埋土は人為的な堆積様相であり、かつ土器の出土状況が特殊であることから、当土坑が晩期の墓坑だった可能性も考慮されるが、確証は薄い。

（3）陥し穴状遺構

調査区からは溝状の陥し穴状遺構23基が検出された。また、前述のとおり土坑に分類した中に底面小穴を有するものが14基含まれている。これらは後述の陥し穴状遺構Ｃ型に類似しており、陥し穴状遺構である可能性が高い。本項では底面小穴を伴う土坑を含めて陥し穴状遺構として扱うこととする。



第61図　陥し穴状遺構形態分類図



第62図　陥し穴状遺構配置図

陷し穴状遺構の形態分類　陷し穴状遺構＝「陥」、土坑＝「坑」、と略す。浅いものも含めた。＊は不確実なもの。

分類		平面形	平面規模	小穴	数	遺構名
A型	A１－１型	溝状	小形 長軸2.5m未満	あり	1	17陥
	A１－２型			なし	9＋ 1？	2陥、7陥、10陥、11陥、12陥、13陥、 14陥、15陥、16陥、＊18陥
	A２－１型		大形 長軸2.5m以上	あり	1	8陥
	A２－２型			なし	11	1陥、3陥、4陥、5陥、6陥、9陥、 ＊19陥、20陥、21陥、22陥、23陥
B型		楕円形			0	
C型		円形		あり	14	11坑、15坑、16坑、18坑、19坑、 23坑、25坑、33坑、34坑、35坑、 36坑、38坑、39坑、41坑

岩手県内の陥し穴状遺構については、瀬川司男氏（瀬川1981）や田村壮一氏（田村1987）がその形態、地域性、時期について検討を加えている。田村1987によれば、陥し穴状遺構は平面形状によって、A型：溝形、B型：楕円形、C型：円形、に分類されている。田村分類を参考として、本遺跡の陥し穴状遺構を平面形で大別し、底面小穴の有無によって細分した（第61図）。

なお、ここでA型に含めた19号陥し穴状遺構については、溝というにはやや幅広であり、B型に近いものかもしれないが、楕円というほどのものでもなく、便宜的にA２－２型に組み入れた。19号陥し穴状遺構をA型とすれば、本遺跡ではB型は検出されていない。A型は、開口部長軸1.2～3.6m・短軸0.2～1.2cm、深さ10～140cmである。第61図は、A型・C型の陥し穴状遺構の断面形をそれぞれ合成したものである。A型については、長軸側断面がフラスコ形、逆台形など若干の差異があり、かつその長さにバラつきがあるものの、3つほどの分布の山を見ることができる。開口部長－底面長で見ると、開口部1.5m－底面1.4m付近、2.5m－2.3m付近、3.4m－3.0m付近である。その一方、短軸断面ではU字形ないしはV字形というある程度の斉一性を示しており、概ね開口部幅が60～70cm、底面幅が30～40cm付近に密な分布を示している。C型では開口部径0.8～2.1m、深さ20～129cmを測り、開口部の形状により全体としてフラスコ形や長方形・逆台形を呈するものがあってやや差異が認められるが、中～下部に着目すると概ね同形態・規模であることがわかる。中部の径70cm、底面径70～80cmほどに分布が集中している。C型については、元々開口部で外傾ないし外反ぎみに開く形だったかもしれないが、上部が崩壊ないしは削剥により失われたものではないかと思われる。

第62図は、調査区の陥し穴状遺構の配置を示したものである。一般に陥し穴状遺構が1基のみ単独で存在することは稀であり、2～7基ほどが纏まって配置されることが多い。本遺跡の場合、中世城館の普請により原地形が改変されており、配置を考える上では不完全ではあるが、ある程度の纏まりを認めることができる。第62図の①～⑩はA・C型それぞれの組み合わせを推定したものである。中世の普請前には、1号堀跡部分がもともと小規模な沢、東西の曲輪部分がこの沢を挟む緩やかな傾斜面（尾根先端部）だったと思われる。溝状のA型については、位置関係や軸方向などから①～⑥のセット関係を想定できる。⑤については約18mと離れているが、軸線がほぼ同じこと、2基の間に数基が存在していた可能性があること（当該部分は普請・削剥が著しい）、からセット関係を想定した。現況の等高線で見ると、①～③・⑤は等高線に対して直交する（傾斜に沿う）配置で、④・⑥は等高線に沿う（傾斜を横切る）配置である。一方、C型については、A型と違って軸方向がわからないこともあってセット関係の想定が難しく、直線的な⑦・⑧・⑩、屈曲した⑨という配置を想定したが、不確実である。これらの配置には、原地形の傾斜度や沢へと降りていく獣道（？）の存在、等が関係しているものと思われる。本遺跡の所在する浄法寺町では、東北縦貫自動車道八戸線建設に伴って安比川右岸丘陵上の遺跡群の発掘調査が行われた。それらの中で第63図に示した広沖遺跡、飛鳥台地Ⅰ遺跡、安比内Ⅰ遺跡、大久保Ⅰ遺跡、桂平（Ⅱ）遺跡（註1）、沼久保（Ⅰ）遺跡（註1）、五庵Ⅲ遺跡、五庵Ⅰ遺跡、田余内Ⅰ遺跡、柿ノ木平Ⅲ遺跡において、A型・C型の陥し穴状遺構が検出されている

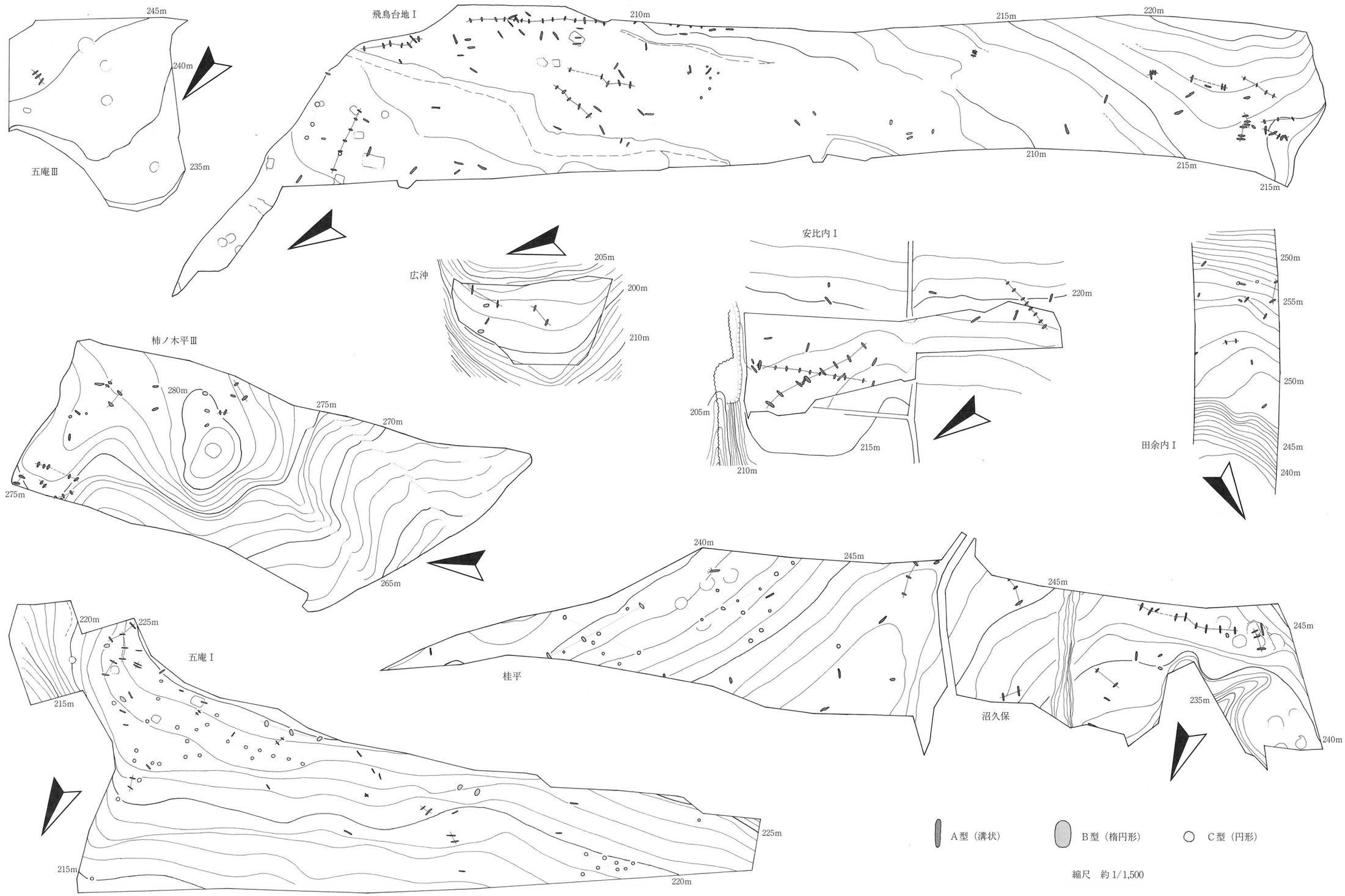
第17表　土坑計測値一覧

遺構名	位置	規模（cm）　△は残存値			重複関係	埋土		備考
		開口部径	底径	深さ	（新＞旧）	堆積様相、混入物	パミス	
1号土坑	5Q	62×158	50×144	22		人為。炭化物粒		
2号土坑	7S	80×138	56×120	32		自然	白・橙	
3号土坑	9T	70×146	49×129	36		自然	白・橙	
4号土坑	9T	48×86	42×79	10	5陥＞		橙	
5号土坑	8V	100×118	85×107	51		自然	白・橙	
6号土坑	8V	104×126	74×105	26		自然		
7号土坑	8V	64×70	38×43	16		人為？		
8号土坑	9V	94×115	81×99	50		自然	白・橙	
9号土坑	8L	66×66	48×56	12		人為？	橙	
10号土坑	9L	△10.7×11	△6.6×9.8	42		人為		
11号土坑	9M	△11.6×20.0	△9.0×14.8	24	22坑＞	？		
12号土坑	13N	176×232	98×148	26		自然。焼土、炭化物粒		
13号土坑	13H	28	70	48		自然	白・橙	
14号土坑	19I	△168×242	△176×186	50		人為？底面に土器	白・橙	墓坑？
15号土坑	6Q	78×82	64×69	26		自然	白・橙	底面中央に小穴
16号土坑	7P	82×88	72×74	46		自然	橙	底面中央に小穴
17号土坑	8O	72×86	62×66	84		自然		
18号土坑	8O	126×156	80×82	108		自然	白・橙	底面中央に小穴
19号土坑	7O	76×80	68×72	20		自然	白・橙	底面中央に小穴
20号土坑	8N	80×94	60	106		自然		
21号土坑	8N	120×124	64×72	112		自然	白・橙	
22号土坑	9M	88×108	75×78	137	＞11坑	自然	橙	底面中央に小穴
23号土坑	10N	141×200	106×114	129		自然	白・橙	底面中央に小穴
24号土坑	11M	73×76	64	33		自然	白・橙	
25号土坑	11M	90×109	72×81	103		自然	白・橙	底面中央に小穴
26号土坑	11P	90×92	69×71	107		自然	白・橙	
27号土坑	11P	98×106	64×69	102		自然	白・橙	
28号土坑	13O	97×106	79	106		自然	白・橙	
29号土坑	13O	112×117	80×88	79		自然	白・橙	
30号土坑	13P	91×93	66×67	87		自然	白・橙	
31号土坑	13S	90×97	72×78	78		自然	白・橙	
32号土坑	14H～14I	75×78	68×72	73		自然	白・橙	
33号土坑	15I	116×133	114×116	88		自然	白・橙	
34号土坑	16G	112×120	66×70	114		自然	白	底面中央に小穴
35号土坑	17G	100×107	72×73	118		自然	白・橙	底面中央に小穴
36号土坑	16H	101×123	80×81	100	21陥＞	自然	白・橙	底面中央に小穴
37号土坑	17F～17G	114×132	78×80	158	22坑＞	自然	白・橙	
38号土坑	18G	42	54×62	95	22坑＞	埋土不明	不明	底面中央に小穴
39号土坑	18E	119×135	76×85	116		自然	白・橙	底面中央に小穴
40号土坑	18F	100×102	74×80	113		自然	白・橙	
41号土坑	18F	95×99	55×57	105		自然	白・橙	底面中央に小穴
42号土坑	19J	108×121	67×81	116		埋土不明	白・橙	

＊底面中央に小穴を持つものは円筒形陥し穴状遺構となる可能性有り

第18表　陥し穴状遺構計測値一覧

遺構名	位置	規模（cm）　△は残存値			重複関係	埋土	長軸方向	備考
		開口部径	底径	深さ	（新＞旧）	パミス・混入物	（Nから）	
1号陥し穴状遺構	6O～7O	22×305	16×289	10		白	22° W	底面のみ残存
2号陥し穴状遺構	7Q～8Q	16×185	6×175	15		8	2° E	底面のみ残存
3号陥し穴状遺構	9R	38×322	8×312	53		地山ブ	30° E	
4号陥し穴状遺構	9T～10T	28×317	9×308	42		橙	44° W	
5号陥し穴状遺構	9T	22×266	13×270	28	＞4坑	橙	35° W	
6号陥し穴状遺構	9N	73×355	18×401	102		白・橙	70° E	
7号陥し穴状遺構	9P～10P	70×225	29×206	91		橙	9° E	
8号陥し穴状遺構	10Q	58×265	20×253	69			16° E	底面に小穴5
9号陥し穴状遺構	10R	35×252	19×218	27		橙	14° E	
10号陥し穴状遺構	10S～11S	27×234	13×217	27		橙	23° W	
11号陥し穴状遺構	10T	23×124	14×120	10		橙	38° W	
12号陥し穴状遺構	10U	11×120	－	9		橙	23° W	底面のみ残存
13号陥し穴状遺構	13O～14O	47×184	35×172	41		白・橙	14° E	
14号陥し穴状遺構	13P～14P	58×210	37×210	52		白・橙	1° W	
15号陥し穴状遺構	13P～14P	44×162	33×152	60		白・橙	0°	
16号陥し穴状遺構	13Q	55×169	30×155	76		橙	32° W	
17号陥し穴状遺構	13R	58×145	25×119	58			48° W	底面に小穴？
18号陥し穴状遺構	17P	21×△216	12×△205	26		白	53° E	
19号陥し穴状遺構	13M～14M	119×227	35×204	87		白・橙	61° E	
20号陥し穴状遺構	14M	77×274	8×290	114		白・橙	36° E	
21号陥し穴状遺構	16H～17H	42×294	16×316	89	＞36坑	白・橙	1° E	
22号陥し穴状遺構	18F～18G	62×337	18×338	141	＞37・38坑	白・橙	90° W	
23号陥し穴状遺構	18G～18H	41×293	13×300	94		白・橙	74° E	



第63図　岩手県北部における陥し穴状遺構集成図

（註２）。これらの遺跡の陥し穴状遺構の配置については、田村1987において既に指摘されているが、想定される組み合わせ関係を図示した（第63図）。遺跡によって調査部分の位置や面積が異なることで遺構数の多寡があり一概には言えないが、各遺跡の陥し穴状遺構は一定の纏まりを示していると解される（註３）。Ａ型の陥し穴状遺構については、飛鳥台地Ⅰ遺跡、安比内Ⅰ遺跡、沼久保遺跡で８～12基の並列的配置の様相が示されている。一方、Ｃ型が顕著なのは五庵Ⅰ遺跡、桂平遺跡で、３～６基の直線または弧状配置が見られる。また判然としないが三角形配置と思われるものもある。Ａ型・Ｃ型ともに、傾斜に対しての配置・位置関係には規則性は見られず、それぞれの地形に応じたものと思われる。本遺跡の陥し穴状遺構の配置状況も、従前の調査成果と同傾向を示す事例である。

本遺跡検出の陥し穴状遺構からの出土遺物は皆無であり、縄文時代という以上に具体の所属時期を明らかにし得ない。先学によるこれまでの調査成果によれば、この両者には時期差があると考えられており、Ａ型は縄文中期末～後期前葉、Ｃ型は前期前葉以前（中掫浮石降下以前）、とされている（田村1987）。本遺跡でも、Ａ型とＣ型の重複が、Ａ型・21号陥し穴状遺構－Ｃ型・36号土坑、同じく38号陥し穴状遺構－37号土坑、で見られる。いずれも前者が後者を截っており、Ａ型がＣ型よりも新しいことは確実であり、これまでの見解を裏付けるものといえる。

註

１）桂平遺跡・沼久保遺跡は町道を挟んで続くほぼ同一の遺跡であり、昭和59・60年に岩手県埋文が調査を行った。この調査時点では遺跡名が「桂平遺跡」、「沼久保遺跡」とされているが、現在の遺跡登録ではそれぞれ「桂平Ⅱ遺跡」、「沼久保Ⅰ遺跡」となっている（浄法寺町教委1996など）。

２）上記の他、海上Ⅰ遺跡・海上Ⅱ遺跡ではＢ型の陥し穴状遺構が複数検出されている。なお、浄法寺を含めた県北地区のＢ型陥し穴状遺構のうち埋土上位に白色パミスが堆積している事例があり、当該パミスは分析によって十和田ａ降下火山灰と同定されている。昭和60年代ころまでは、この事象は埋没しきっていない遺構に十和田ａ火山灰が堆積したもので、遺構自体の所属時期は縄文時代であると解釈されることも多かった。田村壮一氏は田村1987において、これら十和田ａを伴う一群（田村分類Ｂ１型）の陥し穴状遺構を弥生時代～平安時代のものとの見解を示した。このＢ１型陥し穴状遺構は岩手県南部でも少数検出されていたが、県南地域では十和田ａ火山灰が希薄なため、従来、良好な史料を欠いていた。しかし、平成17年度に当センターが調査を行った奥州市（旧・胆沢郡胆沢町）宮沢原下遺跡（岩手県埋文2006、2006年度本報告予定）において、十和田ａ火山灰を伴うＢ１型陥し穴状遺構が多数検出され、当該地域における事例が飛躍的に増加することとなった。とりわけ、同遺跡では十和田ａ火山灰が埋土下位～底面付近に堆積している事例があり、Ｂ１型の所属時期が平安時代まで下る可能性が高いことが示唆されている。

３）安比川左岸側での調査事例は少ないが、町教委で調査を行った上杉沢遺跡や野黒沢Ⅷ遺跡では晩期の集落跡が確認されているが、陥し穴状遺構は検出されていない。安比川右岸は北西～北向きの傾斜地が多く、日照条件は良くない。一方、左岸は稲庭岳裾野の緩くなだらかな丘陵が連続しており、集落を営む上で好条件である。これらのことから、安比川の右岸と左岸では利用のされ方がやや異なっているのかもしれない（右岸には狩場が多く、左岸には大規模な集落）。いずれ、今後、左岸の調査事例が増えることにより明らかになっていくものと思われる。

参考文献

岩手県埋文　2006　「宮沢原下遺跡」（概報）『平成17年度発掘調査報告書』第490集
瀬川司男　1981　「陥し穴状遺構について」『紀要Ⅰ』岩手県埋文
田村壮一　1987　「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要Ⅶ』岩手県埋文

２．中　　世

（１）歴史的環境

本項では、今回調査の主体である中世城館に関わって、中世における三戸・二戸地方、「糠部（ぬかのぶ）諸郡」の情勢について浄法寺氏を軸として概観する（註１）。

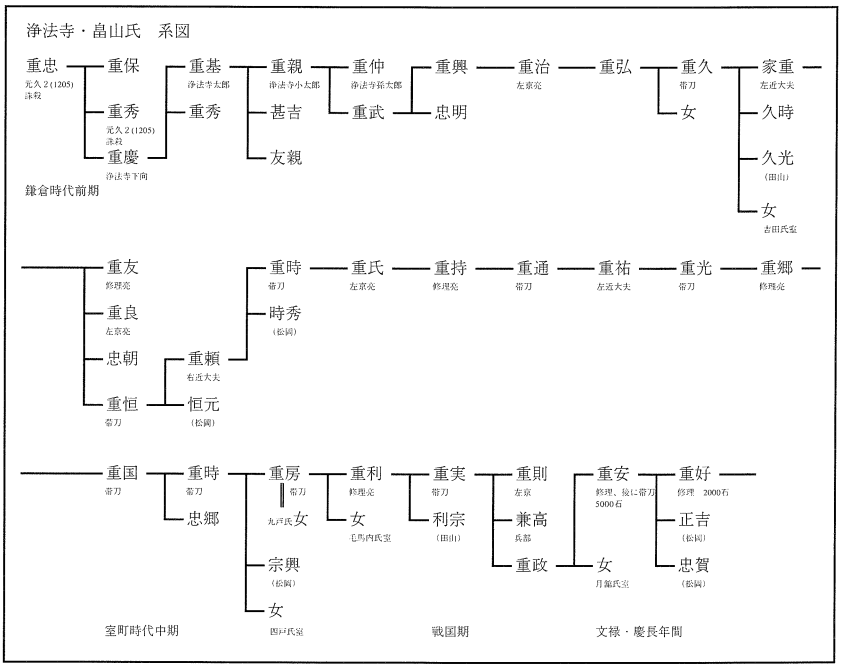
〔中世糠部の情勢と浄法寺氏〕

中世の浄法寺は、その名の由来となった浄法寺氏の支配地となっていた。浄法寺氏の出自については、奥州藤原氏滅亡後に浄法寺に所領を得た畠山氏が祖とされており、伝承によれば13世紀初めに畠

山重慶が“浄法寺”姓を称したことに始まるとされる。元久２（1205）年、畠山重忠・重秀は「事に座して」誅殺された。重秀の弟・重慶坊は日光へ逃れて、天台宗の修験となって大夫阿闍梨を称し、後に浄法寺へ下向した。この重慶の子・重基が“浄法寺太郎”を称して、応永年間（1394～1428年）ころに南部13代・守行の家臣となったと伝えられている。経緯の真偽はともかく、以後、浄法寺氏は三戸南部氏の配下として、また一方で鹿角氏・田山氏・松岡氏・四戸氏・毛馬内氏らと血縁関係を持つことで、南北朝動乱期から戦国時代までを生き残り、三戸南部氏の有力家臣としての地位を得ていったらしい。ただし南部配下とはいっても、浄法寺氏はある程度独立した存在だったようである。浄法寺には南部一門の所領が存在していないこともそれを傍証している。この間、南部氏は、田名部の蠣崎氏、鹿角の秋田氏、岩手郡滴石（雫石）の戸沢氏らを攻めて領地を奪い、稗貫氏・煤孫氏らを討って和賀を平定、さらに津軽を攻略、陸奥における勢力を急速に伸ばしている。

天正10（1582）年、三戸南部24代晴政・25代晴継が相次いで死去すると、後継者を巡り一族・重臣の対立が激化し、後継者を決める重臣会議が開かれたが、南部氏配下の大身となっていた浄法寺修理重安もこれに参加している。九戸城主・九戸政実を推す声が大勢であったが、結果的には、南部一門の最長老である剣吉館主・北信愛（松斎）が強く推挙した田子（南部）信直が三戸南部26代宗主に決まった。三戸城（第３図18；以下同様）に入った南部信直は離反した大浦氏に津軽を奪われたものの、滴石・志和（紫波）を制圧してその勢力圏を北上川中流域へと南下させていった。

天正18（1590）年、豊臣秀吉の小田原城攻めに参陣した南部信直は、秀吉から「南部七郡」（糠部・鹿角・岩手・志和・閉伊・和賀・稗貫；異説あり）の領地を安堵された。秀吉の派遣した仕置軍の前に小田原参陣しなかった和賀氏・稗貫氏らは降伏、所領を没収され、北上川中流域は名実ともに南部領地となった。しかし、「奥州仕置」により領地を奪われた和賀氏と稗貫氏は領地奪還を図って蜂起し（和賀・稗貫一揆）、翌天正19（1591）年には信直への対立を深める九戸政実が、櫛引氏・七戸氏・久慈氏ら反信直諸氏を率いて挙兵した。政実は、櫛引清長に苫米地城（青森県南部町）、七戸家国に伝法寺城（十和田市）（註２）を攻めさせた。対する信直は、月舘館（96）に布陣して九戸勢と交戦し、九戸方の一戸城（83）を陥れて、北秀愛を城主として守らしめた。秀愛は一戸城奪還を図る政実の猛攻によく耐え、一戸城を死守した。しかしこの時、南部一門の半ば以上が信直に叛旗を翻す情勢となっており、信直麾下の旗本以外の外様諸将は形勢を傍観した。宗主重安が信直派である浄法寺氏内部でも九戸方に組する者が続出し、浄法寺重好（重安の長子）の「弟」とその家臣・浄法寺主膳は、負傷した北秀愛に代わって一戸城を守備していた重好を欺いて一戸城を奪い（註３）、一門の吉田氏・福田氏らは九戸方に寝返ったらしい（註４）。



第64図　浄法寺氏系図

一戸城を奪われた南部信直は四戸（金田一城；41）に引いて九戸勢と交戦したが、情勢は九戸方優勢となりつつあった。一揆と政実派への対応に苦慮した信直は豊臣秀吉に救援を要請し、秀吉は関白豊臣秀次を総大将とする奥州再仕置軍を派遣した。４万人超の奥州再仕置軍は和賀の二子城を攻め落とし、和賀一揆を鎮圧、北上して九戸へ向かった。九戸方は、浄法寺を経由して九戸へ向かっていた秋田氏や出羽・小野寺氏の仕置軍合流を阻止するため「浄法寺口」で襲撃したが敗退、政実をはじめ九戸方の一族郎党が九戸城（53）に立て籠もった。津軽の大浦氏、松前氏らを加えた６万人の仕置軍は九戸方の姉帯（あねたい）城（88）・根反（ねそり）城（86）・一戸城を陥れて九戸城へ迫る。この時、浄法寺修理重安は信直方として参陣し、浅野長政軍に属していた。九戸城を包囲し力攻めに出た仕置軍に対して、篭城する少数の九戸勢は夥しい戦死者を出しつつも抗戦した。地理の不案内、兵糧の不足、疫病の流行などにより仕置軍は戦術を転換し、九戸氏菩提寺である長興寺の僧薩天を使者として、子女の助命を条件として降伏を勧告した。「衆寡敵せず」と悟った政実は降伏開城したが、政実の一族および子女はことごとく撫で斬り、あるいは二の丸に押し込められて焼き殺された。政実は浅野長政により三迫（宮城県栗原郡）の豊臣秀次本陣へ護送され、当地で処刑された。

重安は所領５千石（一説には６千石）を有して安比川流域・鹿角・田山まで支配を広げ、九戸の乱に際しては、南部一族の浪岡城代・楢山帯刀義実、月館隠岐、勘五郎らとともに終始信直支持の立場をとった。その結果、浄法寺重安は、客分ではあるが南部家臣団の中において八戸氏・北氏に次ぐ確固たる地位を築いた。

慶長５（1600）年９月、秋田の仙北小松川（平鹿郡山内村）に逃れていた和賀氏の遺児・和賀忠親が旧臣を集め、稗貫勢とともに花巻城を襲い、次いで岩崎城に立て籠もった（岩崎一揆、慶長の和賀・稗貫一揆）。10月、南部利直は岩崎城攻めのため出陣、岩崎城西にある兵庫館を本陣として岩崎城を攻めたが、籠城する和賀勢の守りが固く、かつ大雪に見舞われたため利直は春まで攻撃を延期することとして花巻城へ引き上げた。「浄法寺修理」（重好か）は、岩崎城監視役として残留・越冬を命ぜられたが、後に修理が密かに浄法寺に戻って監視の務めを怠っていたことが発覚した。権勢を誇っていた浄法寺氏であるが、利直の命に叛いたこの行動により所領没収、家取り潰しとなったのである。

（２）中世城館跡の分布

前項で述べた時代背景を踏まえて、現在の岩手県二戸郡から青森県三戸郡にかけての中世城館分布を見ると、旧街道や河川沿いに実に多くの館跡が存在していることがわかる。第65図に当地域における144箇所の城館跡および中世遺跡を示した（註５）。

当地域には馬淵川が南から北へと貫流し、その支流である安比川・十文字川・白鳥川・海上川・熊原川等が合流している。平野の少ない当地域ではこれらの川筋に沿って街道が敷かれている（註６）。盛岡から北に延びる奥州街道（奥州道中）は一部山間へ入る部分もあるものの、現在の国道４号の路線と重なっている。街道は、分水嶺の中山峠を越えて一戸中心部から鳥越を経て現二戸市街地に入り、金田一へと北上する。川口集落を経て、馬淵川がＵ字形に曲流する舌崎を右に、釜沢館（35）を左に見つつ、難所「蓑ヶ坂（みのがさか）」を登って中世における南部宗家の根拠地・三戸へと至る。街道はさらに南部氏入府の地・現南部町へと入り、市街北の丘陵を経てへと延びている。この奥州街道には各方面への脇街道が連結しており、図幅内に示したものでは三戸街道（八戸～三戸）、田子街道（鹿角街道？；三戸～田子～鹿角）、八戸街道（二戸～軽米～八戸）、「鹿角街道」〔浄法寺街道？；二戸～浄法寺～：鹿角街道（盛岡～鹿角）に連結〕、「浄法寺街道」（一戸～浄法寺）などがある（註７）。

図示したとおり、中世城館の分布には「南部・三戸」、「二戸・一戸」、「浄法寺」という三つの中心

地域がある。16世紀代における三戸南部氏の根拠地である青森県南部町・三戸町には、聖寿寺館（本三戸城）（7）や三戸城を中心に大規模な城館が集中している。一方、南部信直と対立した九戸勢の館は、九戸氏居城の九戸城や一戸城、姉帯城、五月館（90）などが、現在の一戸町から二戸市の奥州街道沿いに纏まって位置している。南部信直と九戸氏を中心とする反信直勢の対立情況の中、安比川流域を支配地としていた浄法寺氏は地理的には九戸勢力圏の側面を衝く位置にあり、三戸南部の対九戸戦略の前線として重要な地域だったとも考えられる（註8）。かかる軍事的緊張状況を背景とするためか、浄法寺町内には館跡が多く、これまで27箇所の城館が確認されており、これに本遺跡の館を加えると28の城館が町内に存在していたこととなる。浄法寺の館は安比川沿いの谷底平野が眺望できる高位の段丘面に点在している。浄法寺には二戸・一戸方面と花輪・鹿角方面を結ぶ「鹿角街道」が通り、さらに天台寺南側を通過し、山中を抜けて出ル町を経由して一戸城へと至る「浄法寺街道」もある（註9）。浄法寺城（121）を中心とするこれらの館はその街道沿いに配置されていたようである（註10）。これらの城館については文献史料が乏しく、館主の伝承残るものも少ない。いくつかの館について、浄法寺氏配下の吉田氏・松岡氏・漆沢氏・大森氏・大清水氏らの名が伝えられており、二戸・一戸方面と鹿角方面との交通の要衝である安比川流域を支配していく中で、街道の抑えとして浄法寺氏が一族・郎党を配したものだった可能性がある。浄法寺の狭い河谷は長渡路・八幡館・滝見橋・大清水付近でその幅が極端に狭まり天険要害をなし、その要所に館が置かれており、全体として難攻易守の形勢となっている（註11）。ところで、天正20（1592）年、豊臣秀吉の命により南部領内の48城中、一戸城・姉帯城・金田一城・古軽米城など36城が破却された。この時浄法寺城も廃城となっており、町内に分布するこれらの館跡の多くはこの時点で破却されたものと思われ、本遺跡の城館が機能した時期の下限もここに置かれるものと思われる。ただし現時点では、それらの城館のうち、調査が行われたものは浄法寺氏居城である浄法寺城、吉田館（114）および本遺跡（112）のみであり、明確に証明された訳ではない。

（千葉正彦）

註

1）南部氏の動向を記述するにあたって、『岩手県史　第3巻』（岩手県1961）、『浄法寺町史』（浄法寺町1997）、『和賀一族の興亡』（北上市立博物館1996）等を全般的に参照した。

2）前掲『岩手県史　第3巻』（831頁）では七戸家国が攻めたのは「伝法寺城」である、としているが、『南部史要』（1998、第5版、52頁）には「浄法寺城」とある。ここでは前者に拠る。

3）『南部史要』（52頁）には「･･･公〔引用者註：南部信直〕は九戸、一戸の連絡を断て急に一戸城を攻めてこれを陥れ、･･･（略）･･･東朝政、浄法寺重好をして代りて守らしむ、然るに重好の弟某及びその臣浄法寺主膳なるもの政実に応じて朝政、重好を欺てこれを追ひ同城に拠りて反旗を飜す、公の軍これを攻むるも頑強に抵抗し、戦う毎に利あらず、･･･（後略）」とある。つまり、浄法寺重好の「弟」は兄が任されていた一戸城を奪取した形であり、浄法寺氏一族の内紛を象徴している。なお「重好」ではなく「重安」とする史料もある。

4）『南部諸城の研究』（沼舘1981）によると、松岡・吉田・荒谷・駒ヶ嶺・福田の諸氏が九戸陣営に組みして、出羽勢の九戸侵攻を妨害した、とされている。しかし、築部1971では吉田氏は九戸側に立たなかったとされており、反信直に組みした「吉田」氏が吉田館に拠る浄法寺一門の吉田氏なのか、明らかではない。あるいは吉田一族内でも立場の違いがあり、一部が九戸方となった可能性がある。他氏についても同様。諸説あり、このあたりの事情は判然としない。

5）抽出に際して複数の文献を参照したが、文献による記載の有無があるもの、名称のみで内容不詳なものもあるが、それらの「館」も便宜的に一括して示している。

6）街道の道筋は、『岩手県「歴史の道」調査報告』（岩手県教委1979・1980・1981）、『奥州街道』（2002）、『北奥路程記』（岩手県文化財愛護協会2002）、『二戸郡誌』（1977）等を参照し、一部については推定の上、作図した。

7）街道の名称については、それぞれの地域で異なっており、一定していない。多くの場合、その道の最終目的の地名を冠して呼ばれることが多いようである。例えば、八戸から三戸へと延びている「三戸街道」は、八戸から見て最終到達地点である三戸の名を冠して呼ばれ、三戸から鹿角へ辿る道は「鹿角街道」と呼ばれる。しかし、逆に秋田側では鹿角・三戸間の道を「奥筋往来」や「三戸往来」という名称で呼んだらしい。「三戸～鹿角」、「二戸～浄法寺～曲田」、「盛岡～曲田～田山～鹿角」といった複数の街道がそれぞれの地域でいずれも「鹿角街道」と呼ばれたようであり、「浄法寺街道」も「一戸～浄法寺」、「二戸～浄法寺～曲田」のいずれを指すのか、史料により異同がある。

第19表　三戸郡・二戸郡における中世の遺跡・館跡

※ 第65図と対応

No	館名・遺跡名	所在地	備考（城主・遺構等）
1	天王沢館	新郷村	
2	蝦館	新郷村	
3	蛇沼館	三戸町	館主：蛇沼惣左衛門
4	貝守館・横館	三戸町	館主：貝守弥七郎。横館は出城。
5	小向館	南部町	天正年間、館主：小向小四郎
6	馬場館	南部町	天正６（1578）年、南部信直が築城。館主：馬場市右衛門
7	聖寿寺館（本三戸城）	二戸市（旧浄法寺町）	南部11代信直～24代晴政居城。天文８年家臣の放火により焼失。
8	佐藤館	南部町	館主：佐藤氏
9	平良ヶ崎城	南部町	建久３（1192）年、南部初代光行が築城
10	大向館	南部町	南部氏居館
11	蝦夷館	南部町	南部氏居館
12	中山館	南部町	南部氏居館
13	赤石館	南部町	天正年間（1573～92年）。館主:桜庭安房の居館。
14	相内館	南部町	建久２（1191）年。南部光行の仮陣屋。「一夜堀」の伝承あり。
15	上名久井館	南部町	館主：名久井（工藤）氏→東氏（南部一門）？
16	川守田館	三戸町	館主：川守田正応。平場，堀。
17	泉山館	三戸町	館主:泉山古康（南部信直の舅）。堀。
18	三戸城	三戸町	南部26代信直が完成。16世紀後半以降，南部宗家の居城。
19	梅内館	三戸町	館主：梅内氏（北氏一族）。
20	金堀館	三戸町	館主：石沢善三郎。
21	京兆館	三戸町	館主：岩館右京？
22	目時館	三戸町	館主：目時筑前。
23	豊川館	三戸町	館主：豊川又右衛門。
24	斗内館	三戸町	館主：斗内氏。
25	日ノ沢館	田子町	館主：日ノ沢弥左衛門？平場、堀。
26	種子館	田子町	館主：種子陣左衛門。
27	馬場館	田子町	館主：佐々木氏？
28	清水頭館	田子町	
29	田子館	田子町	館主：佐々木惣左衛門。南部信直、宗家継承前の居所。
30	蝦夷館	田子町	
31	相米館	田子町	館主：相米氏。
32	原館（工藤館）	田子町	館主：原氏。
33	石亀館	田子町	館主：石亀氏。
34	茂市館	田子町	館主：茂市惣七。
35	釜沢館	二戸市	館主：小笠原（釜沢）氏。九戸の乱で落城。岩埋文調報455・490集。
36	海上館	二戸市	堀切。
37	月折館	二戸市	堀切、平場、空堀。
38	荒谷館	二戸市	堀切。
39	野々上館	二戸市	堀切。
40	下山井館	二戸市	
41	四戸館（金田一城）	二戸市	堀、曲輪、土塁。
42	沖Ⅰ	二戸市	竪穴建物跡１。岩埋文調報152集。
43	八ツ長Ⅱ	二戸市	竪穴建物跡７。岩埋文調報168集。
44	堀野館（小四郎館）	二戸市	空堀、平場。館主：堀野氏。
45	長瀬Ｄ	二戸市	竪穴建物跡１。岩埋文調報22集。
46	長瀬Ｃ	二戸市	竪穴建物跡。岩埋文調報22・51集。
47	佐々木館（米沢館）	二戸市	館主：佐々木氏。堀。
48	沢内Ｂ	二戸市	竪穴建物跡４。岩埋文調報７集。
49	家の上	二戸市	竪穴建物跡１。岩埋文調報35集。
50	米沢（エンダテ）	二戸市	岩埋文調報376・402集。
51	下村	二戸市	竪穴建物跡３、掘立柱建物（中・近世）。岩埋文調報323集。
52	中曽根	二戸市	二戸市教委調査。
53	九戸城	二戸市	九戸氏居城。曲輪、堀、土塁、建物跡など。二戸市教委調査。
54	在府小路	二戸市	掘立柱建物跡、溝跡，陶磁器。九戸城関連。二戸市教委調査。
55	橋場	二戸市	土塁（損壊;九戸城土塁の一部）。二戸市教委調査。
56	村松館	二戸市	
57	坂本館（白鳥館）	二戸市	曲輪、堀。
58	諏訪間	二戸市	鎌倉時代の居館跡。堀、塀、橋。岩埋文調報394集、二戸市教委調査。
59	石切所館	二戸市	平場、堀。
60	上里	二戸市	竪穴建物跡１、堀。岩埋文調報55集。石切所館と関連か。
61	蒼前館	二戸市	堀。
62	根森館	二戸市	堀、平場。
63	根森松屋敷館	二戸市	堀，平場。
64	下斗米間	二戸市	曲輪、堀。館主：下斗米氏。
65	上斗米古館	二戸市	
66	田中館	二戸市	館主：田中館正孝。曲輪、堀。
67	上斗米館	二戸市	館主：上斗米氏。
68	前田館	二戸市	
69	米田館	二戸市	曲輪、堀。
70	足沢館	二戸市	館主：足沢氏（南部一門）→九戸の乱直前、浅野家家臣・浅野重吉居館。
71	本田館	二戸市	
72	楢館	二戸市	堀、平場。
73	似鳥館	二戸市	館主：似鳥左近。九戸方。
74	大向館	二戸市	
75	福田館	二戸市	館主：福田主計。九戸方。
76	鳥越館	一戸町	
77	八木沢館	一戸町	曲輪。
78	樋ノ口館	一戸町	複郭。
79	小滝館	一戸町	曲輪、腰曲輪、堀。
80	西法寺館（マ館）	一戸町	館主：西法寺氏。九戸方。複郭，堀。
81	松嶺館	一戸町	
82	楢山館	一戸町	館主：楢山氏。九戸方。曲輪、堀。
83	一戸城	一戸町	北館、八幡館、神明館、常念館の総称。館主：一戸氏。一戸町教委調査。
84	野田館	一戸町	
85	上野（上野Ｂ）	一戸町	帯曲輪、竪穴建物跡。岩埋文調報359集、一戸教委調査。
86	根反館	一戸町	館主：根反弥左衛門。平場、堀。
87	老ヶ館	一戸町	曲輪、腰曲輪、竪堀。
88	姉帯城	一戸町	館主:姉帯兼政（九戸氏一族）。天正19年落城。一戸町教委調査。
89	五月館（小鳥谷城）	一戸町	館主：小鳥谷摂津（九戸の乱で姉帯城に篭城）。岩埋文調報424集。
90	新舘林館Ⅱ	一戸町	
91	女鹿館	一戸町	館主：女鹿長俊。曲輪、腰曲輪、堀。
92	女鹿沢内館	一戸町	
93	中里館	一戸町	館主：中里大粥。複郭、堀。
94	小友館	一戸町	曲輪、堀。館主：月舘氏。浄法寺氏一族の居館とも云われている。
95	半在家館	一戸町	
96	月舘館	一戸町	館主：月舘隠岐左衛門。複郭、二重堀。
97	樋投館	一戸町	単郭、平場、堀。
98	月館中坪Ⅱ	一戸町	陶磁器、単郭、堀、土塁。
99	内ノ沢館	一戸町	
100	家向館	一戸町	
101	岩清水館	一戸町	単郭、三重堀。
102	出ル町館	一戸町	館主：出町与次郎。曲輪、堀。
103	川又館	浄法寺町	
104	長渡路館	浄法寺町	
105	エゾ館	浄法寺町	
106	長流部館	浄法寺町	

No	館名・遺跡名	所在地	備考（城主・遺構等）
107	漆沢館	浄法寺町	館主：漆沢氏。
108	宮沢館	浄法寺町	
109	松岡館	浄法寺町	館主：松岡尾張（浄法寺一門）。
110	コアスカ館	浄法寺町	
111	飛鳥台地Ⅰ	浄法寺町	竪穴建物跡３。岩埋文調報120集。
112	舘Ⅱ	浄法寺町	曲輪、堀・大溝、土塁、竪穴建物跡，掘立柱建物跡など。報告遺跡。
113	不動館	浄法寺町	堀、土塁。舘Ⅱ遺跡と隣接。
114	吉田館	浄法寺町	館主：吉田兵部。町教委調査。
115	荒谷館	浄法寺町	館主：荒谷孫右衛門。
116	江牛館	浄法寺町	
117	小船向館	浄法寺町	
118	アイヌ館	浄法寺町	
119	里川目館	浄法寺町	
120	田子内館	浄法寺町	
121	細田向館	浄法寺町	
122	深堀館	浄法寺町	
123	浄法寺城	浄法寺町	浄法寺氏の居城。曲輪、堀、掘立柱建物など。町教委調査。
124	太田館	浄法寺町	太田氏（浄法寺氏一門）。
125	太田向館	浄法寺町	

No	館名・遺跡名	所在地	備考（城主・遺構等）
126	上杉沢館	浄法寺町	
127	小杉沢館	浄法寺町	
128	タテシロ館	浄法寺町	
129	大森館	浄法寺町	館主：大森氏。梁部1971・文化庁1984等に記載。現台帳に登録なし。
130	小泉館	浄法寺町	
131	下谷地館	浄法寺町	
132	大清水館	浄法寺町	館主：大清水氏。
133	五庵Ⅱ	浄法寺町	竪穴建物20、住居状２、掘立柱建物１。岩埋文調報94集。
134	五庵Ⅰ	浄法寺町	竪穴建物跡。岩埋文調報97集。
135	駒ケ嶺館	浄法寺町	駒ケ嶺氏（浄法寺氏一門）。
136	下藤館	浄法寺町	
137	下ノ田館	安代町	
138	北ノ城館	安代町	堀。岩埋文調報438集。
139	八幡館	安代町	
140	五日市館	安代町	
141	目名市館	安代町	
142	有矢野館	安代町	竪穴建物跡。岩埋文調報303集。
143	上の山館	安代町	
144	小屋畑館	安代町	竪穴建物跡。岩埋文調報40集。

8）個々の中世城館の城主とその立場が判明している訳ではなく、三戸・九戸両陣営が具体にどの程度の勢力圏を有したのかはわからない。例えば、前述のとおり、浄法寺宗主・重安が一貫して信直派だったのに対し、一族の吉田氏や福田氏らが九戸方についていた事実があり、各地域で両陣営の館が混在する状況だったものと思われる。

9）註７）参照。『二戸郡誌』（1977）によれば、「浄法寺街道」とは、一戸と浄法寺を結ぶ街道で、一戸・鳥海から浄法寺御山へ越えて浄法寺宮沢で鹿角街道（現・県道二戸五日市線）へ合流するものである。全長三里二十九町（約14.86km）、幅二～四間（約2.6～7.3m）の大道で、菅江真澄が一戸へと辿った道である。一方、『北奥路程記』では、二戸福岡から荒屋曲田（現八幡平市）へ至る、全長８里34町（34.91km）、幅員２間（2.6m）の道、現在の県道を「浄法寺街道」と称している（岩手県教委 1981）。ここでは、江戸時代の絵図の記載等を参照して、前者の説を採って便宜的に浄法寺街道と呼ぶこととする。なお、この「浄法寺街道」沿いには、月舘館（96）、岩清水館（99）、中里館（93）、小友館（94）など多くの城館が配置されており、浄法寺を経由して鹿角方面と一戸・二戸方面を結ぶ当街道の重要性が窺い知れる。

10）荒谷館（115）、江牛館（116）、太田館（124）、上杉沢館（126）など、館跡が密集している浄法寺の芦名沢・多々良沢の沢筋にも、田子・鹿角方面や田子方面へと繋がる道が存在していたであろう。絵図等では正確なルートが読み取れないものの、現道とそれほどのズレはないものと思われる。

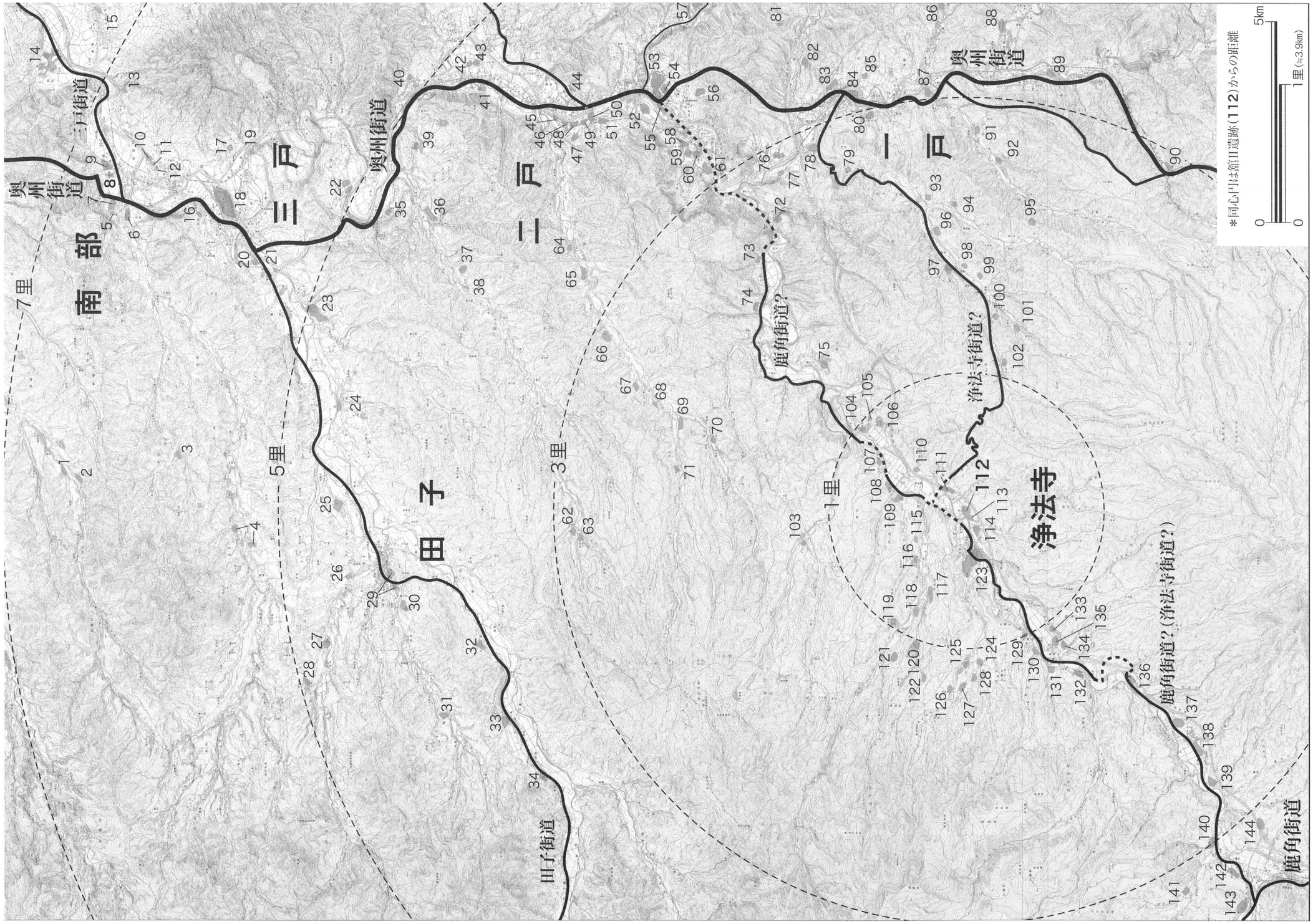
11）沼舘、前掲書、197～198頁。

（３）発掘調査から得られた知見

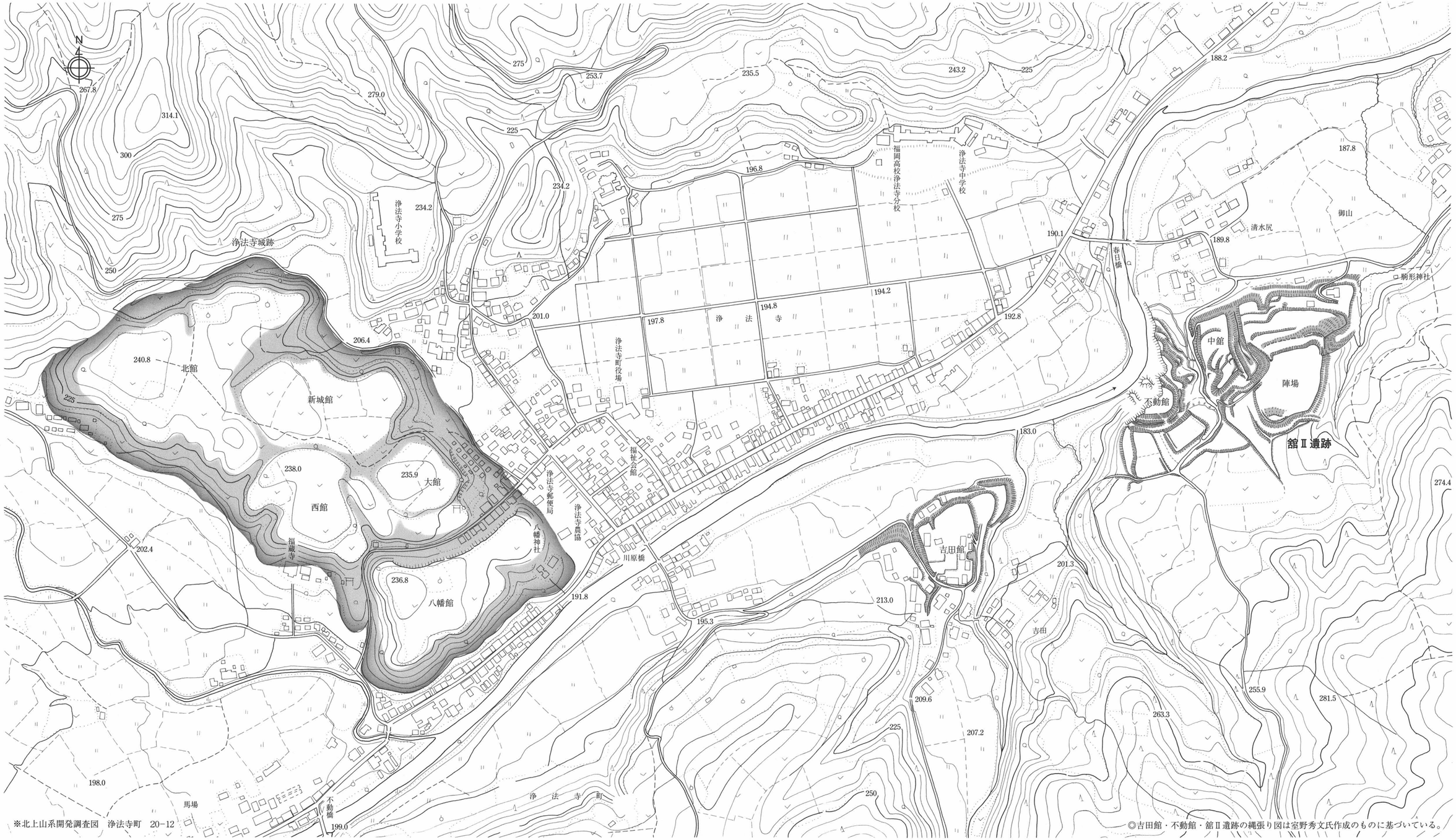
〔縄張り（第69図）〕

舘Ⅱ遺跡は、蛇行しながら北東流する安比川右岸の沖積地に対して張り出す北向きの丘陵上に立地し、標高は209～221mを測る。館跡は、丘陵尾根の先端部を利用してつくられた山城で、東西両側は谷地形を利用し、南端は尾根を横断する堀で区画防御する構えとなっており、全体の規模は東西約250m、南北約300mの範囲に及ぶ。曲輪と堀を含めた面積は約75,000m²である。縄張りは東西２つの曲輪で構成され、今回の調査区は東側曲輪の北西隅から西側曲輪の北半部緩斜面上にかかる。

東側曲輪（陣場）：東側曲輪の頂上部には山城の中心となる平坦地があり、現在は墓地・畑地となっている。北方にあたる斜面下方にはこれらを取り囲むように階段状の平坦地群(註１）が配置され、通路が各平坦地を繋ぐ。これらの平坦地群は北東側を自然の沢状の落ち込みにより、北西側を堀跡群により限られている。北側は幾重にも巡らされた平坦地群により比較的守りが堅いのに対し、東側は自然の沢地形によって守られているに過ぎず、殆ど普請の手が加えられていない。南側においては、地表面観察によると堀状の浅い窪みと、窪みの両側に取り付く低い土塁状の高まりが確認できたことから、本曲輪の南端の防御はこの堀と土塁によっているものと推測される。全体的に北側に比して東－南側の守りは薄く、この方面からの敵の侵攻をそれほど意識した縄張りとはなっていないように思われる(註２)。虎口は北西、北東、西側にＡ～Ｃ・Ｇの計４箇所が想定され、各々最上位の平坦地に通じている。



第65図　三戸郡・二戸郡における中世城館分布図

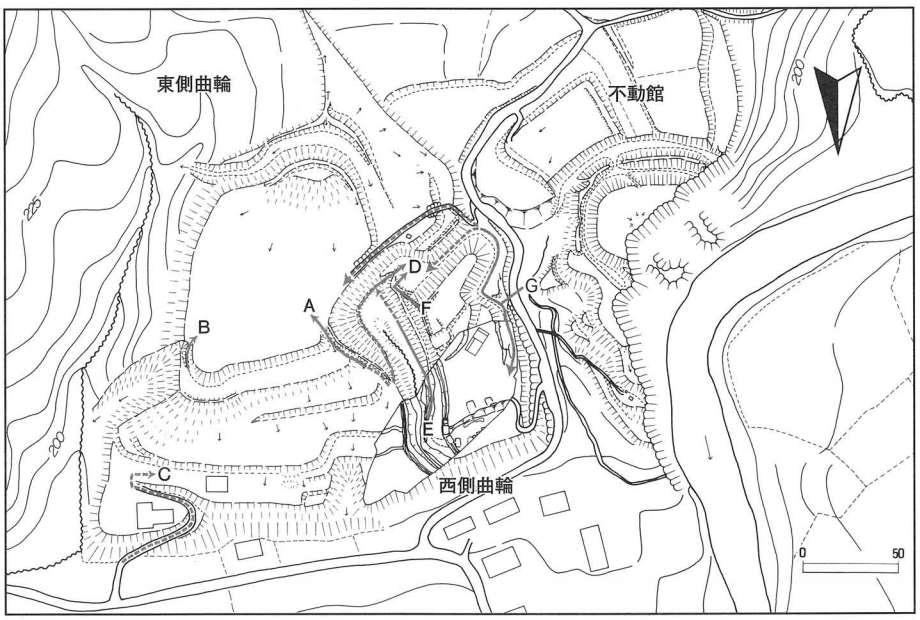


第66図　周辺の館跡縄張り図（S＝1：10,000）

西側曲輪（中舘）：西側曲輪の頂部には北東－南西方向に細長い平坦地が存在する(註3)。この平坦地は北側において小規模なクランク状の二重突出部を形成しており、斜面下方にはこれを取り囲むように、階段状の平坦地群が配置されている。この平坦地の東側には縁辺部に沿って３方向に土塁が巡らされ、このうち南東方向に延びるものは南側の堀底へ接続し、その後枡形状に屈曲して虎口状をなす（F）。このほかに虎口が想定される地点は本曲輪内に数箇所存在する（D・E・G）。１つは３号平坦地の西側において最も周囲より落ち込む地点Gで、北側は３号平坦地、南側は陣場の最頂部および南側の堀へと通じる。この地点には丸太材の小階段が付けられ、山への登り口として今に痕跡を残している。一方、東側の堀底面を伝わって入城する経路D・Eも想定できる。但し、これらは現地踏査による地表面観察から推定したものであり、発掘調査に基づくものではないため詳細は不明である。調査区南西側にあたる平坦地、及び切岸状遺構は後世の耕地造成の際、局所的ではあるがⅤ～Ⅵ層上位まで掘削されており、この部分の平坦地の範囲が不明瞭となっている（２・３号平坦地）。

註
1）堀、土塁に囲まれた城域内には、北から南方向に緩く傾斜する尾根の自然地形を利用して人工的に造られた平坦地が数段確認でき、断面からは普請（切り盛り）の痕跡を認める事ができる。本報告書では便宜上、このように堀・土塁によって防御された平坦地のことを「郭・曲輪」、曲輪内部の斜面上に形成された階段状の平場を「平坦地」と呼称して両者を区別した。
2）陣場の南側には現在東北自動車道が通っており、縄張りの南端が不明瞭となっている。この付近は地形図においても不自然な地形が観察され、本来の縄張りが改変されている可能性が高い。
3）地元の方より中舘の位置する曲輪最上位の平坦地に「馬屋」があったという言い伝えを伺っている。

周辺の舘・街道との関係：舘Ⅱ遺跡は安比川の右岸に張り出す丘陵縁辺部に立地する。本遺跡と谷を隔てた西側には同じく中世山城「不動館」があり、西側を安比川の断崖と接し、東－南側を二重の堀で区切った内部に狭い平坦地と腰曲輪を持つ。地元では、これを含めて東側から「陣場」、「中舘」、「お不動様」と呼び習わしている（写真図版１）。やや遠方に目を転ずれば、西方約1000mに浄法寺氏の居館である浄法寺城、南西方約400mには浄法寺氏配下の土豪とされる吉田氏の居館「吉田館」がある。11月18～19日にかけて実施した周辺踏査の折、不動館から吉田館にかけて通じる古い道路跡



第67図　舘Ⅱ遺跡虎口・連絡路想定図

を確認した（右下写真）。このことから、地理的には舘Ⅱ遺跡・不動館と同様に吉田館もまた、相互に密接に関連していた施設である可能性を想定できる。

次に街道について。本山城は地理的に鹿角街道・浄法寺街道など交通の要衝に近く、街道を経由して当地入りする近隣諸氏の動向を監視するのには好立地であったと考えられる。加えて当時隆盛を誇った九戸氏やその周辺勢力、これと対立する三戸南部氏勢（浄法寺氏を含む）、双方の動向に常に目を配れる地点に立地する。また、必然的に鹿角・浄法寺・奥州街道を通って入城する敵を迎え撃つこと、街道から攻め入られた場合を想定して枝道の両側に舘を築き、有事の際の通行の遮断と監視を行うことに、本山城を造った主たる理由があったと推測される。縄張り図からは、道の両側に防御の主力を向けている様子が読み取れる。

〔絵図（巻頭カラー写真１・２）〕

盛岡市中央公民館所蔵の御旧領之内福岡通絵図と、岩手県立図書館所蔵の岩手県管轄陸奥国二戸郡御山村を確認することができた。いずれも絵図の年代は不明であるが、描かれた手法から前者のほうが前出と考えられる（巻頭図版参照）。前者によると安比川は現在の流路と大分異なって描かれる。現在、安比川は駒ケ嶺を抜け吉田館に差し掛かる手前でやや東側に膨らみ、不動館の立地する崖にぶつかり北側に屈曲しながら清水尻を抜けるが、絵図によればこの区間の川はほとんど蛇行せず北流する。調査区のある地点には吉田村、御山村、清水尻の地名が見え、舘Ⅱ遺跡（陣場）に相当する部分には「侍屋敷」の地名が確認できる。次に街道であるが、舘Ⅱ遺跡と不動館の間を通る旧道の存在を絵図から確認することができる。実際にはこの道はほどなく西へ分岐し、吉田館へと抜けるのであるが、絵図には詳細が表現されていない。一方、時代がやや降って後者の絵図では、川と丘陵縁辺部の位置関係が大分正確さを欠くものの、大きくカーブを描く不動館周辺の安比川の流路については現在に近いものとして表現されている。平成17年11月18～19日に盛岡市遺跡の学び館の室野氏の指導のもと実施した現地の地形観察において、不動館の位置する曲輪の西側に崩落に伴う残崖が確認され、縄張りの構造からも以前は更に西側に張り出していた可能性をご指摘頂いている。このことを鑑みれば両者の絵図が描かれた時間幅の中で崖の崩落や流路の変更などの地形変化が起きた可能性もあるいは想定できるのかも知れない。後者の絵図では調査区のある地点は吉田川と安比内澤に挟まれた地区にあたるが、そこには清水尻、大久保、舘などの地名が見え、舘Ⅱ遺跡の載る山稜尾根部分には「古舘」の表記を確認することができる。

〔曲輪内で見つかった普請の跡〕

平坦地・切岸状遺構

平坦地１～６が調査され、整地層、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、竪穴状遺構などが確認された。整地層は平坦地１の北西側、平坦地２の西側縁辺部に認められ、これにより旧地形の丘陵緩斜面が階段状の平坦面に造成されている。調査区南西側の２・３号平坦地、及び１・２号切岸状遺構は後世の耕地造成の際、局所的にⅤ～Ⅵ層上位まで掘削されており、この部分の平坦地の範囲が不明瞭となっている。また、４号平坦地の南端部は切土造成され、本来の２～４号平坦地の範囲・整地の痕跡が失われている。３号平坦地は本来、細く外縁部を巡る帯曲輪状を呈する可能性がある。

堀跡・大溝跡・土塁跡

堀跡３条・溝跡２条（計５条）と、土塁１箇所が確認された。これらの遺構は直接切り合いがなく、

新旧関係の把握が困難である。堀はすべて空堀で、作事跡との重複関係、人為堆積層の確認などより、時間差を持って構築されたものと考えられる。その中で確認できたのは以下の３点である。①３号堀跡が１号土塁の埋土（人為堆積）で埋まる　②１号堀跡の堆積土下位に、２号堀跡の掘削土と見られる地山層（但し、壁面崩落土の可能性も有）が堆積する　③３号堀跡埋め立て後に竪穴建物跡群が造られる。これらの事実から普請の新旧を想定した場合、大局的には１・３号堀跡・１号土塁が最も古く、次いで２号堀跡・１号大溝跡、５号堀跡が造られたものと考えられる。

〔曲輪内でみつかった作事の跡〕

曲輪内部からは、３種類の建物跡が造られる地点を異にしながら見つかっている。掘立柱建物跡は２号平坦地の山際に位置する。１号掘立柱建物跡は梁間４間・桁行７間の建物跡で、多用される柱間寸法は梁行170㎝（5.61尺）、桁行200㎝（6.6尺）～220㎝（7.26尺）である。周辺には建物跡と軸方向を同一にする柱穴（柱穴状小ピット群）も少なからず存在することから、本来は２～３回の建て替えがあったと考えられる。竪穴建物はその殆どが平坦地４の縁辺および３号堀跡の埋め立て地付近に集中して分布する。これらは建物同士が近接・重複する事から本来は更に時期細分されると考えられる。切岸状遺構は１・２号平坦地と接続する２箇所が確認されている。また、両切岸状遺構の裾部と壁面を接するように１～４号竪穴状遺構が検出されている。１～４号竪穴状遺構はその後、門跡（？）、掘立柱建物跡の作事の際に壊されている。また、２号平坦地に位置する掘立柱建物跡は、近接する竪穴状遺構を切って平場を造成しており、これより新しい。このほかⅤ・Ⅵ層地山面で（一部、整地層を切る）柱穴が558基確認されており、掘立柱建物跡等の可能性が考えられたが、建物配置を確認するには至らなかった。

〔縄張りの変遷〕

縄張りの変遷については、遺構同士の直接的な重複が少なく、重複している場合も出土遺物が殆どないことから推定するのが困難であった。そのため作事の位置関係や埋土の堆積状況から推測せざるを得ず、前後関係は確実ではない。今回は本調査区の縄張りの変遷について一応の見解を述べる。

第Ⅰ期：１号堀跡、３号堀跡、１号土塁

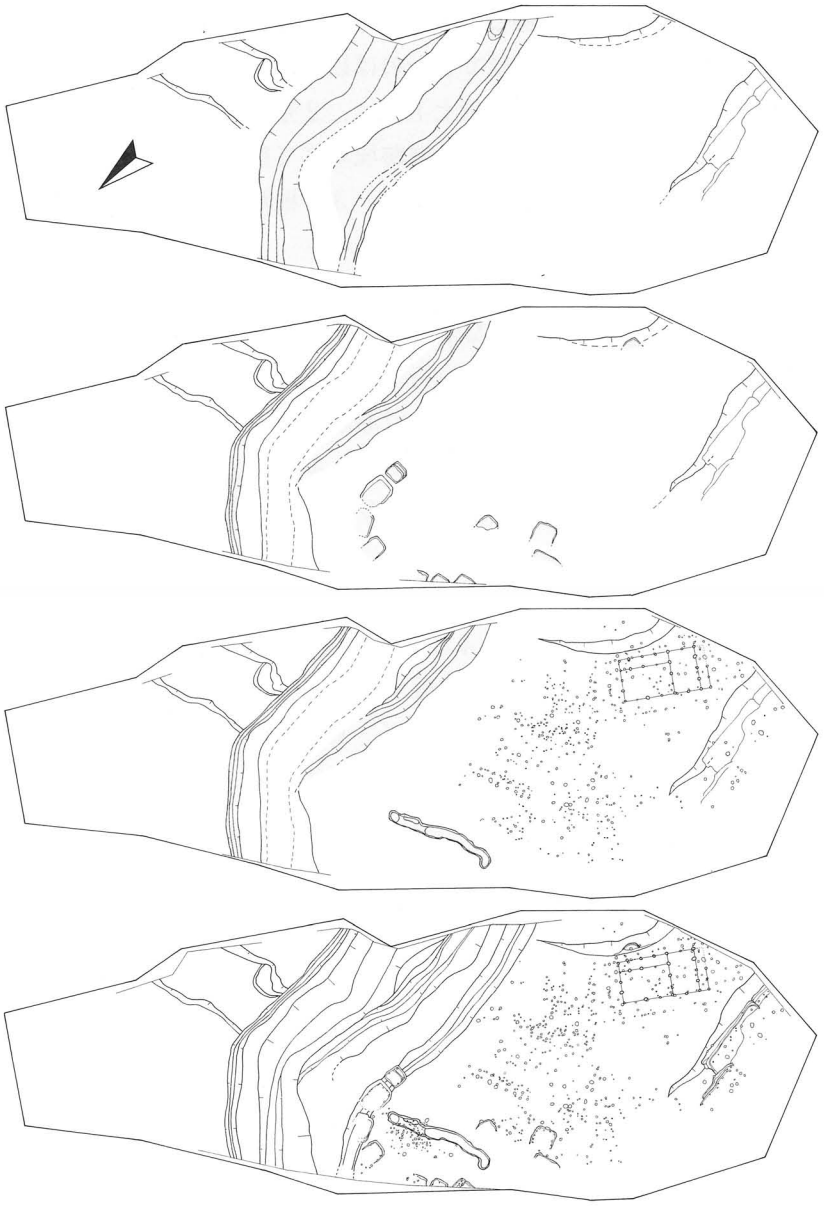
１号堀跡は自然の沢を利用した堀で、最初の段階から存在したと考えられる。３号堀跡は切り合い関係から竪穴建物跡群より確実に古期で、１号土塁構築土による東側一方向からの人為的な埋め戻しが行われている。よって３号堀跡と１号土塁とは同時存在と考えられる。これと竪穴建物跡群との切り合い関係から本期をⅠ期と仮定する。本期は１号堀跡・３号堀跡との土塁を伴う二重堀を形成していたと推測される。

第Ⅱ期：２（１）号堀跡、１号大溝跡、竪穴建物跡群

１号堀跡は大部分が自然埋没による堆積状況を示すが、第14層に白色の地山土の一括堆積が認められる。これは西側堀壁面崩落土、もしくは２号堀跡構築時の掘削土（人為堆積土）の双方の可能性が考えられる。一貫した断面により１号堀跡との重複関係を把握できないことから根拠はやや不十分とならざるを得ないが、ここで２号堀跡が新しいと判断した場合、Ⅱ期以降にあたるとみられる。そうであれば、この時点で１号堀跡は完全に埋没しきっていない状況で使用されていたことになる。１号大溝跡については不明な点が多いが、本館跡が各時期に亘って二重堀の防御性を保持していたと仮定した場合、本期にあたる。但しⅠ期の段階で既に三重堀であった可能性もある。

第Ⅲ期：１号平坦地、１号切岸状遺構、２（・１）号堀跡、１・２号大溝跡、掘立柱建物跡、一部柱穴群

２号堀跡が１号堀跡より新期と判断すればⅡ期以降となるため、本期まで含める。１号掘立柱建物跡については、検出面（２号平坦地）と５号竪穴状遺構の床面との関係から、５号竪穴建物跡よりも



第68図　舘Ⅱ遺跡縄張り変遷想定図（中世）

新期と考えられる。但し、その場合2号平坦地全体が更に削平されたことになる。5号堀跡は、竪穴建物跡群との位置関係からみて、それらより新期であることから本期に含めた。

全体：西側竪穴状遺構、1号門跡？

時期不明であることから時期別図に含めていないが、両者ともに3号平坦地南側に位置する。両者には新旧が認められ、竪穴状遺構の床面を壊して、門跡の掘り込みが造られている。竪穴状遺構は埋土下位から鉄製品が出土していることから中世としたが、盛土整地層の下位との境界付近にもあたり、断定はできない。

これまでの事柄をまとめると以下のようになる。

1　舘Ⅱ遺跡については文献資料や伝承が乏しく館主も不明であるが、地理的な環境から判断して浄法寺氏配下の在地領主の舘であった可能性がある。歴史的背景からみると15世紀末葉～16世紀中頃にかけては九戸氏が新興勢力として台頭し二戸に進出する動きを強める。本舘の造営理由としては、このような動きの中で浄法寺氏を含む三戸南部方が九戸方に対抗するために造営した山城群のうち

の一つであったと考えられる。

2　調査区の縄張り変遷には、遺構の重複関係から少なくとも３時期あり、それぞれ堀跡と土塁、堀跡と竪穴建物跡、大溝跡と掘立柱建物跡を主体とする時期で構成されていた可能性がある。但し遺構間の直接的な重複が少なく、重複している場合も出土遺物が殆どないため、作事の位置関係や埋土の堆積状況から推測したものであり、前後関係は確実ではない。

3　舘Ⅱ遺跡の周辺には多数の山城があり、これらの位置関係から①舘Ⅱ遺跡と不動館が併存していた可能性、②これに加え吉田館が併存した可能性などが考えられる。後者の可能性としては、吉田館の専守防衛の為に街道を押さえる目的で吉田氏自身が築いた出城などの可能性も残される。

4　出土遺物が少ないため館の性格は判然としないが、調査区から出土した大堀Ⅰ期の端反り皿の口縁部片が16世紀代のものであることから舘Ⅱ遺跡の造営時期は上限が16前半代～中頃とみられ、16世紀後半には浄法寺城と並存していたと考えられる。また、このほか古銭、茶臼、石鉢片などが出土しており、少ない中にも当時の状況を推測する上で貴重な資料が得られた。

おわりに

舘Ⅱ遺跡は先記のように、２つの区画（曲輪）から構成されている山城であり、道を挟んで隣接する不動館を含めそれぞれが連携しながら機能していたものと考えられる。これを含めた３つの舘の縄張りと地形観察から判断する限りでは、不動館の造りが３つのなかで一番丁寧であり、土塁の形状も高く堅固なことから最も古くから存在した曲輪である可能性がある。中舘は占地から不動館と対となり街道の監視と封鎖を担う目的で造られた曲輪と考えられる。この中舘と接して東側に位置する陣場は、縄張りの造り、特に東側・南側の防御性の薄さから推測して一番後に普請が開始された曲輪と考えられ、現在の縄張りの段階で山城が役割を終えた可能性がある。しかしながら発掘調査が行われたのは陣場と中舘にあたる限られた一部分で、周辺エリアの調査が未だ行われていない段階にあり、出土遺構や遺物からの情報もないため、不明な点が数多い。周辺の山城の発掘調査が進んだ段階で、包括的な検討がなされる必要があろう。

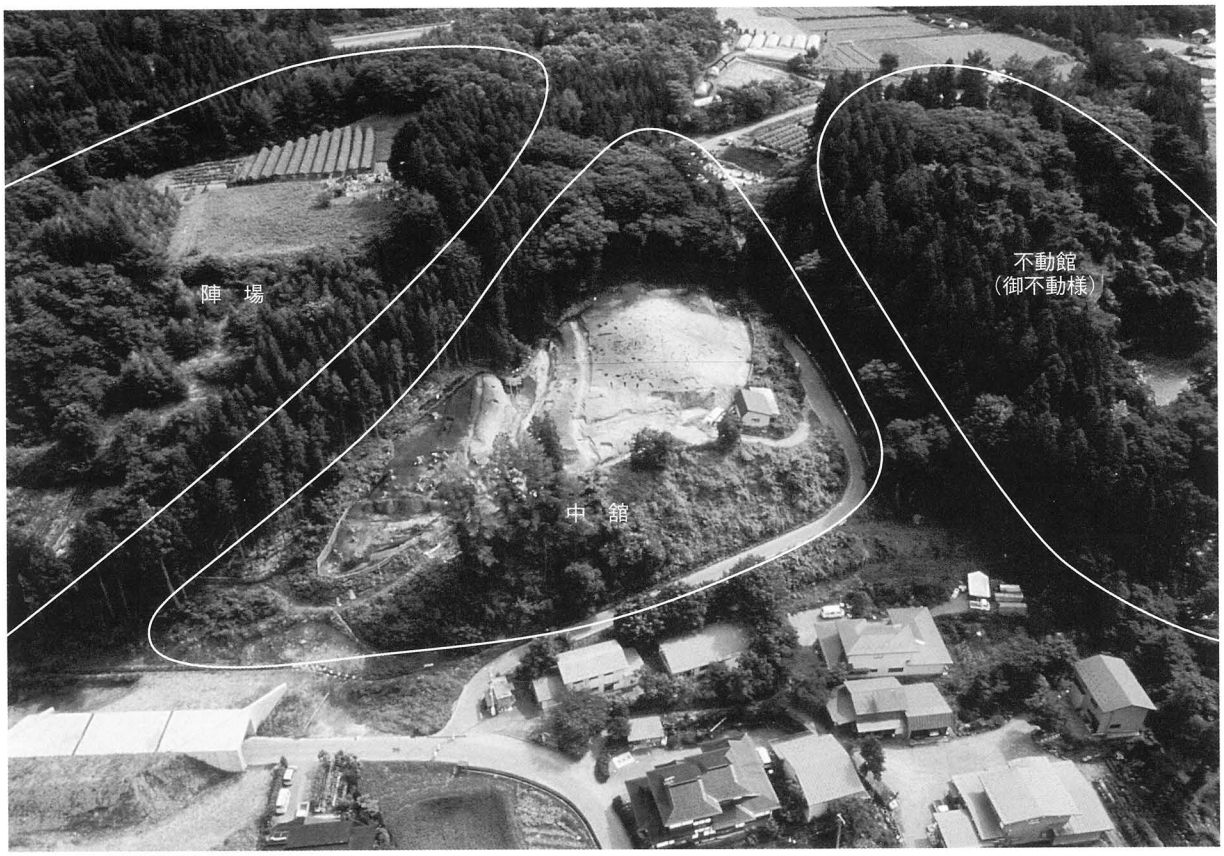
（丸山直美）

引用・参考文献

桐山秀穂　1996「日本における茶臼の研究」『古代學研究所研究紀要　第６号』：43～100, 古代學研究所
青森県教委　1983「青森県の中世城館」『北海道・東北地方の中世城館①北海道・青森・秋田』東洋書林、所収
一戸町教委　1982『一戸バイパス関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ（一戸城跡）』一戸町文化財調査報告書第２集
岩手県　1961『岩手県史　第３巻（中世篇・下）』
岩手県　1979『北上山系開発地域　土地分類基本調査　浄法寺』岩手県農地林務部
岩手県教委　1979『岩手県「歴史の道」調査報告　奥州道中』岩手県文化財調査報告書第367集
岩手県教委　1979『岩手県「歴史の道」調査報告　鹿角街道』岩手県文化財調査報告書第467集
岩手県教委　1981『岩手県「歴史の道」調査報告　浄法寺・八戸街道』岩手県文化財調査報告書第67集
岩手県教委　1986『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集
簗部善次郎　1971『二戸郡・九戸郡古城館趾考』東北民俗研究会（二戸）
――　1977『二戸郡誌』〔縮刷版〕二戸郡誌編集委員会・編、名著出版会（東京）
――　1995『図説　岩手県の歴史』細井計・編、河出書房新社（東京）
――　1998『南部史要　全』〔第５版〕
――　1998『東北の街道』渡辺信夫・監修、無明舎出版・編（秋田）
――　2002『北奥路程記』岩手県文化財愛護協会・編
――　2002『奥州街道』無明舎出版・編（秋田）
沼舘愛三　1981『南部諸城の研究』伊吉書院（八戸）
浄法寺町教委　1998『浄法寺城跡　平成９年度町内遺跡詳細分布調査概報』

第69図　館Ⅱ遺跡（陣場・中館）・不動館縄張り図

写　真　図　版

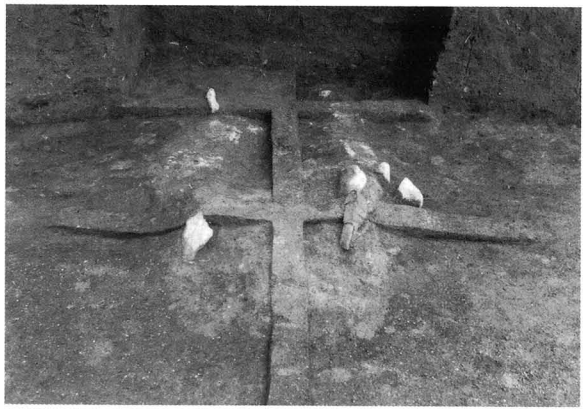


遺跡近景（北から）

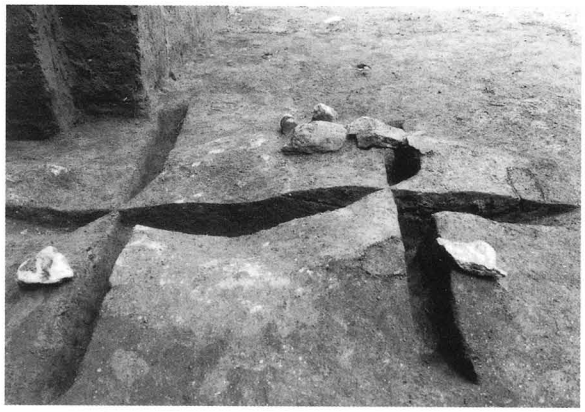
遺跡近景（南西から）

写真図版１　空中写真

1号炉跡　断面①

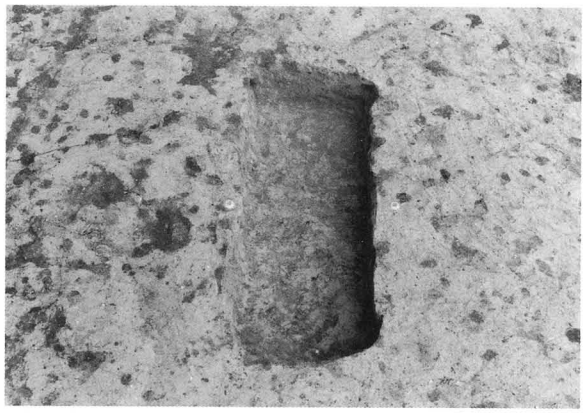


平面



断面②

断面③



1号土坑　平面

断面

2号土坑　平面

断面

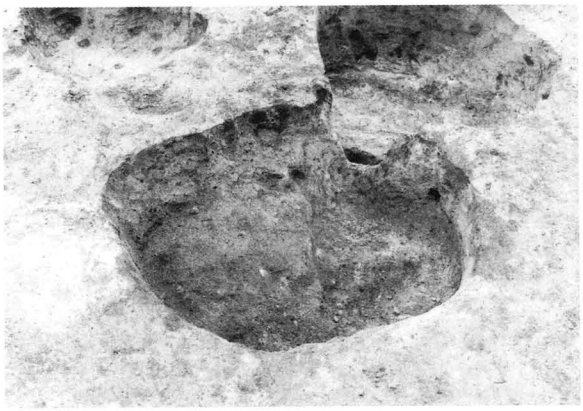
写真図版2　1号炉跡・1・2号土坑

3号土坑　平面

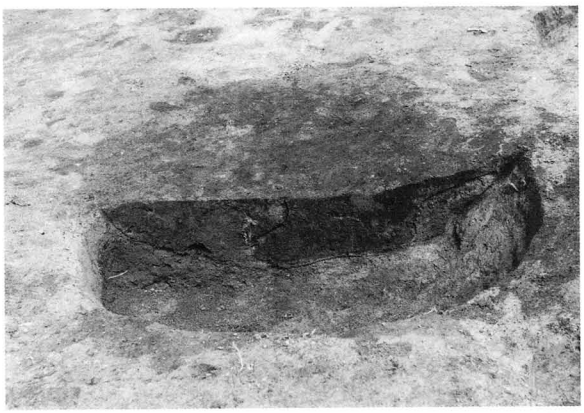
断面

5号土坑　平面

断面



6号土坑　平面

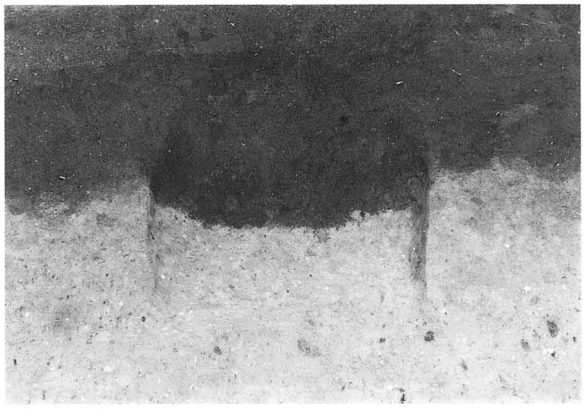


断面

7号土坑　平面

8号土坑　平面

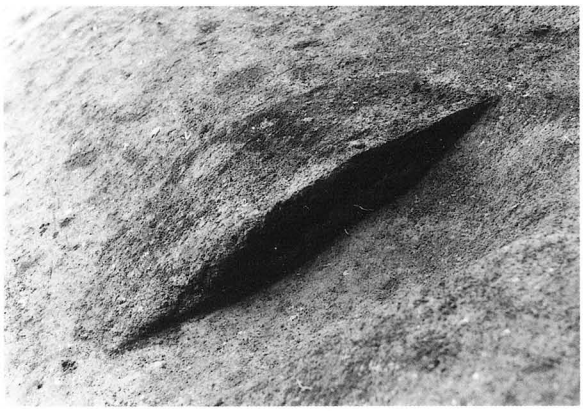
写真図版3　3・5～8号土坑



9号土坑　平面

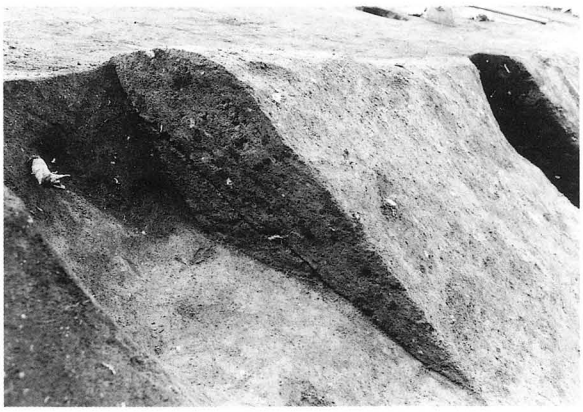
断面

10号土坑　平面



断面

11号土坑　平面



断面

12号土坑　平面

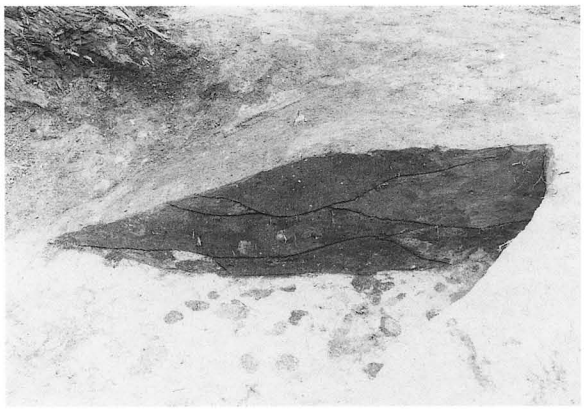
断面

写真図版４　９～12号土坑

13号土坑　平・断面

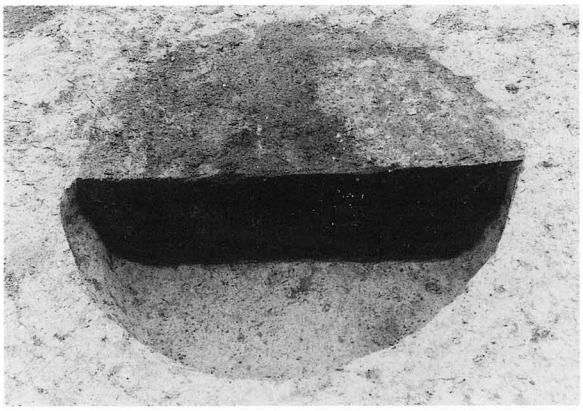
14号土坑　遺物出土状況

14号土坑　平面



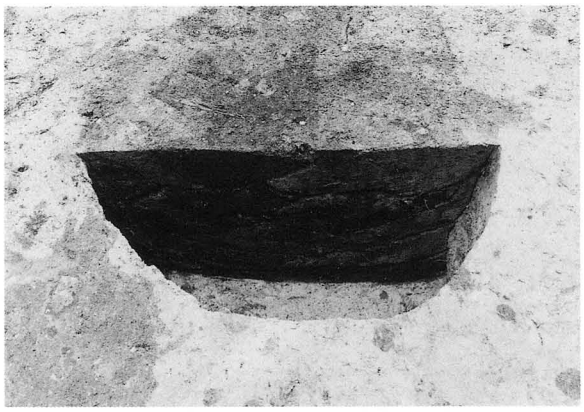
断面

15号土坑　平面



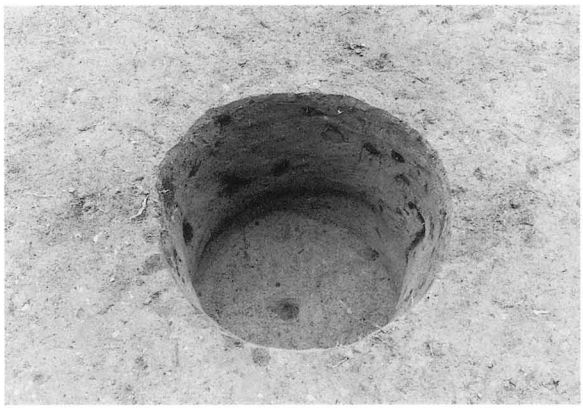
断面

16号土坑　平面

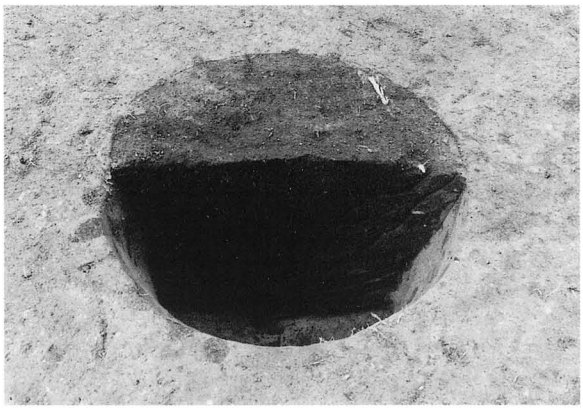


断面

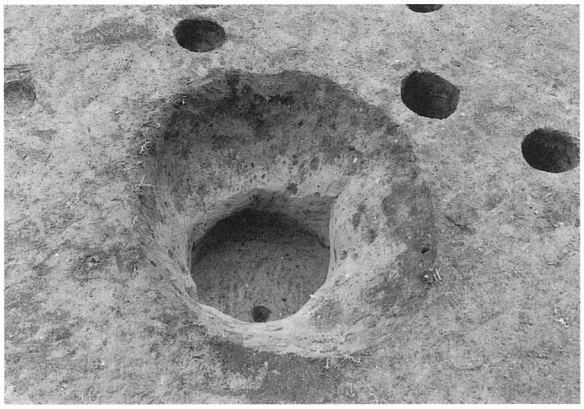
写真図版５　13～16号土坑



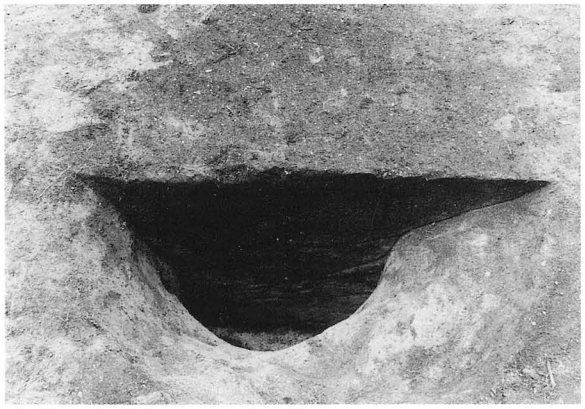
17号土坑　平面



断面

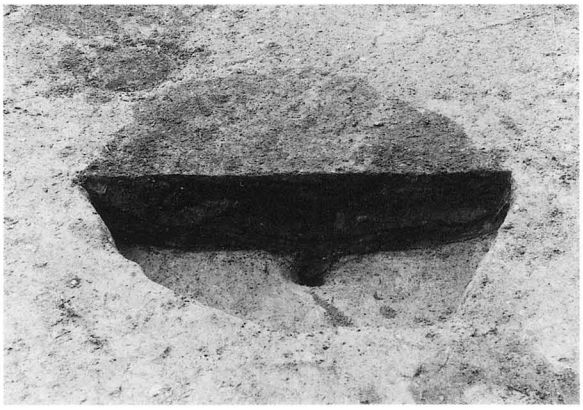


18号土坑　平面



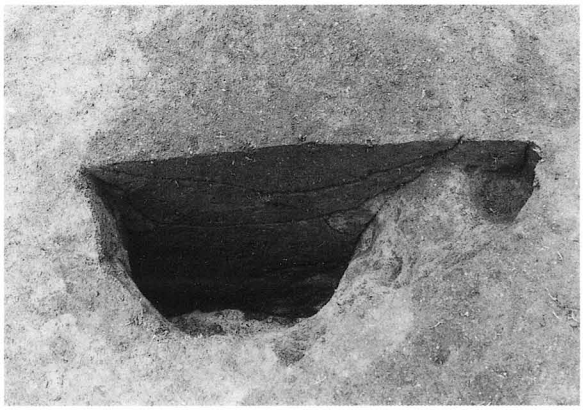
断面

19号土坑　平面



断面

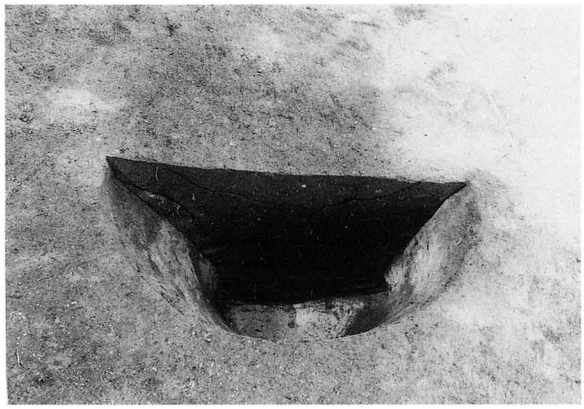
20号土坑　平面



断面

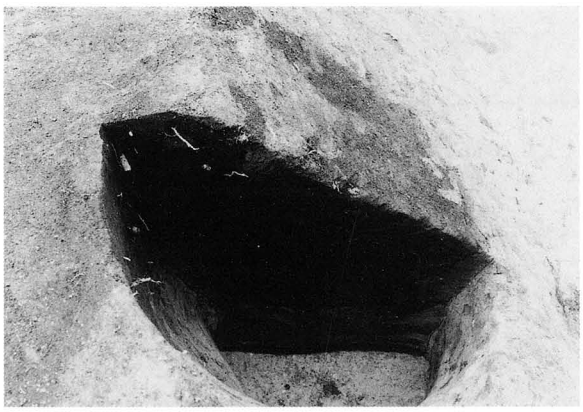
写真図版 6　17～20号土坑

21号土坑　平面



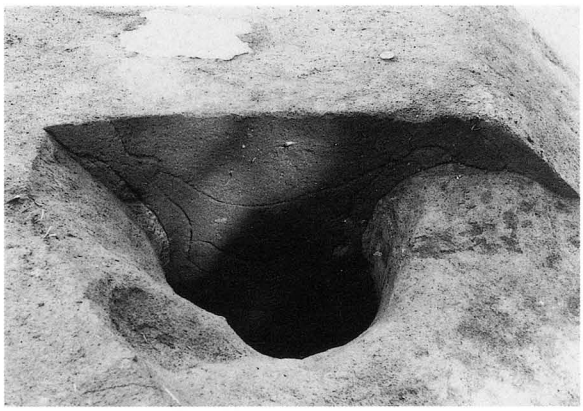
断面

22号土坑　平面

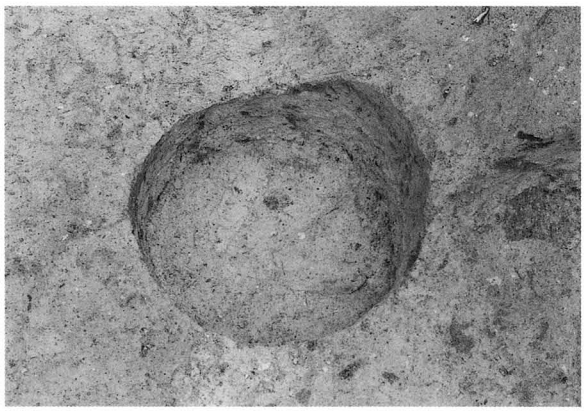


断面

23号土坑　平面



断面

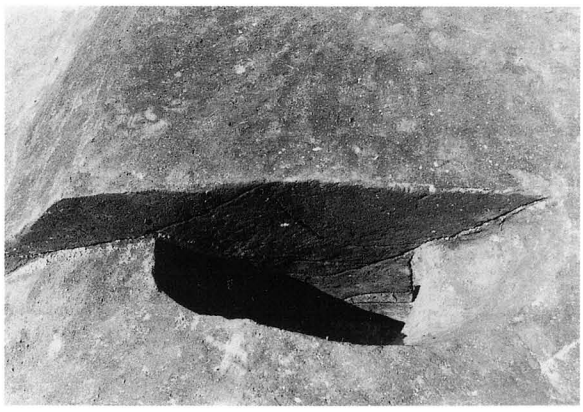


24号土坑　平面

断面

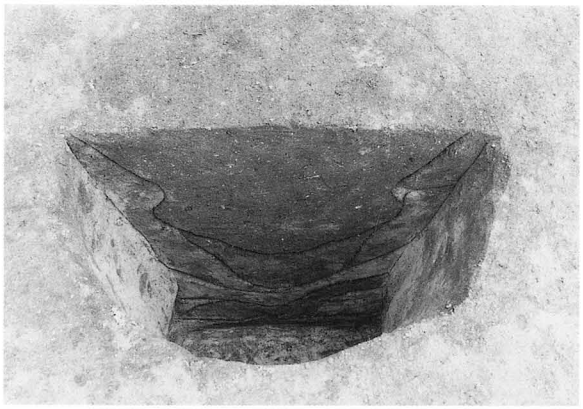
写真図版７　21～24号土坑

25号土坑　平面



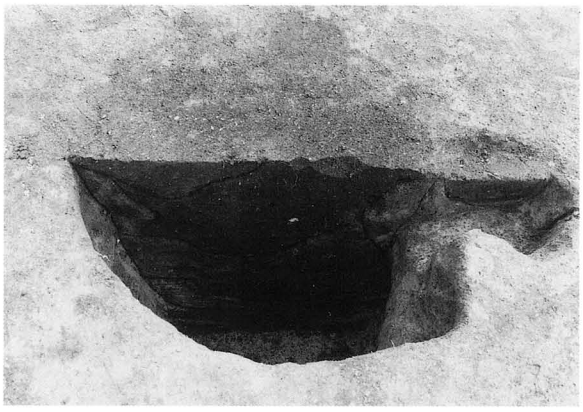
断面

26号土坑　平面



断面

27号土坑　平面

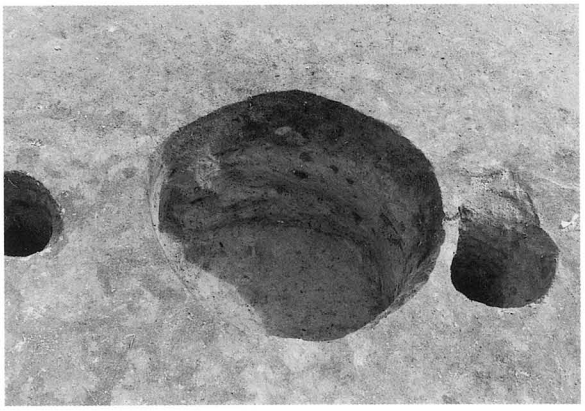


断面

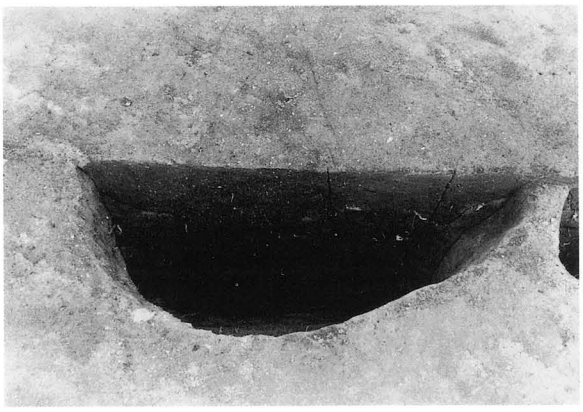
28号土坑　平面

断面

写真図版 8　25～28号土坑

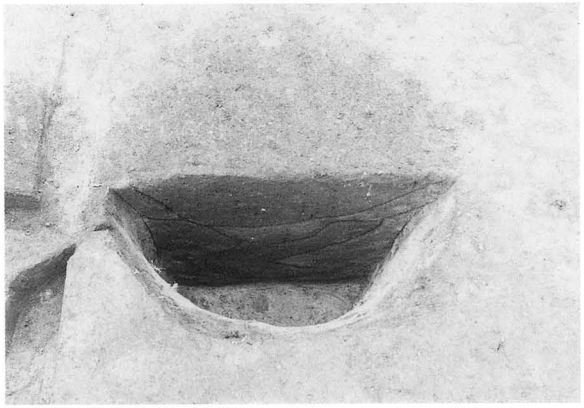


29号土坑　平面



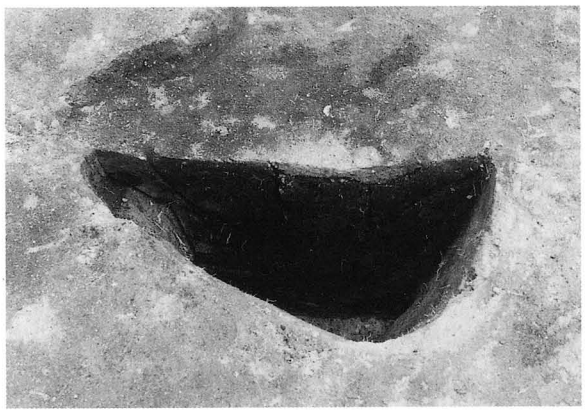
断面

30号土坑　平面



断面

31号土坑　平面



断面

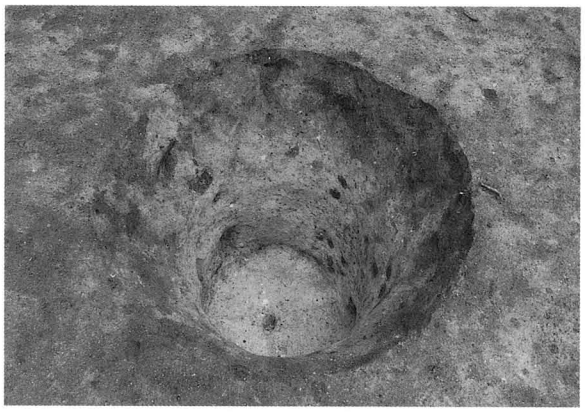
32号土坑　平面

断面

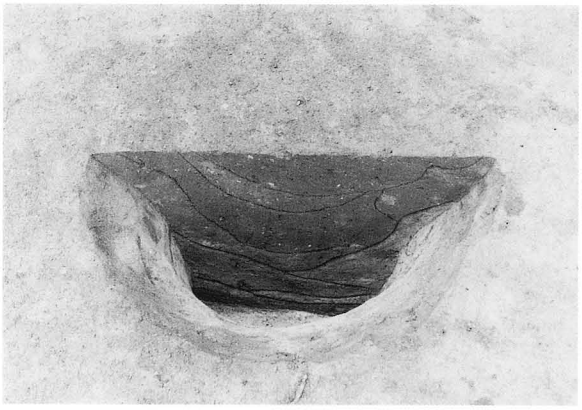
写真図版 9　29～32号土坑

33号土坑　平面

断面

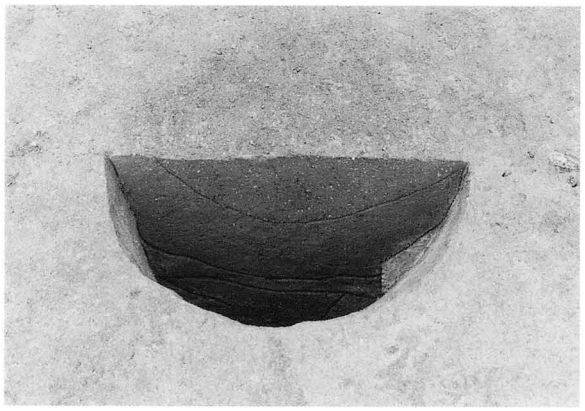


34号土坑　平面



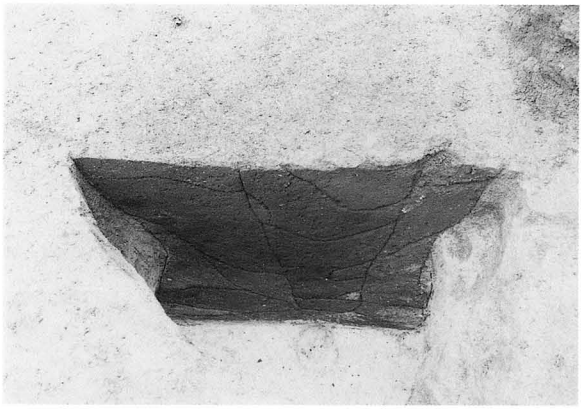
断面

35号土坑　平面



断面

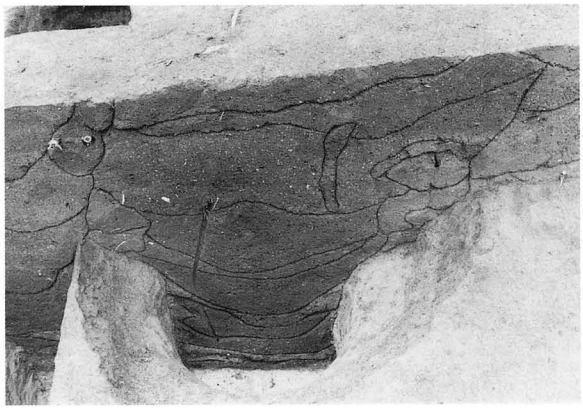
36号土坑　平面



断面

写真図版10　33～36号土坑

37号土坑　平面



断面

38号土坑　平面

42号土坑　平面

39号土坑　平面

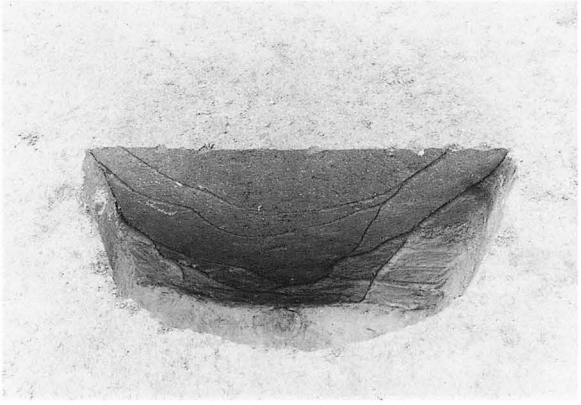
断面

40号土坑　平面

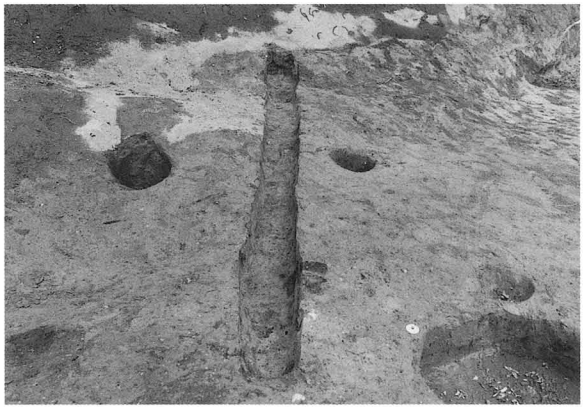
断面

写真図版11　37～40・42号土坑

41号土坑　平面



断面



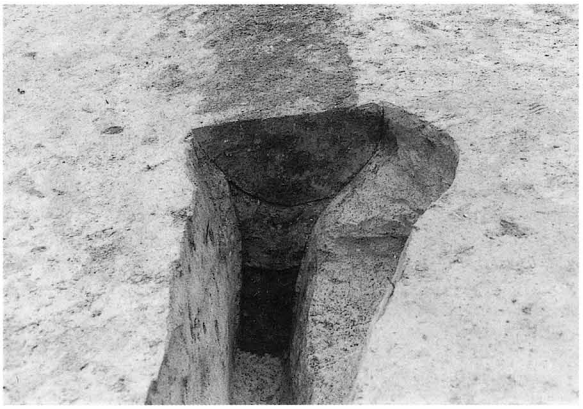
1号陥し穴状遺構　平面

断面

2号陥し穴状遺構　平面

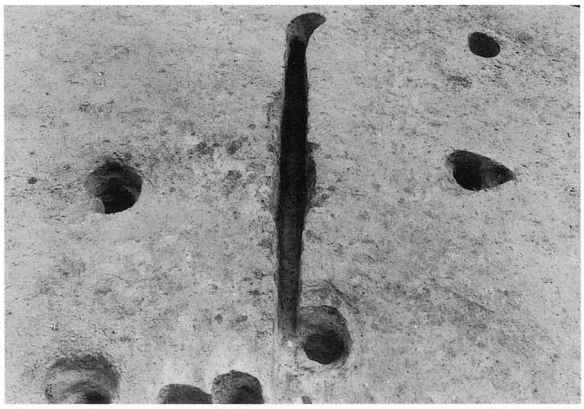
断面

3号陥し穴状遺構　平面

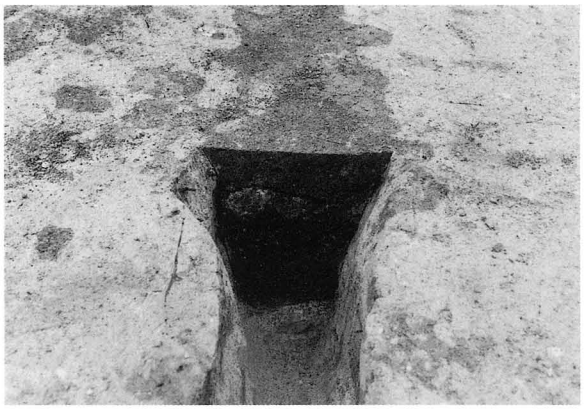


断面

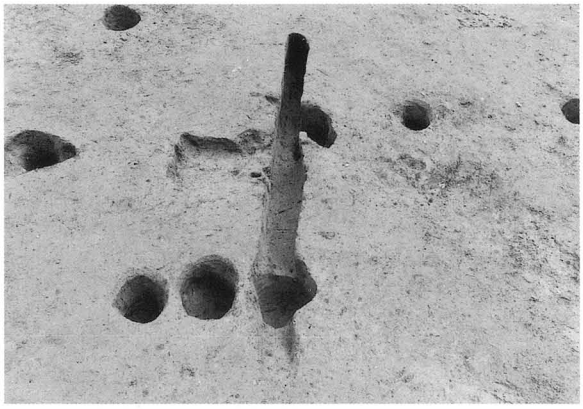
写真図版12　41号土坑・1～3号陥し穴状遺構



4号陥し穴状遺構　平面

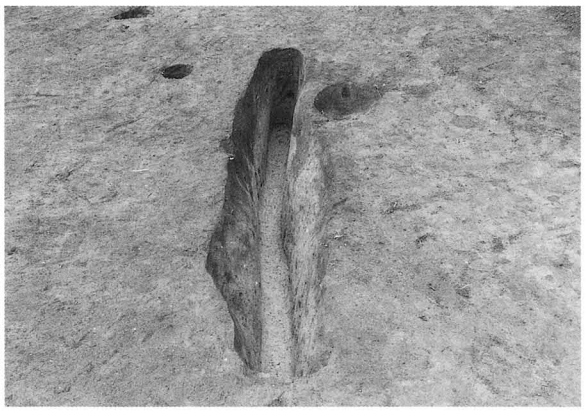


断面



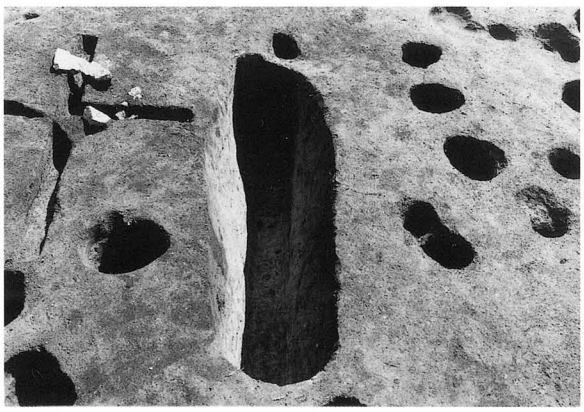
5号陥し穴状遺構・4号土坑　平面

断面

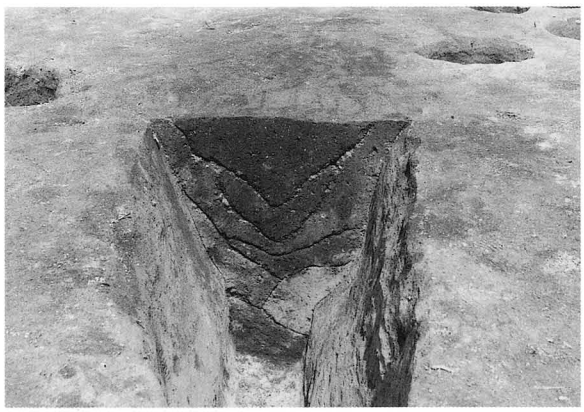


6号陥し穴状遺構　平面

断面

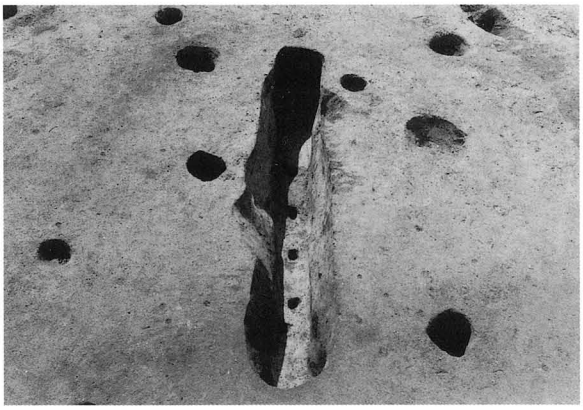


7号陥し穴状遺構　平面



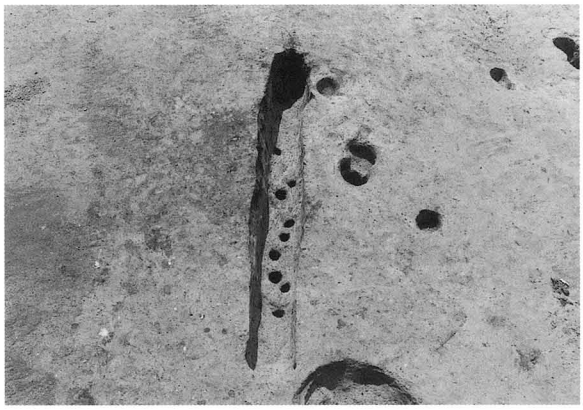
断面

写真図版13　4～7号陥し穴状遺構（4号土坑）

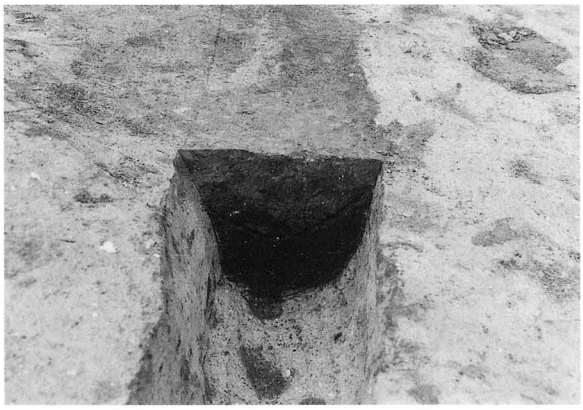


8号陥し穴状遺構　平面

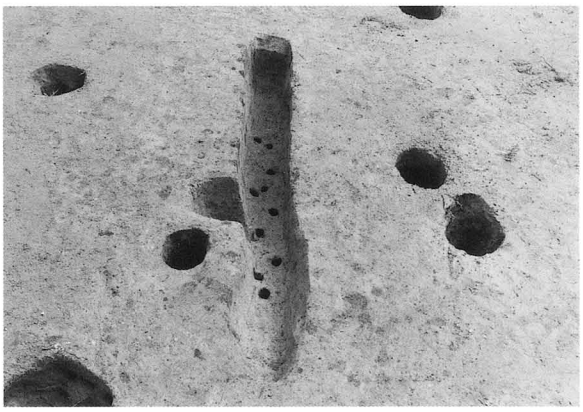
断面



9号陥し穴状遺構　平面



断面



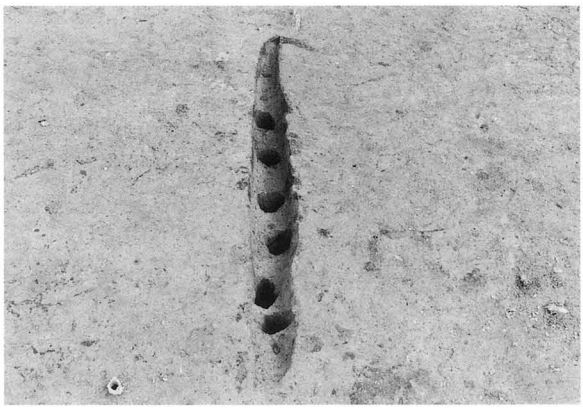
10号陥し穴状遺構　平面

断面

11号陥し穴状遺構　平面

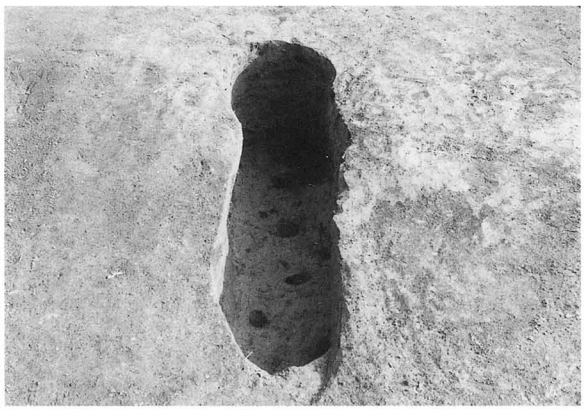
断面

写真図版14　8～11号陥し穴状遺構



12号陥し穴状遺構　平面

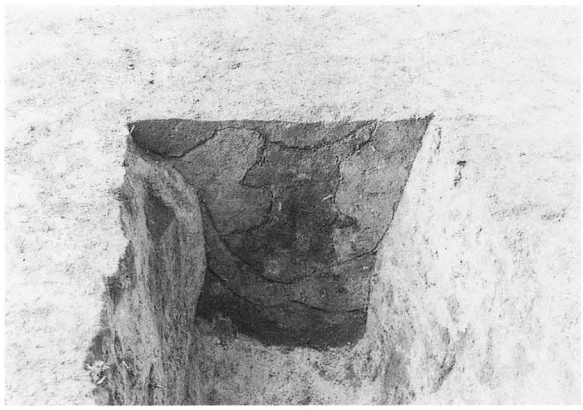
断面



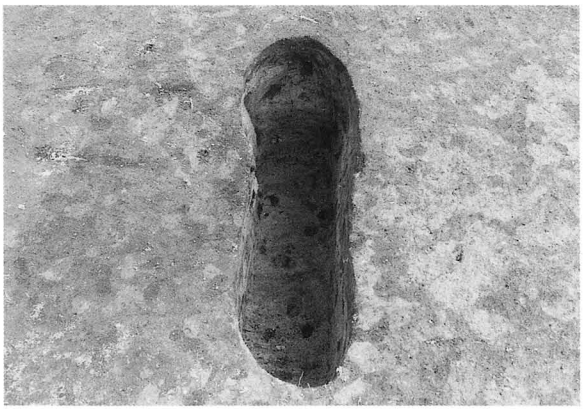
13号陥し穴状遺構　平面

断面

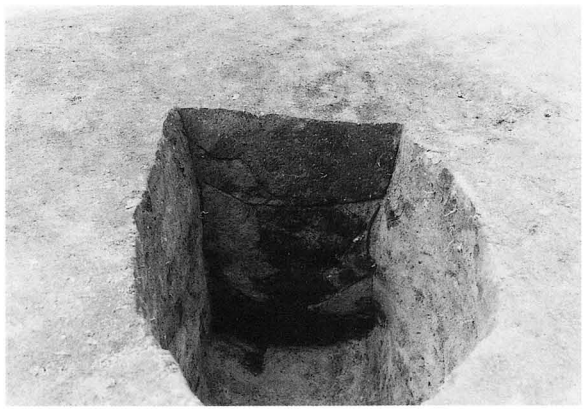
14号陥し穴状遺構　平面



断面



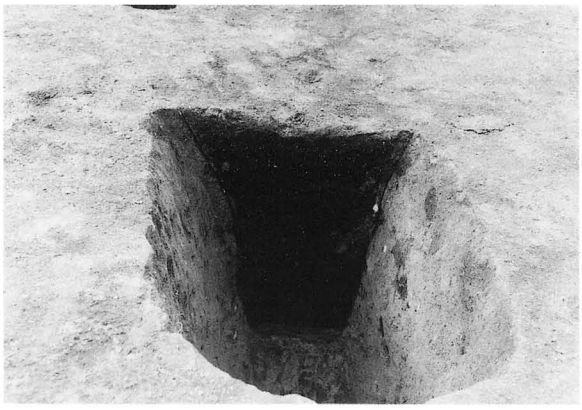
15号陥し穴状遺構　平面



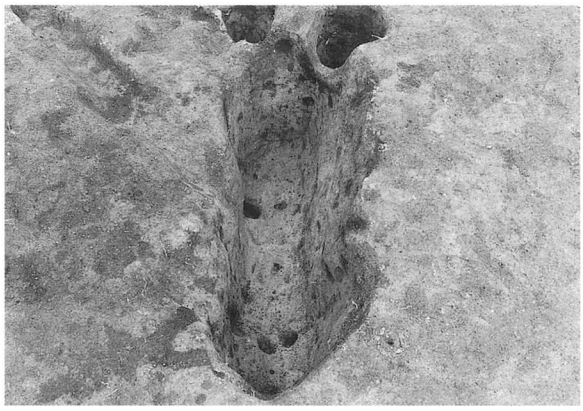
断面

写真図版15　12～15号陥し穴状遺構

16号陥し穴状遺構　平面



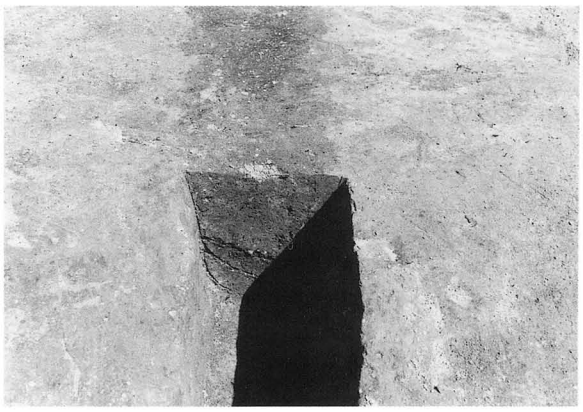
断面



17号陥し穴状遺構　平面

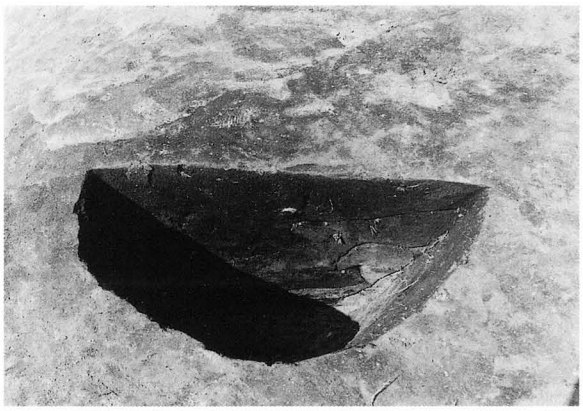
断面

18号陥し穴状遺構　平面



断面

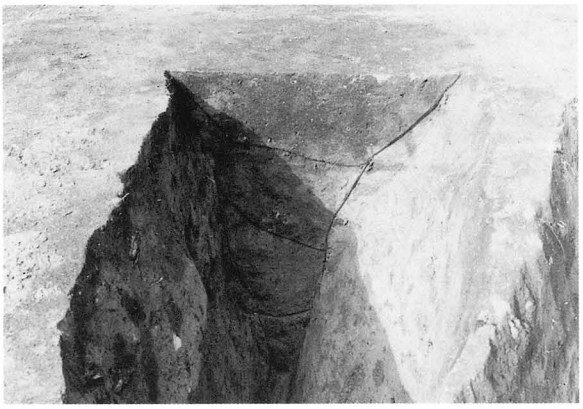
19号陥し穴状遺構　平面



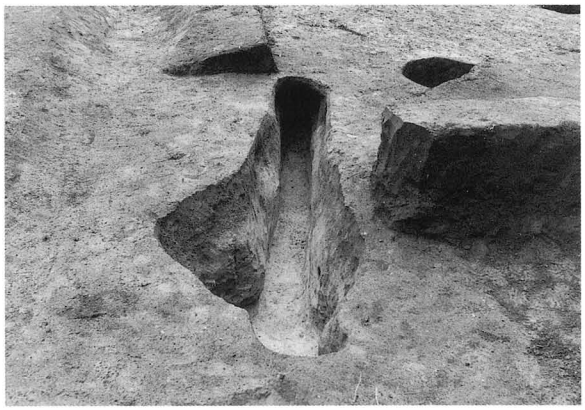
断面

写真図版16　16～19号陥し穴状遺構

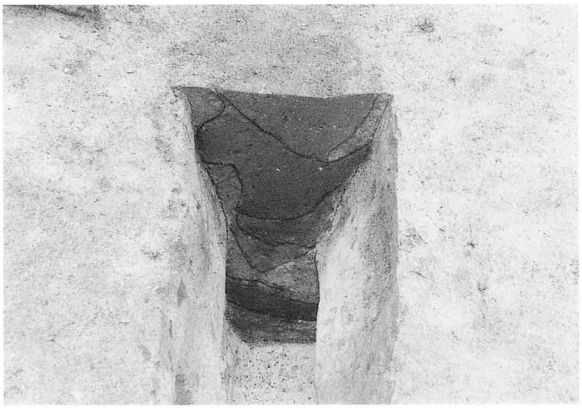
20号陥し穴状遺構　平面



断面

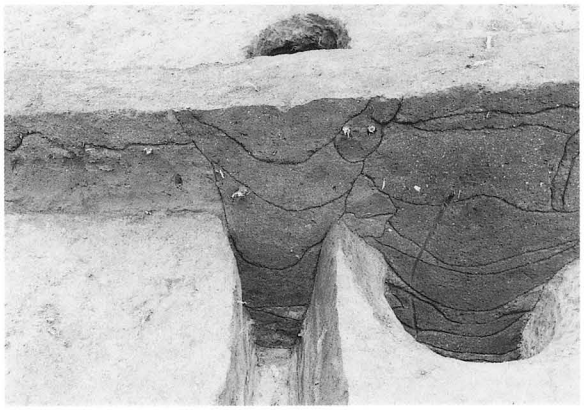


21号陥し穴状遺構　平面



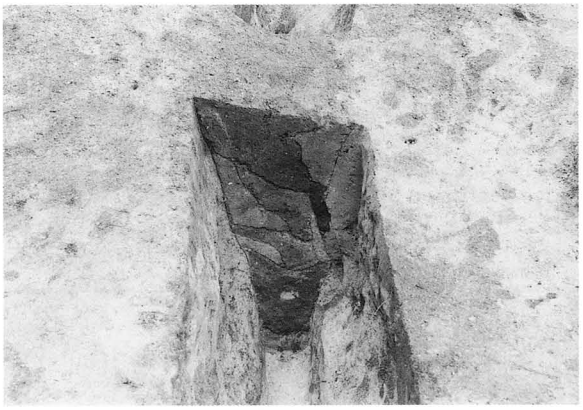
断面

22号陥し穴状遺構　平面



断面

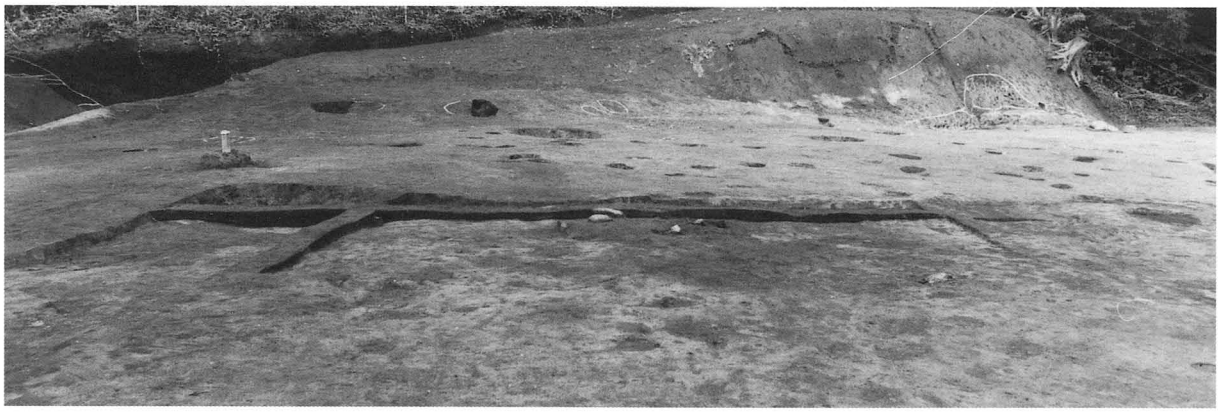
23号陥し穴状遺構　平面



断面

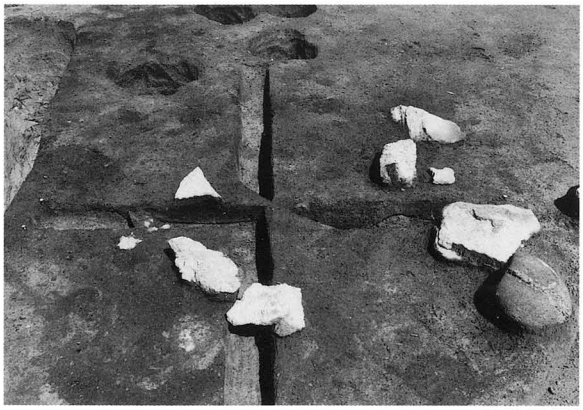
写真図版17　20～23号陥し穴状遺構

完　掘



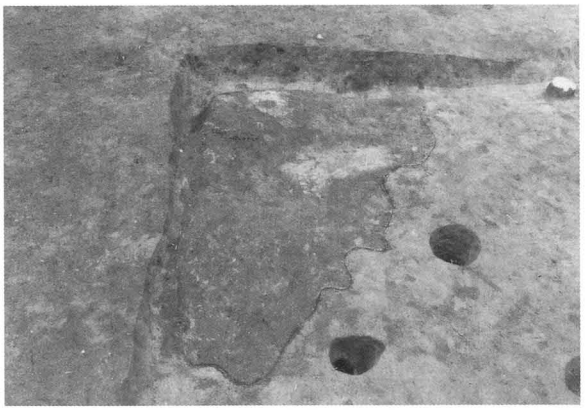
断　面

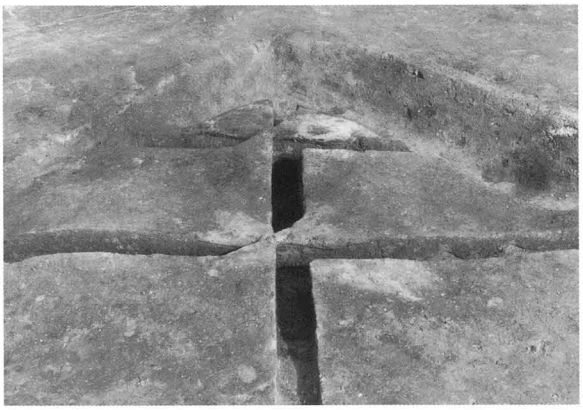
1号竪穴住居跡カマド　平面



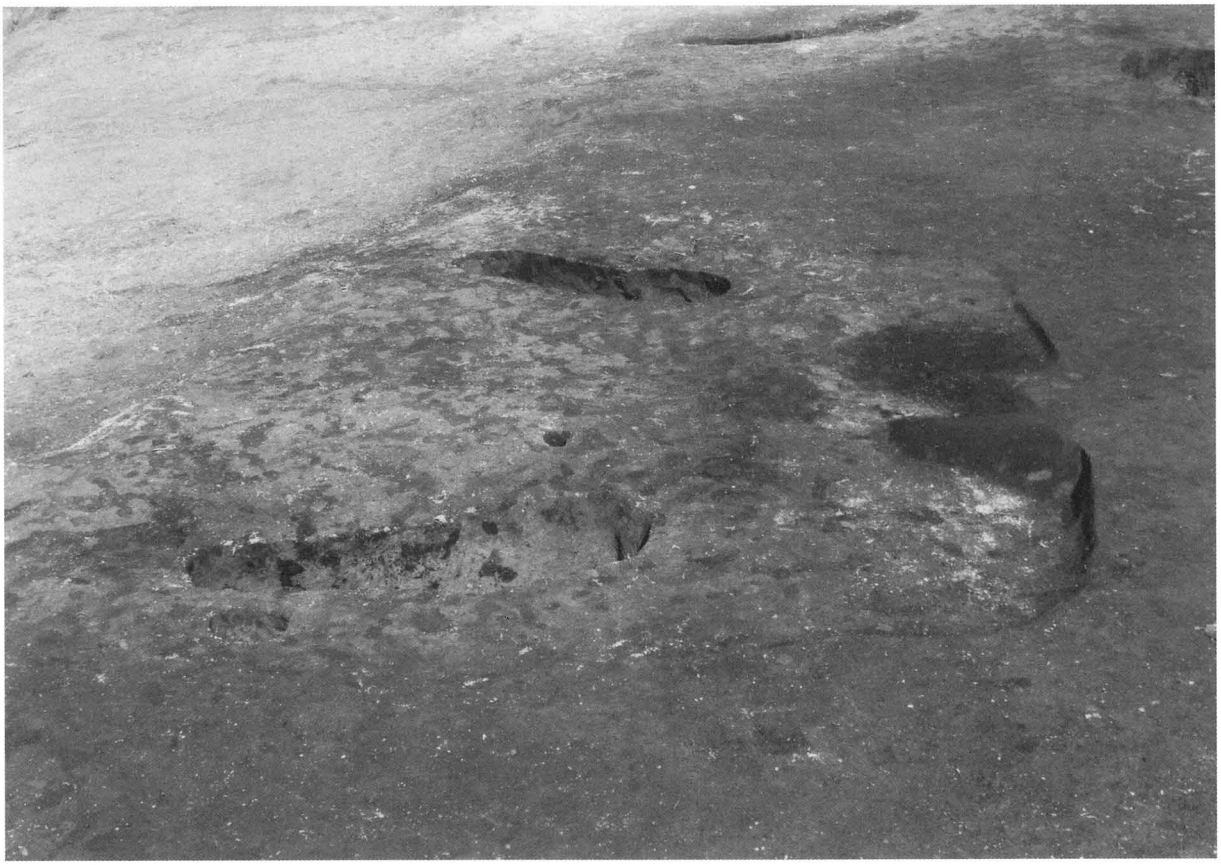
断面

写真図版18　1・2号竪穴住居跡

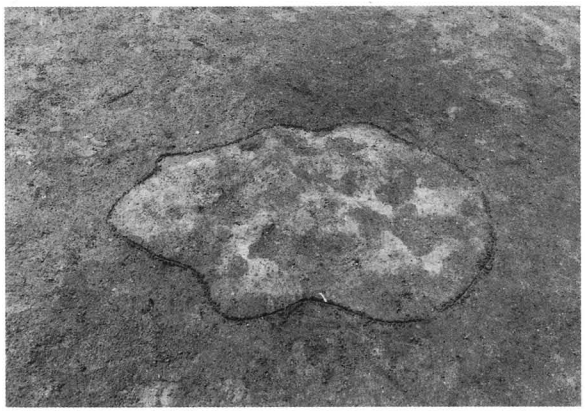


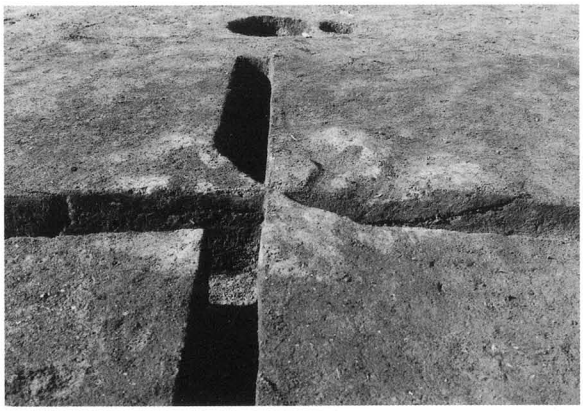


2号竪穴住居跡カマド　　平面　　断面



3号竪穴住居跡　　平面

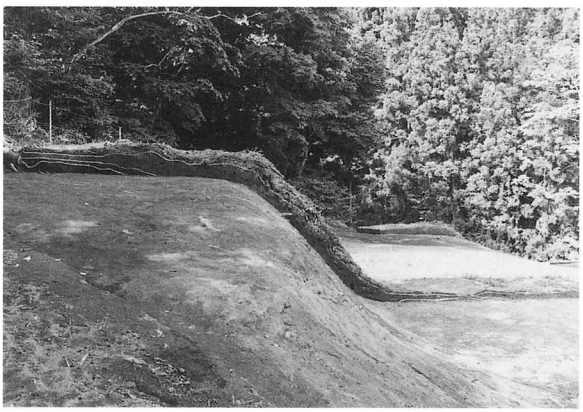




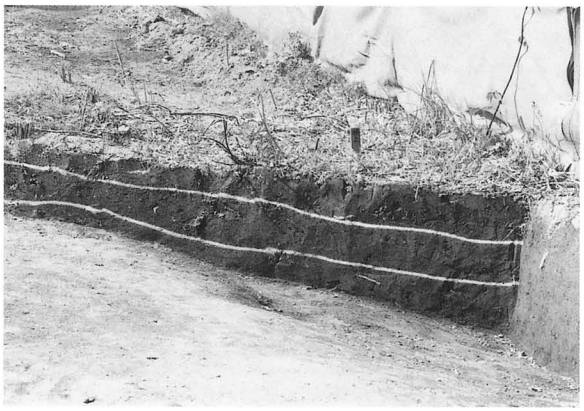
1号焼土遺構　　平面　　断面

写真図版19　2・3号竪穴住居跡・1号焼土遺構

1号平坦地（曲輪）・1号切岸状遺構完掘（北西から）

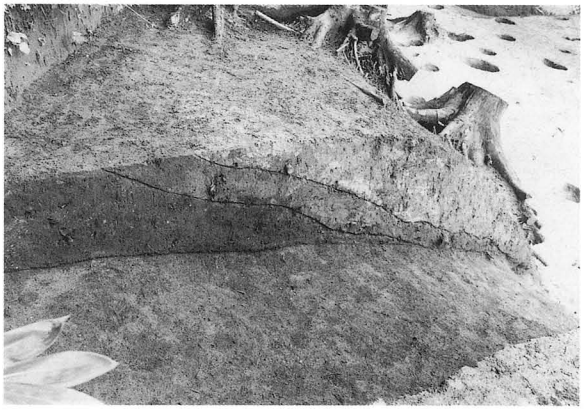


断面①（東から）



断面②（東から）

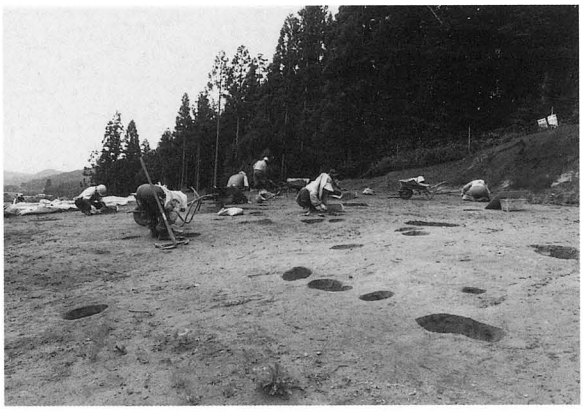
1号平坦地検出（西から）



盛土断面（東から）

写真図版20　1号平坦地（曲輪）・1号切岸状遺構

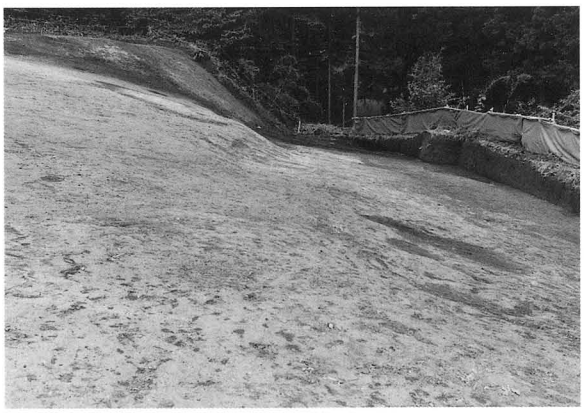
2号平坦地検出（東から）



作業風景

断面①（東から）

断面②（西から）



2号切岸状遺構・3号平坦地検出（北から）

写真図版21　2・3号平坦地（曲輪・帯曲輪）・2号切岸状遺構

4号平坦地完掘（西から）

5・6号平坦地完掘（北から）

写真図版22　4～6号平坦地（曲輪）

1～3号堀跡・1・2号大溝跡

1号堀跡断面①（北から）

1号堀跡断面②（南から）

2号堀跡断面①（北から）

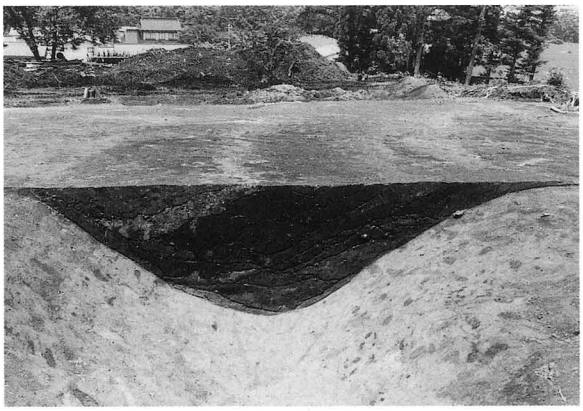
2号堀跡断面②（北から）

写真図版23　1～3号堀跡・1・2号大溝跡

2号堀跡完掘（北から）

3号堀跡検出（北から）

3号堀跡断面①（北から）



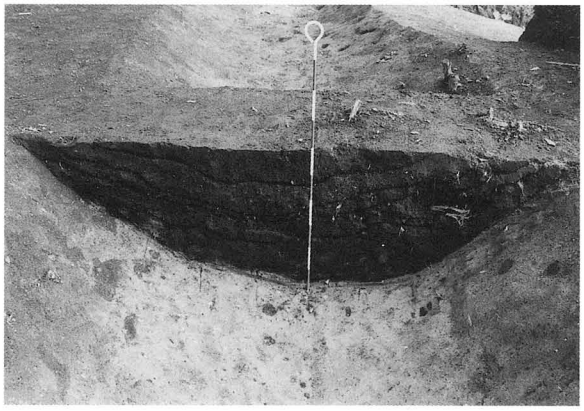
3号堀跡断面②（南から）

遺物出土状況（北から）

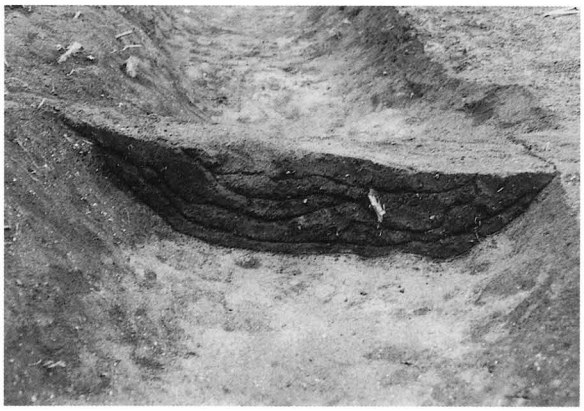
写真図版24　2・3号堀跡・遺物出土状況

1号大溝跡完掘（北から）

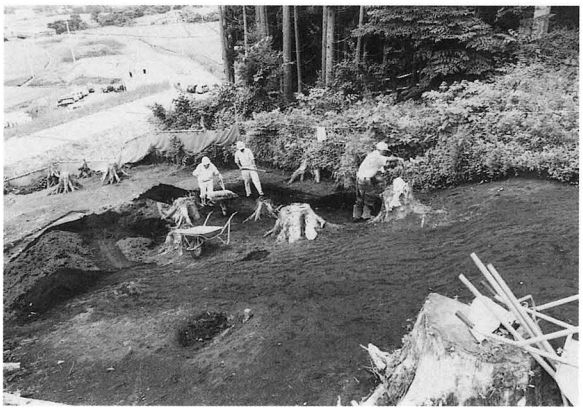
1号大溝跡断面①（北から）



1号大溝跡断面②（北から）



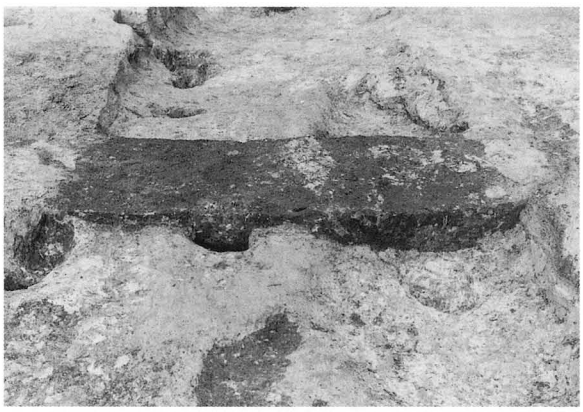
1号大溝跡断面③（北から）



作業風景

写真図版25　1号大溝跡

2号大溝跡完掘（西から）



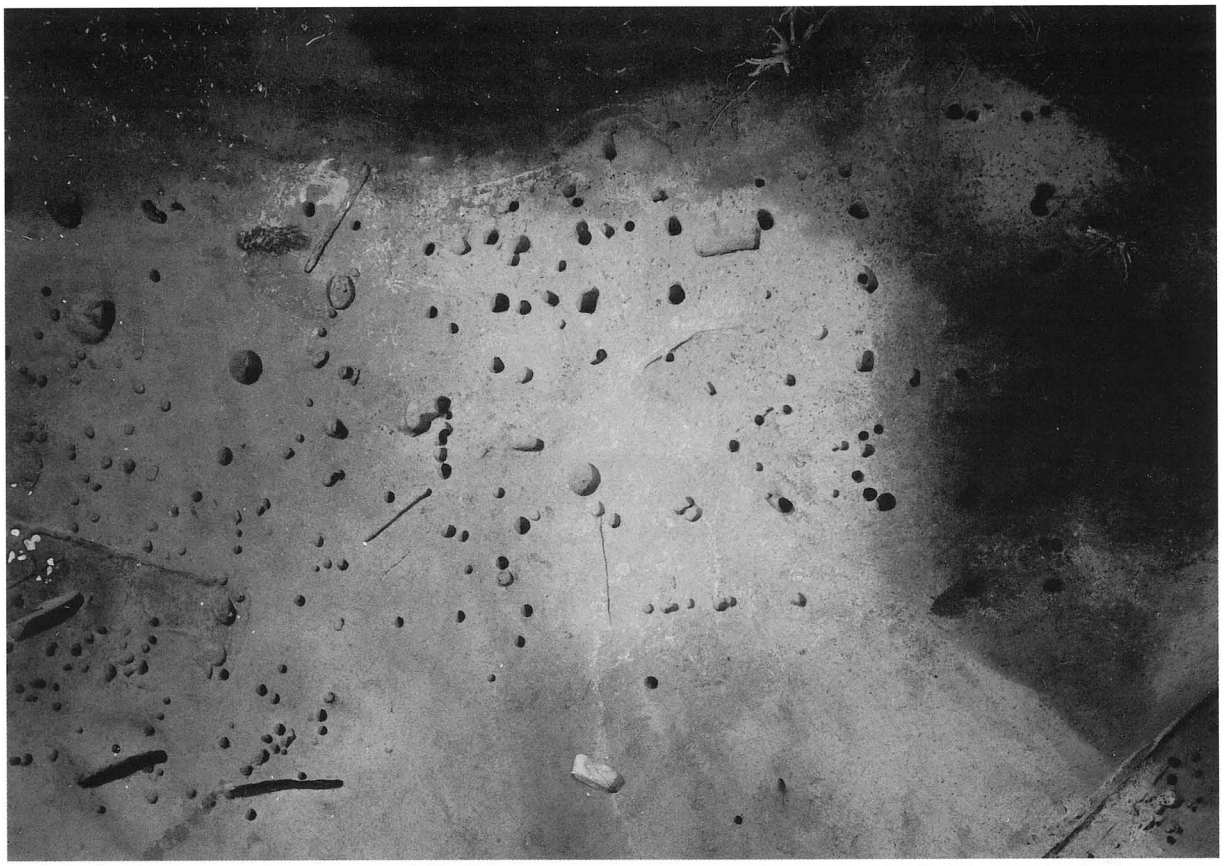
2号大溝跡断面（西から）

1号土塁断面①（北東から）

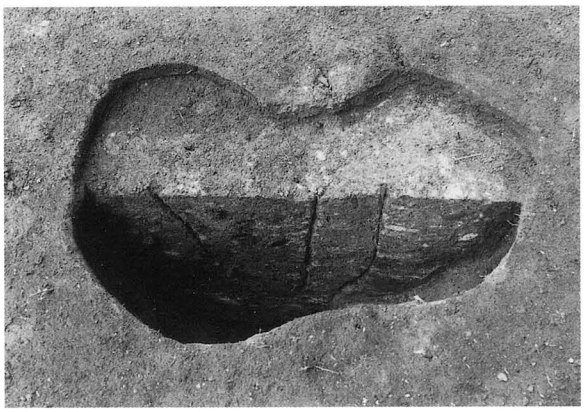
断面②（北から）

現地説明会

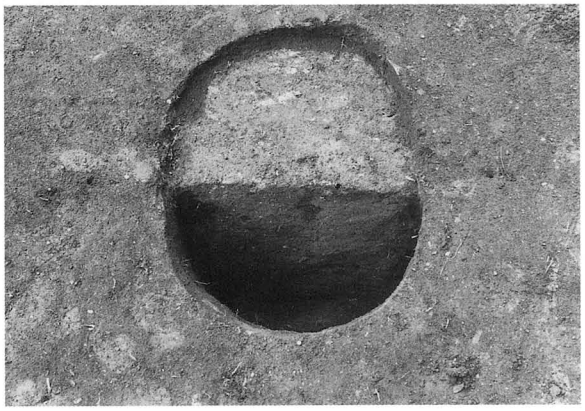
写真図版26　2号大溝跡・1号土塁



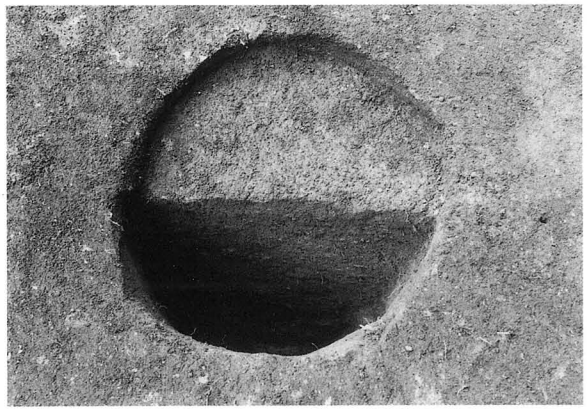
1号掘立柱建物跡完掘



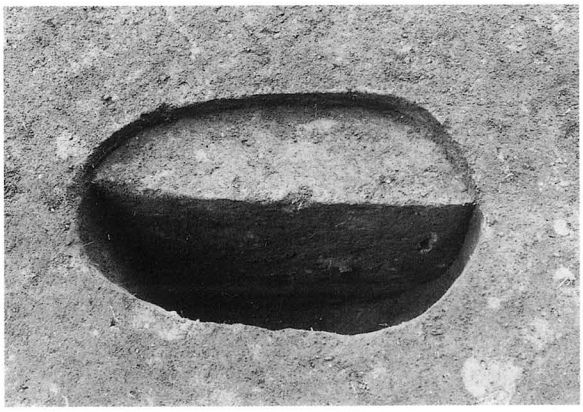
pp449・498　断面



pp421　断面



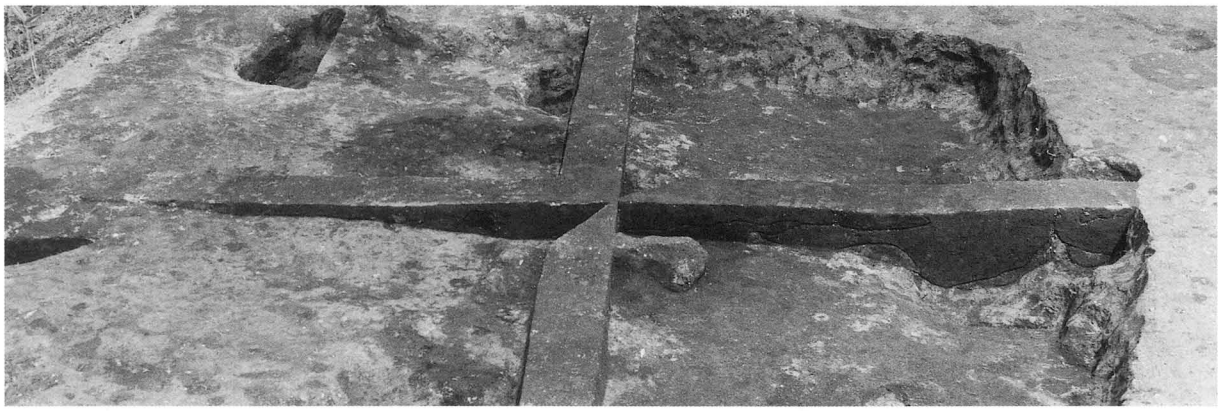
pp452　断面



pp432・431　断面

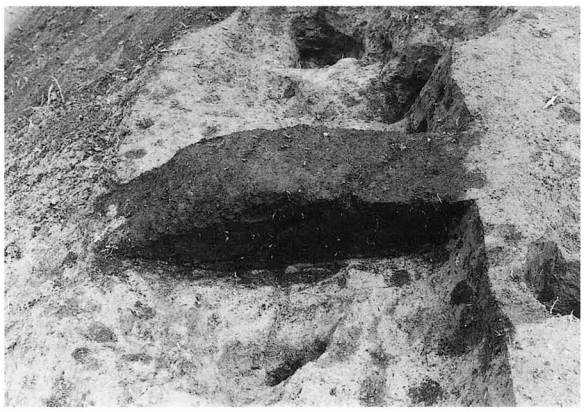
写真図版27　1号掘立柱建物跡

1号竪穴建物跡平面（南から）



1号竪穴建物跡断面（西から）

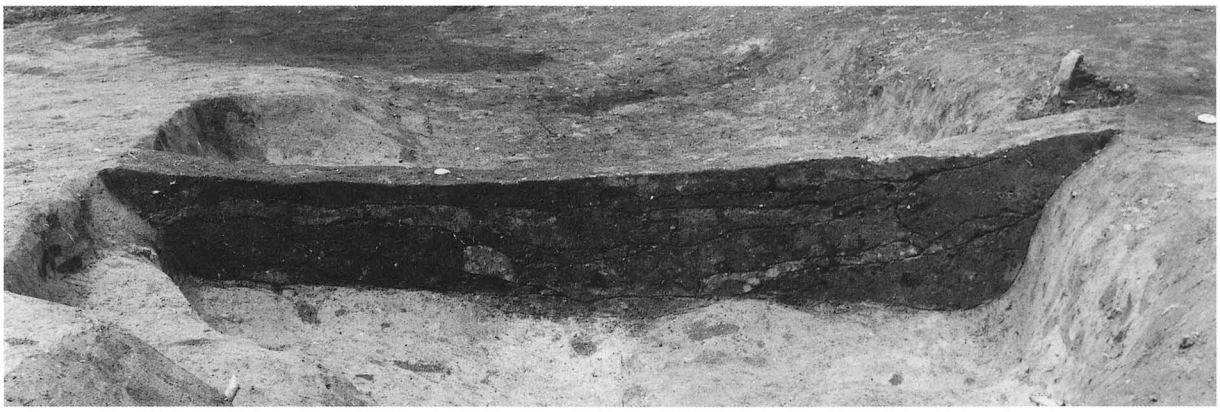
2号竪穴建物跡完掘（西から）



2号竪穴建物跡断面（西から）

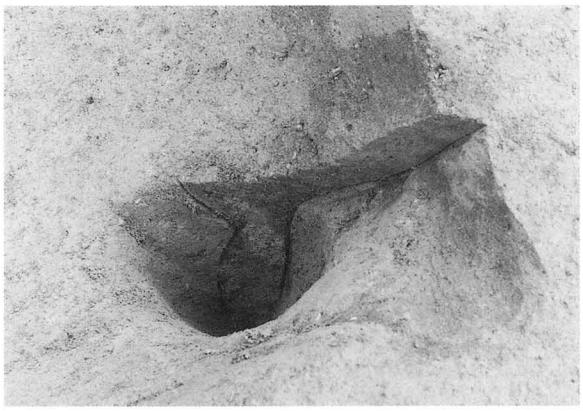
写真図版28　1・2号竪穴建物跡

3・4号竪穴建物跡完掘（北から）



断面（南から）

pp9断面（北から）



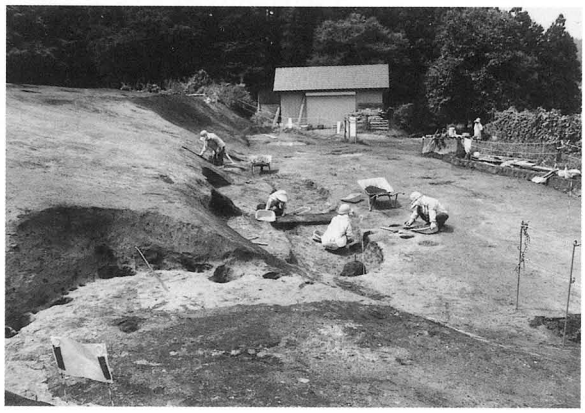
pp3断面（北から）

写真図版29　3・4号竪穴建物跡

5号竪穴建物跡平面（北から）

断面（西から）

貼り床断面（西から）



作業風景

写真図版30　5号竪穴建物跡

6号竪穴建物跡完掘（東から）

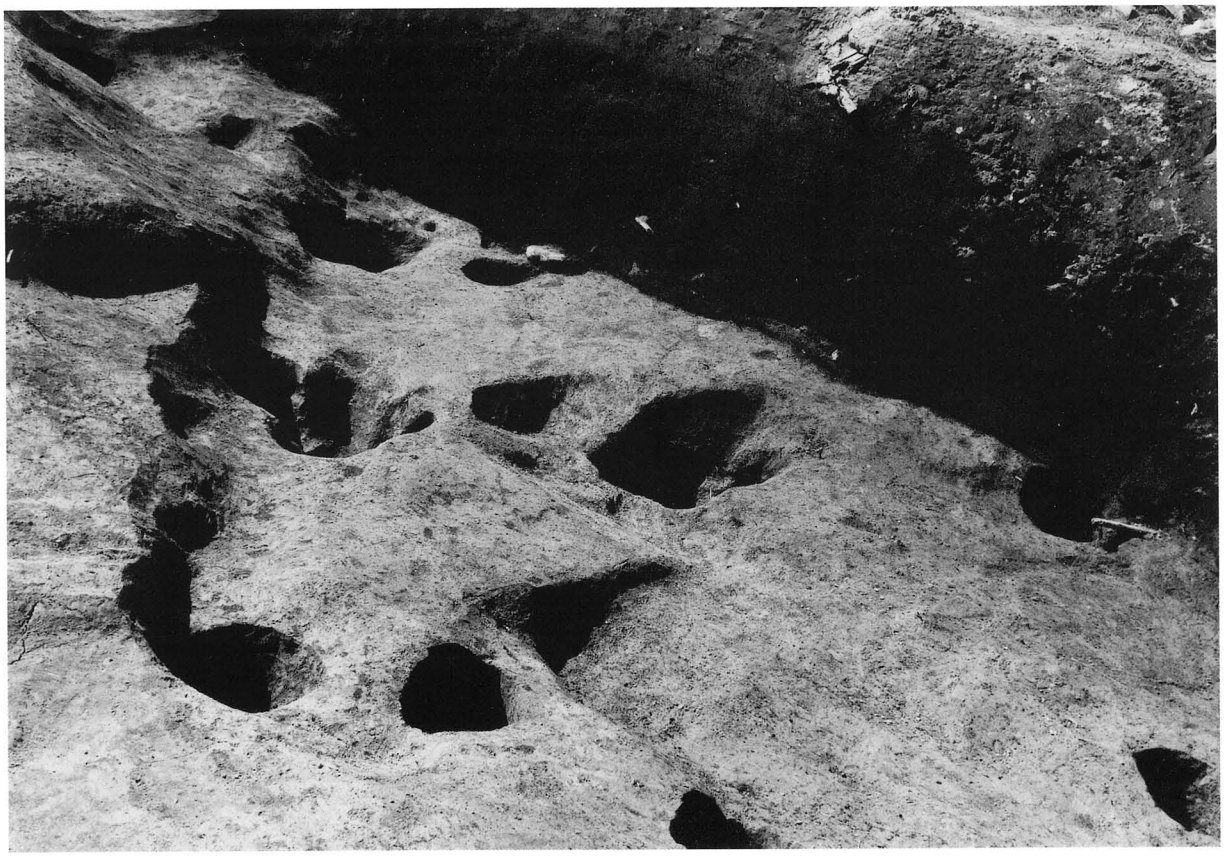
断面（北から）

写真図版31　6号竪穴建物跡

7号竪穴建物跡完掘（北から）

断面（東から）

写真図版32　7号竪穴建物跡



8号竪穴建物跡完掘（東から）

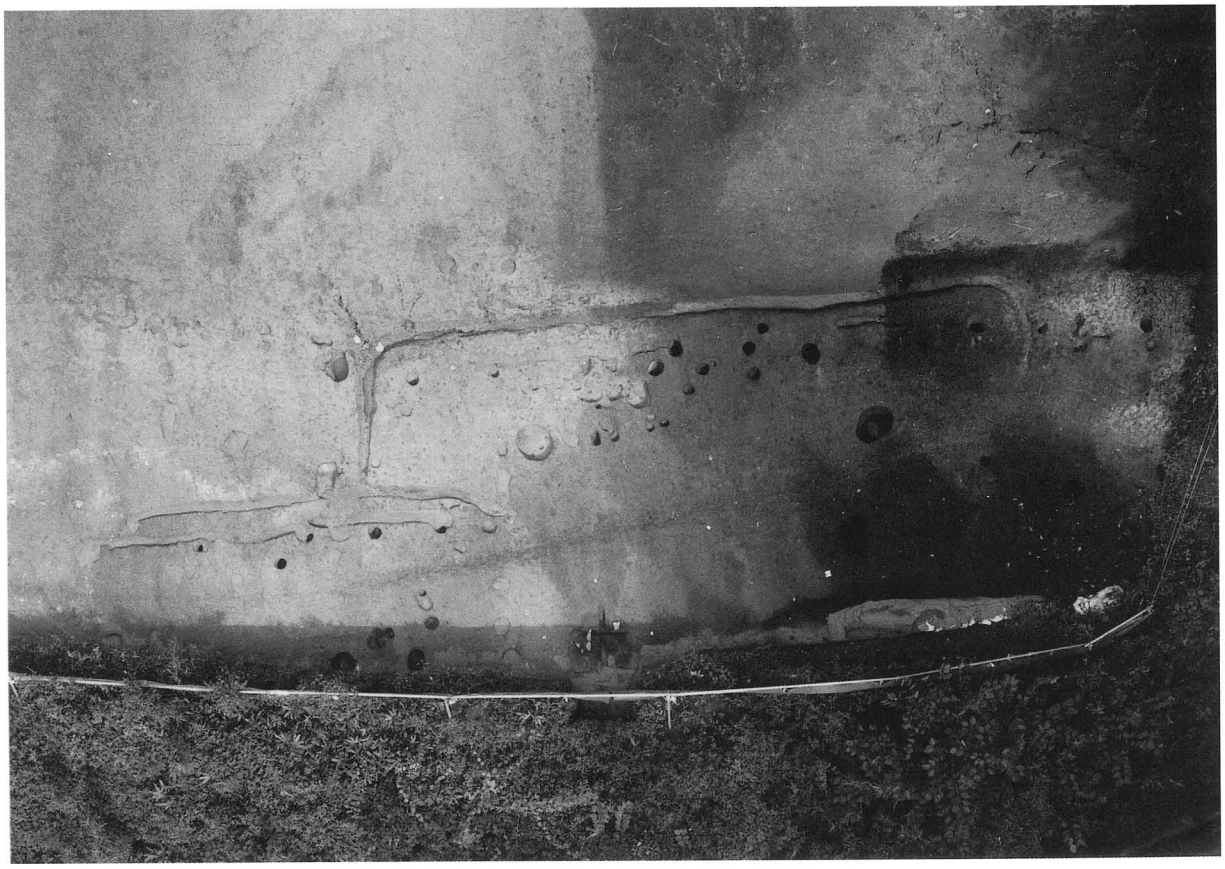
断面（南から）

写真図版33　8号竪穴建物跡

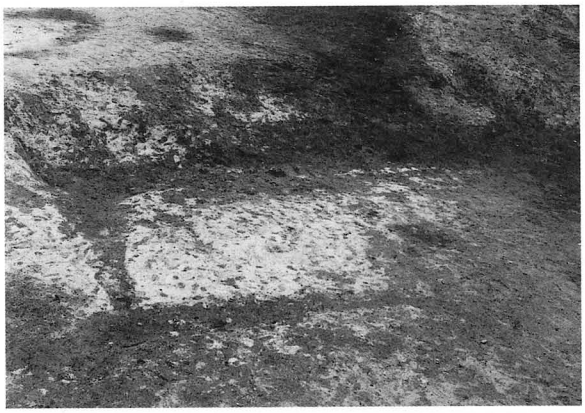
9号竪穴建物跡平面（西から）

断面（南から）

写真図版34　9号竪穴建物跡

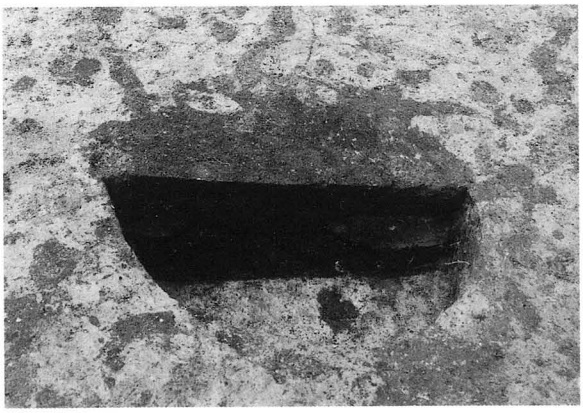


1～4号竪穴状遺構全景



1号竪穴状遺構　検出

1号竪穴状遺構　断面



1号竪穴状遺構　P1断面

1号竪穴状遺構　遺物出土状況

写真図版35　1～4号竪穴状遺構

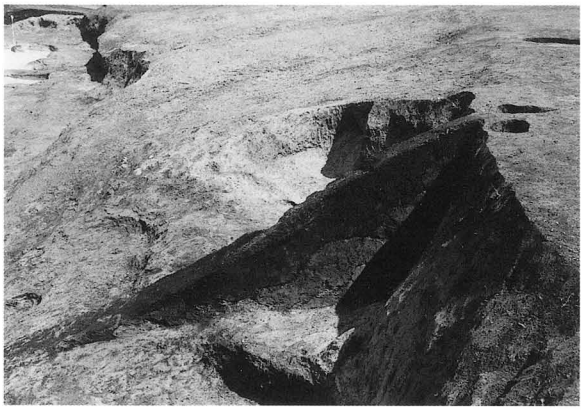
2号竪穴状遺構　断面

3・4号竪穴状遺構　断面

5号竪穴状遺構　平面

断面

6号竪穴状遺構　平面



断面

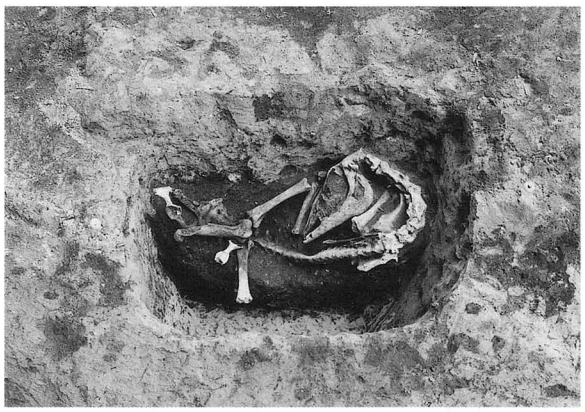
7号竪穴状遺構　平面

断面

写真図版36　2～7号竪穴状遺構

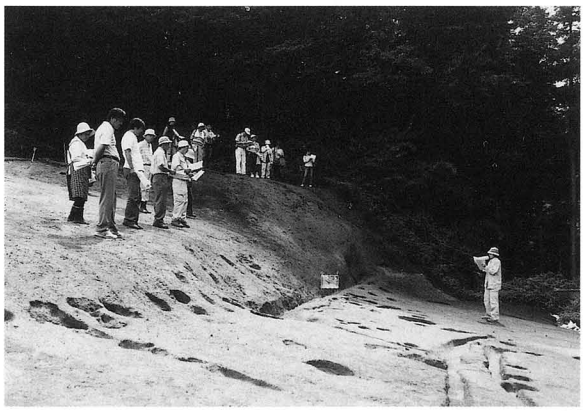
調査区東側全景（北から）

1号墓坑　断面



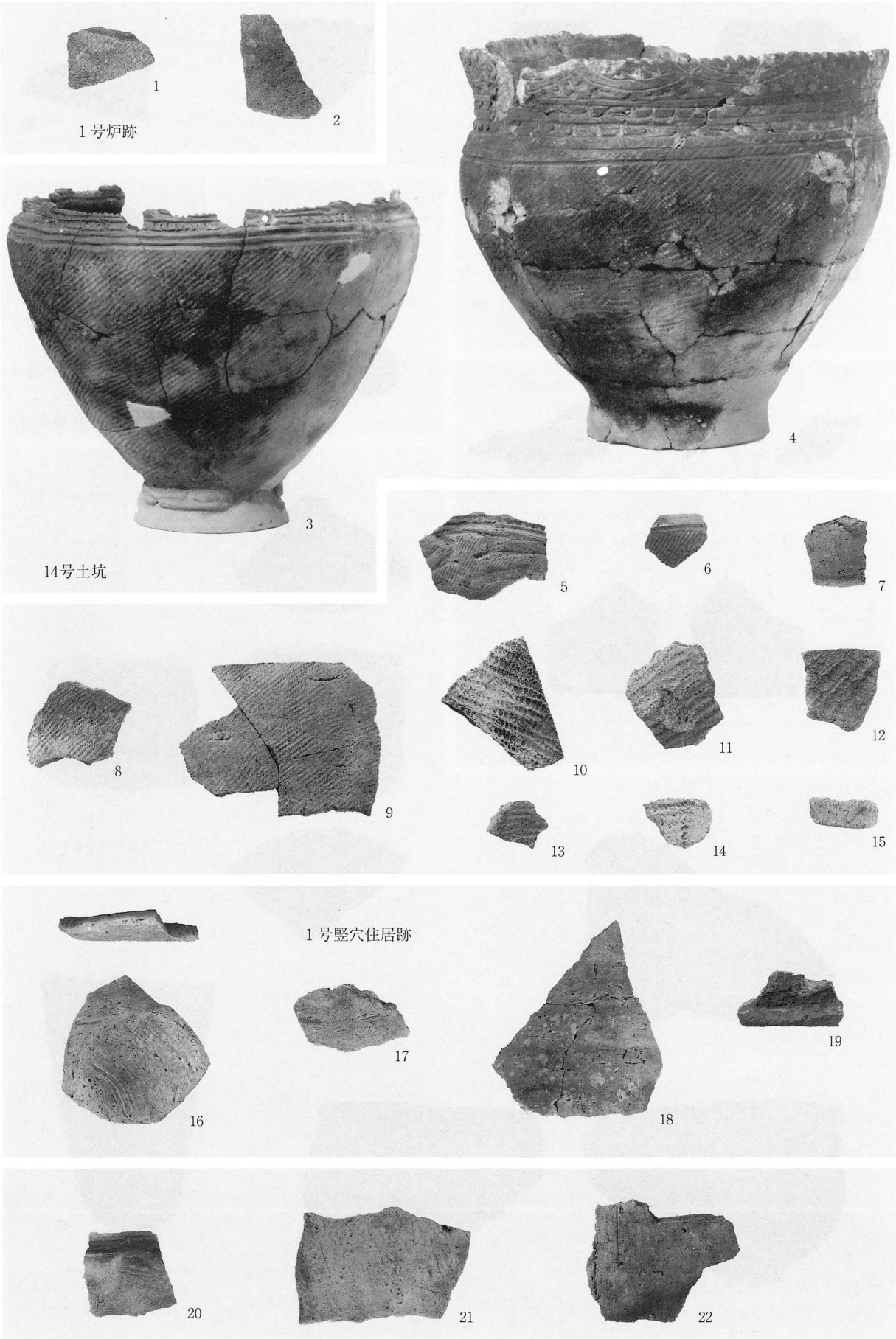
獣骨出土状況

完掘

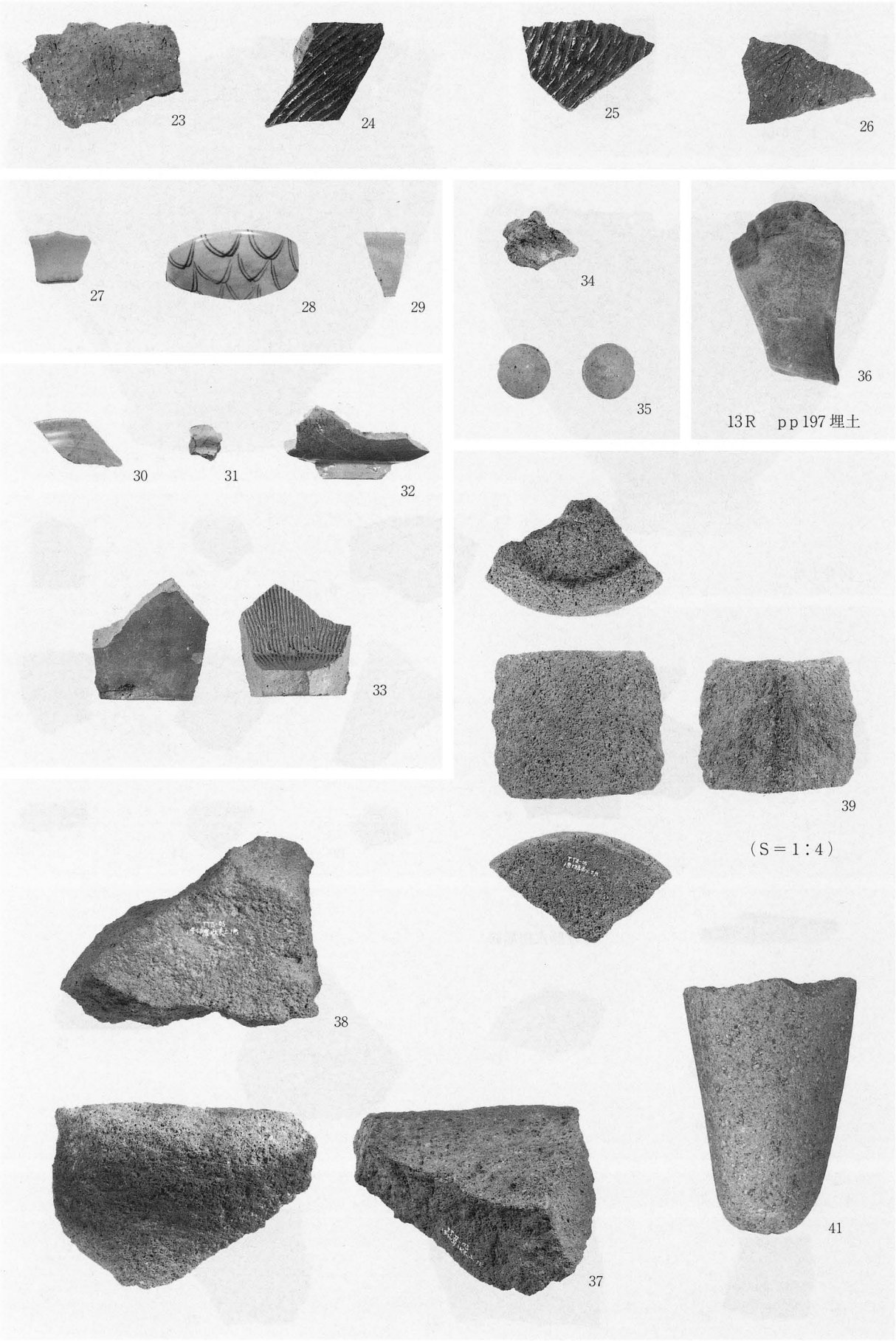


現地説明会

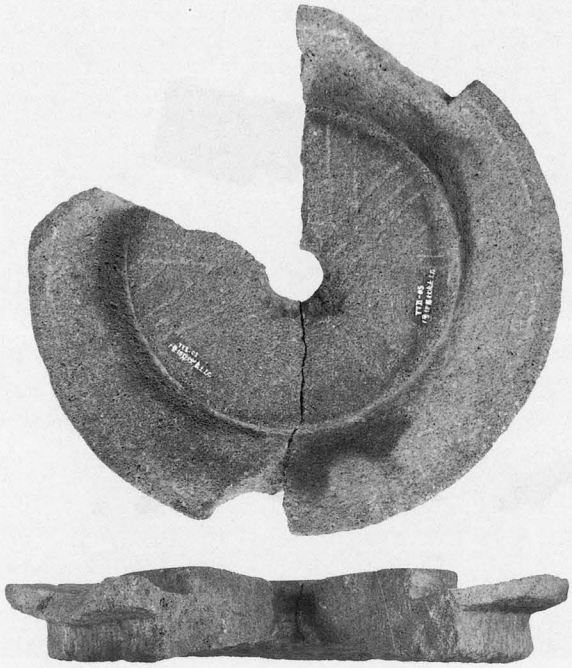
写真図版37　1号墓坑（獣骨出土）

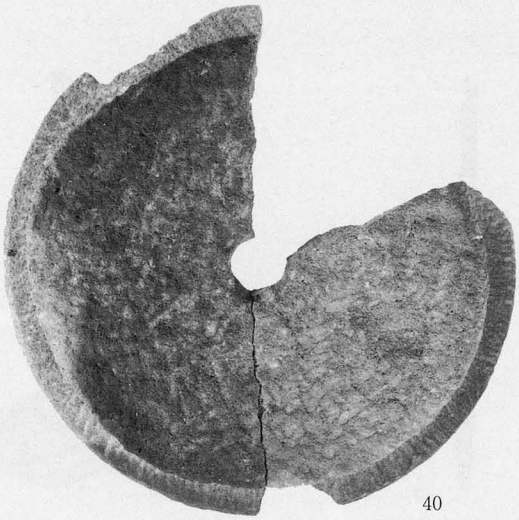


写真図版38　出土遺物1



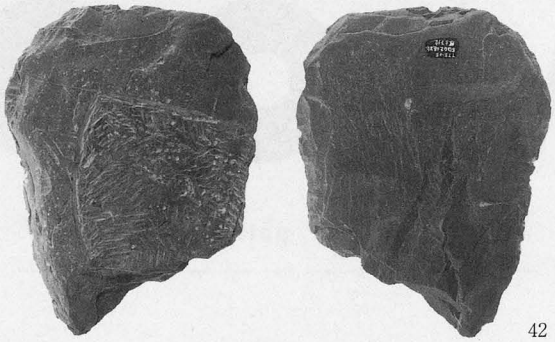
写真図版39　出土遺物 2



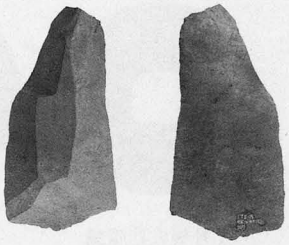


40

（S＝1：4）



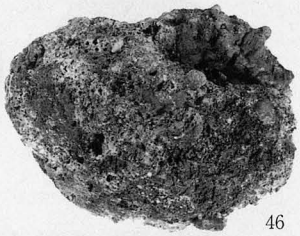
42



43

44

45



46

S＝1：2

写真図版40　出土遺物３

47

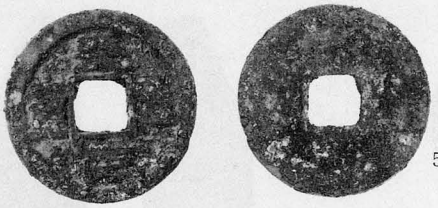
48

49

S＝1：2

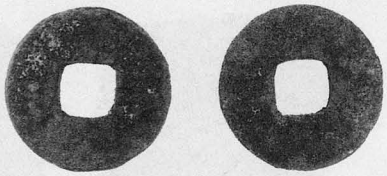
56

2号平坦地（曲輪）pp433埋土　　S＝1：1



50

1号竪穴状遺構

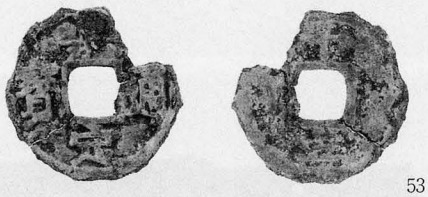


51

13O　pp146埋土

52

1号平坦地（曲輪）Ⅱ層

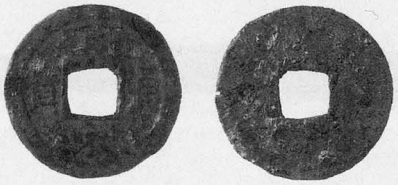


53

2号平坦地（曲輪）Ⅱ層

54

5号平坦地（曲輪）Ⅰ層



55

S＝1：1

写真図版41　出土遺物4

報告書抄録

ふりがな	たてにいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	舘Ⅱ遺跡発掘調査報告書
副書名	主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第497集
編著者名	丸山直美・千葉正彦
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地　TEL (019) 638-9001
発行年月日	2006年11月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
舘(たて)Ⅱ(いせき)遺跡	岩手(いわて)県二戸(にのへ)市浄法寺(じょうぼうじ)町御山(まちおやま)舘(たて)1番地(ばんち)	03213	JE37-0075	40度 11分 5秒	141度 9分 57秒	2005.05.19 ～ 2005.09.08	4,730㎡	主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業に係る緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
舘(たて)Ⅱ(いせき)遺跡	狩り場跡	縄文時代	炉跡1基 土坑42基（内、円筒形陥し穴状遺構の可能性あるもの14基を含む） 溝形陥し穴状遺構23基	縄文土器	＊縄文時代晩期（大洞BC式期）の深鉢が入れ子状に潰れた状態で2点出土している（14号土坑）
	集落跡	平安時代	竪穴住居跡3棟 焼土遺構1基		
	城館跡	中世	平坦地6箇所 切岸状遺構2箇所 空堀跡3条・大溝跡2条 土塁1箇所 掘立柱建物跡1棟 竪穴建物跡9棟 竪穴状遺構7棟	古銭 陶磁器・茶臼・石鉢	＊調査区中央部の空堀を埋戻した跡に複数の竪穴建物跡が造られている
		中世以降	柱穴状小ピット595個		
		時期不明	墓坑(獣骨)		

要約	舘Ⅱ遺跡は北向きの丘陵尾根部に造られた戦国時代の山城で、道を挟んで隣接する不動館と共に、それぞれが連携しながら機能していたものと考えられる。調査の結果、堀や土塁によって画された複数の平坦地の内部に、竪穴建物跡・竪穴状遺構などの建物跡が立地を異にしながら確認された。これら普請・作事の痕跡からは、縄張りが数時期に亘って変更されており、次第に防御性を増しながら変遷してゆく様子が垣間見れる。本館跡に関しては文献資料・伝承が乏しく、その由来は不明であるが、歴史的な背景や周辺に複数存在する館跡の位置関係等から推測して、当時この地方を所領した浄法寺氏に関わる人物によって築かれた山城であった可能性が高い。

（北緯・東経は日本測地形による）

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第497集

舘(たて)Ⅱ遺跡発掘調査報告書

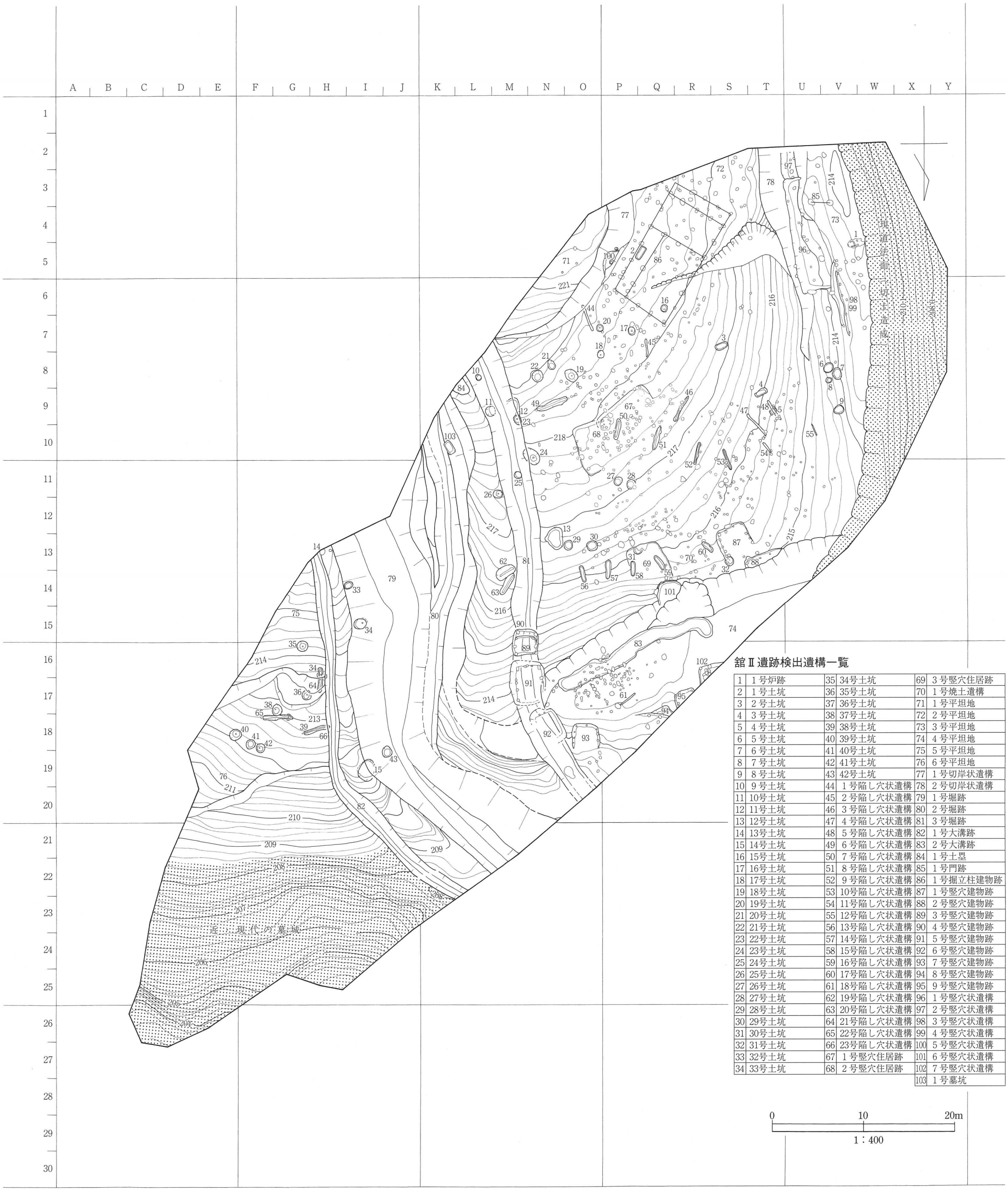
主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

印　刷　平成18年11月20日
発　行　平成18年11月30日

発　行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話（019）638－9001
FAX（019）638－8563

印　刷　株式会社長内印刷
〒020-0122　岩手県盛岡市みたけ三丁目３－28
電話（019）643－5343

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006



館Ⅱ遺跡検出遺構一覧

1	1号炉跡	35	34号土坑	69	3号竪穴住居跡
2	1号土坑	36	35号土坑	70	1号焼土遺構
3	2号土坑	37	36号土坑	71	1号平坦地
4	3号土坑	38	37号土坑	72	2号平坦地
5	4号土坑	39	38号土坑	73	3号平坦地
6	5号土坑	40	39号土坑	74	4号平坦地
7	6号土坑	41	40号土坑	75	5号平坦地
8	7号土坑	42	41号土坑	76	6号平坦地
9	8号土坑	43	42号土坑	77	1号切岸状遺構
10	9号土坑	44	1号陥し穴状遺構	78	2号切岸状遺構
11	10号土坑	45	2号陥し穴状遺構	79	1号堀跡
12	11号土坑	46	3号陥し穴状遺構	80	2号堀跡
13	12号土坑	47	4号陥し穴状遺構	81	3号堀跡
14	13号土坑	48	5号陥し穴状遺構	82	1号大溝跡
15	14号土坑	49	6号陥し穴状遺構	83	2号大溝跡
16	15号土坑	50	7号陥し穴状遺構	84	1号土塁
17	16号土坑	51	8号陥し穴状遺構	85	1号門跡
18	17号土坑	52	9号陥し穴状遺構	86	1号掘立柱建物跡
19	18号土坑	53	10号陥し穴状遺構	87	1号竪穴建物跡
20	19号土坑	54	11号陥し穴状遺構	88	2号竪穴建物跡
21	20号土坑	55	12号陥し穴状遺構	89	3号竪穴建物跡
22	21号土坑	56	13号陥し穴状遺構	90	4号竪穴建物跡
23	22号土坑	57	14号陥し穴状遺構	91	5号竪穴建物跡
24	23号土坑	58	15号陥し穴状遺構	92	6号竪穴建物跡
25	24号土坑	59	16号陥し穴状遺構	93	7号竪穴建物跡
26	25号土坑	60	17号陥し穴状遺構	94	8号竪穴建物跡
27	26号土坑	61	18号陥し穴状遺構	95	9号竪穴建物跡
28	27号土坑	62	19号陥し穴状遺構	96	1号竪穴状遺構
29	28号土坑	63	20号陥し穴状遺構	97	2号竪穴状遺構
30	29号土坑	64	21号陥し穴状遺構	98	3号竪穴状遺構
31	30号土坑	65	22号陥し穴状遺構	99	4号竪穴状遺構
32	31号土坑	66	23号陥し穴状遺構	100	5号竪穴状遺構
33	32号土坑	67	1号竪穴住居跡	101	6号竪穴状遺構
34	33号土坑	68	2号竪穴住居跡	102	7号竪穴状遺構
				103	1号墓坑

館Ⅱ遺跡　遺構配置図